

資料	財文化藏理馬郡	01-310
	調查事業団保管	11-2
No. 1-2464	平成 2 年 3 月 31 日	(6)

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第5集

三ツ寺III遺跡
保渡田遺跡
中里天神塚古墳

(第2分冊)

1985

群馬県教育委員会
財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

目 次

卷 首 函 版

序

例 言

凡 例

第I章 調査に至る経過（第1分冊）	1
第II章 遺跡の立地と歴史的環境	3
第III章 三ツ寺Ⅲ遺跡	7
第1節 調査の方法と経過	9
第2節 発見された遺構と遺物	13
第3節 出土土器観察表	259
第IV章 保渡田遺跡（第2分冊）	331
第1節 調査の方法と経過	333
第2節 発見された遺構と遺物	335
1号住居跡	335
2号住居跡	342
3号住居跡	344
4号住居跡	347
5号住居跡	348
6号住居跡	351
7号住居跡	351
8号住居跡	360
9号住居跡	363
10号住居跡	365
11号住居跡	367
12号住居跡	368
13号住居跡	374
14号住居跡	375
15号住居跡	376
16号住居跡	376
17号住居跡	379
18号住居跡	379
20号住居跡	385
21号住居跡	386
22号住居跡	388
23号住居跡	392
24号住居跡	394
25号住居跡	355
26号住居跡	396
27号住居跡	396
28号住居跡	402
29号住居跡	402
30号住居跡	405
31号住居跡	396
32号住居跡	407
33号住居跡	409

34号住居跡	411	56号住居跡	450
35号住居跡	413	57号住居跡	452
36号住居跡	417	58号住居跡	456
37号住居跡	420	59号住居跡	457
38号住居跡	423	60号住居跡	460
39号住居跡	425	61号住居跡	462
40号住居跡	426	62号住居跡	463
41号住居跡	427	63号住居跡	464
42号住居跡	428	1号掘立柱跡	466
43号住居跡	430	2号掘立柱跡	466
44号住居跡	433	3号掘立柱跡	467
45号住居跡	434	4号掘立柱跡	468
46号住居跡	434	5号掘立柱跡	468
47号住居跡	432	1号溝跡	470
48号住居跡	436	2号溝跡	470
49号住居跡	440	3号溝跡	470
50号住居跡	441	4号溝跡	470
51号住居跡	442	5号溝跡	470
52号住居跡	443	6号溝跡	472
53号住居跡	445	7号溝跡	470
54号住居跡	445	8号溝跡	472
55号住居跡	447	縄文時代の遺物	473
第3節 出土土器観察表			479
第V章 中里天神塚古墳			521
第VI章 調査の成果と問題点			535
第1節 古墳時代・奈良時代の土器について			535
第2節 平安時代の土器について			551
第3節 三ツ寺Ⅲ遺跡9号土墳墓出土の人骨について			555
第4節 三ツ寺Ⅲ遺跡2号土墳墓出土の馬歯・馬骨について			557

挿 図 目 次

第 288 図	遺跡周辺の地形……………	332	第 318 図	8 号住居跡……………	361
第 289 図	保渡田遺跡調査区設定図……折り込み		第 319 図	8 号住居跡出土遺物①……………	362
第 290 図	1 号住居跡……………	336	第 320 図	8 号住居跡出土遺物②……………	363
第 291 図	1 号住居跡エレベーション・カマ ド見通し……………	337	第 321 図	9 号住居跡……………	364
第 292 図	1 号住居跡カマド……………	338	第 322 図	9 号住居跡出土遺物①……………	364
第 293 図	1 号住居跡出土遺物①……………	339	第 323 図	9 号住居跡出土遺物②……………	365
第 294 図	1 号住居跡出土遺物②……………	340	第 324 図	10号住居跡……………	366
第 295 図	1 号住居跡出土遺物③……………	341	第 325 図	10号住居跡出土遺物……………	367
第 296 図	2 号住居跡……………	342	第 326 図	11号住居跡カマド・12号住居跡カ マド……………	368
第 297 図	2 号住居跡カマド・貯蔵穴……………	343	第 327 図	11号住居跡・12号住居跡……………	369
第 298 図	2 号住居跡出土遺物①……………	343	第 328 図	11号住居跡出土遺物……………	370
第 299 図	2 号住居跡出土遺物②……………	344	第 329 図	12号住居跡出土遺物①……………	371
第 300 図	3 号住居跡……………	345	第 330 図	12号住居跡出土遺物②……………	372
第 301 図	3 号住居跡カマド・貯蔵穴……………	346	第 331 図	13号住居跡……………	373
第 302 図	3 号住居跡出土遺物①……………	346	第 332 図	13号住居跡出土遺物……………	374
第 303 図	3 号住居跡出土遺物②……………	347	第 333 図	14号住居跡……………	375
第 304 図	4 号住居跡……………	348	第 334 図	14号住居跡出土遺物①……………	375
第 305 図	4 号住居跡出土遺物……………	348	第 335 図	14号住居跡出土遺物②……………	376
第 306 図	5 号住居跡……………	349	第 336 図	15号住居跡……………	377
第 307 図	5 号住居跡出土遺物……………	350	第 337 図	15号住居跡出土遺物……………	378
第 308 図	6 号住居跡カマド・貯蔵穴……………	351	第 338 図	16号住居跡……………	378
第 309 図	6 号住居跡……………	352	第 339 図	16号住居跡出土遺物……………	379
第 310 図	6 号住居跡出土遺物①……………	353	第 340 図	17号住居跡・18号住居跡……………	380
第 311 図	6 号住居跡出土遺物②……………	354	第 341 図	17号住居跡・18号住居跡……………	381
第 312 図	7 号住居跡・25号住居跡……………	355	第 342 図	18号住居跡カマド……………	382
第 313 図	7 号住居跡カマド・25号住居跡カ マド……………	356	第 343 図	17号住居跡出土遺物……………	383
第 314 図	7 号住居跡出土遺物①……………	357	第 344 図	18号住居跡出土遺物……………	384
第 315 図	7 号住居跡出土遺物②……………	358	第 345 図	20号住居跡……………	385
第 316 図	7 号住居跡出土遺物③……………	359	第 346 図	20号住居跡カマドセクション……………	386
第 317 図	7 号住居跡出土遺物④・25号住居 跡出土遺物……………	360	第 347 図	20号住居跡出土遺物……………	386
			第 348 図	21号住居跡……………	387
			第 349 図	21号住居跡出土遺物……………	388

第 350 図	22号住居跡……………	389	第 383 図	36号住居跡……………	417
第 351 図	22号住居跡……………	390	第 384 図	36号住居跡カマド……………	418
第 352 図	22号住居跡カマド—2……………	391	第 385 図	36号住居跡出土遺物①……………	418
第 353 図	22号住居跡出土遺物①……………	391	第 386 図	36号住居跡出土遺物②……………	419
第 354 図	22号住居跡出土遺物②……………	392	第 387 図	37号住居跡……………	420
第 355 図	23号住居跡……………	393	第 388 図	37号住居跡カマド……………	421
第 356 図	23号住居跡出土遺物……………	393	第 389 図	37号住居跡出土遺物①……………	421
第 357 図	24号住居跡……………	394	第 390 図	37号住居跡出土遺物②……………	422
第 358 図	24号住居跡カマド……………	395	第 391 図	38号住居跡……………	423
第 359 図	24号住居跡出土遺物……………	395	第 392 図	38号住居跡出土遺物①……………	424
第 360 図	26号住居跡・27号住居跡・31号住居跡……………	397	第 393 図	38号住居跡出土遺物②……………	425
第 361 図	26号住居跡・27号住居跡・31号住居跡……………	398	第 394 図	39号住居跡……………	425
第 362 図	26号住居跡出土遺物①……………	399	第 395 図	39号住居跡カマドセクション……………	426
第 363 図	26号住居跡出土遺物②……………	400	第 396 図	39号住居跡出土遺物……………	426
第 364 図	27号住居跡出土遺物①……………	400	第 397 図	40号住居跡……………	427
第 365 図	27号住居跡出土遺物②……………	401	第 398 図	40号住居跡出土遺物……………	428
第 366 図	31号住居跡出土遺物……………	401	第 399 図	41号住居跡・42号住居跡・43号住居跡・47号住居跡……………	429
第 367 図	28号住居跡・29号住居跡……………	403	第 400 図	41号住居跡カマド・43号住居跡カマド……………	430
第 368 図	28号住居跡出土遺物・29号住居跡出土遺物①……………	404	第 401 図	41号住居跡出土遺物・42号住居跡出土遺物……………	431
第 369 図	29号住居跡出土遺物②……………	405	第 402 図	43号住居跡出土遺物・47号住居跡出土遺物……………	432
第 370 図	30号住居跡……………	406	第 403 図	44号住居跡……………	433
第 371 図	30号住居跡出土遺物……………	407	第 404 図	44号住居跡出土遺物……………	433
第 372 図	32号住居跡……………	408	第 405 図	45号住居跡……………	434
第 373 図	32号住居跡出土遺物……………	409	第 406 図	45号住居跡出土遺物……………	434
第 374 図	33号住居跡……………	410	第 407 図	46号住居跡……………	435
第 375 図	33号住居跡出土遺物①……………	410	第 408 図	46号住居跡出土遺物……………	436
第 376 図	33号住居跡出土遺物②……………	411	第 409 図	48号住居跡……………	437
第 377 図	34号住居跡……………	412	第 410 図	48号住居跡カマド……………	438
第 378 図	34号住居跡出土遺物……………	413	第 411 図	48号住居跡出土遺物①……………	438
第 379 図	35号住居跡……………	414	第 412 図	48号住居跡出土遺物②……………	439
第 380 図	35号住居跡出土遺物①……………	414	第 413 図	48号住居跡出土遺物③……………	440
第 381 図	35号住居跡出土遺物②……………	415	第 414 図	49号住居跡……………	440
第 382 図	35号住居跡出土遺物③……………	416			

第 415 図	49号住居跡カマド	441	第 450 図	63号住居跡出土遺物②	466
第 416 図	49号住居跡出土遺物	441	第 451 図	1号掘立柱跡・2号掘立柱跡	467
第 417 図	50号住居跡	441	第 452 図	3号掘立柱跡	468
第 418 図	50号住居跡出土遺物	442	第 453 図	5号掘立柱跡	468
第 419 図	51号住居跡	442	第 454 図	4号掘立柱跡	469
第 420 図	51号住居跡出土遺物	443	第 455 図	1号溝跡・2号溝跡・3号溝跡・ 7号溝跡	折り込み
第 421 図	52号住居跡	444	第 456 図	4号溝跡・5号溝跡・6号溝跡・ 8号溝跡①	471
第 422 図	52号住居跡出土遺物	445	第 457 図	4号溝跡・5号溝跡・6号溝跡・ 8号溝跡②	472
第 423 図	53号住居跡・54号住居跡	446	第 458 図	3号溝跡出土遺物	472
第 424 図	53号住居跡出土遺物・54号住居跡 出土遺物	447	第 459 図	表土出土遺物	472
第 425 図	55号住居跡	448	第 460 図	縄文時代の遺物①	474
第 426 図	55号住居跡カマド	449	第 461 図	縄文時代の遺物②	475
第 427 図	55号住居跡出土遺物①	449	第 462 図	縄文時代の遺物③	476
第 428 図	55号住居跡出土遺物②	450	第 463 図	縄文時代の遺物④	477
第 429 図	56号住居跡	451	第 464 図	縄文時代の遺物⑤	478
第 430 図	56号住居跡出土遺物①	451	第 465 図	遺跡周辺の地形	525
第 431 図	56号住居跡出土遺物②	452	第 466 図	中里天神塚古墳墳丘実測図	526
第 432 図	57号住居跡	453	第 467 図	墳丘断面図	527
第 433 図	57号住居跡カマド	454	第 468 図	石室実測図	528
第 434 図	57号住居跡出土遺物①	454	第 469 図	硝石実測図	529
第 435 図	57号住居跡出土遺物②	455	第 470 図	硝石エレベーション図	530
第 436 図	58号住居跡	456	第 471 図	遺物出土状態図 出土遺物図①	532
第 437 図	58号住居跡貯蔵穴	457	第 472 図	出土遺物②	533
第 438 図	58号住居跡出土遺物	457	第 473 図	三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第1分 類期	541
第 439 図	59号住居跡	458	第 474 図	三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第2分 類期	542
第 440 図	59号住居跡出土遺物	459	第 475 図	三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第3分 類期	543
第 441 図	60号住居跡カマド	460	第 476 図	三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第4分 類期	544
第 442 図	60号住居跡	461	第 477 図	三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第5分 類期	545
第 443 図	60号住居跡出土遺物	462			
第 444 図	61号住居跡	463			
第 445 図	61号住居跡出土遺物	463			
第 446 図	62号住居跡	463			
第 447 図	62号住居跡出土遺物	464			
第 448 図	63号住居跡	464			
第 449 図	63号住居跡出土遺物①	465			

第 478 図	三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第 6 分 類期……………	546	類期	三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第15分 類期……………	553
第 479 図	三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第 7 分 類期……………	547	第 484 図	三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第16分 類期……………	554
第 480 図	三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第 8 分 類期……………	548	第 485 図	三ツ寺Ⅲ遺跡出土の馬歯・馬骨の 部位……………	559
第 481 図	三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第 9 分 類期 三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第10分 類期……………	549	第 486 図	出土馬骨の部位……………	560
第 482 図	三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第11分 類期 三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第12分 類期……………	550	第 487 図	三ツ寺Ⅲ遺跡出土の馬 A の馬歯の 部位及び咬合面の状態……………	561
第 483 図	三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第13分 類期 三ツ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡第14分		第 488 図	三ツ寺Ⅲ遺跡出土の馬 A の馬歯・ 馬骨……………	566
			第 489 図	三ツ寺Ⅲ遺跡出土の馬 A の馬歯・ 馬骨……………	567
			第 490 図	三ツ寺Ⅲ遺跡出土の馬 A の馬歯・ 馬骨……………	568

図 版 目 次

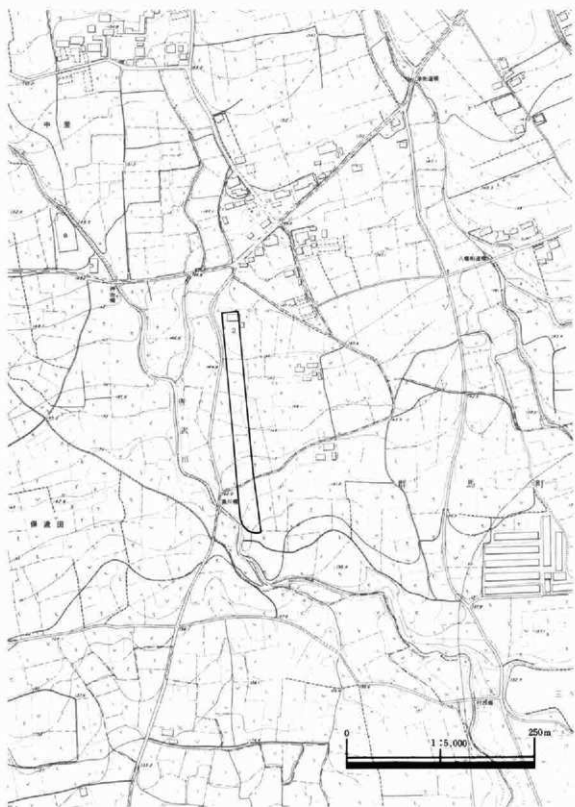
- | | | |
|---|---------------|---|
| <p>図版 103 I区・II区全景（南より）
I区・II区道南全景（北より）</p> | | <p>11号住居跡遺物出土状態全景
11号住居跡カマド</p> |
| <p>図版 104 II区・III区全景（南より）
II区・III区全景（北より）</p> | <p>図版 116</p> | <p>11号住居跡カマド
12号住居跡カマド
12号住居跡カマド周辺遺物出土状態</p> |
| <p>図版 105 遺跡近景
1号住居跡全景</p> | <p>図版 117</p> | <p>13号住居跡全景
13号住居跡カマド遺物出土状態</p> |
| <p>図版 106 1号住居跡カマド遺物出土状態
1号住居跡カマド遺物除去後
1号住居跡カマド周辺遺物出土状態</p> | <p>図版 118</p> | <p>14号住居跡全景
15号住居跡全景
15号住居跡カマド</p> |
| <p>図版 107 1号住居跡カマド天井石除去後
1号住居跡カマド天井石
1号住居跡カマド内遺物出土状態</p> | <p>図版 119</p> | <p>16号住居跡全景
17号住居跡全景
17号住居跡遺物出土状態全景</p> |
| <p>図版 108 1号住居跡カマド煙道部
2号住居跡遺物出土状態全景
2号住居跡全景</p> | <p>図版 120</p> | <p>17号住居跡カマド
18号住居跡全景
18号住居跡カマド</p> |
| <p>図版 109 3号住居跡全景
3号住居跡カマド周辺遺物出土状態
5号住居跡全景</p> | <p>図版 121</p> | <p>20号住居跡全景
20号住居跡カマド
21号住居跡全景</p> |
| <p>図版 110 5号住居跡カマド遺物出土状態
6号住居跡全景
6号住居跡カマド遺物出土状態</p> | <p>図版 122</p> | <p>22号住居跡全景
22号住居跡遺物出土状態全景
22号住居跡カマド2遺物出土状態</p> |
| <p>図版 111 6号住居跡遺物出土状態
6号住居跡遺物出土状態
7号住居跡カマド</p> | <p>図版 123</p> | <p>22号住居跡貯蔵穴遺物出土状態
22号住居跡カマド1
22号住居跡カマド2</p> |
| <p>図版 112 7号・25号住居跡遺物出土状態全景
7号・25号住居跡全景</p> | <p>図版 124</p> | <p>23号住居跡全景
24号住居跡全景
26号・27号・28号・29号・31号住居跡全景</p> |
| <p>図版 113 8号住居跡全景
8号住居跡遺物出土状態全景
9号住居跡全景</p> | <p>図版 125</p> | <p>26号・27号・28号・31号住居跡全景
28号・29号住居跡全景
26号住居跡遺物出土状態全景</p> |
| <p>図版 114 10号住居跡全景
10号住居跡遺物出土状態全景
10号住居跡カマド</p> | <p>図版 125</p> | <p>26号・27号・28号・31号住居跡全景
28号・29号住居跡全景
26号住居跡遺物出土状態全景</p> |
| <p>図版 115 11号・12号住居跡全景</p> | <p>図版 125</p> | <p>26号住居跡遺物出土状態全景</p> |

- | | | | |
|--------|---|--------|--|
| 図版 126 | 27号・31号住居跡全景
28号住居跡全景
29号住居跡全景 | 図版 138 | 46号住居跡カマド
48号住居跡全景
48号住居跡カマド |
| 図版 127 | 26号住居跡遺物出土状態
26号住居跡カマド
28号住居跡カマド | 図版 139 | 48号住居跡遺物出土状態
49号住居跡全景
50号住居跡全景 |
| 図版 128 | 29号住居跡カマド
30号住居跡遺物出土状態全景
30号住居跡カマド | 図版 140 | 51号住居跡全景
51号住居跡カマド
52号住居跡全景 |
| 図版 129 | 32号・33号住居跡全景
32号住居跡全景
33号住居跡全景 | 図版 141 | 52号住居跡カマド
53号・54号住居跡全景
55号住居跡全景 |
| 図版 130 | 32号住居跡カマド周辺遺物出土状態
34号・35号住居跡全景
34号住居跡床下状態全景 | 図版 142 | 55号住居跡遺物出土状態
56号住居跡遺物出土状態全景
57号住居跡全景 |
| 図版 131 | 35号住居跡遺物出土状態全景
35号住居跡床下状態全景
36号住居跡遺物出土状態全景 | 図版 143 | 57号住居跡カマド遺物出土状態
57号住居跡カマド
57号住居跡カマド |
| 図版 132 | 36号住居跡カマド遺物出土状態
37号住居跡全景
37号住居跡遺物出土状態全景 | 図版 144 | 58号住居跡全景
59号住居跡全景
59号住居跡遺物出土状態 |
| 図版 133 | 37号住居跡カマド周辺遺物出土状態
38号住居跡全景
38号住居跡遺物出土状態全景 | 図版 145 | 60号住居跡全景
63号住居跡全景
63号住居跡カマド |
| 図版 134 | 38号住居跡遺物出土状態
38号住居跡カマド
39号住居跡遺物出土状態全景 | 図版 146 | 1号掘立柱跡
3号掘立柱跡
4号掘立柱跡 |
| 図版 135 | 40号住居跡全景
40号住居跡カマド
41号・42号・43号・47号住居跡全景 | 図版 147 | 1号住居跡出土遺物
2号住居跡出土遺物 |
| 図版 136 | 42号住居跡全景
43号住居跡全景
41号住居跡カマド | 図版 148 | 2号住居跡出土遺物
3号住居跡出土遺物
5号住居跡出土遺物
6号住居跡出土遺物 |
| 図版 137 | 43号住居跡カマド
44号住居跡遺物出土状態全景
46号住居跡遺物出土状態全景 | 図版 149 | 6号住居跡出土遺物
7号住居跡出土遺物
8号住居跡出土遺物 |

図版 150	8号住居跡出土遺物	60号住居跡出土遺物
	9号住居跡出土遺物	63号住居跡出土遺物
	10号住居跡出土遺物	表土
	11号住居跡出土遺物	図版 159 出土金属器
	12号住居跡出土遺物	縄文時代の遺物—1
図版 151	12号住居跡出土遺物	縄文時代の遺物—2
	15号住居跡出土遺物	縄文時代の遺物—3
	17号住居跡出土遺物	図版 160 縄文時代の遺物—4
	18号住居跡出土遺物	縄文時代の遺物—5
図版 152	18号住居跡出土遺物	縄文時代の遺物—6
	20号住居跡出土遺物	縄文時代の遺物—7
	22号住居跡出土遺物	図版 161 トレンチ掘り下げ状態
	26号住居跡出土遺物	トレンチ掘り下げ状態
図版 153	27号住居跡出土遺物	表土除去後の全景
	29号住居跡出土遺物	図版 162 表土除去後の状態
	30号住居跡出土遺物	石室検出状態全景(北より)
	31号住居跡出土遺物	石室検出状態(南より)
	32号住居跡出土遺物	図版 163 閉塞石・礎石除去後の石室全景(東より)
図版 154	35号住居跡出土遺物	閉塞石・礎石除去後の石室全景(北より)
	36号住居跡出土遺物	図版 164 石室全景(東より)
	37号住居跡出土遺物	閉塞石の状態
図版 155	37号住居跡出土遺物	石室内部の状態
	38号住居跡出土遺物	図版 165 石室内部の状態(礎石除去後)
	39号住居跡出土遺物	石室内部の状態(礎石除去後)
	42号住居跡出土遺物	奥壁の状態(礎石除去後)
	43号住居跡出土遺物	図版 166 裏込め石の状態
図版 156	43号住居跡出土遺物	裏込め石の状態
	48号住居跡出土遺物	金環出土状態
	51号住居跡出土遺物	図版 167 金環出土状態
	52号住居跡出土遺物	鉄刀出土状態
	53号住居跡出土遺物	石室除去後の根石の状態
	55号住居跡出土遺物	図版 168 古墳全景
図版 157	55号住居跡出土遺物	移築前の天神祠
	56号住居跡出土遺物	移築前の庚申塔
図版 158	59号住居跡出土遺物	

- 図版 169 移築前の庚申塔
移築後の天神祠・庚申塔
移築後の天神祠・庚申塔
- 図版 170 出土した金環・銀環
出土した鉄刀・鉄鏃・釘
- 図版 171 9号土墳墓出土人骨
- 図版 172 三ツ寺田遺跡出土の馬Aの馬歯・馬骨

保 渡 田 遺 跡



第288図 遺跡周辺の地形

群馬町都市計画図を使用

第IV章 保渡田遺跡

第1節 調査の方法と経過

(1) 周辺の地形と調査の方法

保渡田遺跡は、唐沢川を挟み三ッ寺III遺跡の北に位置する遺跡である。唐沢川は、保渡田遺跡の西側を南流し、遺跡の南辺で鉤の手に曲がる。大地形に沿い、北から南へ流れる唐沢川が、三ッ寺III遺跡と保渡田遺跡の間で西側から東側へ横切る形である。

唐沢川の流れと同様に、北から南へ下がる大地形により、標高は、北に位置する保渡田遺跡の方が高くなっている。三ッ寺III遺跡南端の標高は約135mであり、保渡田遺跡北端の標高は約145mである。三ッ寺III遺跡と保渡田遺跡の標高差は、最大で約10mあることになる。

遺跡周辺の地形（第288図）・基本土層（付図2）は、三ッ寺III遺跡とほぼ同じである。

保渡田遺跡の調査区域は、上越新幹線大宮起点84km460m～84km740mの約280mの区間である。大宮起点84km500m～84km700mのセンター杭を基準として、100mを1区とする調査区を設定した。更に、同じセンター杭を基準にして、4×4mのグリッドを設定した。センター杭と直交する方向のグリッド名称は、同杭をEとして、B～Jと名付けた。また、センター杭に平行する方向は、100mの調査区を単位として、1区間を1～25の数字で表わした（第289図）。

(2) 調査の経過

保渡田遺跡は、昭和53年1月17日から試掘調査を開始し、引き続き本調査を行なった。調査期間は、試掘調査を含め、昭和53年1月17日～昭和53年8月31日である。試掘調査は、4×4mのグリッドの一部、南西側の2×2mを掘り下げることを原則とした。試掘の結果、遺構の数が多く、表土は耕作土であり、遺構が依存していないことが確認できた。この結果から、パワーシャベル等を導入し、遺構の少ない北側を除き、全面的に表土を掘削することにした。調査経過の概略は、次の通りである。

試掘調査・第1次調査

53年1月17日	発掘調査開始。現場プレハブに器材を搬入する。
1月18日	グリッド設定を始める。
1月19日	グリッドの掘り下げ開始。多くのグリッドで遺構を確認する。
2月9日	グリッドの掘り下げ終了。
2月14日	パワーシャベル等を導入し、表土の全面掘削を開始する。表土掘削に並行して遺構確認も開始。
2月25日	南側部分の表土掘削終了。
2月27日	遺構確認終了。
2月28日	1号・2号・4号住居跡から遺構調査を開始。

- 53年3月29日 本年度の調査は、本日で終了。
- 3月 3月中に調査した遺構は、1号～6号・10号～12号・14号・15号・17号・18号住居跡である。3号～5号・10号～12号・14号・15号住居跡は、調査終了。

第2次調査

- 53年4月10日 本日より第2次調査開始。表土掘削のため、パワーシャベル等を導入。
- 4月15日 表土掘削終了。
- 4月 4月中に調査した遺構は、1号・2号・6号～9号・13号・16号～24号住居跡である。8号・9号・16号～20号住居跡は調査終了。
- 5月31日 群馬町立金古小学校郷土クラブの先生・生徒が来訪する。
- 5月 5月中に調査した遺構は、1号・2号・6号・7号・13号・21号～24号・27号・28号・30号・33号住居跡である。1号・2号・6号・7号・13号・21号～24号・27号・28号・33号住居跡は調査終了。
- 6月 6月中に調査した遺構は、25号・30号・32号・39号・40号・51号～63号住居跡である。25号・30号・32号・39号・51号～59号住居跡は調査終了。
- 7月 7月中に調査した遺構は、26号・29号・31号・35号・37号・38号・40号～44号・47号～50号・60号～63号住居跡である。37号・38号・44号・47号・49号・50号・60号～63号住居跡は調査終了。
- 8月17日 本日で野外の調査は終了。
- 8月18日 本日からの作業は、遺構原図の整理、遺物の洗浄・注記、発掘器材の整理である。
- 8月30日 発掘器材の搬出。
- 8月31日 本日で発掘調査の全工程が終了。来月より、引き続き三ッ寺III遺跡の発掘調査を行なう予定。
- 8月 8月中に調査した遺構は、26号・29号・31号・34号～36号・40号～45号・46号・48号住居跡であり、全遺構調査終了。



第289図 保渡田邊跡 調査区設定図

第2節 発見された遺構と遺物

(1) 住居跡

1号住居跡（第290・291・292図、図版105・106・107・108）

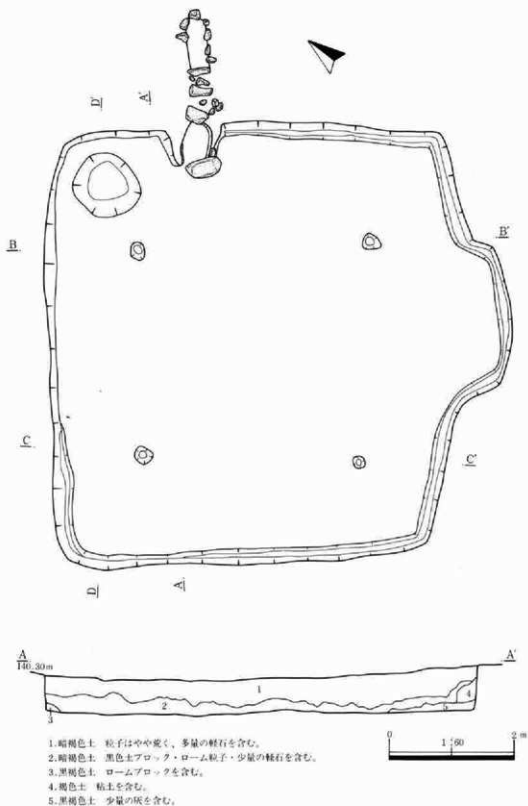
確認面はローム層上面の黒褐色土層である。1号溝跡と重複し、2号住居跡・58号住居跡が近接する。1号溝跡との新旧関係は不明であるが、同溝跡と6号住居跡・8号住居跡との新旧関係の類推から、当住居跡の方が古いと推測している。

規模は南北約6.0m・東西約7.0mであり、平面形は隅丸長方形を呈する大型の住居跡である。当住居跡は、南側壁に東西約2.3m・南北約1.0mの張り出し部を持つ。この張り出しのため南側壁全体が歪み、服らんだ形となっている。主軸はN-63°-Eである。覆土は暗褐色土が主であり、軽石を含んでいる。壁の立ち上りは約50～60cmであり、残存状態は非常に良好である。床はローム層中に構築されており、硬く良好である。北西隅付近の床面直上からは、焼土・炭化物の散布が確認できた。支柱穴は4本であり、床面での直径は約20～30cm、床面からの深さは約60～70cmである。壁周溝は、張り出し部分も含めほぼ全面的に巡っているが、北東隅を中心とした東側壁のカマドより北側及び北側壁の東寄り $\frac{2}{3}$ からは検出されなかった。

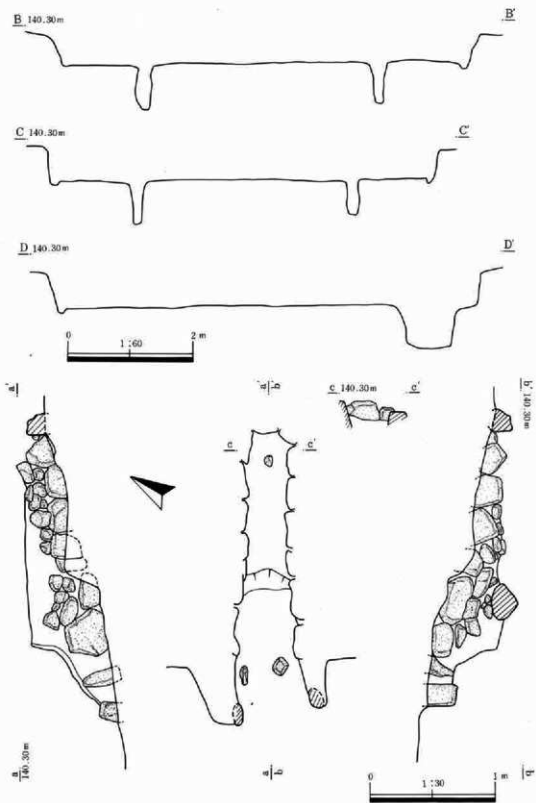
カマドは東側壁の中央やや北寄りに構築されており、規模も大きく、残存状態も非常に良好である。袖部先端～煙道部先端までの長さは約2.5mを測る。袖は粘土と石を素材に、煙道部は石を素材に構築されている。燃焼部は壁内に構築されており、石を用いた支脚が並列して立てられていた。同時に2つの堦が立てられる構造である。袖は粘土を用いているが、先端は石で固めてある。煙道部の張り出しは、壁から約1.8mを測り、下面を除く3面を全面的に石で囲む構造になっている。半分より東側の天井石はなくなっていたが、当時は先端を除き被っていたものと推定している。煙道部底面は二段になっており、燃焼部先端から約1.1mの点で約30cm上がり、煙道部先端に至る。なお、遺構検出時には燃焼部天井石が前面に落ちている状態で検出されたが(遺構全体平面図)、カマド平面図では、それを復元して実測した。貯蔵穴はカマドの左側、北東隅に構築されている。規模は直径約1.0m、床面からの深さ約70cmを測り、平面形は不整形な円形を呈する。遺構は壁・床・壁周溝・カマド・貯蔵穴ともに残存状態は良好であった。特にカマドの残存状態は良好であり、その規模・構造には特筆すべき点が多い。

遺物の量は多く、土師器の杯・高杯・壺・台付壺、須恵器の杯・蓋などが出土している。遺物の出土は、東半分が多く、特にカマド周辺に集中していた。カマド内からは土師器の堦(1住-36)・台付壺(1住-35)が、貯蔵穴西脇からは土師器の高杯(1住-6)が出土している。土師器の杯は須恵器模倣で外縁を有するものである。

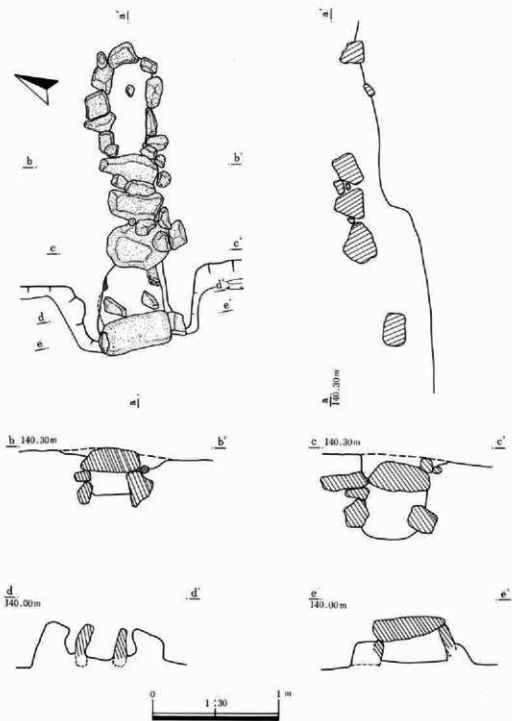
(井川)



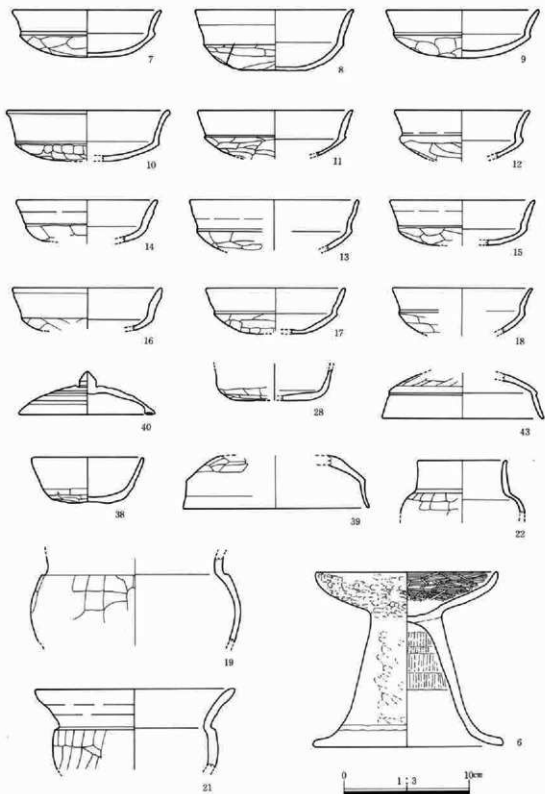
第290図 1号住居跡



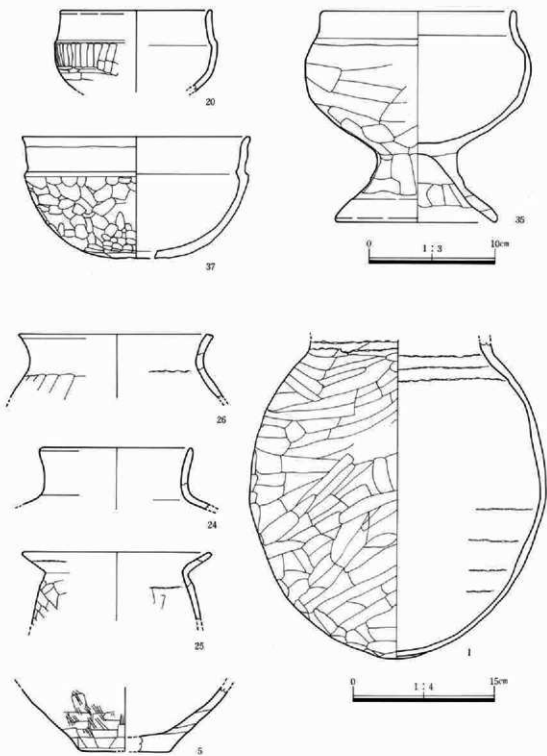
第291図 1号住層跡エレベーション・カマド見通し



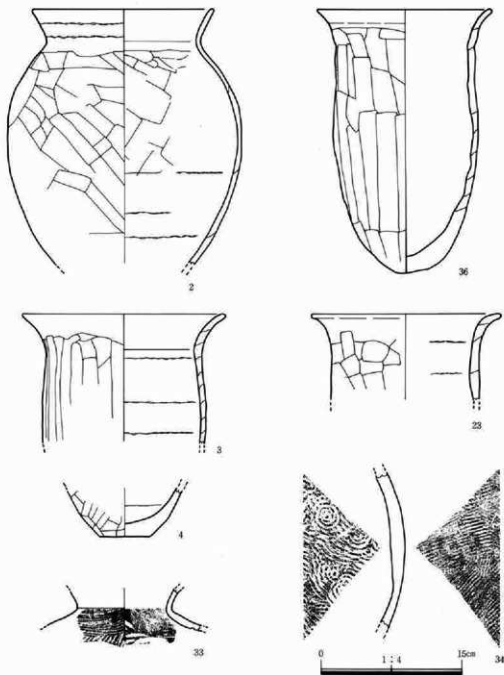
第292図 1号住居跡カマド



第293図 1号住居跡出土遺物①



第294図 1号住居跡出土遺物②



第295図 1号住居跡出土遺物③

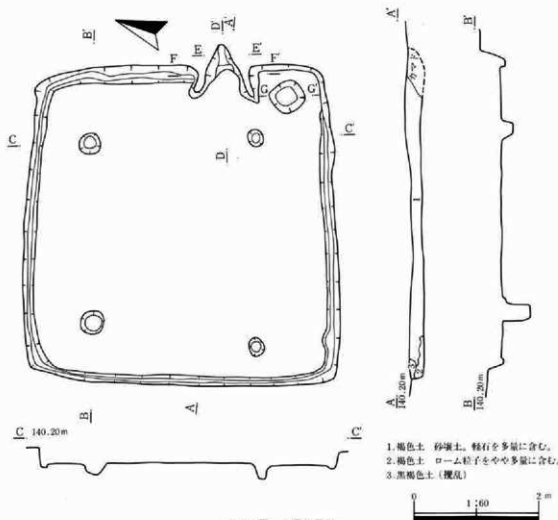
2号住居跡 (第296・297図、図版108)

当住居跡は、1号住居跡・3号住居跡・1号溝跡と近接するが、重複関係はない。規模は一辺約5.0mで、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-74°-Eである。覆土は、軽石・ロームブロックを含む褐色土が主である。壁の残存状態は良好であり、立ち上りは約30~35cmである。床はローム層中に構築されており、比較的硬く良好である。主柱穴は4本であるが、北西側柱穴が床面から約45cmであるのを除き、他の3本は床面から約15~20cmと浅い。壁周溝はほぼ全面的に巡っているが、南東隅の貯蔵穴の周囲からは検出されなかった。

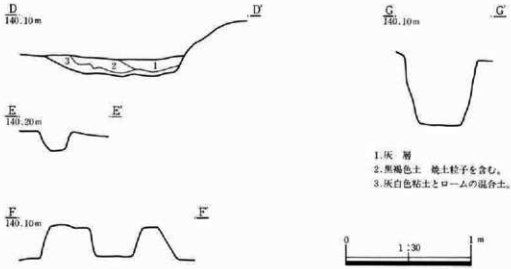
カマドは東側壁の南寄りに構築されている。燃焼部は壁内にあり、袖は粘土を素材にしている。煙道部の張り出しは、壁から約30cmである。貯蔵穴はカマドの右側に構築されている。規模は1辺約50cmで、平面形は不整形な方形を呈する。床面からの深さは約50cmである。

遺物は土師器の壺・杯などが出土している。杯は外面の稜を特徴とするものであり、隣接する1号住居跡との大きな時間差はないと推定している。

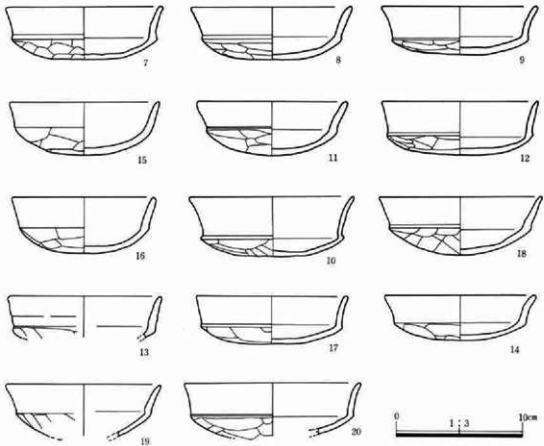
(井川)



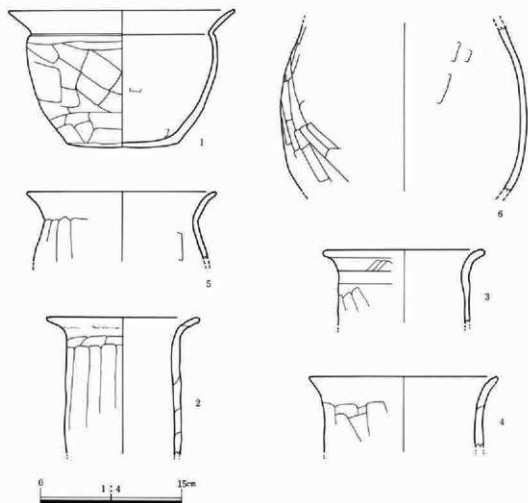
第296図 2号住居跡



第297図 2号住居跡カマド・貯蔵穴



第298図 2号住居跡出土遺物①



第299図 2号住居跡出土遺物②

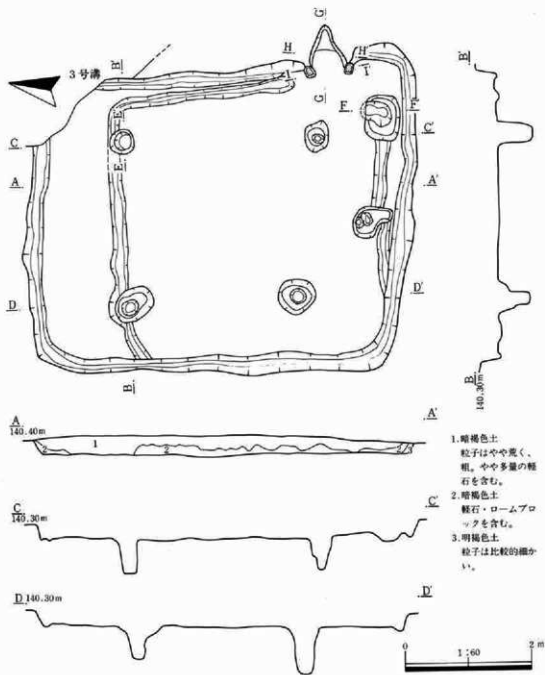
3号住居跡 (第300・301図、図版109)

当住居跡は3号溝跡と重複し、2号住居跡・6号住居跡が近接する。3号溝跡との新旧関係は、同溝跡が当住居跡の北東隅を破壊していることから、当住居跡が古い。

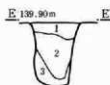
規模は東西約4.8m・南北約6.0mで、平面形はやや歪んだ隅丸長方形を呈する。主軸はN-82°-Eである。壁の立ち上りは約25cmであり、床は比較的硬く良好である。主柱穴は4本であり、床面からの深さは約50~70cmである。壁周溝はカマド部分を除き全面的に巡る。更に、その内側に壁周溝が巡っているが、南西隅・西壁側からは検出されなかった。即ち、当住居跡は北東隅から南西隅への対角線を軸に拡張されていると推定できる。

カマドは東壁の南寄りに構築されており、燃焼部の半分は壁外である。袖は粘土と石を素材に用いている。貯蔵穴はカマドの右側・南東隅付近に構築されている。規模は長辺約70cm・短辺約60cmで、平面形は楕円形に近い長方形を呈する。遺物は土師器の杯・甕、須恵器の杯・甕・壺などが出土している。

(井川)



第300図 3号住居跡



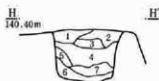
貯蔵穴セクション

1. 暗褐色土 粒子は荒く、軽石・焼土を含む。
2. 褐色土 ロームブロックを含む。
3. 褐色土 粒子は細かい。

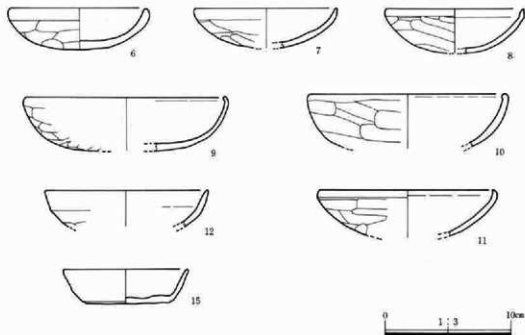


カマドセクション

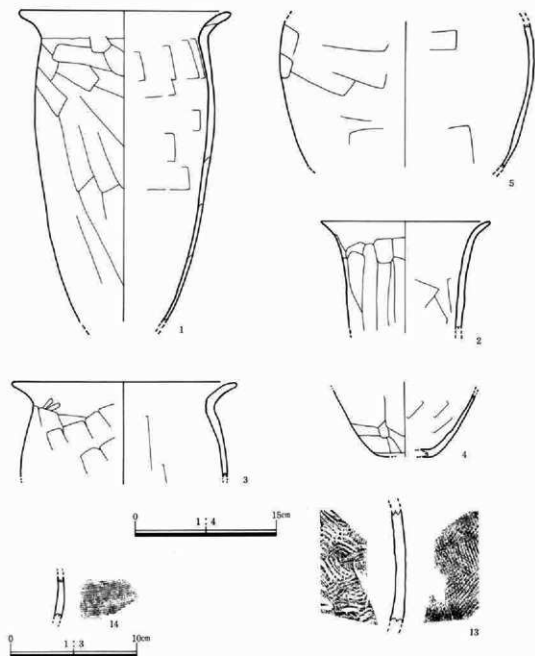
1. 暗褐色土 砂質。多量の軽石を含む。
2. 暗褐色土 軽石・ロームブロック・焼土を含む。
3. 明褐色土 少量の軽石を含む。
4. 明褐色土 多量の焼土を含む。
5. 焼土ブロック
6. 灰層
7. 灰・焼土混合土。



第30図 3号住居跡カマド・貯蔵穴



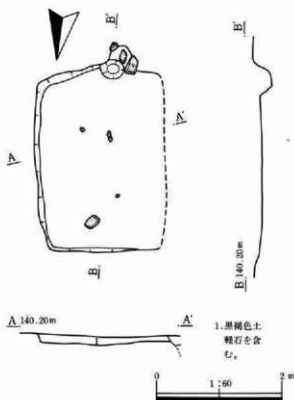
第302図 3号住居跡出土遺物①



第303図 3号住居跡出土遺物②

4号住居跡（第304図）

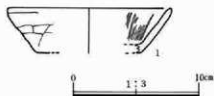
残存状態の不良な住居跡であり、3号溝跡が近接するが、重複関係はない。規模は南北約3.0mであり、東西は不明であるが、約2.0mと推定している。小型の住居跡であり、平面形は隅丸長方形を呈すると考えられる。主軸は推定N-8'-Wであり、覆土は黒褐色土である。壁の立ち上りは、東側壁でも約15cmと悪く、西側壁では確認できなかった。床は全体的にやや軟弱である。壁内に柱穴はなく、壁周溝も確



第304図 4号住居跡

認できなかった。

カマドは南側壁に構築されており、袖は粘土と石を素材にしていたものと推定している。燃焼部の北寄りに、長軸約40cm・短軸約30cm・床面からの深さ約20cmであり、平面形は楕円形を呈するピットがあるが、カマドとの関係は不明である。貯蔵穴は検出されなかった。遺物は非常に少ないが土師器の杯などが出土している。(井川)



第305図 4号住居跡出土遺物

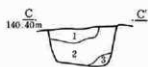
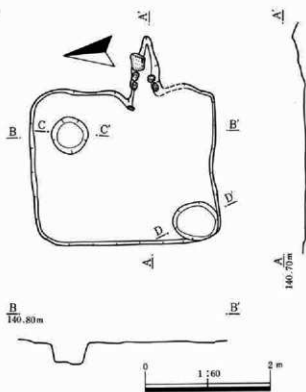
5号住居跡 (第306図、図版109・110)

当住居跡は6号住居跡・8号住居跡の東側に位置し、単独で検出された。周辺はピットが取り囲んでいる。規模は南北約2.9m・東西約2.4mで、隅丸方形を呈する。主軸はN-93°-Eである。確認面が床面に近く、住居内の覆土はほとんどない。床面は平坦で堅緻。壁はわずかに認められるが、ほとんど無いに等しい為不明である。貯蔵穴は住居跡内北東隅に位置し、規模は直径58cm・深さ30cmであり、円形を呈する。床面はほぼ平坦で、壁は直立に近い。貯蔵穴内の遺物は土師質の椀(5住-6)の他、破片を数点含む。西南隅のピットは南北71cm・東西60cm・深さ6cmの円形を呈するが、貯蔵穴といえるかどうか不明である。底面から羽釜の胴部片が出土している。

カマドは住居跡の東辺南寄りに位置し、覆土は軽石まじりの褐色土が全体を覆う。燃焼部には焼土・灰を多量に含む。カマド内には袖石として使用されたと思われる石を5個両側手前に配し、支脚はカマド内中央北寄りに位置し、大きさは高さ10cm・幅5cmで細長い形を呈している。遺物はカマド内に集中し、羽釜(5住-1・3)、灰釉の皿(5住-4)・椀(5住-5)、土師質の椀(5住-7・8)、横瓶(5住-10)などほとんど床直より出土している。その他は、焼土層と炭化物・焼土の混合土層に破片を多量に含む。

住居内の遺物は、南際集中し、破片がほとんどを占める。

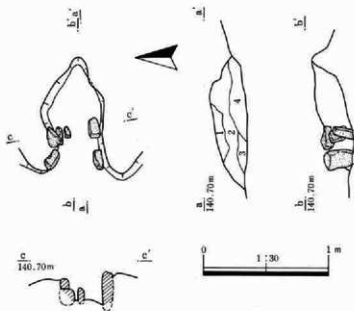
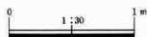
(宮下)



- 貯蔵穴セクション(C-C')
1. 淡茶褐色土 しまりのない土。
 2. 黒色土 さくさくした土。
 3. ローム。

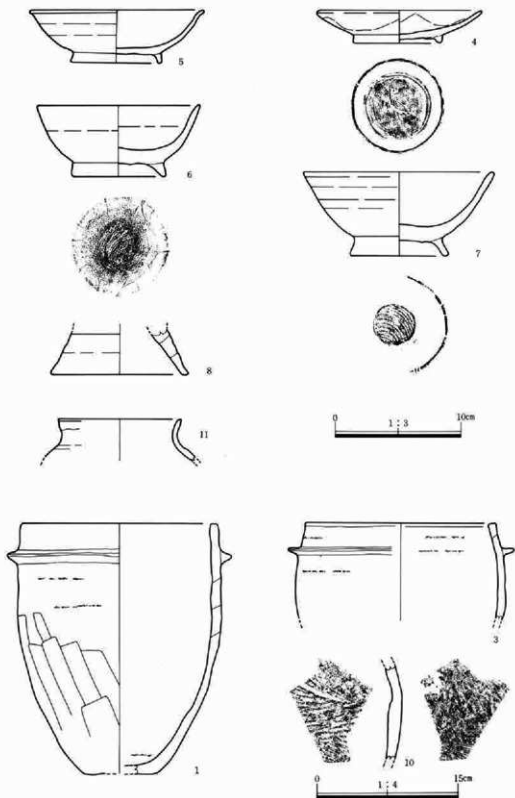


- 貯蔵穴セクション(D-D')
1. 炭化物
 2. 茶褐色土 粘質、しまりのない土。



- カマドセクション
1. 褐色土 粒子が細くしまりがなく、軽石を含む。
 2. 褐色土 軽石・ロームブロック・焼土を含む。
 3. 焼土
 4. 炭化物と焼土の混合土。

第306図 5号住層跡



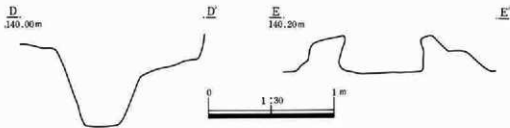
第307図 5号住居跡出土遺物

6号住居跡（第308・309図、図版110・111）

当住居跡は1号溝跡・3号溝跡と重複し、3号住居跡・5号住居跡・9号住居跡が近接する。1号溝跡との新旧関係は、覆土の相違により当住居跡の方が古く、3号溝跡との新旧関係も、南西隅付近が同溝によって破壊されていることから、当住居跡が古い。

規模は東西約6.0m・南北約5.9mで、平面形は隅丸方形を呈する。覆土は軽石を含む褐色土・暗褐色土が主であり、主軸はN-20°-Wである。壁の立ち上りは約50cmであり、残存状態は良好である。床は硬く、良好な床である。主柱穴は4本である。主柱穴の床面からの深さは約60~80cmであり、平面形は円形ないし楕円形を呈する。壁周溝はほぼ全体を巡るが、北東隅・南東隅からは検出されず、東壁側の壁周溝は断続的であった。

カマドは北側壁の中央やや東寄りに構築されており、壁に垂直ではなく、やや西に傾く。袖は粘土と石を素材にしている。燃焼部は壁内にあり、煙道部は約70cm壁外に張り出す。貯蔵穴はカマドの右側、北東隅に構築されている。規模は長辺約1.1m・短辺約0.8m・床面からの深さ約0.6mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。カマド・貯蔵穴周辺から、遺物が多く出土している。出土遺物としては、土師器の杯・甕、須恵器の杯・甕・壺・蓋・提瓶などがある。（井川）

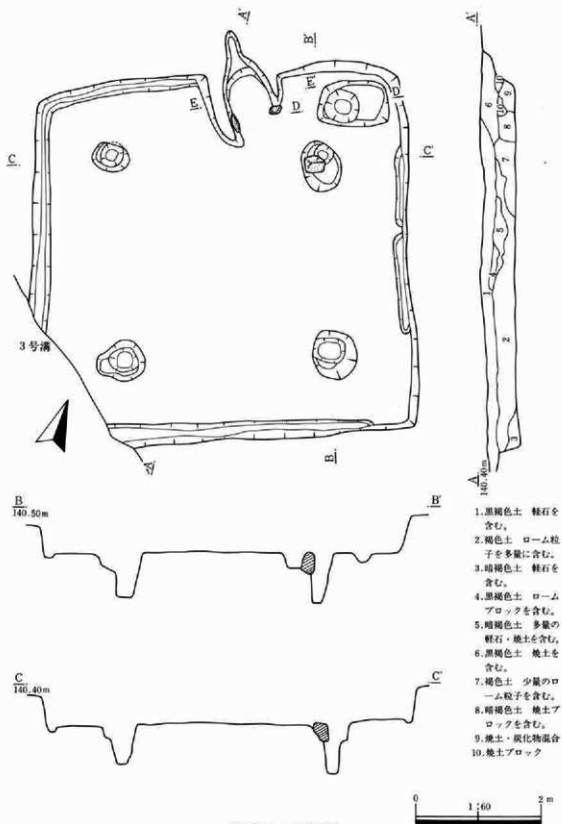


第308図 6号住居跡カマド・貯蔵穴エレベーション

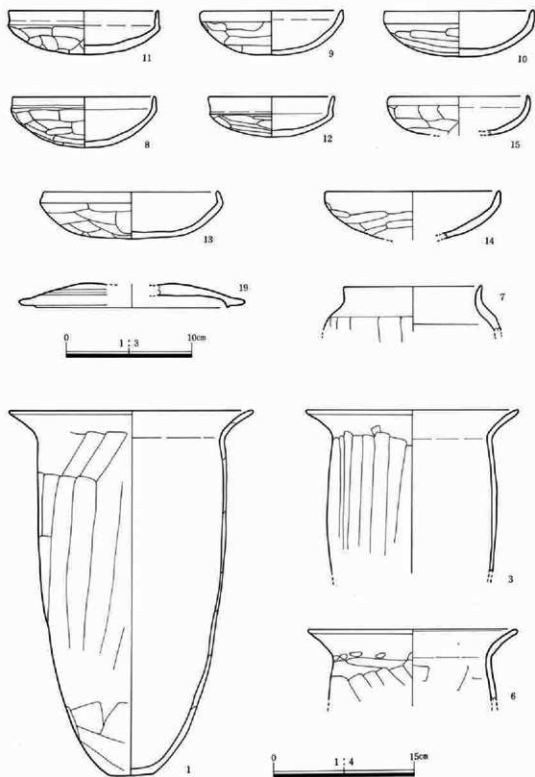
7号住居跡（第312・313図、図版111・112）

当住居跡は、13号住居跡・25号住居跡が重複し、11号住居跡・12号住居跡が近接する。13号住居跡との新旧関係は不明である。25号住居跡との新旧関係は、当住居跡のカマドが破壊されていないこと及び25号住居跡の壁周溝の残存状態から、当住居跡が新しい。

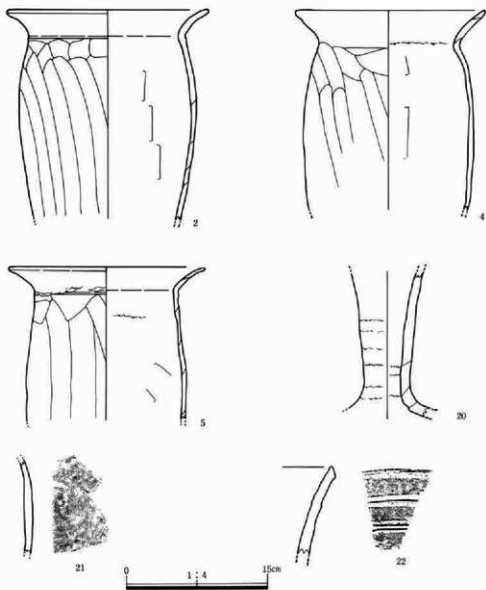
25号住居跡の壁周溝の残存状態から、当住居跡の規模は一辺約2.5mであり、平面形は隅丸方形を呈すると推定できる。主軸はN-69°-Wである。壁の立ち上りは約40~50cmを測るが、東側壁と南西付近を除く南側壁からは検出できなかった。床はローム層中に構築されており、比較的硬く、良好な床である。



第309図 6号住居跡



第310図 6号住層跡出土遺物①



第311図 6号住居跡出土遺物②

壁内に柱穴は検出できず、壁周溝も確認できなかった。

カマドは西壁やや南寄りに構築されており、袖は粘土と石を素材にしている。貯蔵穴はない。遺物は土師器の杯・壺・台付壺、須恵器の杯・蓋・壺・壺などが出土している。（井川）

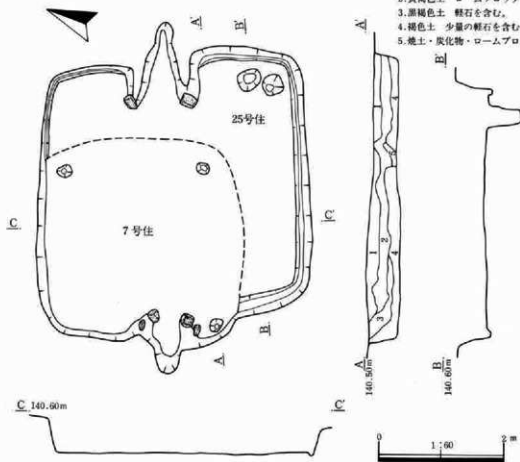
25号住居跡（第312・313図、図版112）

当住居跡は7号住居跡・13号住居跡と重複する。7号住居跡との新旧関係は前述の通りであり、13号住居跡との新旧関係は不明であるが、遺物から見れば、当住居跡が古い。

規模は東西約4.2m・南北約4.3mで、平面形は隅丸方形を呈すると推定できる。主軸はN-69°-Eである。壁の立ち上りは約35~50cmであり、床は硬く良好であるが、北西部は不明である。壁内に柱穴はない。壁周溝は、カマド部分を除いて、全面的に巡るものと推測している。

カマドは東壁中央に構築されている。袖の素材は粘土であり、先端には石を用いている。南東隅から直径約30cm・床面からの深さ約20cmのピットと、直径約40cm・床面からの深さ約50cmのピットが検出できた。貯蔵穴と考えることもできる。遺物は土師器の杯・壺などが出土しているが少ない。（井川）

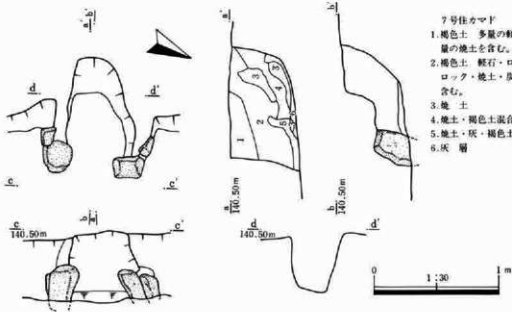
1. 褐色土 軽石を含む。
2. 黄褐色土 ロームブロックを含む。
3. 黒褐色土 軽石を含む。
4. 褐色土 少量の軽石を含む。
5. 焼土・炭化物・ロームブロック混合。



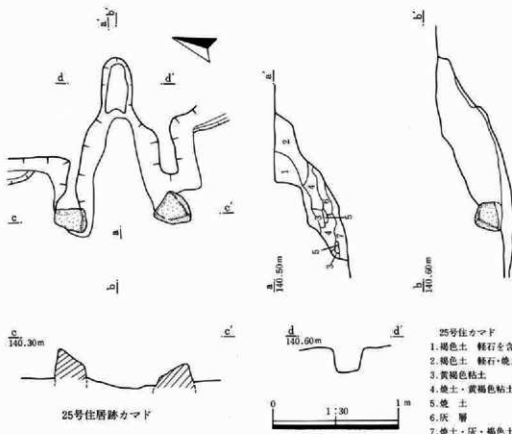
第312図 7号住居跡・25号住居跡

7号住カマド

1. 褐色土 多量の軽石・少量の焼土を含む。
2. 褐色土 軽石・ロームアロロック・焼土・炭化物を含む。
3. 焼土
4. 焼土・褐色土混合。
5. 焼土・灰・褐色土混合。
6. 灰層



7号住居跡カマド

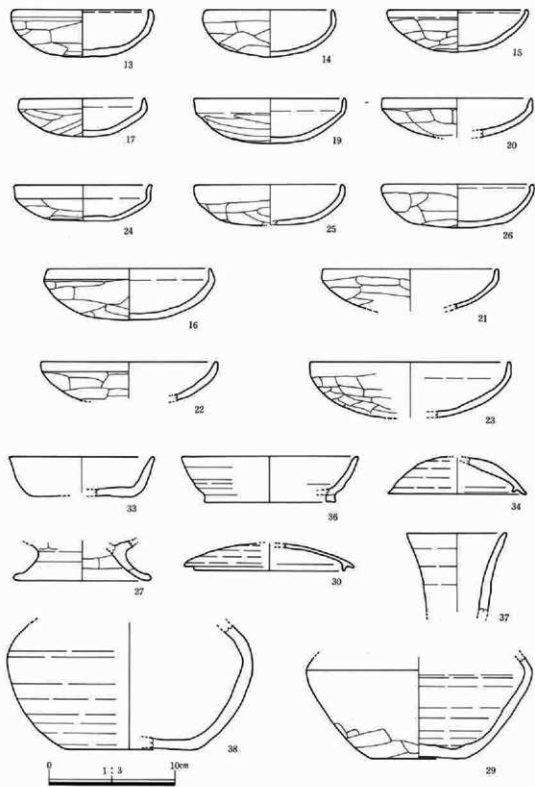


25号住居跡カマド

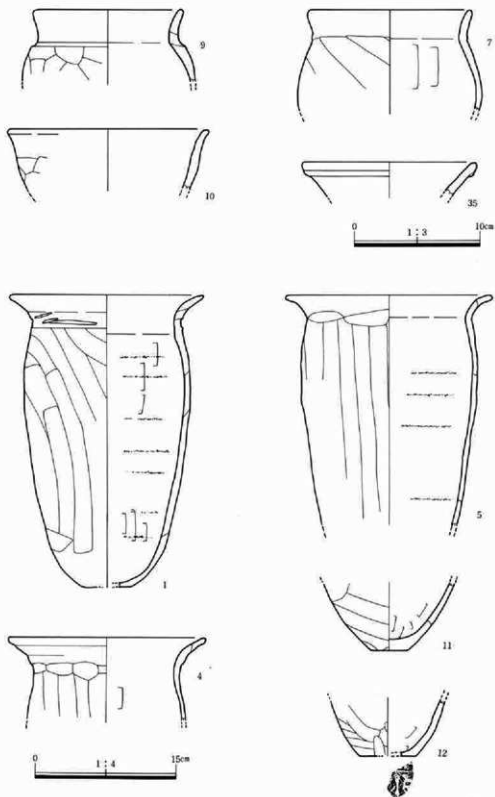
25号住カマド

1. 褐色土 軽石を含む。
2. 褐色土 軽石・焼土含む。
3. 黄褐色粘土
4. 焼土・黄褐色粘土混合。
5. 焼土
6. 灰層
7. 焼土・灰・褐色土混合。

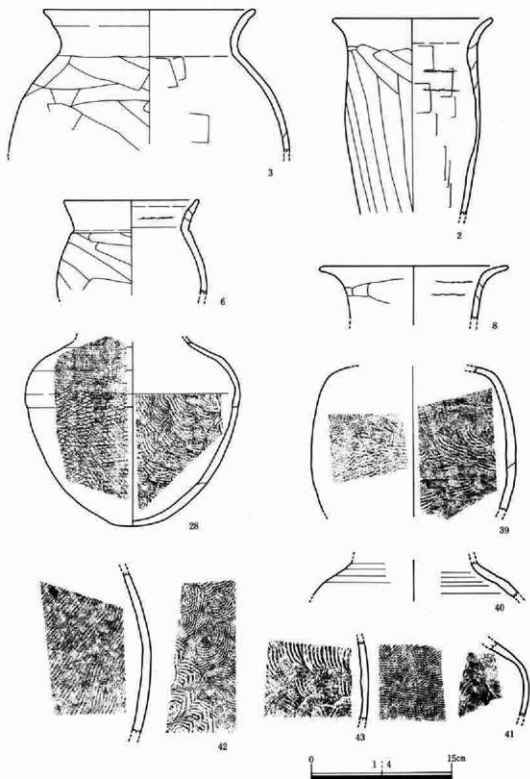
第313図 7号住居跡カマド・25号住居跡カマド



第314図 7号住居跡出土遺物①



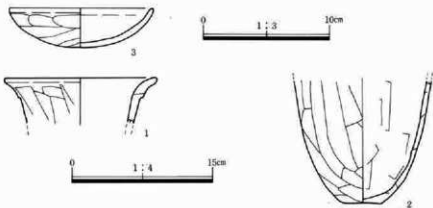
第315図 7号住居跡出土遺物②



第316図 7号住居跡出土遺物③



7号住居跡出土遺物④



第317図 25号住居跡出土遺物

8号住居跡 (第318図、図版113)

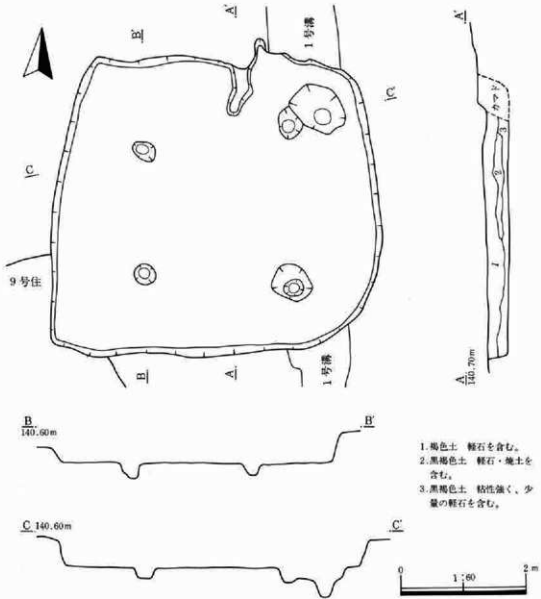
9号住居跡・1号溝跡と重複し、6号住居跡・10号住居跡が近接する。9号住居跡との新旧関係は不明である。1号溝跡との新旧関係は、同溝跡が当住居跡のカマド右袖を破壊していることから、当住居跡が古い。覆土は軽石を含む褐色土・黒褐色土である。

規模は東西約5.2m・南北約4.8mで、平面形は不整形な隅丸方形を呈する。主軸はN-4°-Wである。壁の立ち上りは約30~40cmであり、比較的良好であるが、北側壁の東寄り1/3と南側壁の東寄り1/4は1号溝跡に破壊されている。床は比較的硬く良好である。主柱穴は4本であり、規模は直径約30~40cmで、平面形は円形ないし楕円形を呈する。床面からの深さは、南東側柱穴が約70cmと深いのが、他は約15~25cmと浅い。壁周溝は検出されなかった。

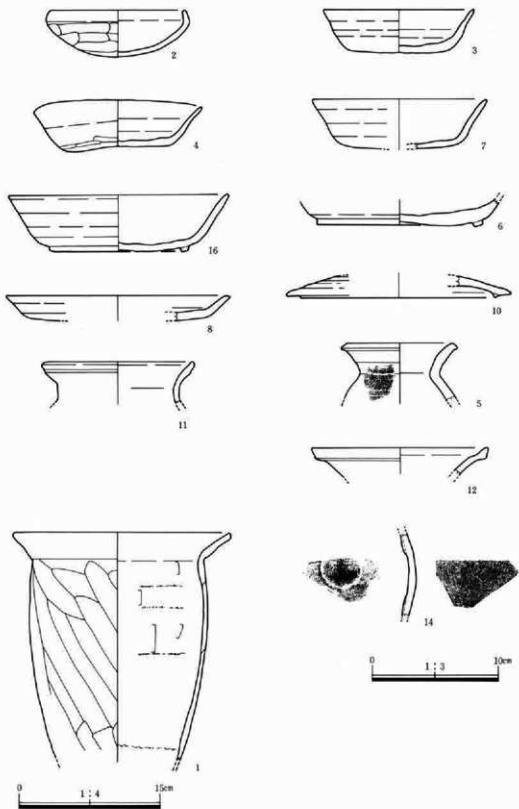
カマドは北側壁の東寄りに構築されている。東側半分は1号溝跡により破壊されており、西側半分のみが残存である。袖の素材には粘土を使用している。貯蔵穴は北東隅に構築されている。規模は長軸約90cm・短軸約70cmで、平面形は不整形な楕円形を呈する。床面からの深さは約50cmである。

遺物は住居跡全体から出土するが、カマド・貯蔵穴周辺からの出土が多い。遺物は土師器の杯・甕、須恵器の杯・皿・蓋・甕などが出土している。

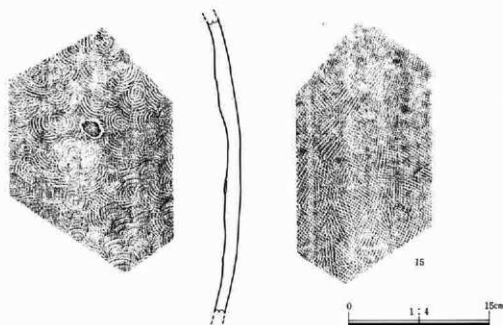
(井川)



第318図 8号住居跡



第319図 8号住居跡出土遺物①



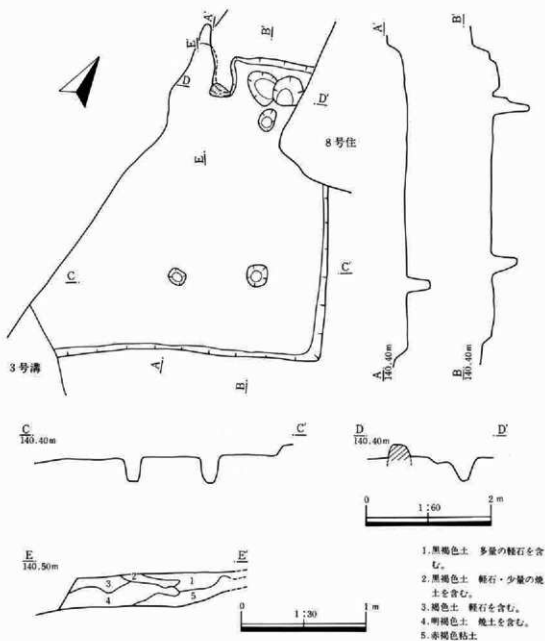
第320図 8号住居跡出土遺物②

9号住居跡（第321図、図版113）

8号住居跡・3号溝跡と重複し、6号住居跡・1号溝跡が近接する。8号住居跡との新旧関係は不明である。3号溝跡との新旧関係は、同溝跡により当住居跡の南西部分の壁・床が破壊されていることから、当住居跡が古い。

規模は北西側の約 $\frac{1}{2}$ が調査区域外のため不明であるが、南北約4.8mである。平面形は隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと推定している。壁の立ち上りは約20～30cmであり、西側部分は未調査である。床は比較的硬く良好である。主柱穴は4本と推測しているが、西側の柱穴は不明である。東側柱穴の規模は直径約25～30cm、平面形は円形ないし楕円形を呈し、床面からの深さは約40～60cmである。南側中央付近に直径約30cm・床面からの深さ約40cmのピットがある。柱穴と考えることも可能であるが、位置が変則である。調査範囲内から、壁周溝は検出されなかった。

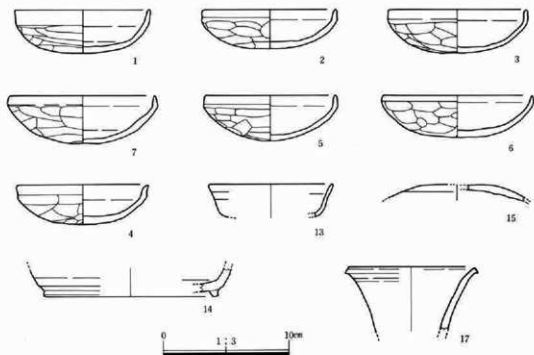
カマドは北側壁に構築されている。西側半分は未調査であるが、燃焼部は半分が壁内である。右袖は粘土を素材に使用している。北東隅からは2基のピットが検出されたが、1基は床面からの深さが約10cmと浅く、貯蔵穴とは考えにくい。他方は床面からの深さが約40cmであり、直径約50cmで、平面形は円形を呈している。遺物は土師器の杯・甕、須恵器の杯・甕などが出土している。（井川）



第321図 9号住居跡



第322図 9号住居跡出土遺物①



第323図 9号住居跡出土遺物②

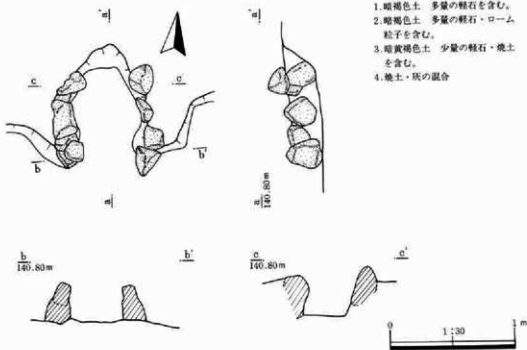
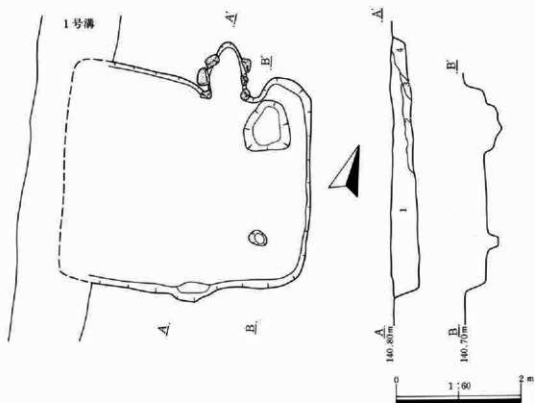
10号住居跡（第324図、図版114）

当住居跡は、1号溝跡が重複し、8号住居跡が近接する。1号溝跡との新旧関係は、同溝跡によって当住居跡の西側壁が破壊されていることから、当住居跡が古い。

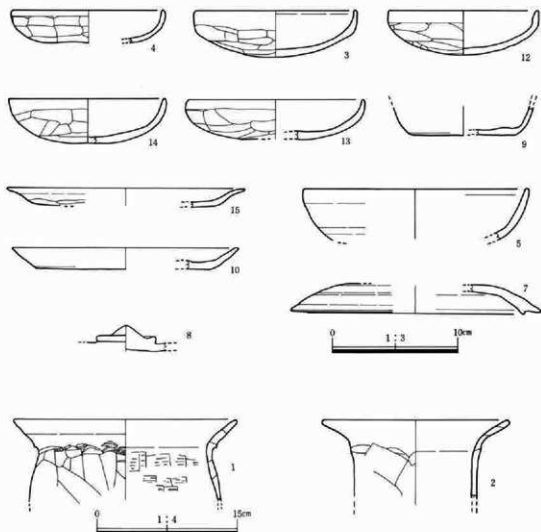
規模は不明であるが、南北が約3.4mであり、平面形は隅丸長方形を呈するものと推定している。主軸はN-14°-Wである。壁の立ち上りは約30～35cmであるが、西側壁は1号溝に破壊されている。床は比較的硬く良好であるが、やや軟弱な部分もある。壁内から柱穴は検出されず、壁周溝も検出されなかった。

カマドは北側壁の東寄りに構築されている。燃焼部は半分が壁外である。袖部・燃焼部・煙道部の周囲は石で構築されており、石の間を粘土で固めている。1号住居跡と同じように、石を多用したカマドである。貯蔵穴はカマドの右側、北東隅に構築されている。規模は一辺約75cmで、平面形は不整形な方形を呈する。床面からの深さは約30cmである。南東部に、規模が長軸約30cm・短軸約20cm・床面からの深さ約20cmで、平面形が不整形な楕円形を呈する小ピットがある。住居跡に属するか否かは、不明である。遺物は土師器の杯・甕、須恵器の杯・皿・蓋などが出土している。

(井川)



第324図 10号住居跡



第325図 10号住居跡出土遺物

11号住居跡 (第326・327図、図版115・116)

12号住居跡と重複し、7号住居跡・13号住居跡・25号住居跡が近接する。12号住居跡との新旧関係は、覆土の相違・当住居跡のカマドの残存状態・12号住居跡の壁・壁周溝の残存状態から、当住居跡が新しい。覆土は軽石を含む褐色土である。

規模は東西約2.6m・南北約3.0mと小型で、平面形は不整形な隅丸長方形を呈する。主軸はN-93°-Wである。壁の立ち上りは約50~60cmであり、残存状態は良好である。床も硬く、良好な床である。壁内から柱穴は検出されず、壁周溝も確認されなかった。

カマドは東側壁の南寄りと西側壁の南寄りに2基構築されており、袖の残存状態から、西側壁のカマドが新しい。東側壁のカマドは石を素材にしているが、破壊されており、袖は検出できなかった。西側壁のカマドは粘土を素材にしており、燃焼部は壁内にある。貯蔵穴は南西隅に構築されており、規模は

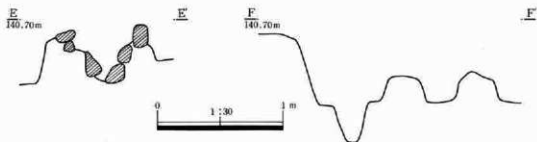
長軸約40cm・短軸約30cm・床面からの深さ約30cmで、平面形は楕円形を呈する。

(井川)

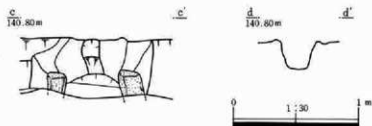
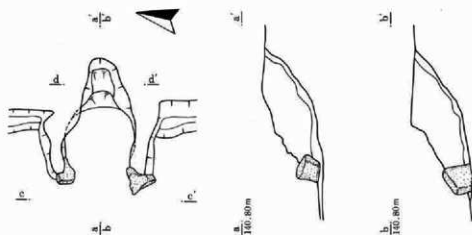
12号住居跡 (第326・327図、図版115・116)

11号住居跡・13号住居跡と重複し、7号住居跡・25号住居跡が近接する。11号住居跡との新旧関係は、前述の通り当住居跡が古く、13号住居跡との新旧関係も覆土の相違から、当住居跡が古い。

規模は東西約4.5m・南北約4.6mで、平面形は隅丸方形を呈すると推定している。主軸はN-77-Eである。壁の立ち上りは約40~45cmであり、残存状態は良好であるが、南西部は11号住居跡によって破

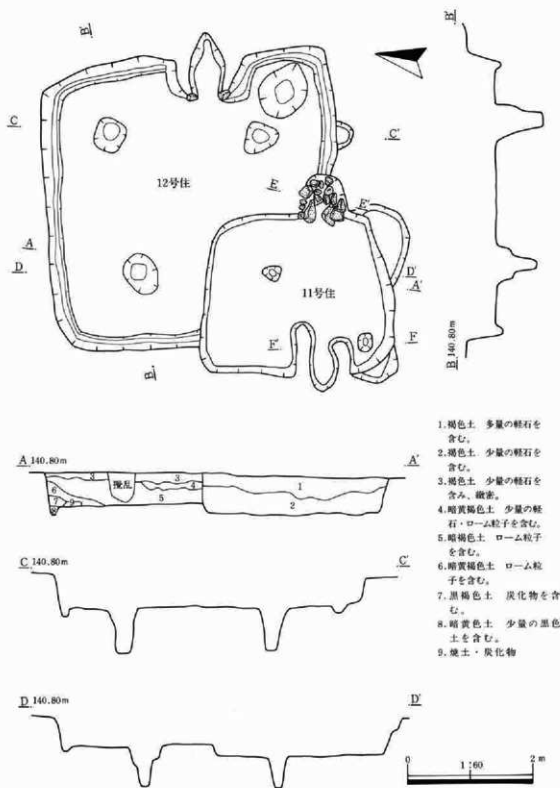


11号住居跡カマド

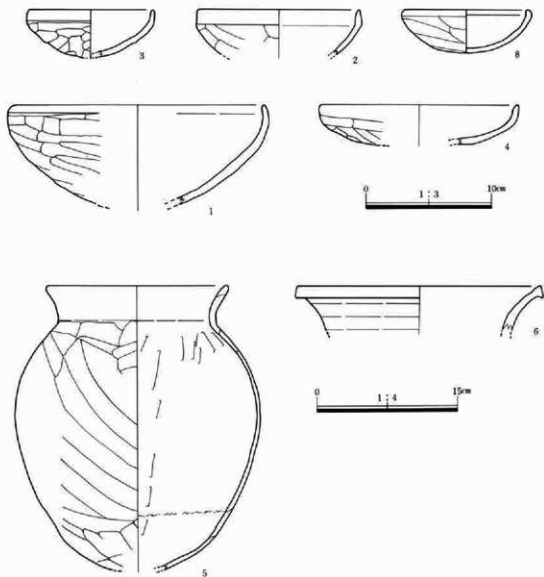


12号住居跡カマド

第326図 11号住居跡カマド・12号住居跡カマド



第327図 11号住居跡・12号住居跡

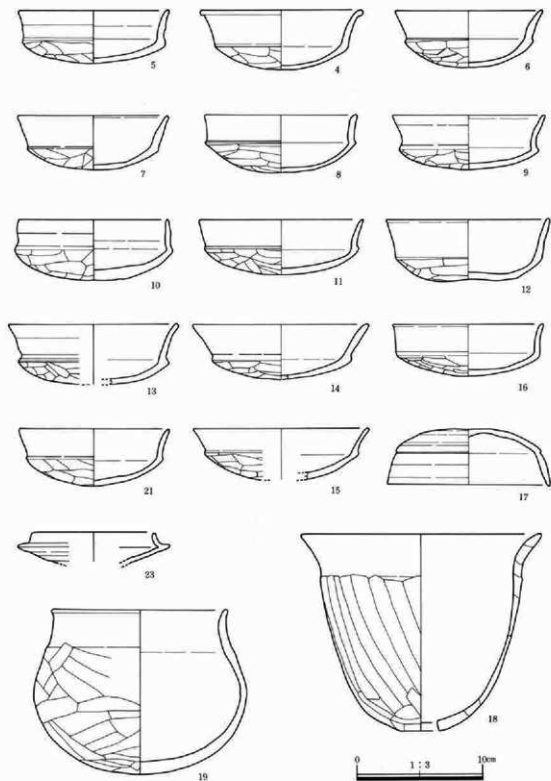


第328図 11号住居跡出土遺物

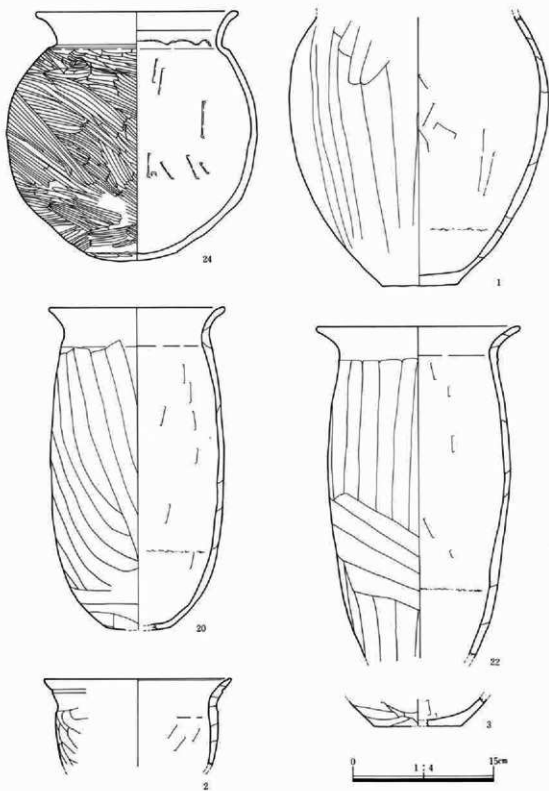
壊されている。床は硬く、良好であるが、南西部は不明である。主柱穴は4本であり、床面からの深さは約60～70cmである。南西部は不明であるが、壁周溝はカマド部分を除き、巡っているものと推定している。

カマドは東壁中央やや南寄りに構築されている。燃焼部は壁内にあり、袖は粘土を素材としているが、先端には石を使用している。貯蔵穴はカマドの右側、南東隅に構築されている。規模は長辺約80cm・短辺約70cm・床面からの深さ約60cmであり、平面形は不整形な長方形を呈する。遺物は土師器の杯・壺・甕・須恵器の蓋などが出土している。

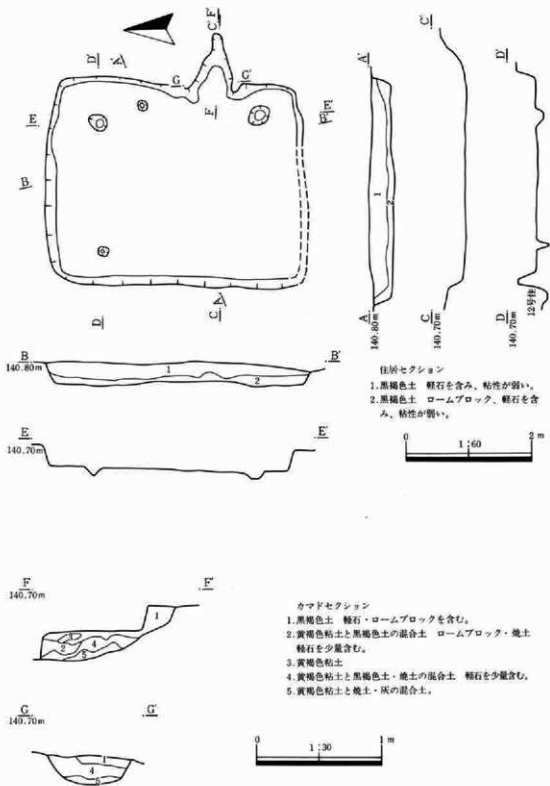
(井川)



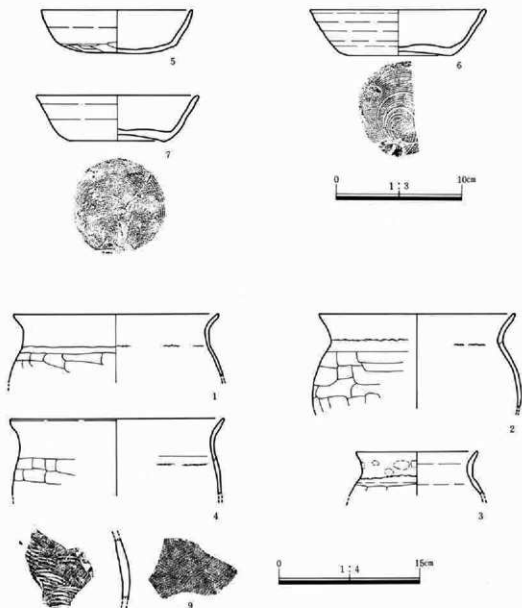
第329図 12号住居跡出土遺物①



第330図 12号住居跡出土遺物②



第331図 13号住居跡



第332図 13号住居跡出土遺物

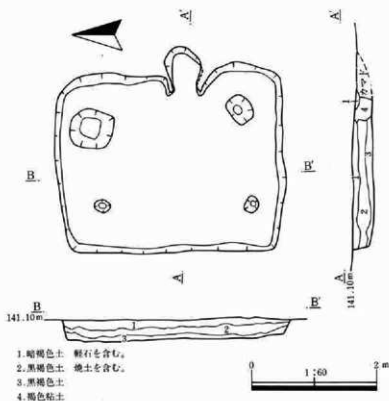
13号住居跡 (第331図、図版117)

当住居跡は12号住居跡・25号住居跡と重複関係にある。規模は南北約4.1m・東西約3.3mで隅丸長方形を呈する。主軸はN-89°-Eである。床面はほぼ平坦で軟質。貯蔵穴は検出されず、柱穴は3本検出され、長軸17~35cm・短軸17~30cm・深さ10~19cmの規模。不定形な円形を呈し、遺物は須恵器の甕(13住-9)を北東隅の柱穴内から出土し、他は破片を出土している。カマドは住居跡内東辺南寄りに位置する。カマド全体は黒褐色土に覆われ、燃焼部に焼土・灰をわずかに含む。煙道部は、傾きが強く壁に直角にあたる。遺物は土師器の甕(13住-2)を床直より出土し、破片は数点散らばっている。

遺物は住居跡内南西から土師器の小型壺(13住-3)・杯(13住-5)などが出土し、中央から南側に集中する。当住居跡は重複関係により、12号住居跡・25号住居跡より新しいと判断できる。(宮下)

14号住居跡 (第333図、図版117)

15号住居跡・17号住居跡・20号住居跡・21号住居跡・22号住居跡が近接するが、重複はない。規模は東西約2.8m・南北約3.6mで、平面形は隅丸長方形を呈する小型の住居跡である。主軸はN-89°-Eで

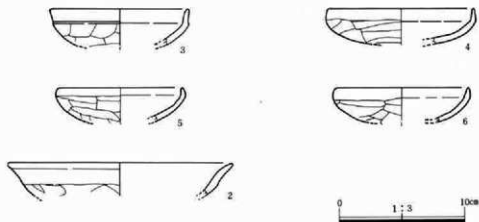


第333図 14号住居跡

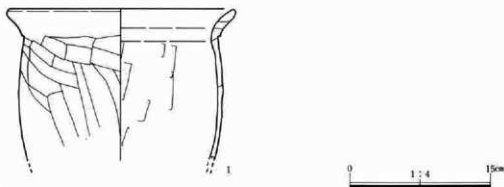
ある。壁の立ち上りは約25~30cmであり、床面はやや軟弱である。住居内には、4基のピットがあるが、床面からの深さは約10~20cmと浅い。平面形も一辺約70cmの不整形な方形から、一辺約20cmの方形までまちまちであり、柱穴と考えるには難がある。壁周溝は確認できなかった。

カマドは東壁中央やや南寄りに構築されている。燃烧部は半分が壁内であり、袖は粘土を素材にしている。遺物は土師器の杯・壺などが出土している。

(井川)



第334図 14号住居跡出土遺物①



第335図 14号住居跡出土遺物②

15号住居跡（第336図、図版118）

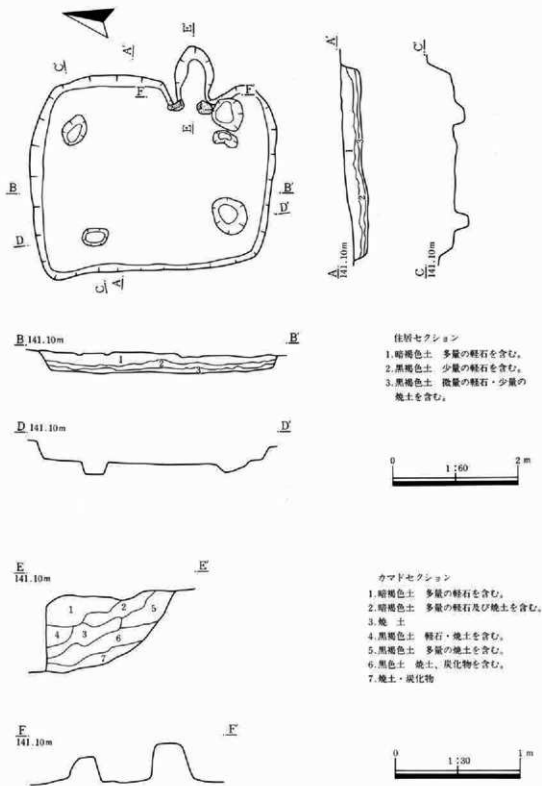
17号住居跡・1号溝跡・2号溝跡が近接するが、重複はない。覆土は軽石を含む暗褐色土が主である。規模は東西約3.0m・南北約4.0mであり、平面形は不整形な隅丸長方形を呈する。主軸はN-82°-Eである。壁の立ち上りは約20~25cmであり、残存状態はやや不良である。床は比較的硬く良好である。主柱穴は4本であるが、床面からの深さは約25~30cmであり、やや浅い。柱穴の規模は、長軸約35~65cm・短軸約20~50cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。壁周溝は確認できなかった。

カマドは東側壁中央の南寄りに構築されているが、残存状態はやや不良である。燃焼部は半分が壁内にあり、煙道部の壁外への張り出しは約60cmである。燃焼部からは、焼土・炭化物の堆積が確認できた。袖は粘土を素材に構築しているが、先端には石を使用している。貯蔵穴はカマド右側、南東隅に構築されている。規模は直径約50cmであり、平面形は不整形な円形を呈する。床面からの深さは約20cmであり、やや浅い。遺物の出土は非常に少ないが、土師器の杯・甕などが出土している。（井川）

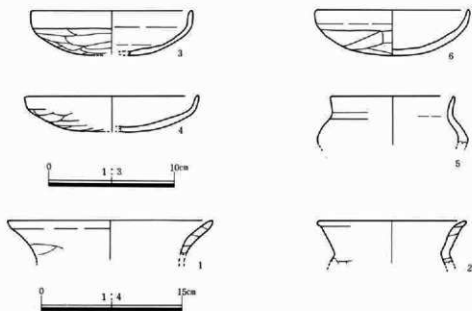
16号住居跡（第338図、図版118）

1号溝跡と重複し、15号住居跡が近接する。1号溝跡との新旧関係は、同溝跡により当住居跡の東半分が破壊されていることから、当住居跡が古い。

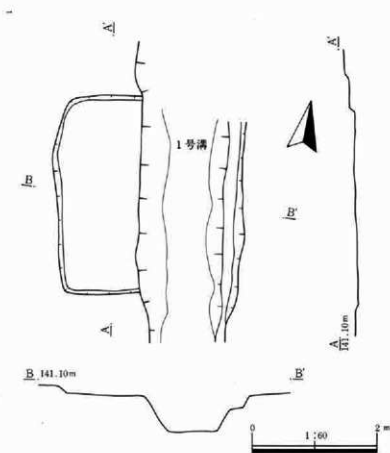
規模・平面形は不明であるが、南北は約3.0mであり、平面形は隅丸方形か隅丸長方形を呈すると推定している。壁の立ち上りは約5~10cmと浅く、床もやや軟弱であり、残存状態は不良である。カマド・柱穴・壁周溝・貯蔵穴は確認できなかった。カマドは1号溝跡によって破壊され、壁内に柱穴はなく、壁周溝もないものと推測している。遺物は非常に少ないが、土師器の杯などが出土している。（井川）



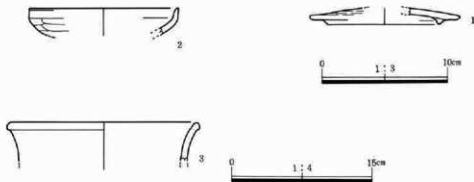
第336図 15号住居跡



第337図 15号住居跡出土遺物



第338図 16号住居跡



第339図 16号住居跡出土遺物

17号住居跡 (第340・341図、図版119)

18号住居跡・2号溝跡と重複し、15号住居跡・22号住居跡が近接する。18号住居跡との新旧関係は、覆土の相違により、当住居跡が新しい。2号溝跡との新旧関係は、覆土の相違により、当住居跡が古い。当住居跡の覆土は、軽石を含む暗褐色土・褐色土である。

規模は東西約4.2m・南北約4.1mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-64°-Eである。壁の立ち上りは約45cmであり、残存状態は良好である。床も硬く、良好な床である。支柱穴は4本であり、直径約20~30cm、床面からの深さ約20~50cmである。平面形は不整形な円形ないし楕円形を呈する。壁周溝は、カマド部分を除き巡っている。住居跡内中央に、大小のピットが存在するが、住居造築以前のものである。

カマドは東壁中央に構築されている。カマド燃焼部は壁内にあり、煙道部の壁外への張り出しは約40cmである。袖は粘土を素材に使用しており、煙道部の周囲も粘土で固めてあった。貯蔵穴は南東隅に構築されている。規模は直径約60cm・床面からの深さ約30cmであり、平面形は円形を呈する。

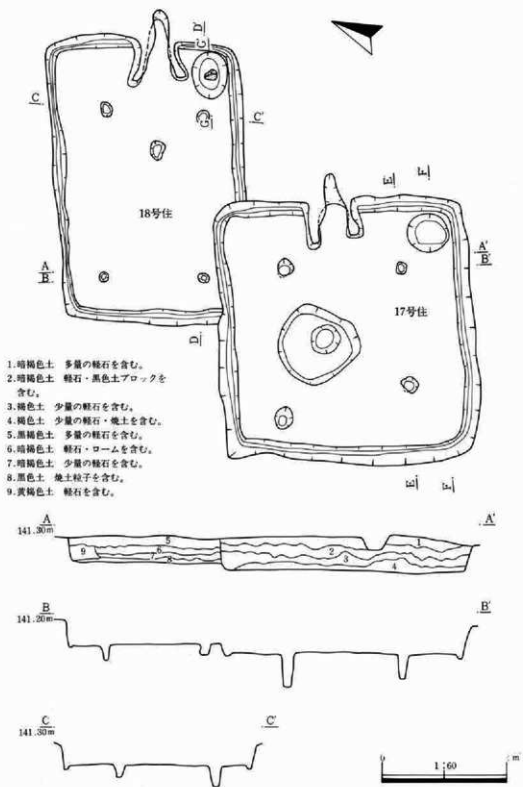
遺物は土師器の杯・高杯・壺などが出土している他、石英安山岩製の砥石が出土している。高杯はカマド内からの出土であり、支脚に使用された可能性がある。(井川)

18号住居跡 (第340・341・342図、図版120)

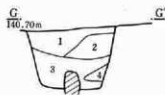
17号住居跡が重複し、22号住居跡・2号溝跡が近接する。17号住居跡との新旧関係は前述の通りである。覆土は少量の軽石を含む黒褐色土が主である。

規模は東西約4.5m・南北約3.0mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-66°-Eである。壁の立ち上りは約40cmであり、17号住居跡と重複する南西隅を除き、残存状態は良好である。床は硬く、良好な床である。支柱穴は4本である。規模は直径約20cm・床面からの深さ約20~30cmであり、平面形は円形を呈する。南西隅は17号住居跡との重複により不明であるが、壁周溝はカマド部分を除き、巡っていると推定できる。

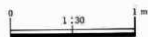
カマドは東壁中央やや南寄りに構築されている。燃焼部は壁内にあり、煙道部の壁外への張り出しは、



第340図 17号住居跡・18号住居跡



18号住居跡貯蔵穴

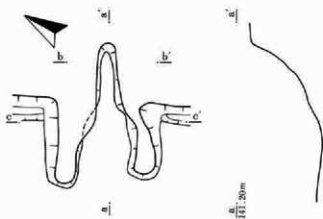


貯蔵穴セクション

1. 褐色土 軽石を含む。
2. 褐色土 軽石を含まない。
3. 黒色土ブロック
4. ロームブロック



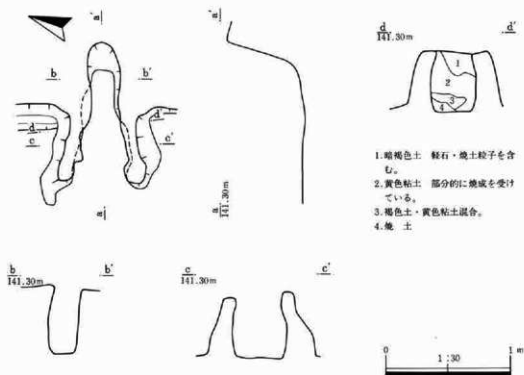
17号住居跡カマド



c
141.20m



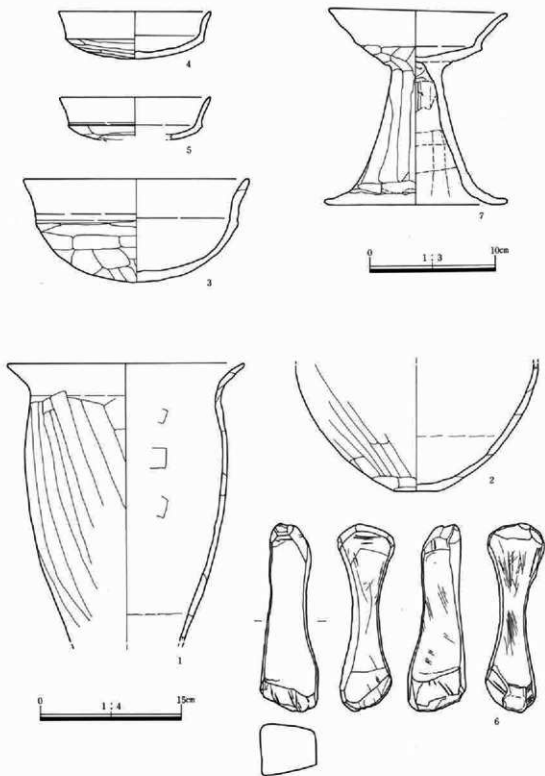
第34図 17号住居跡・18号住居跡



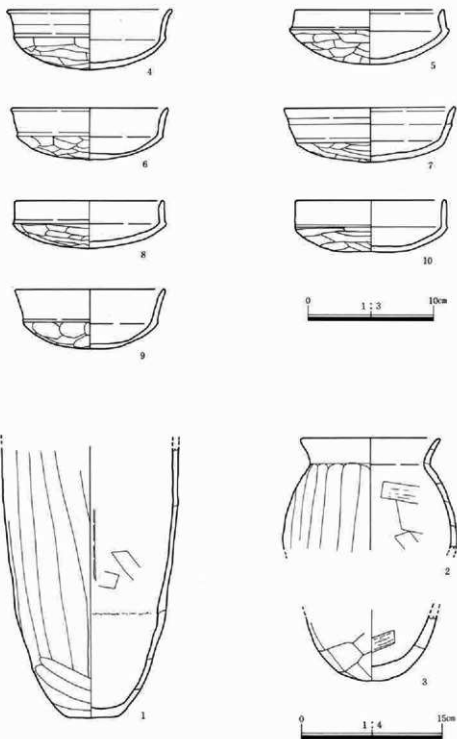
第342図 18号住居跡カマド

約50cmである。袖は粘土を素材に使用しており、煙道部の周囲も粘土で固めている。カマドの構造は17号住居跡と同様である。貯蔵穴はカマドの右側、南東隅に構築されている。規模は長軸約70cm・短軸約55cmであり、平面形は楕円形を呈する。床面からの深さは約50cmである。遺物は土師器の壺・杯などが出土している。

(井川)



第343図 17号住居跡出土遺物

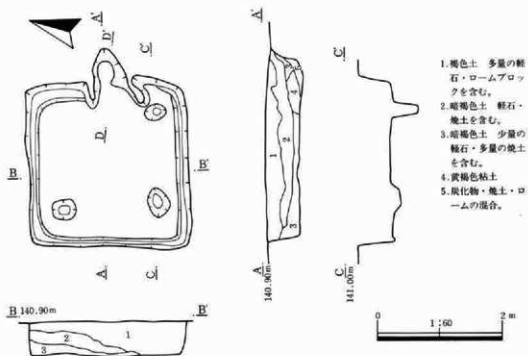


第344図 16号住居跡出土遺物

20号住居跡 (第345・346図、図版120・121)

重複はなく、12号住居跡・14号住居跡が近接する。覆土は軽石を多量に含む褐色土・暗褐色土が主である。規模は東西約2.6m・南北約2.5m、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-72°Eである。壁の立ち上りは約50cmであり、残存状態は良好である。床は硬く、良好な床である。住居跡内の各隅付近からは、3基の住居跡内ピットが確認できたが、北東隅からは検出できなかった。ピットの規模は長軸約35~50cm・短軸約25~35cmであり、平面形は楕円形を呈する。床面からの深さは、西側の2基が約20cmと浅く、南東側のピットは約40cmである。3基のピットを柱穴と考えることも可能であるが、不自然な面は残る。壁周溝は、カマド部分を除いてほぼ巡っている。

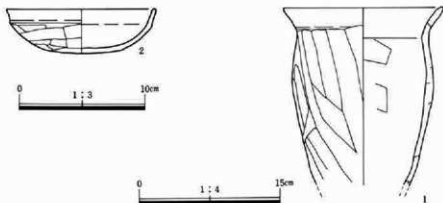
カマドは東壁中央に構築されている。燃焼部は半分が壁内であり、煙道部の壁外への張り出しは、確認面で約50cmである。3基のピットのいずれかを、貯蔵穴と考えることもできるが、規模等から難は残る。遺物は非常に少ないが、土師器の杯・壺などが出土している。(井川)



第345図 20号住居跡



第346図 20号住居跡カマドセクション



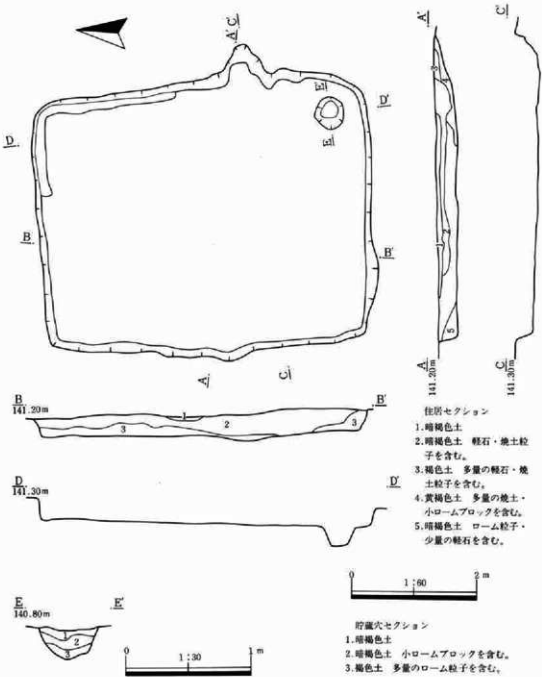
第347図 20号住居跡出土遺物

21号住居跡 (第348図、図版121)

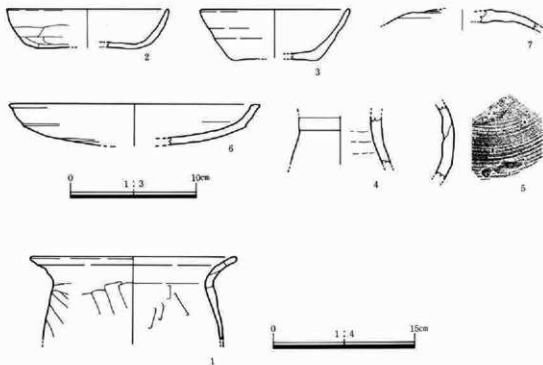
重複関係はなく、22号住居跡が近接する。覆土は軽石を含む褐色土・暗褐色土である。規模は東西約4.2m・南北約5.3mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-85°-Eである。壁の立ち上りは約35cmであり、残存状態は比較的良好である。床は比較的硬く、良好であるが、やや軟弱な部分もある。壁内に柱穴はなく、壁周溝は北東部分にのみ掘られている。

カマドは東側壁の南寄りに構築されている。残存状態は悪く、袖の痕跡と煙道部の掘り方が確認できただけである。貯蔵穴は南東隅に構築されており、規模は直径約50cmで、平面形は円形を呈する。床面からの深さは約25cmである。遺物は土師器の杯・甕、須恵器の杯・皿・蓋などが出土しているが、出土数は少ない。

(井川)



第348図 21号住居跡



第349図 21号住居跡出土遺物

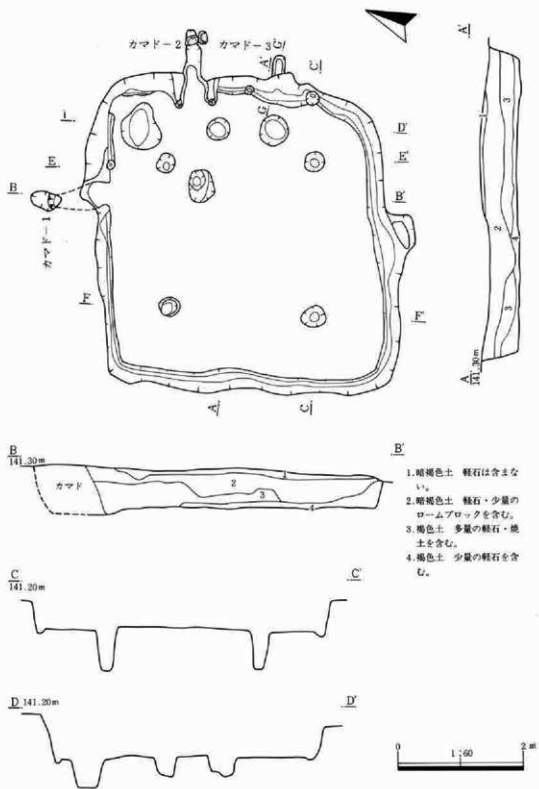
22号住居跡 (第350・351・352図、図版121・122・123)

2号溝跡と重複し、14号住居跡・18号住居跡・21号住居跡が近接する。2号溝跡との新旧関係は、覆土の相違により、当住居跡が古い。覆土は軽石を含む暗褐色土・褐色土である。

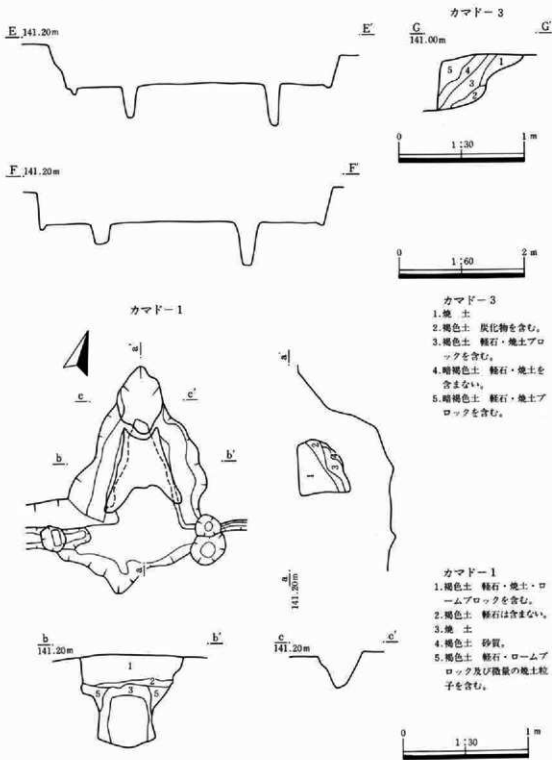
規模は東西約5.0m・南北約4.7mであり、平面形は不整形な隅丸方形である。主軸(カマドー2を基準)はN-64°-Eである。壁の立ち上りは約50~70cmを測り、残存状態は良好である。床は硬く、良好な床である。主柱穴は4本である。規模は直径約25cmであり、平面形は円形・不整形な円形である。床面からの深さは約30~70cmである。壁周溝はカマド部分・北東隅を除いて巡っている。

カマドは北側壁の東寄りに1基(カマドー1)、東側壁に2基(北側からカマドー2・カマドー3)の計3基が構築されている。袖の残存状態からカマドー2が最も新しく、最終的に使用されていたカマドである。カマドー1・カマドー3の新旧関係は不明である。カマドー1の袖は破壊されており、確認できなかったが、トンネル状の煙道部は良好に残存していた。煙道部の壁外への張り出しは約1.0mである。煙道部の天井はロームブロックを含む褐色土で造られている。袖の壁側基部からは直径約20~30cm、床面からの深さ20cmのビットが対で確認できた。

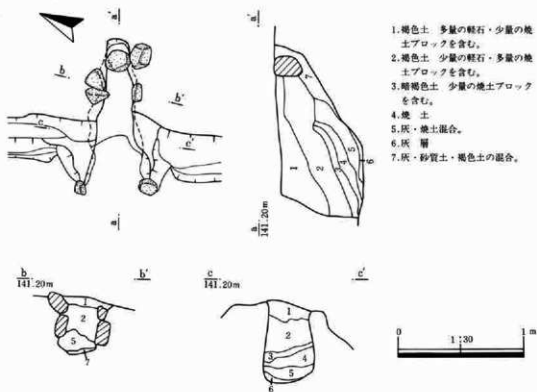
カマドー2の燃焼部は壁内にあり、煙道部の壁外への張り出しは約80cmである。袖は粘土を素材にしており、先端部には石を使用している。煙道部は地山を掘り込み、側面を石で固める構造であり、1号住居跡・10号住居跡と同質のものである。カマドー3は煙道部が確認できただけであり、残存状態は最も悪い。煙道部の壁外への張り出しは約30cmである。



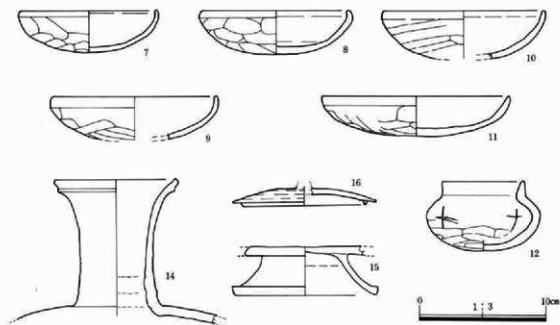
第350図 22号住居跡



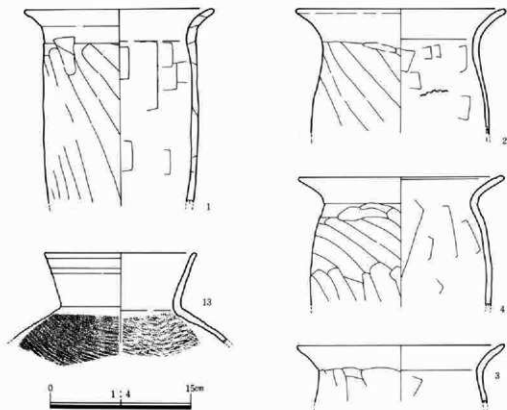
第351図 22号住居跡



第352図 22号住居跡カマドー2



第353図 22号住居跡出土遺物①



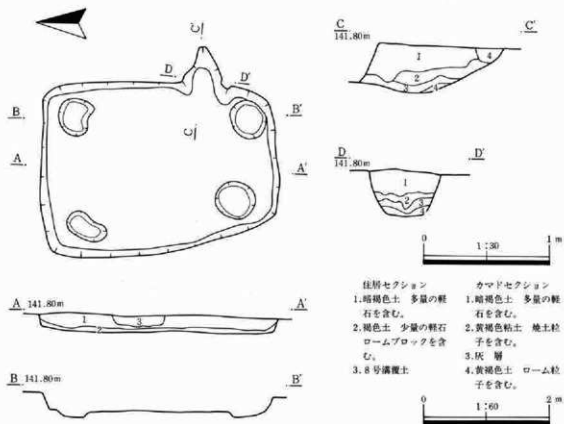
第354図 22号住居跡出土遺物②

貯蔵穴は北東隅に構築されている。規模は長軸約70cm・短軸約60cmであり、平面形は不整形な楕円形である。床面からの深さは約45cmである。柱穴・貯蔵穴の他に、カマドー2・カマドー3の前に各々1基、東側柱穴の間に1基、計3基のピットが確認できた。規模は径約30~40cm・床面からの深さ約30~35cmであり、平面形は円形・楕円形である。遺物の出土はカマド・貯蔵穴周辺に集中しており、土師器の杯・甕、須恵器の高杯・蓋・甕・短頸壺などが出土している。(井川)

23号住居跡 (第355図、図版124)

8号溝跡と重複し、24号住居跡・30号住居跡・6号溝跡が近接する。8号溝跡との新旧関係は、覆土の相違により、当住居跡が古い。覆土は軽石を多く含む暗褐色土が主である。

規模は東西約2.7m・南北約3.7mであり、平面形は隅丸長方形である。主軸はN-87-Eである。壁の立ち上りは約25cmであり、残存状態はやや不良である。床はやや軟弱である。住居跡内の各隅からはピットが検出された。規模は直径約50~60cm・床面からの深さ約10~15cmであり、平面形は円形・不整形な円形である。柱穴と推定できるが、径の大きさ等から、不自然な面が残る。壁周溝は確認できなかった。



第355図 23号住居跡



第356図 23号住居跡出土遺物

カマドは東側壁の南寄りに構築されている。残存状態は悪く、煙道部と僅かな袖が確認できただけである。燃焼部は半分が壁内にあり、煙道部の壁外への張り出しは約50cmである。袖は粘土を素材に使用している。貯蔵穴は検出できなかったが、南東隅のピットを貯蔵穴と考えることも可能である。遺物は非常に少ないが、須恵器の杯・蓋などが出土している。(井川)

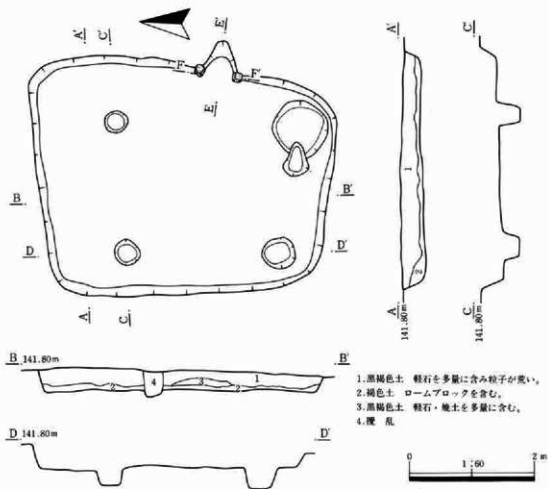
24号住居跡 (第357・358図、図版124)

当住居跡は23号住居跡の西側、26号住居跡の東側に近接し、単独にて検出された。規模は南北に約4.6m・東西に約3.6mで隅丸台形を呈する。主軸はN-93°-Eである。床はほぼ平坦である。貯蔵穴は住居跡内東南隅に位置し、規模は90×92cm・深さ23cmで円形を呈する。遺物は少なく、石が上面に数点散らばっている。柱穴は4本検出され、長軸約35~55cm・短軸約35~50cm・深さ約25~40cmで円形を呈する。4本の柱穴のうち東南隅の1本は貯蔵穴と重なり合う。遺物は須恵器の細頸壺(24住-4)が主なもので、他は破片が少し出土している。

カマドは住居内東辺南寄りに構築され、袖石として使用されたであろう2個の石が両側手前に配されている。黒褐色土が全体を覆い、焼土・灰の層は少量認められる。遺物は土師器の甕(24住-1)、須恵器の碗(24住-7)がカマド手前より出土している。

遺物は住居内北側に集中する。土師器の小型甕(24住-2)、須恵器の甕(24住-5)・杯(24住-6)他、破片を多量に出土している。

(宮下)



第357図 24号住居跡

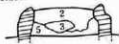
E
141.80m



E

- 1.黒褐色土 軽石を多量に含み、粒子は死い。
- 2.カマドから流れ込んだ焼けた粘土。
- 3.焼土 軽石を少量含む。
- 4.灰層 焼土・炭を少量含む。
- 5.黒褐色土 軽石・焼土を少量含み粘性が強い。

F
141.80m



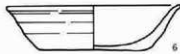
F



第358図 24号住居跡カマド



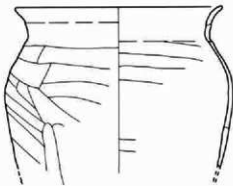
7



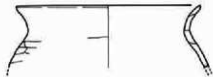
6



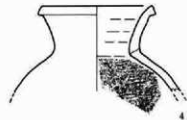
9



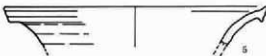
1



2



4



5



第359図 24号住居跡出土遺物

26号住居跡（第360・361図、図版124・125・127）

27号住居跡・28号住居跡・31号住居跡・8号溝跡と重複し、24号住居跡・29号住居跡が近接する。27号住居跡との新旧関係は、同住居跡のカマドの残存状態から、当住居跡が古い。28号住居跡との新旧関係は、覆土の相違から、当住居跡が古い。31号住居跡との新旧関係は、31号住居跡のカマド・壁の残存状態から当住居跡が新しい。即ち、古い順に31号住居跡→26号住居跡→27号住居跡となる。8号溝跡との新旧関係は、覆土の相違により、当住居跡が古い。

当住居跡の規模は、東西約5.1m・南北約5.3mであり、平面形は隅丸方形を呈する。主軸はN-80°-Eである。壁の立ち上りは約50～60cmであり、27号住居跡・28号住居跡との重複部分を除いて、良好である。床は硬く、良好な床を検出した。主柱穴は4本である。規模は直径約15～20cmであり、平面形は円形を呈する。床面からの深さは約45～50cmを測る。壁周溝は検出できなかった。

カマドは東側壁中央やや北寄りに構築されている。燃焼部は壁内にあり、煙道部の壁外への張り出しは約50cmである。袖の素材には、粘土を使用している。貯蔵穴はカマドの左側、北東隅付近に構築されている。規模は直径約50cm、平面形は円形である。床面からの深さは約50cmを測る。遺物は土師器の杯・壺、須恵器の短頸壺・甕などの他に、石英安山岩製の砥石が出土している。（井川）

27号住居跡（第360・361図、図版124・125・126）

26号住居跡・31号住居跡と重複する。新旧関係は前述の通りである。規模は東西約3.8m・南北約4.1mであり、平面形は不整形な隅丸方形を呈する。主軸はN-86°-Eである。壁の立ち上りは約40cmであり、残存状態は良好である。床は硬く、良好な床であるが、やや軟弱な部分がある。壁内から柱穴は検出されず、壁周溝も確認できなかった。

カマドは東側壁の南寄りに構築されている。燃焼部は半分が壁内であり、煙道部の壁外への張り出しは約70cmである。袖は大きく壊されているが、素材には粘土を使用している。カマドの前面からは、ピットが検出できた。ピットの規模は、長辺約45cm・短辺約35cmであり、平面形は長方形である。床面からの深さは約7cmである。ピットの覆土は少量の焼土を含む灰である。

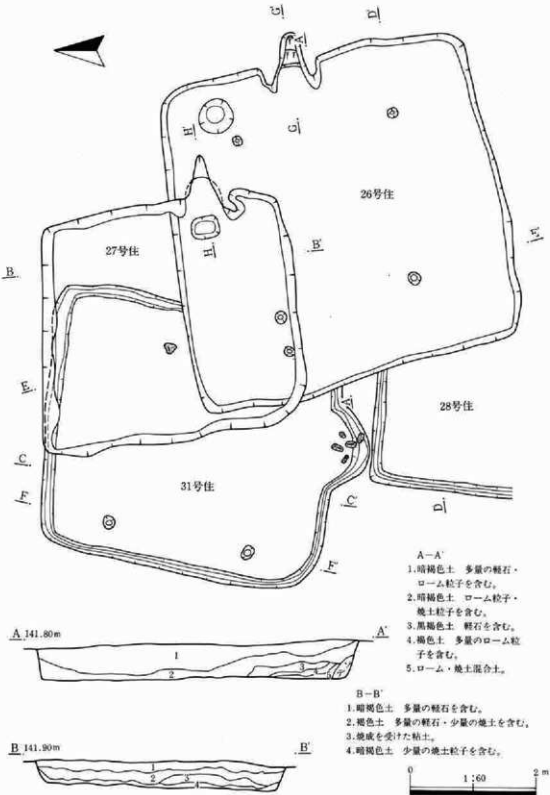
遺物は土師器の甕、須恵器の杯・蓋・長頸壺の他に、石英安山岩製の紡錘車が出土している。

（井川）

31号住居跡（第360・361図、図版124・125・126）

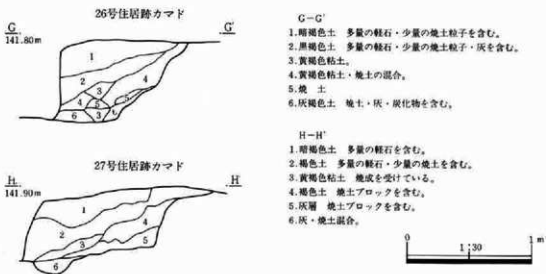
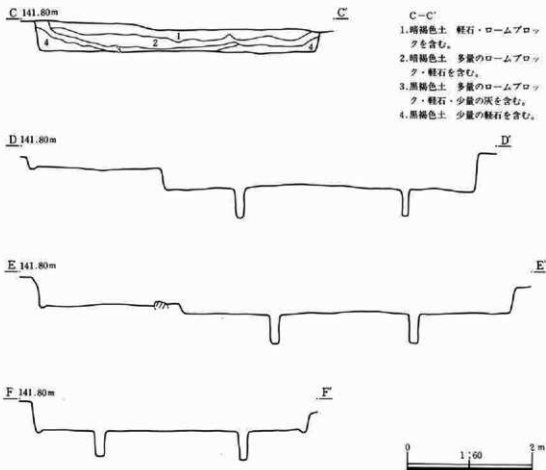
26号住居跡・27号住居跡と重複する。新旧関係は、26号住居跡での記述の通りである。規模は東西約4.2m・南北約4.7mであり、平面形は隅丸長方形を呈すると推定しているが、南側壁中央に東西約1.3m・南北約0.5mの張り出しを有する。壁の立ち上りは約30～45cmであるが、南東部分は26号住居跡に破壊されている。柱穴と推定できるピットが、北東部を除く各部分から3基検出された。規模は直径約15～20cm・床面からの深さ約40～50cmであり、平面形は円形である。ピットの形態は柱穴であるが、3本であることは不自然である。壁周溝は、26号住居跡との重複部分で不明であるが、カマド部分を除き、巡るものと推定している。

カマドは東側壁に構築されていたものと推定できるが、26号住居跡との重複により不明である。貯蔵穴は検出されなかった。遺物は土師器の杯・甕などが出土している。（井川）

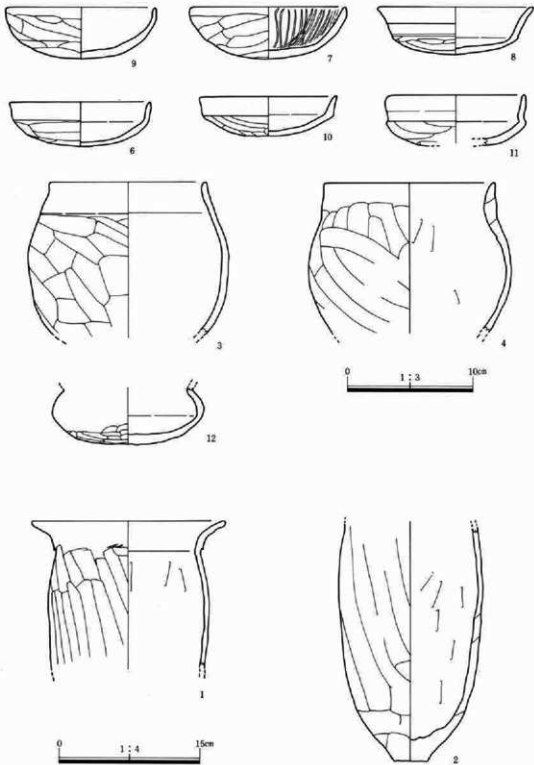


第360図 26号住層跡・27号住層跡・31号住層跡

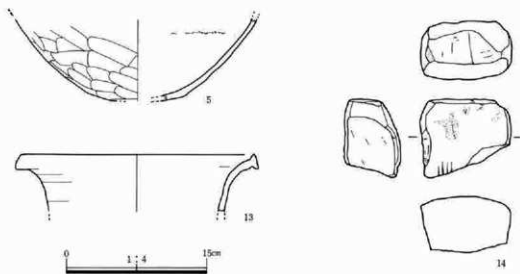
第IV章 保渡田遺跡



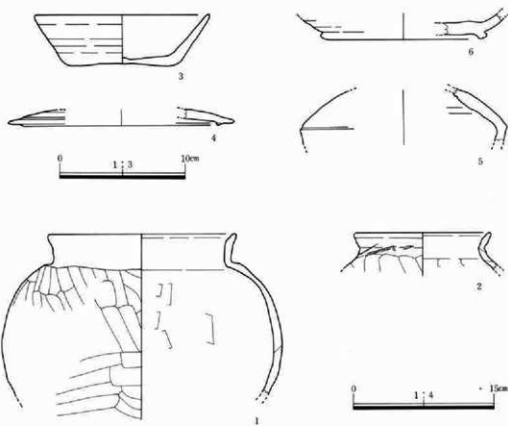
第361図 26号住居跡・27号住居跡・31号住居跡



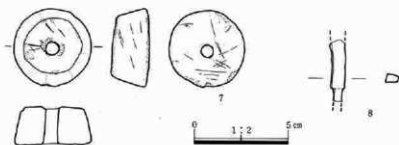
第362図 26号住居跡出土遺物①



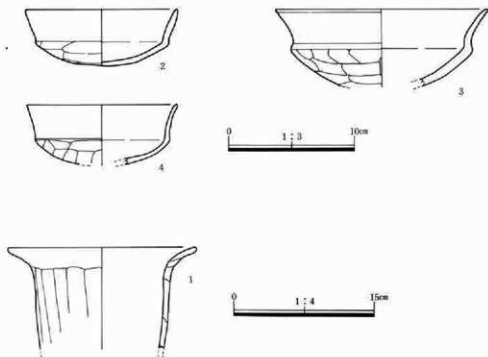
第363図 26号住居跡出土遺物②



第364図 27号住居跡出土遺物①



第365図 27号住居跡出土遺物②



第366図 31号住居跡出土遺物

28号住居跡（第367図、図版124・125・126・127）

当住居跡は6号溝跡の北側に近接し、26号住居跡・29号住居跡と重複関係にある。26号住居跡とは北東隅で切り合い、29号住居跡とは南側で切り合う。

規模は南北約4.0m・東西約2.6mで、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-88°-Eである。壁は緩やかな傾きをもち、床面はやや硬質で平坦である。貯蔵穴は住居跡内の東南隅で壁に付いて構築されている。大きさは南北に55cm・東西に62cm・深さ45cmで、平面形は楕円形を呈する。壁は急な傾斜をもち底面は28×32cmと小さな円形となる。遺物は羽釜（28住-1）を出土し、他に破片を数点、石を1個上面にて検出した。柱穴は検出できていない。壁周溝は北辺と西辺と巡り、西辺の途中にて不明となる。幅18cm・深さ4cmと浅い壁周溝である。

カマドは住居内の東辺南寄りに位置し、袖石・支脚を設けている。袖石はカマド袖の南側に1個配し、支脚として使用された石を、カマド内の中央北寄りに配する。他に2個をカマドの先端に検出。カマド全体は黒褐色土で覆われている。燃焼部は平坦で、灰層がかなり厚く認められ、使用の頻度が多かったのではないだろうか。遺物はカマド前の床直より羽釜（28住-4）を出土し、支脚の周辺より破片を数点出土している。

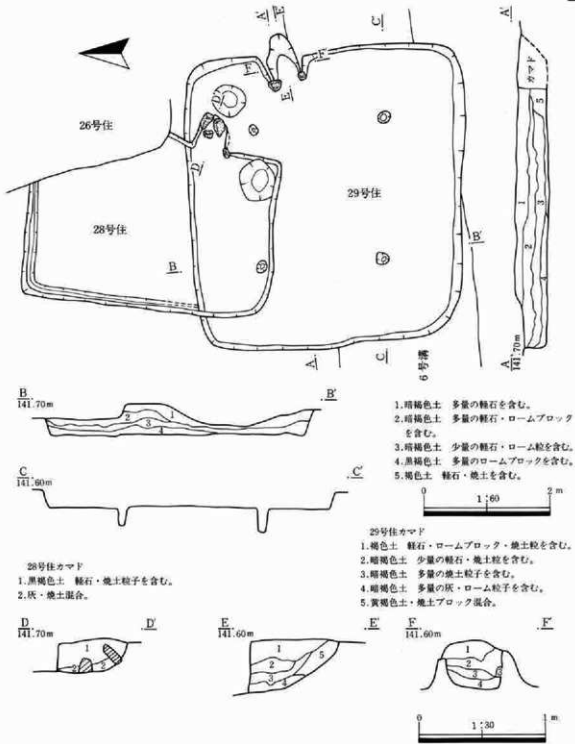
遺物は全体としては数が少ないが、住居跡内の南側に集中して出土している。ほとんどが破片で完形品は認められない。当住居跡は、重複関係により、26号住居跡・29号住居跡より時代が新しいと思われる。（宮下）

29号住居跡（第367図、図版124・125・126・128）

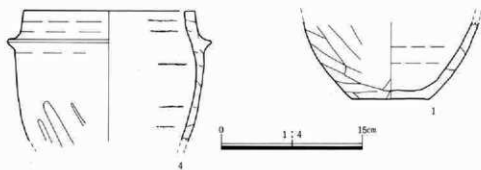
28号住居跡・6号溝跡と重複し、26号住居跡・27号住居跡・31号住居跡・8号溝跡が近接する。28号住居跡との新旧関係は、覆土の相違・28号住居跡のカマド・壁の残存状態から、当住居跡が古い。6号溝跡との新旧関係も、覆土の相違から、当住居跡が古い。

当住居跡の規模は、東西約4.8m・南北約4.4mであり、平面形はやや不整形な隅丸長方形を呈する。主軸はN-88°-Eである。壁の立ち上りは約25~40cmであり、残存状態は比較的良好である。床は硬く、良好な床である。主柱穴は4本が確認できた。規模は径約15~20cmであり、平面形は円形ないし楕円形である。床面からの深さは約30~40cmを測る。壁周溝は検出されなかった。

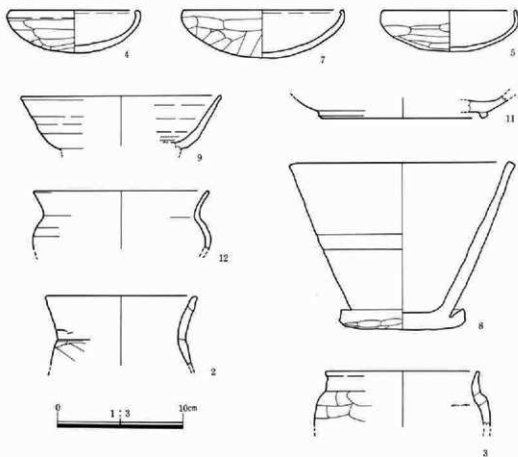
カマドは東側壁の北寄りに構築されている。燃焼部は壁内にあり、煙道部の壁外への張り出しは、確認面で約40cmである。袖の素材は粘土であるが、先端部分には石を使用している。貯蔵穴はカマドの左側、北東隅付近に構築されている。規模は直径約50cmであり、平面形は円形である。床面からの深さは約30cmである。遺物は土師器の杯・壺、須恵器の杯・鉢・短頸壺などが出土している。（井川）



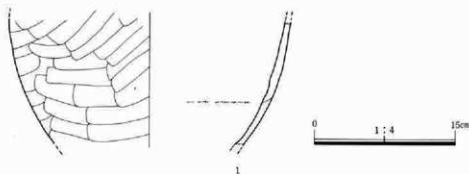
第367図 28号住居跡・29号住居跡



28号住居跡出土遺物



第368回 29号住居跡出土遺物①



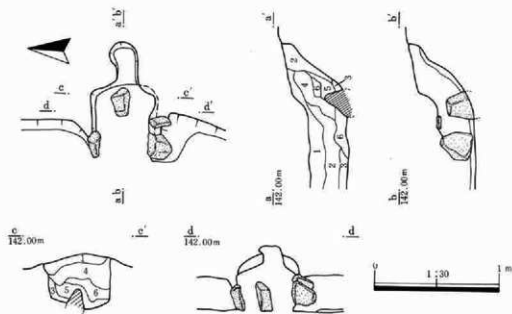
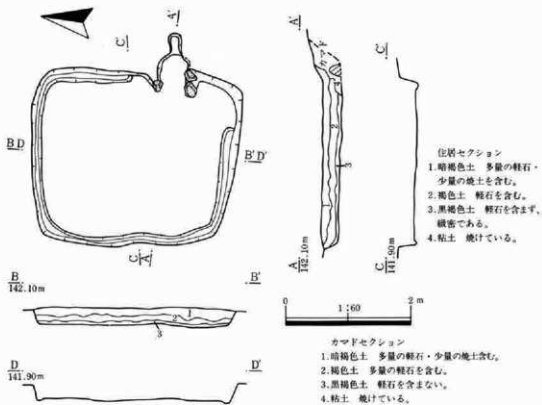
第369図 29号住居跡出土遺物②

30号住居跡 (第370図、図版128)

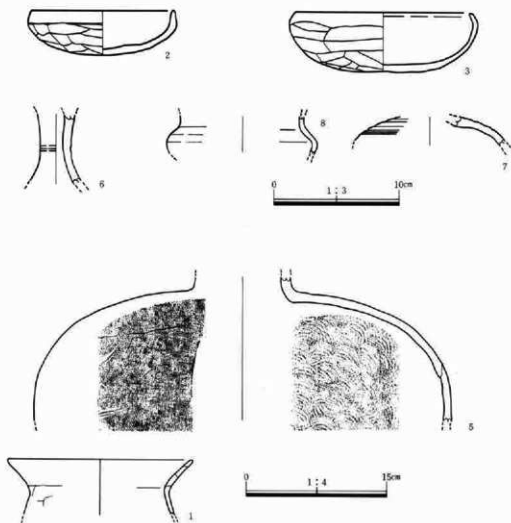
23号住居跡・8号溝跡が近接するが、重複はない。覆土は軽石を含む暗褐色土が主体である。規模は東西約2.7m・南北約3.3mであり、平面形は台形に近い隅丸長方形を呈する。主軸はN-87°-Eである。壁の立ち上りは約30cmであり、残存状態は良好である。床は硬く、良好な床である。壁周溝はほぼ全体を巡るが、カマド部分・南東隅付近からは検出できなかった。

カマドは東側壁の南寄りに構築されている。燃焼部の半分が壁内であり、煙道部の壁外への張り出しは約60cmである。袖は粘土を素材に用いているが、先端部は石を使用して固めている。燃焼部の中央からは、支脚に使用された石が検出できた。支脚の上には、完形品の杯が載っている状態であった。貯蔵穴はない。遺物は土師器の杯・甕、須恵器の高杯・長頸壺・短頸壺・横瓶などが出土している。

(井川)



第370図 30号住居跡



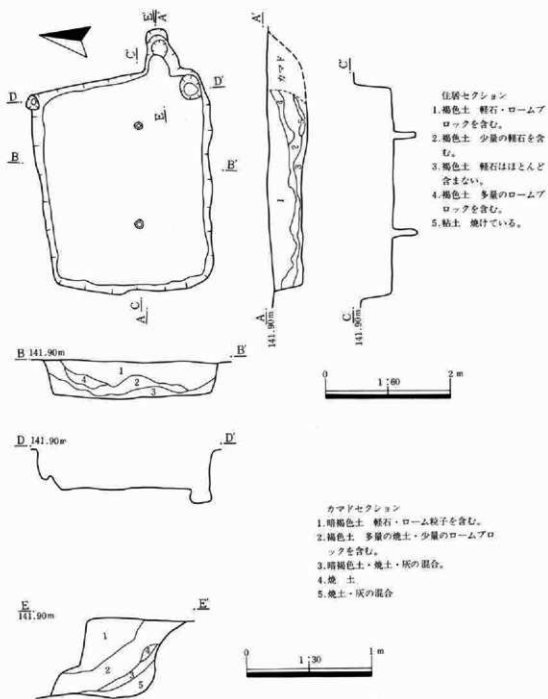
第371図 30号住居跡出土遺物

32号住居跡 (第372図、図版129・130)

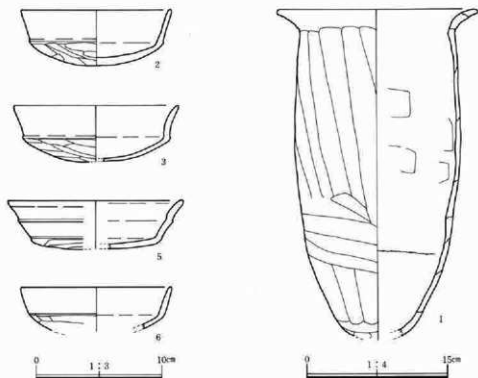
33号住居跡が近接するが、重複はない。覆土は軽石を含む褐色土が主である。規模は東西約3.4m・南北約2.8mであり、平面形は不整形な隅丸長方形を呈する。主軸はN-79°-Eである。壁の立ち上りは約50~60cmであり、残存状態は良好である。床はローム層中に構築されており、硬く良好な床である。主柱穴は2本である。規模は直径約10~15cm、平面形は円形を呈し、床面からの深さは約35~40cmである。壁周溝は検出されなかった。

カマドは東側壁の南東隅近くに構築されている。燃焼部・煙道部とも壁外であり、張り出しは約70cmである。袖は検出されなかったが、造られていない可能性もある。貯蔵穴は南東隅に構築されている。規模は長軸約40cm・短軸約30cmであり、平面形は楕円形を呈する。床面からの深さは約25cmである。遺物は土師器の杯・壺などが出土している。

(井川)



第372図 32号住居跡



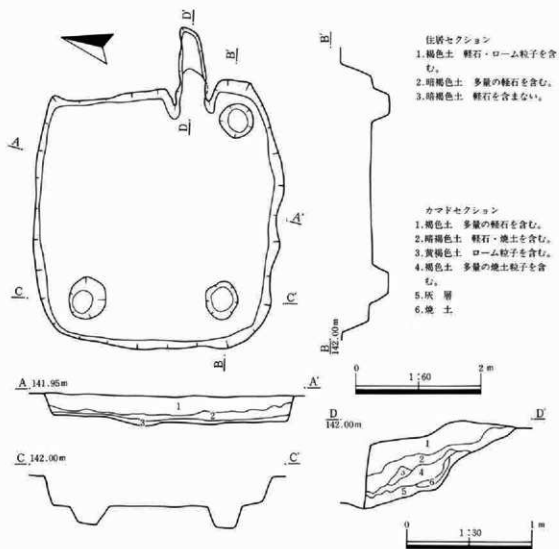
第373図 32号住居跡出土遺物

33号住居跡 (第374図、図版129)

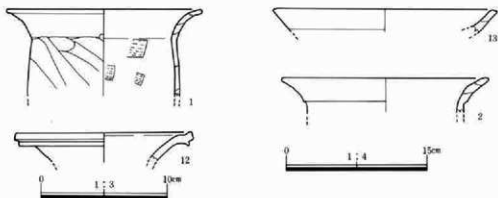
32号住居跡・34号住居跡・36号住居跡が近接するが、重複はない。覆土は軽石を含む褐色土・暗褐色土である。規模は東西約4.1m・南北約3.9mであり、平面形はやや胴の張った不整形な方形を呈する。主軸はN-79°-Eである。壁の立ち上りは約30~40cmであり、残存状態は良好である。床は比較的硬く、良好な床である。壁周溝は検出されなかった。

カマドは東側壁の南寄りに構築されている。燃焼部は半分が壁内であり、煙道部の壁外への張り出しは約90cmである。袖は粘土を素材に造られている。北東隅を除く、北西隅・南西隅・南東隅から各々1基のピットが検出できた。規模は径約50~60cmであり、平面形は円形・楕円形を呈する。床面からの深さは約25~30cmである。3基のピットを柱穴とするには難がある。南東隅のピットは、位置・規模から貯蔵穴と推定できよう。遺物は土師器の杯・甕、須恵器の皿・甕などの他に、鉄鏃と考えられる鉄器が出土している。

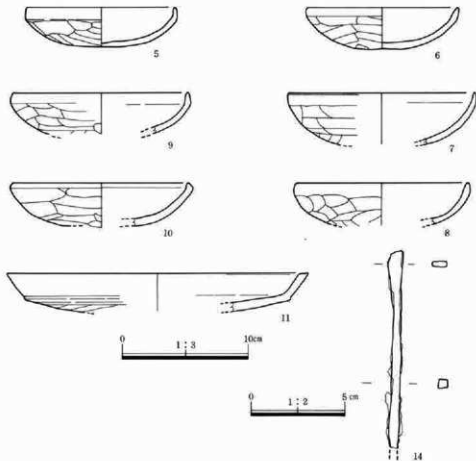
(井川)



第374図 33号住居跡



第375図 33号住居跡出土遺物①



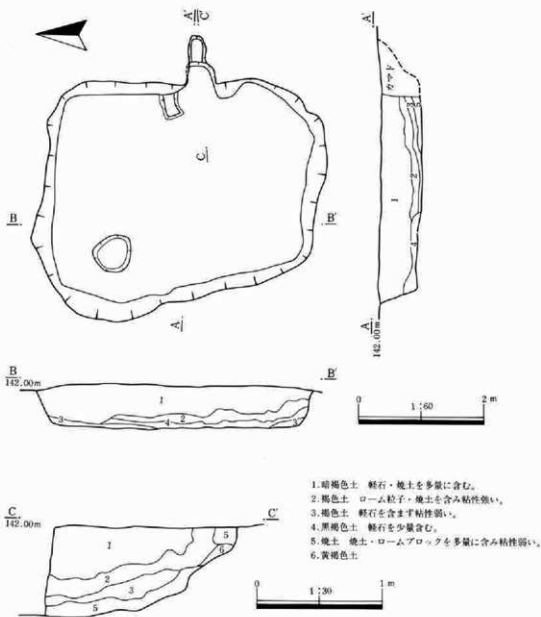
第376図 33号住居跡出土遺物②

34号住居跡 (第377図、図版130)

当住居跡は33号住居跡の西側に近接し、36号住居跡の南側に近接し、35号住居跡と北西隅にて重複する。

規模は南北に約3.5m・東西に約4.4mで、平面形は不定な台形を呈する。主軸はN-89°-Eである。壁は緩やかな傾斜をもち、床はほぼ平坦である。住居跡の輪郭ははっきりせず、凹凸が認められる。覆土は暗褐色土によりほとんど埋没している。遺物の含有層でもある。貯蔵穴は住居跡内の北西隅に構築されている。大きさは南北60cm・東西55cm・深さ12cmで、平面形は不定楕円形である。遺物は含まれていない。壁周溝・柱穴は検出できなかった。

カマドは住居跡内の東辺中央に位置し、煙道部と燃焼部との間に段をもつ。暗褐色土がカマド全体を覆い、焼土は覆土の中ごろに認められ、灰はほとんど見られない。燃焼部は広く開き、袖石は検出できなかった。煙道部は深さ20cm・長さ40cmの大きさで、先端は焼土のかたまりである。遺物はカマド手前床直より土師器の甕 (34住-1・2)、カマド付近より土師器の甕 (34住-3・4) が出土している。

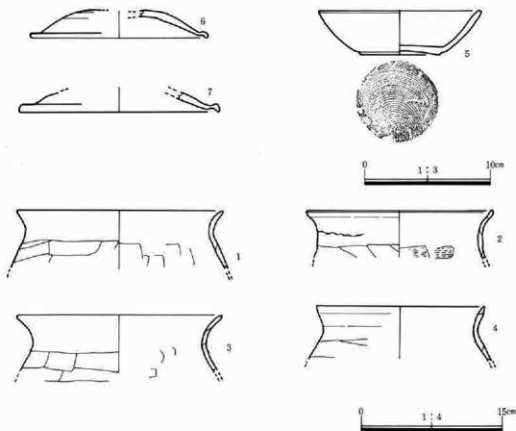


第377図 34号住居跡

遺物は住居跡全体の中央より東側に集中しているが、全体的に数は少ない。張り床中より須恵器の杯(34住-5)・蓋(34住-6)、覆土より須恵器の蓋(34住-7)などが出土しており、他は破片がまばらに認められる。

当住居跡は、重複関係の切り合いにより、35号住居跡を切っている為、新しい時期の住居跡と推定できる。

(宮下)



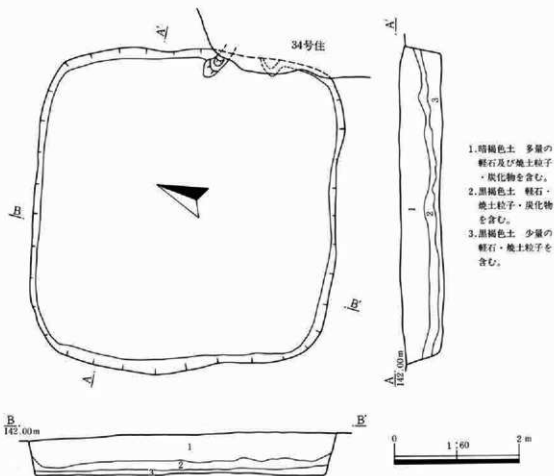
第378図 34号住居跡出土遺物

35号住居跡 (第379図、図版130・131)

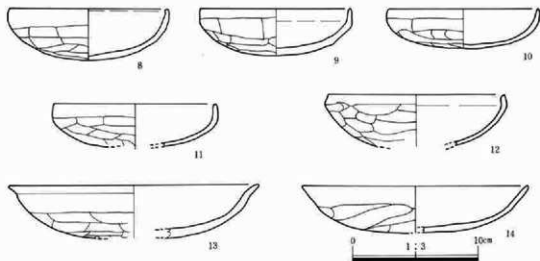
34号住居跡と重複し、27号住居跡・31号住居跡・36号住居跡が近接する。34号住居跡との新旧関係は、当住居跡のカマドが同住居跡に破壊されていることから、当住居跡が古い。覆土は軽石を含む暗褐色土が主である。

当住居跡の規模は東西約5.0m・南北約4.8mであり、平面形は不整形な方形を呈する。主軸はN-72°-Eである。壁の立ち上りは約50cmであり、残存状態は良好である。床は硬く、良好な床である。壁周溝は検出されなかった。

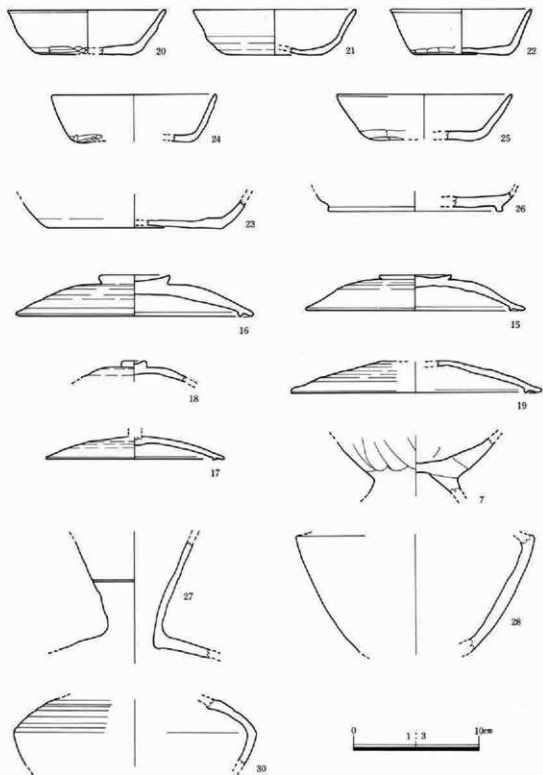
カマドは、大部分が34号住居跡によって破壊されており、袖の先端部が確認できただけである。袖の素材には粘土を使用している。貯蔵穴はない。遺物の出土量は多く、土師器の杯・壺・台付壺、須恵器の杯・蓋・長頸壺などが出土している他、鎌先なども出土している。(井川)



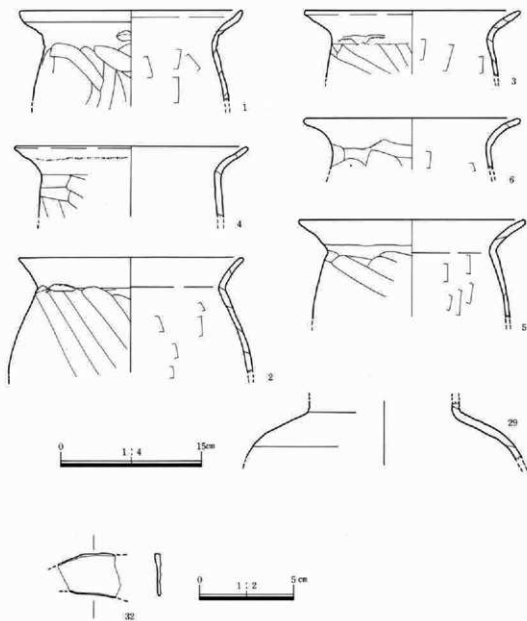
第379図 35号住層跡



第380図 35号住居跡出土遺物①



第381図 35号住層跡出土遺物②



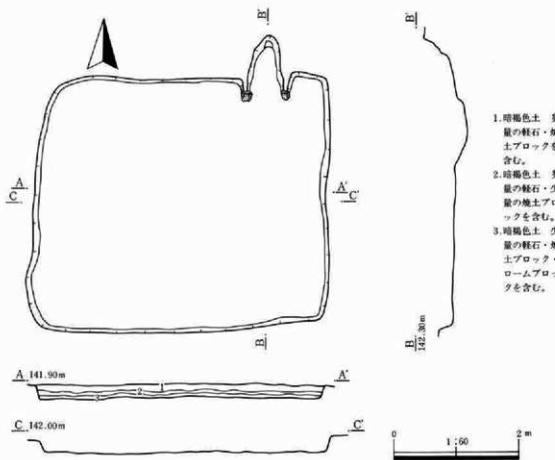
第382図 35号住居跡出土遺物③

36号住居跡 (第383・384図、図版131・132)

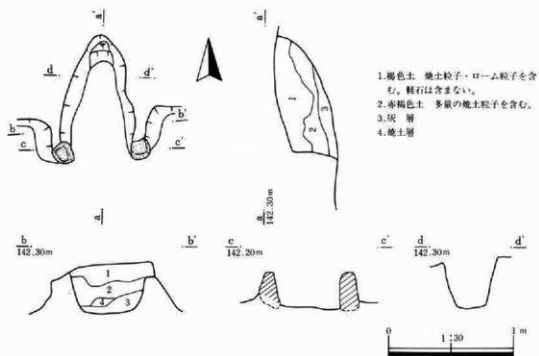
33号住居跡・34号住居跡・35号住居跡が近接するが、重複はない。覆土は軽石を含む暗褐色土である。規模は東西約4.6m・南北約4.0mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-4°-Eである。壁の立ち上りは約15~25cmであり、残存状態はやや不良である。床は比較的硬く良好であるが、やや軟弱な部分もある。壁内に柱穴はなく、壁周溝もない。

カマドは北側壁の北東隅付近に構築されている。燃燒部は半分が壁内であり、煙道部の壁外への張り出しは、確認面で約70cmである。袖は粘土を素材に用いているが、先端部分は、両袖とも石を地山に埋め込んで立てて固めている。貯蔵穴はない。遺物の出土量は比較的多く、住居跡内の全面から出土しているが、カマド周辺への集中傾向がやや見られる。遺物は土師器の杯・壺、須恵器の杯・蓋・壺・長頸壺などである。

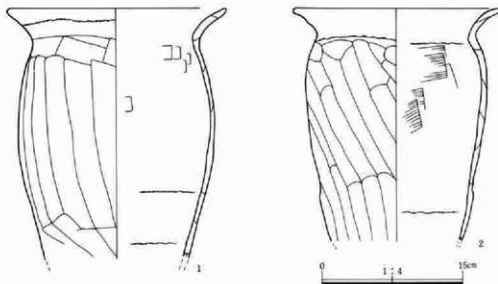
(井川)



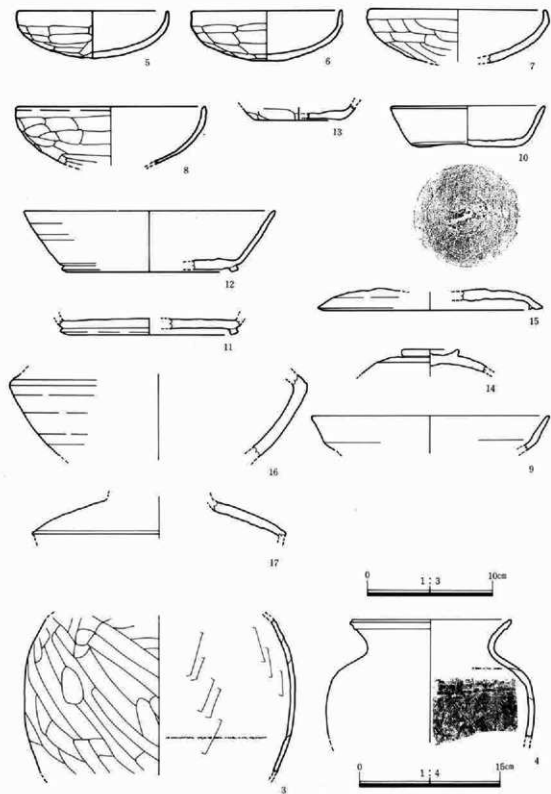
第383図 36号住居跡



第384図 36号住居跡カマド



第385図 36号住居跡出土遺物①

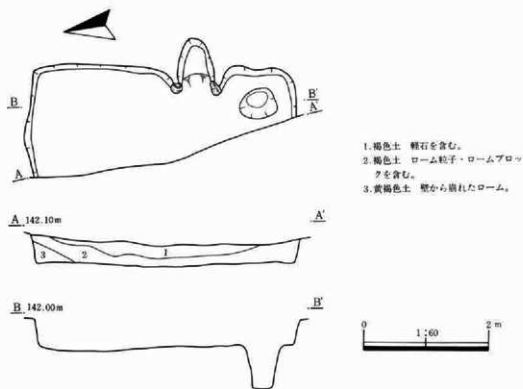


第386図 36号住居跡出土遺物②

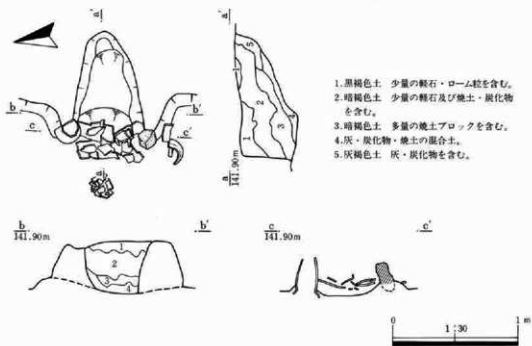
37号住居跡 (第387・388図、図版132・133)

35号住居跡・38号住居跡・50号住居跡が近接するが、調査範囲内での重複はない。覆土は軽石を含む褐色土である。西側半分が調査区域外のため全体規模は不明であるが、南北は約4.3mである。平面形は隅丸方形か隅丸長方形を呈するものと推定している。主軸はN-101°-Eである。壁の立ち上りは約40～45cmであり、良好な残存である。床は硬く、良好な床が検出できた。調査範囲内からは、柱穴・壁周溝は検出できなかった。

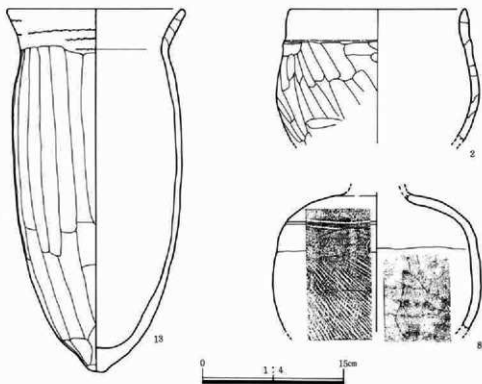
カマドは東側壁中央のやや南寄りに構築されている。燃焼部の半分は壁外であり、煙道部の壁外への張り出しは約50cmである。袖は粘土を素材に用いているが、右袖の先端には石を使用し、左袖の先端は壘(37住-14)を伏せて使用し固めている。貯蔵穴はカマドの右側、南東隅に構築されている。規模は長軸約60cm・短軸約50cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。床面からの深さは約70cmを測り、非常に深い貯蔵穴である。遺物は土師器の杯・壘、須恵器の壺などが出土している。遺物の出土はカマド内・カマド周辺に集中している。(井川)



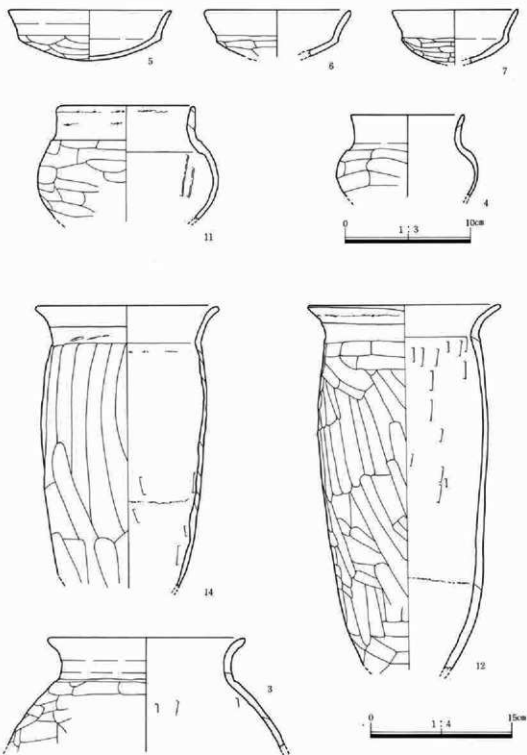
第387図 37号住居跡



第388図 37号住居跡カマド



第389図 37号住居跡出土遺物①



第390図 37号住居跡出土遺物②

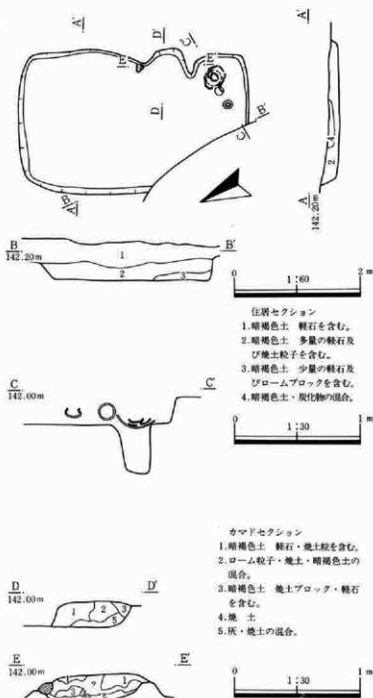
38号住居跡(第391図、図版133・134)

37号住居跡が近接するが、調査範囲内での重複はない。軽石を含む暗褐色土が覆土である。

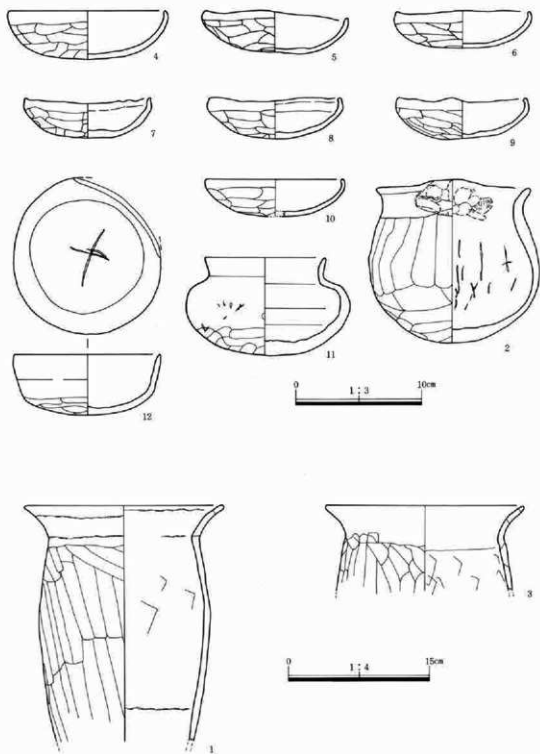
南西側に未調査部分が残るが、規模は東西約2.3m・南北約3.7mであり、平面形は隅丸長方形を呈す小型の住居跡である。主軸はN-118°-Eである。壁の立ち上りは約10~35cmであり、西側の残存状態が良い。床はローム層中に構築されており、比較的硬く良好な床である。壁内に柱穴はなく、壁周溝も検出できなかった。

カマドは東側壁の中央やや南寄りに構築されている。燃焼部は壁内にあり、煙道部の壁外への張り出しは、確認面ではほとんどない。袖は大部分が破壊されているが、素材には粘土を使用している。貯蔵穴はカマドの右側、南東隅に構築されている。規模は直径約30cm、床面からの深さ約40cmであり、平面形は円形を呈する。

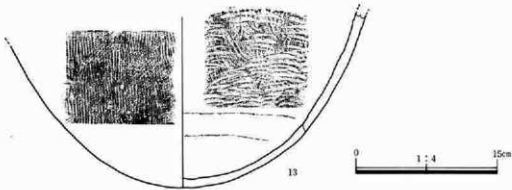
遺物の出土は、カマド・貯蔵穴周辺に集中している。貯蔵穴直上からは、須恵器の大甕の底部が貯蔵穴に蓋をするような形で置かれていた。その大甕の上には土師器の杯が置かれていた。また、貯蔵穴周辺からは、完形品の土師器の大甕、須恵器の短頸甕が出土している。(井川)



第391図 38号住居跡



第392図 38号住居跡出土遺物①



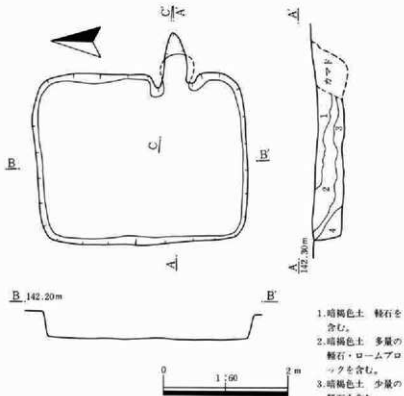
第393図 38号住居跡出土遺物②

39号住居跡 (第394・395図、図版134)

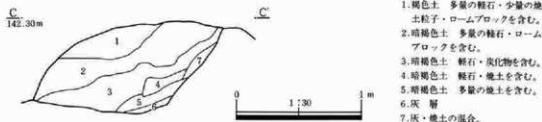
36号住居跡・40号住居跡が近接するが、重複はない。覆土は軽石・ロームブロックを含む暗褐色土である。規模は東西約2.7m・南北約3.4mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-87-Eである。壁の立ち上りは約40cmであり、残存状態は良好である。床はローム層中に構築されており、硬く良好な床である。壁内に柱穴・壁周溝はない。

カマドは東側壁やや南寄りに構築されている。燃焼部の半分が壁内であり、煙道部の壁外への張り出しは約70cmである。袖は粘土を素材に造られている。貯蔵穴は検出できなかった。

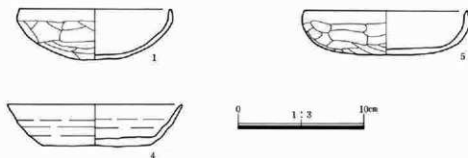
遺物の出土は非常に少ない。遺物は土師器の杯、須恵器の杯が出土している。(井川)



第394図 39号住居跡



第395図 39号住居跡カマドセクション



第396図 39号住居跡出土遺物

40号住居跡 (第397図、図版135)

当住居跡は36号住居跡の北側、39号住居跡の西北に近接する。住居跡の南側にはピット群が広がる。北側には1号掘立柱跡・2号掘立柱跡が隣接する。東側と西側には遺構が検出されない地域が広がり、当住居跡は単独にて検出された。当住居跡の北西部には41号住居跡・42号住居跡・43号住居跡・47号住居跡が近接する。

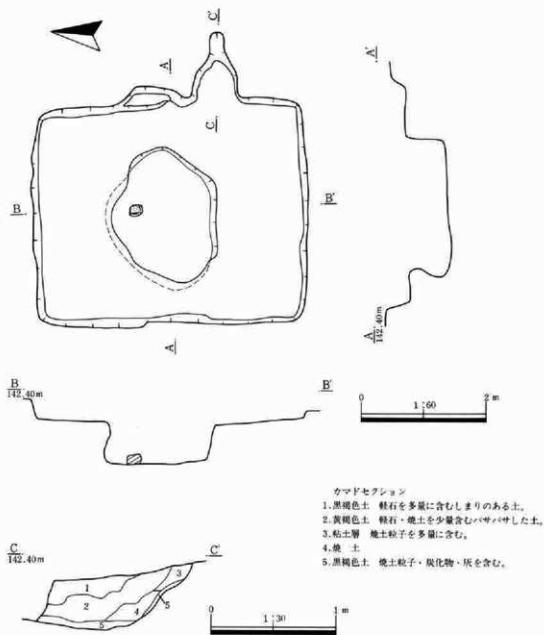
規模は南北約4.3m・東西約3.5mで、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-95°-Eである。壁は緩やかな傾きをもち、床面はほぼ平坦である。当住居跡はトレンチ掘りに当たっている為、住居のセクションは独立して測られていない。住居跡内中央に位置する土坑と一緒に掘り下げられた。住居の覆土は焼土・軽石を含み、土坑は焼土を含まない。

住居跡内中央に位置する土坑は、規模は南北約2.2m・東西約1.7m・深さ約70cmで、平面形は不定楕円形を呈する。土坑の北側と西側は、上端より下端がオーバーハングしている。遺物は須恵器の甕(40住-3)の他、破片が数点、大小の石が10個出土する。

カマドは住居内の東辺南寄りに構築されている。煙道部が、幅約20cm・長さ約35cmと張り出している。燃焼部は広く開がり、床面はほぼ平坦である。遺物はカマド内に土師器の甕(40住-1)、他数点の破片と数は少ない。

遺物は住居跡内全体にまばらに出土する。南壁中央床直より須恵器の椀(40住-5)など、破片が多い。

当住居跡はトレンチ掘りで中央部分が掘られた為、土坑と住居跡の関係はハッキリしないが、土坑内より同時期の遺物が出土しているところから、住居跡に伴う床下土坑とする。(宮下)

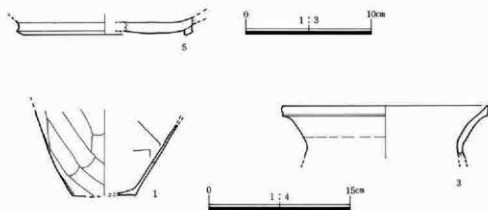


第397図 40号住居跡

41号住居跡 (第399・400図、図版135・136)

当住居跡は42号住居跡・43号住居跡・47号住居跡と重複関係にある。2号掘立柱跡の南側に近接し、40号住居跡の北西部に位置する。

規模は南北約3.1m・東西に推定1.8mで、平面形は隅丸長方形を呈する。壁は床面から約16cmで、ほぼ



第398図 40号住居跡出土遺物

直立に近い。床はほぼ平坦でやや堅緻。主軸はN-83°Eである。貯蔵穴・柱穴は検出されず。

カマドは住居跡内の東辺南寄りに構築されている。カマド全体は黒褐色土に覆われ、灰・焼土の層が床直より10cm位堆積する。凝灰岩の石が4個、カマド内壁際より出土している。カマド構築時に使用されたものと推定している。焼焼部は床面が浅い丸みをもつ。遺物はカマド内先端に集中し、床直より土師器の壺(41住-1)、他に破片が数点出土する。

遺物は住居跡内全体としては数が少なく、土師器の杯(41住-2)が主なもので、他はあまり出土していない。

当住居跡は重複関係が著しく、住居跡内北辺は47号住居跡と切り合い、47号住居跡より時代は新しい。西辺北寄りには43号住居跡に切られ、西辺南寄りには42号住居跡のカマドに切られ、両住居跡より時代は古い。

(宮下)

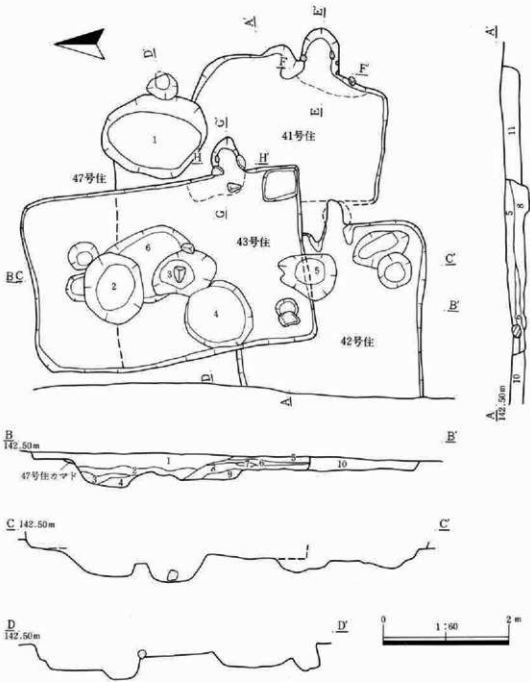
42号住居跡 (第399図、図版135・136)

当住居跡は41号住居跡・43号住居跡と重複関係にある。西側は調査区域外へのびている。住居跡の南側は遺構が検出されない地域が続く。

規模は南北約2.9m、東西は測定できず、平面形は不明。主軸はN-88°Eである。床面から壁まで約16cmで、壁は緩やかな傾きをもつ。床はほぼ平坦で堅緻。

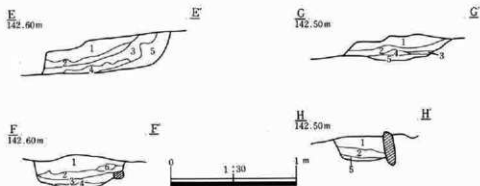
貯蔵穴は住居跡内の東南隅でカマドのすぐ南側に設けられている。大きさは南北に96cm・東西に58cmの細長い楕円形を呈する。遺物は須恵器の碗(42住-2)、壺の胴部片など数点出土している。

カマドは住居跡内の東辺中央に構築されている。覆土の層は固化する事なく取りはずされているが、検出中の所見によれば、カマド全体を軽石混じりの暗褐色土で覆われ、焼土・灰層が厚く堆積し、カマド下のピットも、焼土・灰層を含んでいる。焼焼部はなだらかな丸みもち、カマドの先端はやや直立に近い。軟質の壁をもつ。カマドの底面は、先端も大きく広がる。右袖と左袖とは直線に並ばない。遺



- | | |
|-------------------|-----------------------------|
| 1. 暗褐色土 軽石を多量に含む。 | 7. 暗褐色土 |
| 2. 暗褐色土 軽石を少量含む。 | 8. 暗褐色土 焼土・ローム粒子を含む。 |
| 3. 暗褐色軟質土 | 9. 黒褐色軟質土 |
| 4. 褐色土 ローム粒子を含む。 | 10. 暗褐色土 軽石を多量に含み、焼土粒子を含む。 |
| 5. 暗褐色土 焼土を多量に含む。 | 11. 暗褐色土 軽石を多量に含み、焼土粒子少量含む。 |
| 6. 褐色土 | |

第399図 41号住居跡・42号住居跡・43号住居跡・47号住居跡



41号住カマドセクション

1. 黒褐色土 軽石が多量に混入し、焼土粒子を少量含む。
2. 黒褐色土 焼土粒子が多量に混入し、軽石を少量含む。
3. 暗黒褐色土 灰・焼土粒子・軽石含む。
4. 灰と焼土の混合土。
5. 焼土 灰がわずかに混入。
6. 黄褐色粘土

43号住カマドセクション

1. 黒褐色土 軽石が多量に混入し、焼土粒子を含む。
2. 焼土 良く焼けて、天井・壁面構成材の剥落したもの。
3. 暗褐色土 焼土を含む。
4. 焼土
5. 灰層 焼土を含む。

第400図 41号住居跡カマド・43号住居跡カマド

物はほとんど出土していない。

遺物は住居跡内の北東隅床直より土師器の甕（42住一5）、覆土より須恵器の甕（42住一3）・杯（42住一4）が主な遺物で、ほとんど出土していない。

当住居跡は重複関係により、41号住居跡とカマドで切り合い、41号住居跡より時代は新しい。43号住居跡とは北東隅で切り合い、43号住居跡より時代は古い。（宮下）

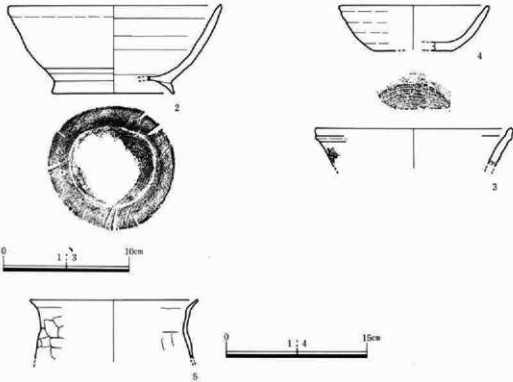
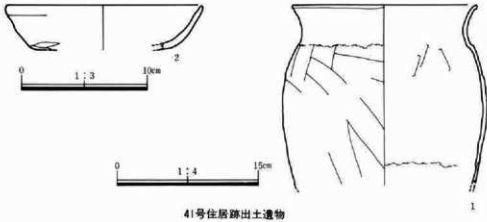
43号住居跡（第399・400図、図版135・136・137）

当住居跡は41号住居跡・42号住居跡・47号住居跡と重複関係にある。北側には4号掘立柱跡が近接し、東側には1号掘立柱跡・2号掘立柱跡が近接する。

規模は南北約4.5m・東西約2.8mで、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-97°-Eである。壁は床面より20cmで、ほぼ直立に近い。床面は47号住居跡と重複している影響で、南側の床面が低く、北側はやや高く、軟質な床面である。

貯蔵穴は、住居跡内の東南隅に位置し、大きさは南北に55cm・東西に50cm・深さ15cmの方形を呈している。遺物は土師器の甕の割部片など数点出土している。

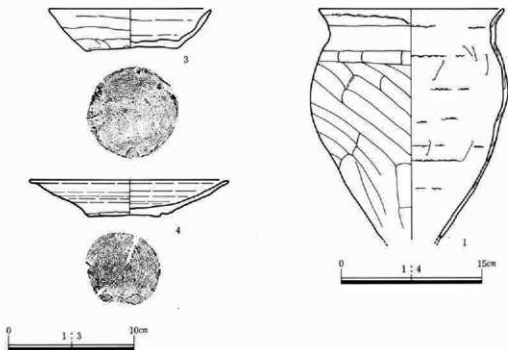
カマドは住居内の東辺南寄りに構築され、袖石として使用された石を高側に配し、焼土の層が厚く堆積する。遺物は床直より土師器の甕（43住一1）、他に破片が数点出土する。



住居跡中央にビット2・ビット3・ビット4・ビット6、南辺にビット5が検出され、当住居跡と同時に掘り下げられた為、住居跡に伴うかどうか不明である。

遺物は須恵器の杯(43住-3)・皿(43住-4)などが主なもので、破片がまばらに出土する。

当住居跡は重複関係により、41号住居跡・42号住居跡・47号住居跡より時代は新しい。(宮下)



43号住居跡出土遺物



第402図 47号住居跡出土遺物

47号住居跡（第399図、図版135）

当住居跡は41号住居跡・43号住居跡と重複関係にあり、規模・平面形・主軸などほとんど不明である。当住居跡の北東隅からは、掘り方と考えられる落ち込み（ピット1）が検出されただけであり、壁の立ち上りは僅かである。また、43号住居跡の床面下からは、当住居跡のカマドの一部が検出できた。

遺物はピット1の床直より土師器の甕（47住-1）・小型甕（47住-2）などで、他はほとんど出土しない。

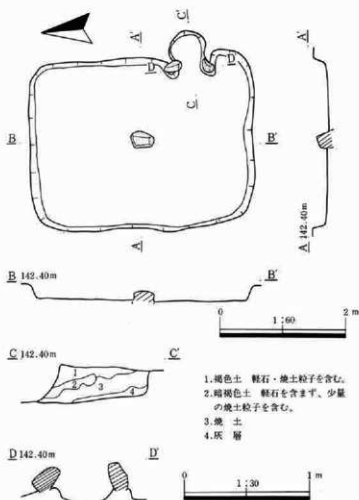
当住居跡は切り合い関係により、41号住居跡・42号住居跡・43号住居跡より時代は古い。（宮下）

44号住居跡(第403図、図版137)

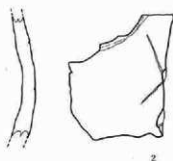
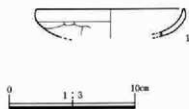
1号掘立柱跡・3号掘立柱跡・5号掘立柱跡が近接するが、重複はない。規模は東西約2.7m・南北約3.6mであり、平面形はやや不整形な隅丸長方形を呈する。主軸はN-94°-Eである。壁の立ち上りは約20~25cmと浅く、上面は破壊されている。床は比較的硬く、良好である。壁内に柱穴・壁周溝はない。

カマドは東側壁の南東隅近くに構築されている。燃焼部は半分が壁内であり、煙道部の壁外への張り出しは確認面で約40cmである。袖は粘土を素材にしているが、両袖共に先端には石を使用している。貯蔵穴は検出できなかった。遺物の出土は非常に少ないが、土師器の杯、須恵器の甕などが出土している。

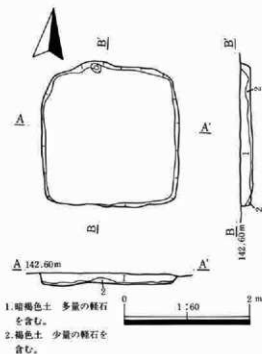
(井川)



第403図 44号住居跡



第404図 44号住居跡出土遺物



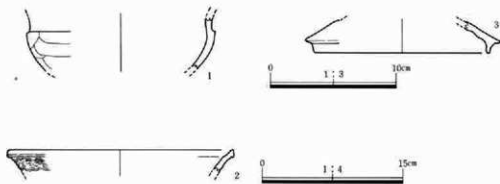
第405図 45号住居跡

45号住居跡 (第405図)

重複・近接構構はない。覆土は軽石を含む暗褐色土である。規模は一辺約2.2mであり、平面形は不整形な隅丸方形を呈する。壁の立ち上りは約15cmであり、残存状態は悪く、上面は破壊されている。床はやや軟弱であり、壁周溝は検出されなかった。

北側壁の西寄りから、規模は直径約15cm・床面からの深さ約10cmであり、平面形は隅丸方形を呈するピットが確認できた。北側壁はそのピット部分で北側に張り出しており、カマドの存在も推測されたが、焼土・灰の堆積は確認できなかった。貯蔵穴はなく、カマドがない事と併せて、住居跡としての使用には疑問が残る。

遺物は土師器の杯、須恵器の蓋・甕などが出土しているが、量は非常に少なく、すべて覆土中からの出土である。(井川)

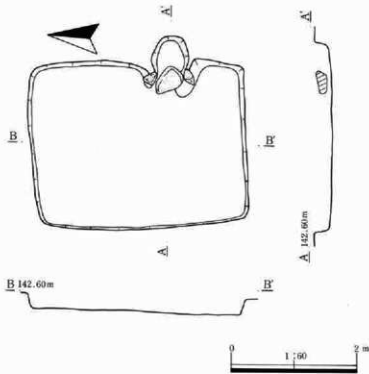


第406図 45号住居跡出土遺物

46号住居跡 (第407図、図版137・138)

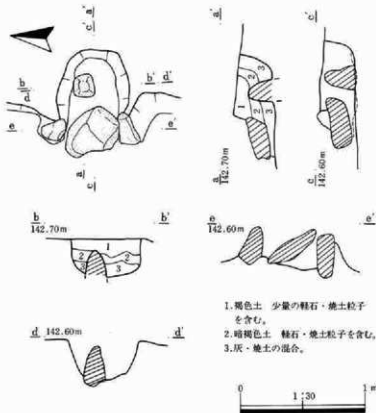
4号掘立柱跡が近接するが、重複はない。規模は東西約2.7m・南北約3.4mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-80°-Eである。壁の立ち上りは約20~25cmであり、残存状態は悪く、上面は破壊されている。床は比較的硬く、良好な床である。壁内から柱穴は検出されず、壁周溝も検出されなかった。

カマドは東側壁中央の南寄りに構築されている。燃焼部は半分が壁内であり、煙道部の壁外への張り



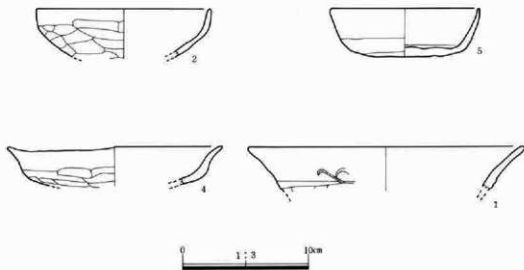
出しは約40cmである。袖は粘土を素材に用いており、両袖共に先端部は石を使用し、固めている。両袖の間からは、長辺約45cm・短辺約30cm・厚さ約15cmの石が、崩れ込んでいる状態で検出された。天井石に使用されていたものと推定できる。また、両袖先端から奥へ約50cm、カマド中心線から北へ寄った位置からは支脚が検出された。支脚は地山に埋め込み、固定されており、壁外に設置されている。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物の出土量は少ないが、土器の杯・壺などが出土している。(井川)



1. 褐色土 少量の軽石・焼土粒子を含む。
2. 暗褐色土 軽石・焼土粒子を含む。
3. 灰・焼土の混合。

第407図 46号住居跡



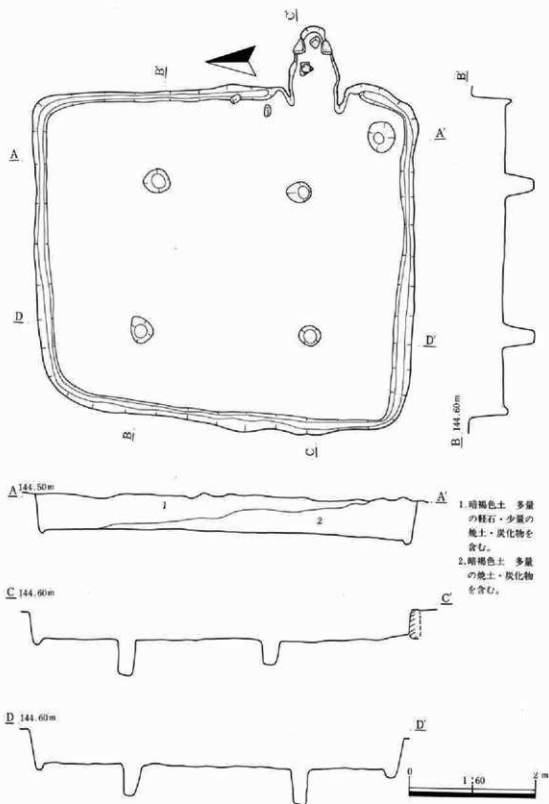
第408図 46号住居跡出土遺物

48号住居跡 (第409・410図、図版138・139)

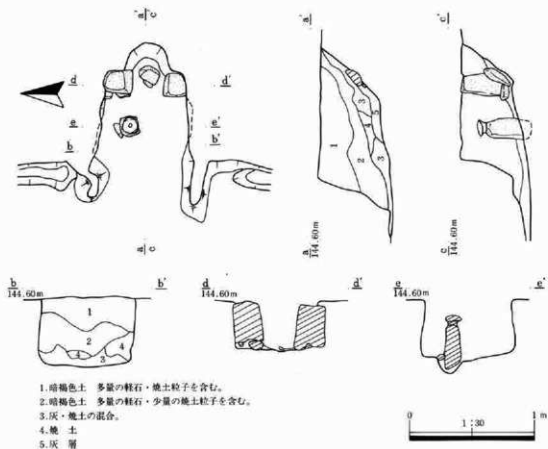
49号住居跡が近接するが、重複はない。覆土は多量の軽石を含む暗褐色土である。規模は東西約5.3m・南北約6.0mであり、平面形は不整形な隅丸長方形を呈する。主軸はN-91°-Eである。壁の立ち上りは約40~60cmを測り、残存状態は良好である。床はローム層中に構築されており、硬く良好な床である。支柱穴は4本である。規模は径約30~40cm・床面からの深さ約40~50cmであり、平面形は円形・楕円形を呈する。壁周溝はカマド部分を除き、巡っている。

カマドは東側壁の南東隅近くに構築されている。燃焼部の半分は壁内であり、煙道部の壁外への張り出しは約100cmである。袖は粘土を素材に使用している。袖の先端から東へ約60cm、カマドの中心線よりやや北よりから支脚が検出された。支脚の設置位置は壁外になる。支脚は地山に埋め込まれ設置されており、上部には完形品の土師器の杯を載せている状態であった。燃焼部の最深部は角柱に調整した石で固めてあった。全体的にカマドの残存状態は良好である。貯蔵穴はカマドの右側、南東隅に構築されている。規模は直径約50cm・床面からの深さ約50cmであり、平面形は円形を呈する。

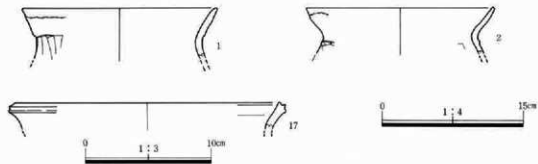
遺物は土師器の杯・甕、須恵器の杯・蓋・短頸壺・甕の他に鉄製品が出土している。(井川)



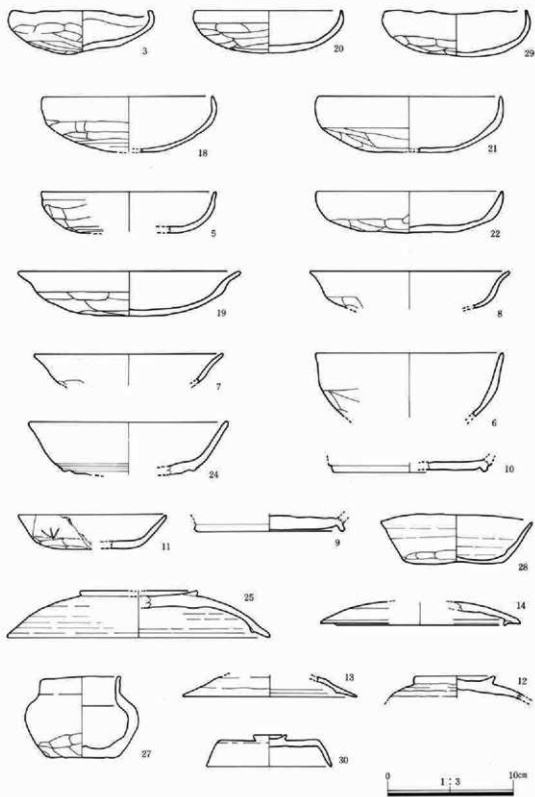
第409図 48号住居跡



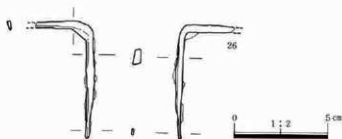
第410図 48号住居跡カマド



第411図 48号住居跡出土遺物①



第412図 48号住居跡出土遺物②

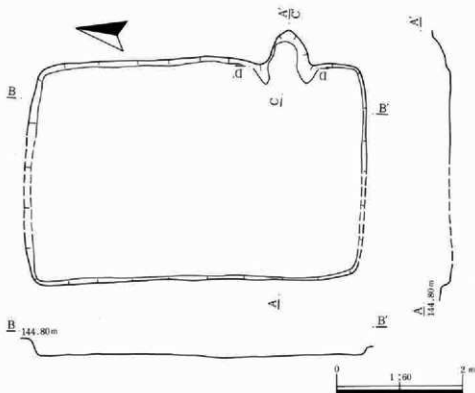


第413図 48号住居跡出土遺物③

49号住居跡 (第414・415図、図版139)

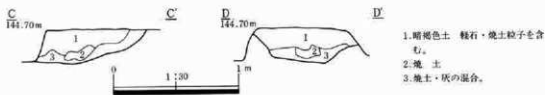
48号住居跡が近接するが、重複はない。規模は東西約3.5m・南北約5.4mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-83-Eである。壁の立ち上りは約15~25cmであり、残存状態は悪く、上面は破壊されている。床は比較的硬く良好であるが、軟弱な部分もある。壁内から柱穴は検出されず、壁周溝も検出されなかった。

カマドは東側壁の南東隅近くに構築されている。燃焼部は半分が壁内であり、煙道部の壁外への張り出しは約30cmである。袖は粘土を素材に使用しているが、残存状態は悪く、大部分が破壊されていた。貯蔵穴は検出されなかった。



遺物の出土量は非常に少ないが、土師器の杯が出土している。遺物の出土はカマド内からである。(井川)

第414図 49号住居跡



第415図 49号住居跡カマド

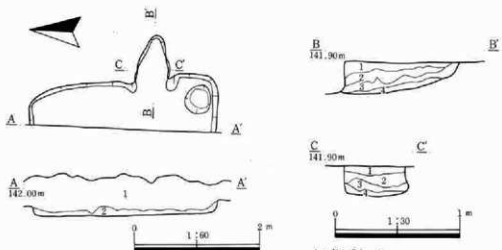


第416図 49号住居跡出土遺物

50号住居跡 (第417図、図版139)

31号住居跡・35号住居跡・37号住居跡が近接するが、調査範囲内での重複はない。覆土は焼土粒子を含む暗褐色土である。規模は、西側は調査区域外のため不明であるが、南北は約3.0mであり、小型の住居跡であると推定している。主軸はN-87-Eである。壁の立ち上りは約15~20cmであり、残存状態は不良で、上面は後世に破壊されている。調査範囲内の壁内から柱穴は検出されず、壁周溝も検出されなかった。壁内に柱穴・壁周溝はないものと推定している。

カマドは東側壁の中央やや南寄りに構築されている。燃焼部の半分は壁内であり、煙道部の壁外への張り出しは約60cmである。袖は粘土を素材に使用しているが、大部分が破壊されている。貯蔵穴はカマ



住居跡セクション

1. 褐色土 多量の軽石・少量の焼土粒子を含む。
2. 暗褐色土 少量の焼土粒子・ロームブロックを含む。

カマドセクション

1. 褐色土 多量の軽石・少量の焼土粒子を含む。
2. 暗褐色土 少量の軽石・焼土粒子を含む。
3. 暗褐色土 少量の軽石・焼土及び粘土を含む。
4. 焼土・灰の混合。

第417図 50号住居跡



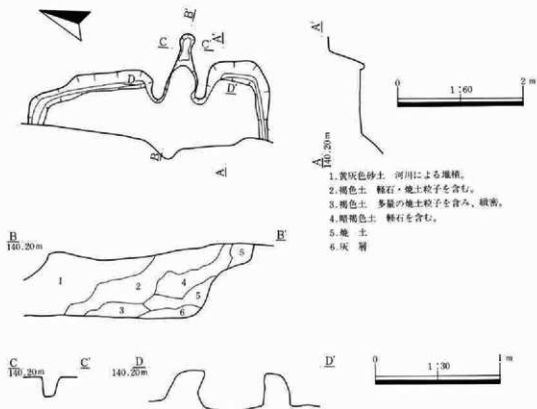
第418図 50号住居跡出土遺物

ドの右側、南東隅に構築されている。規模は径約40cm・平面形は不整形な円形を呈するが、床面からの深さは約15cmであり、浅い。遺物は須恵器の杯が出土しているが、出土量は非常に少なく、覆土中からの出土である。

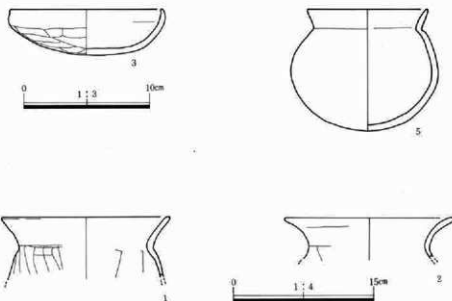
(井川)

51号住居跡 (第419図、図版140)

1号住居跡・2号住居跡・52号住居跡が近接するが、重複はない。河川(旧唐沢川)の氾濫により西側が破壊されている。規模は不明であるが、南北は約2.6mであり、小型の住居跡であると推定している。主軸はN-59°-Eである。壁の立ち上りは約50cmを測り、残存状態は良好であるが、西側は破壊されている。床は硬く、良好な床である。残存部分から、柱穴は検出できなかった。住居の規模などから、壁内に柱穴はないものと推定している。残存部分での壁周溝は、カマド部分を除いて確認できた。恐らく全体を巡るものであろう。



第419図 51号住居跡



第420図 51号住居跡出土遺物

カマドは東側壁の南寄りに、東側壁に直交ではなく、やや南側に傾いて構築されている。燃焼部は壁内にあり、煙道部の壁外への張り出しは約50cmである。袖は粘土を素材に使用している。貯蔵穴は不明であるが、構築されなかった可能性が大きい。遺物の出土は少ないが、土師器の杯・甕などがある。

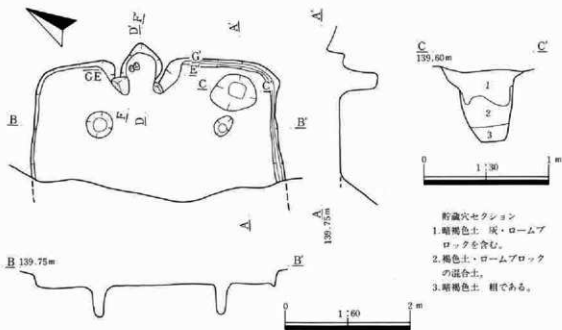
(井川)

52号住居跡 (第421図、図版140・141)

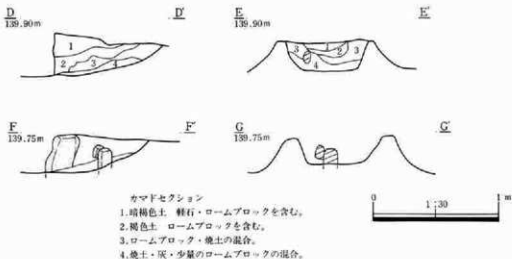
1号住居跡・51号住居跡・53号住居跡・54号住居跡が近接するが、重複はない。西側半分は河川(旧唐沢川)により、破壊されている。規模は不明であるが、南北は約3.9mである。主軸はN-60°-Eである。壁の立ち上りは約15~20cmであるが、西側半分は破壊されている。床はローム層中に構築されており、硬く良好な床である。主柱穴は4本と推定できるが、確認したのは東側の2本である。規模は径約25~40cm・床面からの深さ約50cmであり、平面形は円形・楕円形を呈する。壁周溝は南側壁から東側壁のカマドまで確認できたが、カマドより北側からは検出されなかった。

カマドは東側壁中央やや北寄りに構築されている。燃焼部はほぼ壁内にあり、煙道部の壁外への張り出しは、確認面で約20cmである。袖は粘土を素材に用いているが、先端は石を使用し、固めている。袖の先端から東側へ約45cm、カマド中心線より北寄りの位置から、支脚を検出した。支脚の素材は石であり、地山に埋め込まれている状態であった。貯蔵穴は南東隅に構築されている。規模は長軸約70cm・短軸約55cmであり、平面形は不整形な楕円形を呈する。床面からの深さは約60cmを測る。遺物は土師器の杯・甕などが出土している。

(井川)

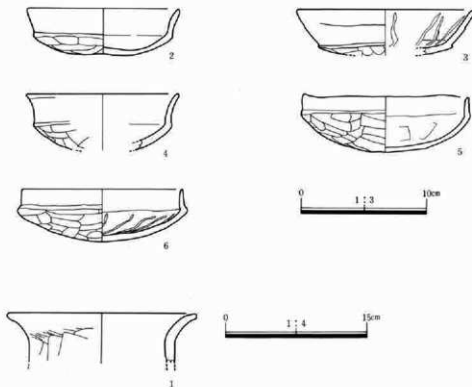


- 貯蔵穴セクション
1. 暗褐色土 灰・ロームブロックを含む。
 2. 褐色土・ロームブロックの混合土。
 3. 暗褐色土 粗である。



- カマドセクション
1. 暗褐色土 軽石・ロームブロックを含む。
 2. 褐色土 ロームブロックを含む。
 3. ロームブロック・焼土の混合。
 4. 焼土・灰・少量のロームブロックの混合。

第42図 52号住居跡



第422図 52号住居跡出土遺物

53号住居跡 (第423図、図版141)

54号住居跡と重複し、52号住居跡・55号住居跡が近接する。54号住居跡は、当住居跡の調査中に壁周溝の存在により確認されたものであり、同住居跡の壁の残存状態などから、当住居跡が新しいと推定している。覆土は軽石を含む褐色土・暗褐色土である。

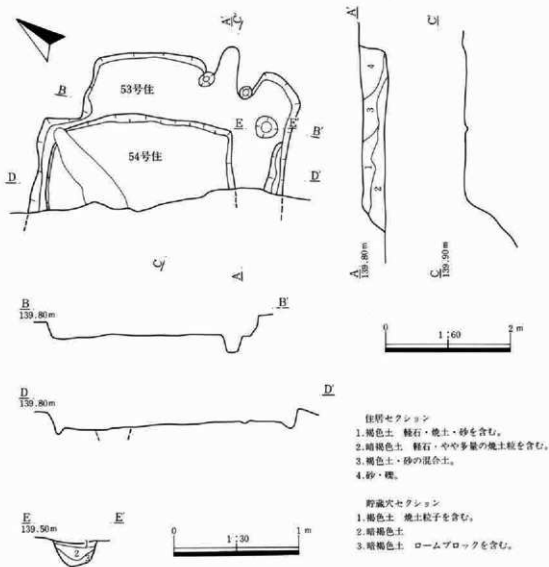
河川(旧唐沢川)の侵食により、規模は不明であるが、南北は約3.3mである。主軸はN-69°-Eである。壁の立ち上りは約25~35cmであるが、西側は破壊されている。床はローム層中に構築されており、硬く良好な床である。壁内から柱穴は検出されていない。壁周溝は、南側壁の西寄り部分から確認できただけである。

カマドは東側壁の南寄りに構築されている。煙道部は先端部分が旧河川により破壊されているが、燃焼部・袖が確認できた。袖は粘土を素材に用いているが、両袖の先端からは、石を埋め込んだ小ビットが検出できた。貯蔵穴は南東隅付近に構築されている。規模は径約30cm・床面からの深さ約30cmであり、平面形は不整形な円形を呈する。遺物は土師器の杯・甕、須恵器の蓋・甕などが出土している。

(井川)

54号住居跡 (第423図、図版141)

53号住居跡と重複する。新旧関係は前述の通りである。規模は不明であるが、南北は約3.1mである。

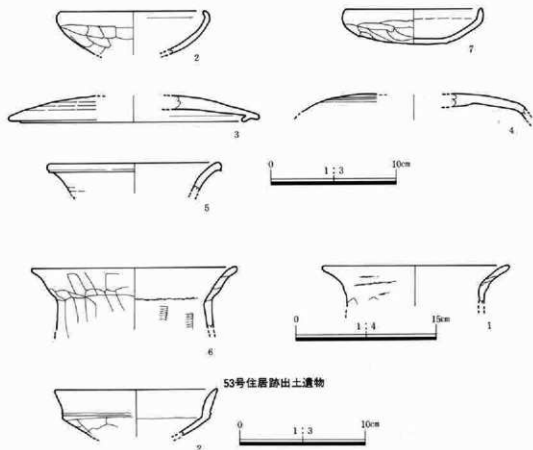


第423図 53号住居跡・54号住居跡

壁は北東部分のみの確認であるが、立ち上りは約20cmである。床は硬く、良好な床である。住居跡検出範囲での壁周溝は全体を巡る。

カマド・貯蔵穴は不明である。遺物の出土は非常に少ないが、土師器の杯が出土している。

(井川)



第424図 54号住居跡出土遺物

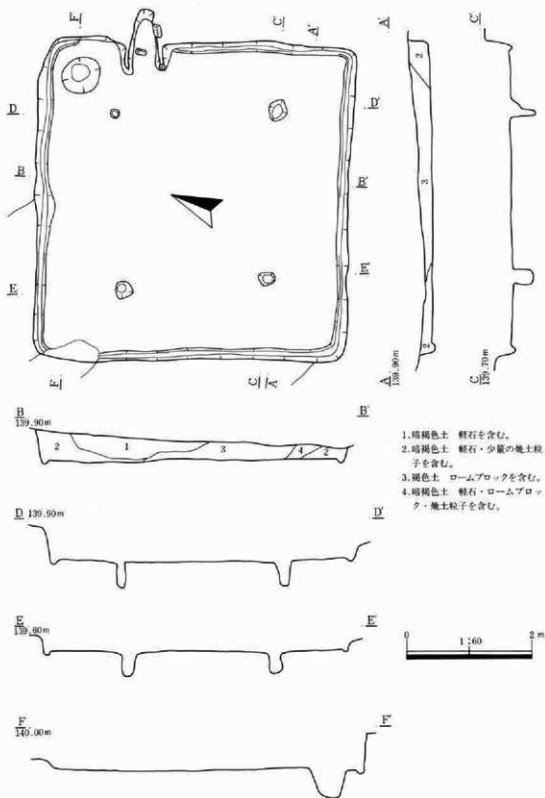
55号住居跡 (第425・426図、図版141・142)

56号住居跡と重複し、53号住居跡・57号住居跡・60号住居跡が近接する。56号住居跡との新旧関係は、覆土の相違により、当住居跡が新しい。覆土は軽石を含む暗褐色土・褐色土である。

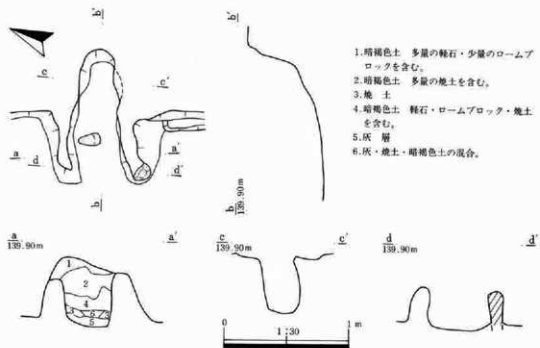
当住居跡の規模は一辺約5.0mであり、平面形は方形を呈する。主軸はN-68°-Eである。壁の立ち上りは、約15~40cmであり、良好な残存である。床はローム層中に構築されており、硬く、良好な床である。支柱穴は4本検出した。規模は径約15~30cm・床面からの深さ約30~40cmであり、平面形は円形・不整形な円形を呈する。壁周溝は、カマド部分を除いて、巡るものと推定している。

カマドは東側壁の北寄りに構築されている。燃焼部の半分は壁内であり、煙道部の壁外への張り出しは約50cmである。袖は粘土を素材に用いているが、南側袖の先端には石を使用している。袖の先端から東へ約35cm、やや北寄りの位置から、支脚が検出された。支脚は石製である。貯蔵穴は北東隅に構築されている。規模は直径約60cmであり、平面形は円形を呈する。床面からの深さは約50cmである。遺物は土師器の杯・壺・台付壺などが出土している。

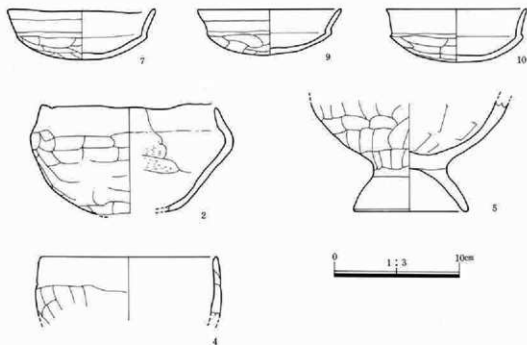
(井川)



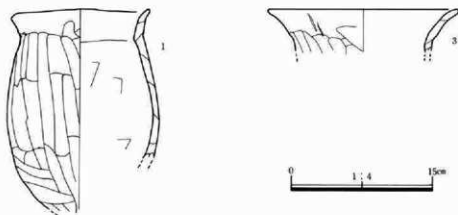
第425図 55号住居跡



第426図 55号住居跡カマド



第427図 55号住居跡出土遺物①



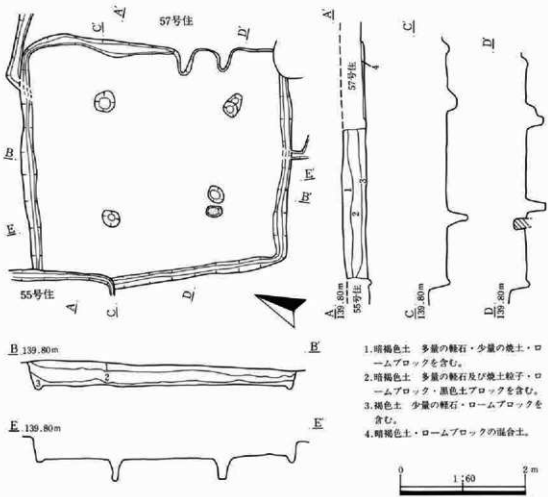
第428図 55号住居跡出土遺物②

56号住居跡（第429図、図版142）

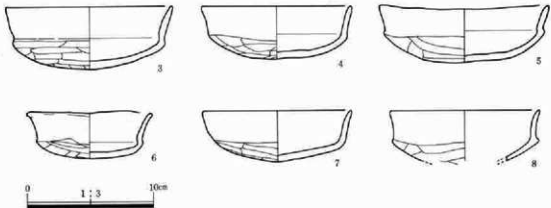
55号住居跡・57号住居跡が重複し、60号住居跡が近接する。55号住居跡との新旧関係は、覆土の相違により、当住居跡が古い。57号住居跡との新旧関係も、覆土の相違、当住居跡のカマドの残存状態から、当住居跡が古い。覆土は軽石を多量に含む暗褐色土である。

当住居跡の規模は、東西約3.7m・南北約4.3mであり、平面形は不整形な（台形に近い）隅丸長方形を呈する。主軸はN-64°-Eである。壁の立ち上りは約30cmであるが、55号住居跡・57号住居跡との重複部分は壁周溝のみの確認である。床はローム層中に構築されており、硬く良好な床である。主柱穴は4本である。規模は径20～30cmであり、平面形は不整形な円形を呈する。床面からの深さは約25～35cmであるが、北東側の柱穴は約10cmであり、浅い。壁周溝はカマド部分・南東部を除いて、巡ると推定している。

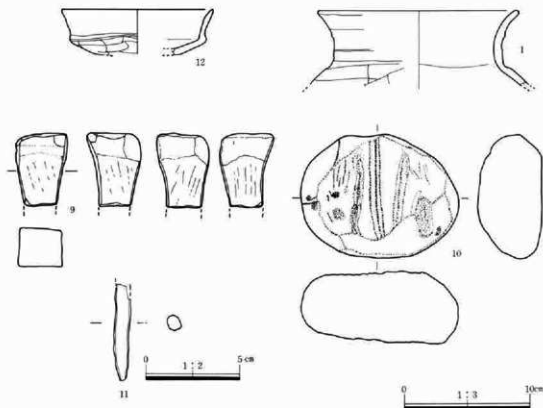
カマドは東側壁の南寄りに構築されている。大部分が57号住居跡に破壊されており、袖の痕跡が確認できただけである。燃焼部は壁内にある。貯蔵穴は検出されていない。遺物は土器器の杯・壺の他、石英安山岩製の砥石、角閃石安山岩製の砥石、鉄製品が出土している。（井川）



第429図 56号住居跡



第430図 56号住居跡出土遺物①



第431図 56号住居跡出土遺物②

57号住居跡 (第432・433図、図版142・143)

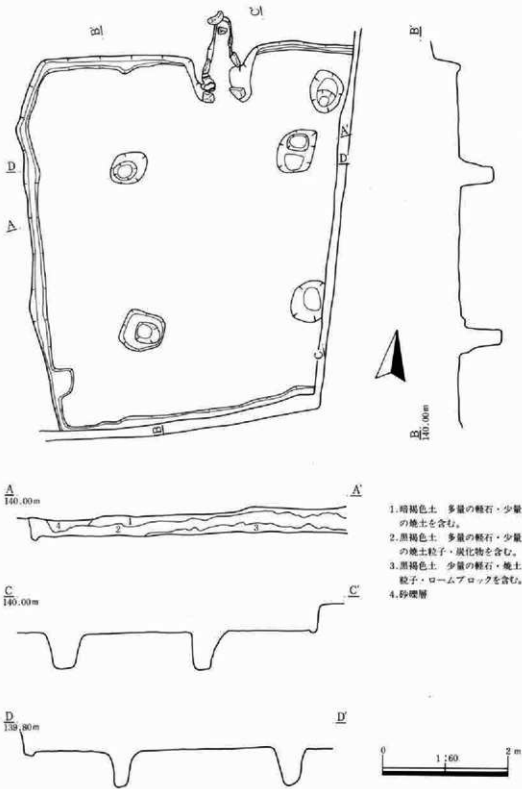
56号住居跡と重複し、55号住居跡・60号住居跡が近接する。56号住居跡との新旧関係は、覆土の相違、同住居跡カマドの残存状態などから、当住居跡が新しい。覆土は軽石を含む暗褐色土である。

規模は、東側が調査区域外のため不明であるが、南北は約5.6mである。主軸(柱穴間の midpoint で測定)はN-17-Wである。壁の立ち上りは約30~40cmであり、残存状態は良好である。床はローム層中に構築されており、硬く、良好な床である。56号住居跡との重複部分は、暗褐色土・ロームブロックの混合土で張り床されていた。主柱穴は4本である。規模は径約50~70cmであり、平面形は不整形な円形・楕円形を呈する。床面からの深さは約50~60cmである。東側は不明であるが、壁周溝は、カマド部分を除き、巡るものと推定できる。

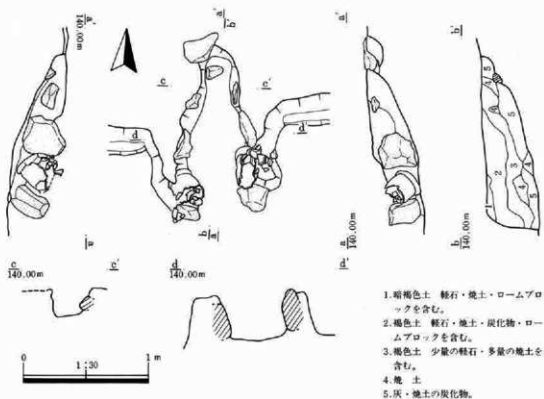
カマドは北側壁に構築されている。燃烧部は壁内にあり、煙道部の壁外への張り出しは約70cmである。袖の素材には粘土を用いているが、袖の先端には土師器の壺・石を使用して固めている。両袖の先端は、それぞれ石を地山に埋め込んで固め、その後(北側)は、それぞれ壺(右袖57住-2・左袖57住-13)を逆さにして使用していた。また、袖部~煙道部の両壁は石で固めてある。

貯蔵穴は北東隅近くに構築されている。規模は長軸約70cm・短軸約50cmであり、平面形は楕円形を呈する。床面からの深さは約50cmである。遺物は土師器の杯・壺、須恵器の杯・蓋などが出土している。

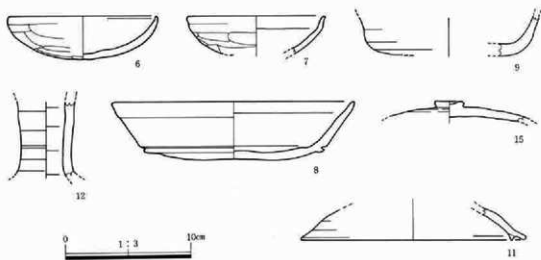
(井川)



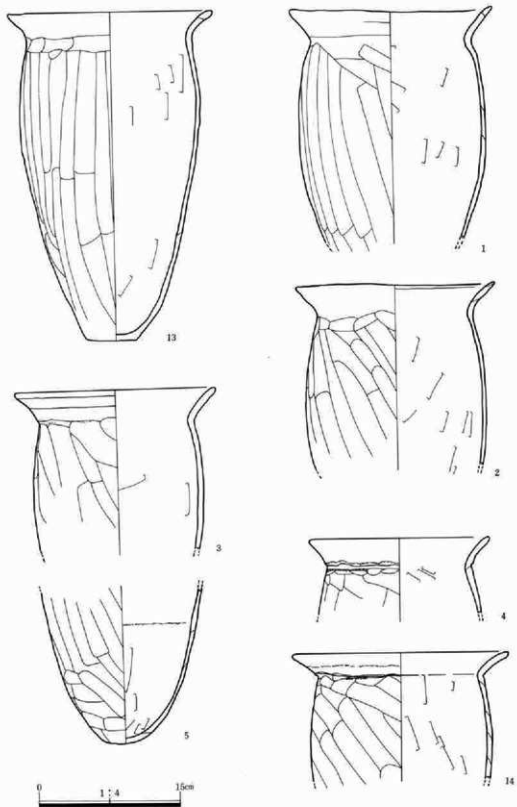
第432図 57号住居跡



第433図 57号住居跡カマド



第434図 57号住居跡出土遺物①



第435図 57号住居跡出土遺物②

58号住居跡 (第436・437図、図版144)

当住居跡は1号住居跡・59号住居跡と重複関係にある。61号住居跡は東側に近接する。

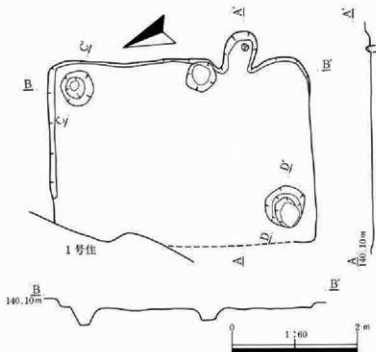
規模は南北に約4.2m・東西に約2.9m、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-70°-Eである。壁の立ち上りは、深さ約9cmで不明瞭である。床面はやや硬質で平坦である。

貯蔵穴は住居内の北東隅と西南隅との2ヶ所に構築されている。北東隅の貯蔵穴は南北52cm・東西58cm・深さ12~27cmの円形を呈し、底面は一段下がっている。遺物はほとんど出土していない。西南隅の貯蔵穴は南北64cm・東西60cm・深さ37cmの円形を呈する。底面は口径より小さく、急な傾きの壁をもつ。遺物はほとんど出土していない。

カマドは東辺南寄りに構築されている。燃焼部は浅い落ち込みとなっている。支脚らしき石がカマド内の先端中央に設けられている。遺物は数点出土する。カマドのすぐ北側壁際に小ピットが検出されているが、覆土は不明で、石が2個出土するのみである。

遺物は住居全体としては数が少なく、須恵器の杯(58住-1)・蓋(58住-2)が主なものである。

当住居跡は時代の古い1号住居跡に掘られた為、西辺の壁は不明である。59号住居跡の西隅を当住居跡のカマドが切っているの、時代は当住居跡が新しい。(宮下)

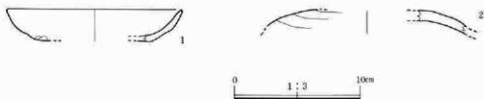


第436図 58号住居跡



1. 黒褐色土 軽石・ローム粒子を少量含み、しまりが悪い。
2. 黄褐色土 軽石を含まず、しまりが悪い。
3. 黒褐色土 軽石を少量含む。

第437図 58号住居跡貯蔵穴セクション



第438図 58号住居跡出土遺物

59号住居跡 (第439図、図版144)

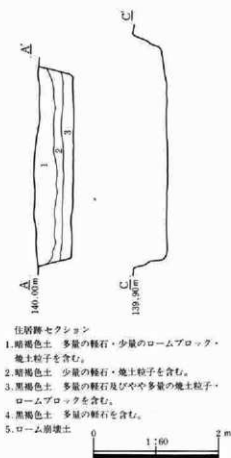
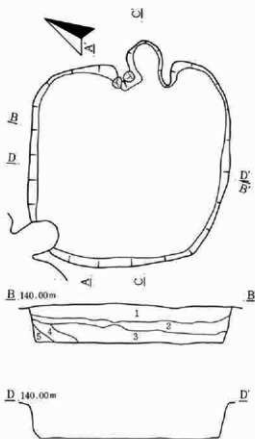
58号住居跡・60号住居跡と重複し、55号住居跡・61号住居跡・7号溝跡が近接する。58号住居跡との新旧関係は、同居居跡のカマドの残存状態から、当住居跡が古い。60号住居跡との新旧関係は不明である。覆土は多量に軽石を含む暗褐色土である。

規模は東西約3.2m・南北約3.1mであり、平面形は不整形な方形を呈する。主軸はN-66°-Eである。壁の立ち上りは約50cmを測り、残存状態は良好であった。床はローム層中に構築されており、硬く良好な床である。壁内から柱穴は検出されず、壁周溝も確認できなかった。

カマドは東側壁中央やや南寄りに構築されている。燃焼部は半分が壁内であり、煙道部の壁外への張り出しは約50cmである。袖は粘土を素材に用いているが、左袖(北側袖)は先端に石を使用している。貯蔵穴は確認できなかった。

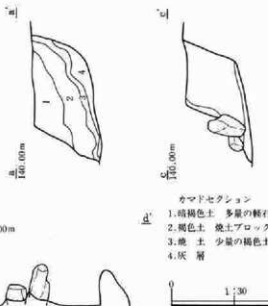
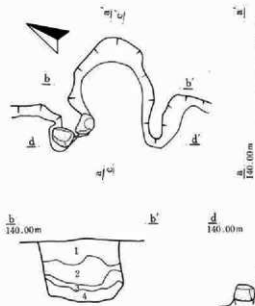
遺物は土師器の杯・甕、須恵器の杯・蓋・長頸壺などが出土している。

(井川)



住居跡土クッション

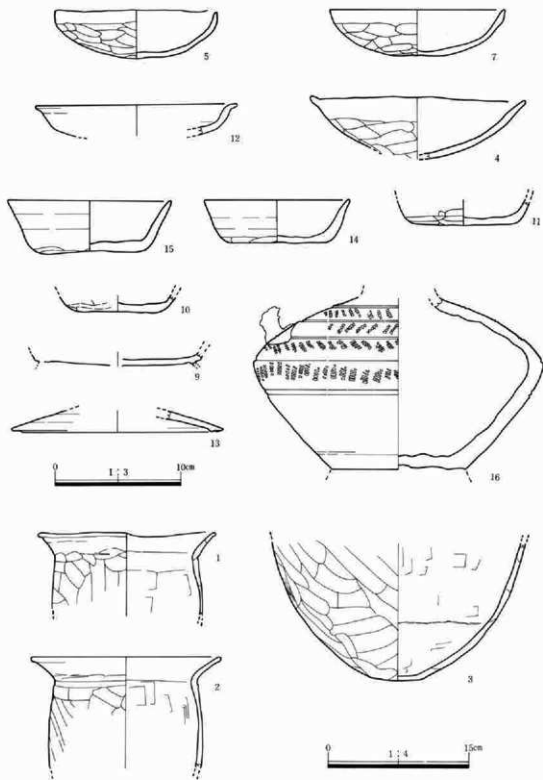
1. 暗褐色土 多量の軽石・少量のロームブロック・焼土粒子を含む。
2. 暗褐色土 少量の軽石・焼土粒子を含む。
3. 黒褐色土 多量の軽石及びやや多量の焼土粒子・ロームブロックを含む。
4. 黒褐色土 多量の軽石を含む。
5. ローム崩壊土



カマドセクション

1. 暗褐色土 多量の軽石を含む。
2. 褐色土 焼土ブロックを含む。
3. 焼土 少量の褐色土を含む。
4. 灰層

第439図 59号住居跡



第440図 59号住居跡出土遺物

60号住居跡 (第441・442図、図版145)

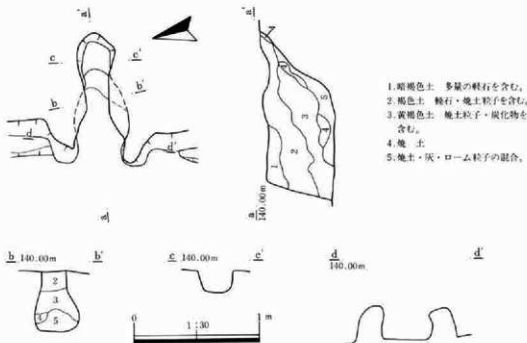
59号住居跡が重複し、56号住居跡・57号住居跡・61号住居跡・62号住居跡・7号溝跡が近接する。59号住居跡との新旧関係は不明である。覆土は多量に軽石を含む暗褐色土である。

規模は東西約4.8m・南北約3.5mであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-93°Eである。壁の立ち上りは約45~50cmを測り、残存状態は良好である。床はローム層中に構築されており、硬く踏み固められた床である。支柱穴は、東西方向の中心線に沿って2本掘られている。住居構造を推測すれば、2本柱で、東西が棟方向と考えることができる。柱穴の規模は、東側の柱穴が長辺約40cm・短辺約30cm・床面からの深さ約80cmであり、平面形は長方形を呈し、西側の柱穴は直径約45cm・床面からの深さ約60cmであり、平面形は円形を呈する。壁周溝はカマド・カマドの両側部分を除いて通っている。

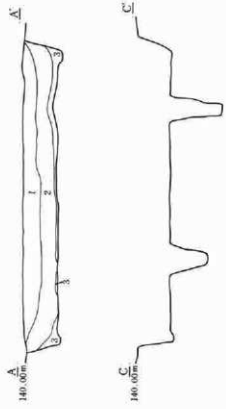
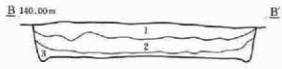
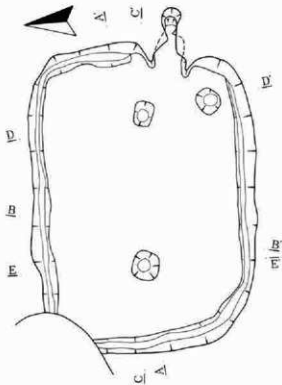
カマドは東側壁の南寄りに構築されている。即ち、住居構造の推定から、妻側にカマドが構築されていることになる。カマド燃焼部の半分は壁内にあり、煙道部の壁外への張り出しは約70cmである。袖は粘土を素材に使用している。燃焼部の最奥部から煙道部にかけては、上部が突き出した状態で検出された。煙道はトンネル状に掘り込まれていたのであろう。貯蔵穴はカマドの右側、南東隅に構築されている。規模は直径約40cmであり、平面形は円形を呈する。床面からの深さは約50cmである。

遺物は土師器の杯・甕の他、長さ2.5cmのチャート製の勾玉が出土している。

(井川)



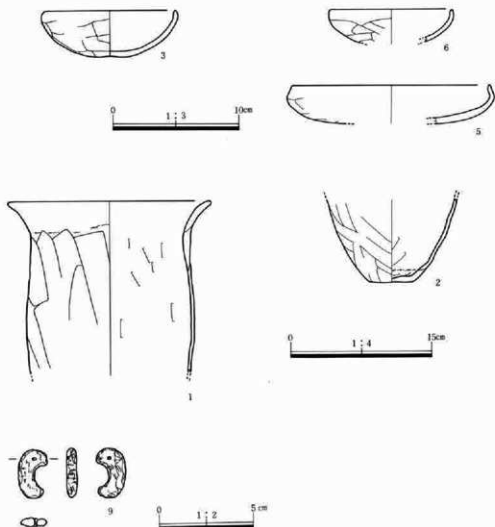
第441図 60号住居跡カマド



- 1. 暗褐色土 多量の軽石を含む。
- 2. 暗褐色土 多量の軽石及び少量の黒褐色土ブロック・ロームブロックを含む。
- 3. 褐色土 少量の軽石・少量のロームブロックを含む。



第442図 60号住居跡



第443図 60号住居跡出土遺物

61号住居跡 (第444図)

7号溝跡と重複し、58号住居跡・59号住居跡・60号住居跡・62号住居跡・3号溝跡が近接する。7号溝跡との新旧関係は、覆土の相違により、当住居跡が古い。

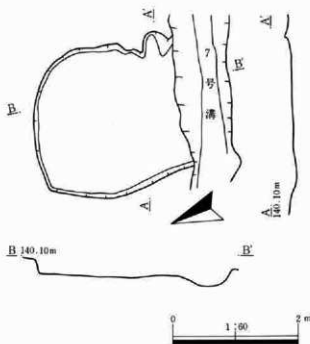
規模は不明であるが、東西は約2.4mである。平面形は不整形な隅丸方形か、隅丸長方形を呈するものと推定している。主軸(北側壁にほぼ平行する線を基準)はN-104°-Eである。壁の立ち上りは約5~20cmであり、北側の方が残りが良いが、全体的に残存状態は不良である。床はやや軟弱である。壁・床ともに、カマドより南側は、7号溝跡により破壊されている。南側が破壊され不明であるが、壁内に柱穴・

壁周溝はないものと推定している。

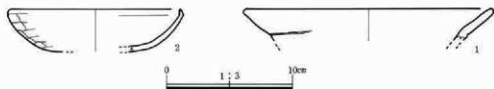
カマドは東側壁に設置されている。燃焼部は半分が壁内であり、煙道部の壁外への張り出しは、確認面で約20cmである。袖はほとんど破壊されており、痕跡が確認できただけである。貯蔵穴は不明である。

遺物の出土は非常に少ないが、土師器の杯・甕が出土している。当住居跡は、上面の大部分が削られており、遺構・遺物の残存状態は不良であった。

(井川)



第444図 61号住居跡

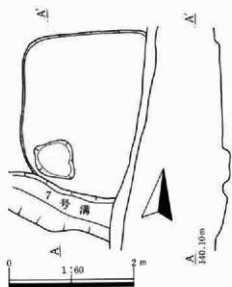


第445図 61号住居跡出土遺物

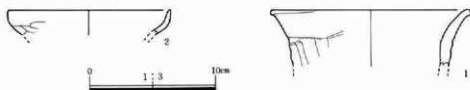
62号住居跡 (第446図)

7号溝跡と重複し、60号住居跡・61号住居跡が近接する。7号溝跡との新旧関係は、覆土の相違により、当住居跡が古い。

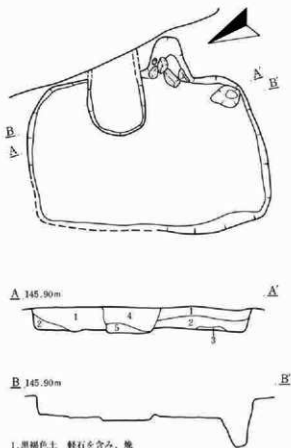
規模・軸は不明である。壁の立ち上りは約5cmであり、上面は大部分が削られている。床はやや軟弱である。調査範囲内で、柱穴・壁周溝は確認されていない。カマドは不明であるが、調査区域外の東側壁に構築されていると推測している。南西隅に長辺約60cm・短辺約50cmで、台形に近い方形を呈するピットがあるが、床面からの深さが約10cmと浅く、貯蔵穴とは考え難い。遺物は土師器の杯・甕が出土しているが、覆土からの出土である。(井川)



第446図 62号住居跡



第447図 62号住居跡出土遺物



1. 黒褐色土 軽石を含み、焼土粒子を少量含む。
2. 暗褐色土 焼土粒子・軽石を含む。
3. 暗褐色土 焼土と灰を含む。
4. 暗黒褐色土 少量軽石を含む。砂利っぽい層。
5. 暗褐色土 骨と茶褐色ローム粒子が混入。

第448図 63号住居跡

63号住居跡 (第448図、図版145)

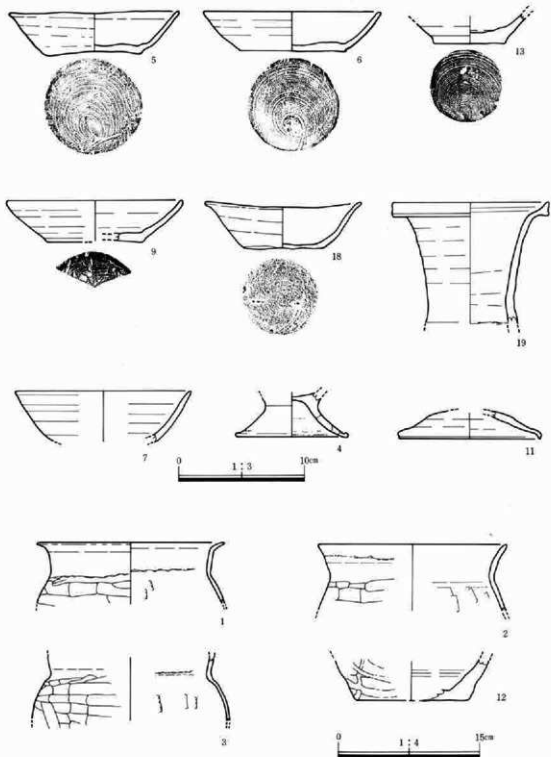
当住居跡は保渡田遺跡の最北端で、トレンチ掘りをした場所より単独にて検出された。周辺には遺構がほとんどなく、遠く西側に、縄文層の区域が検出されたにすぎない。

規模は南北約3.6m・東西約2.5mで、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN-78°-Eである。壁は床面より約35cmで、緩やかな傾きをもち、床面は平坦で堅緻である。

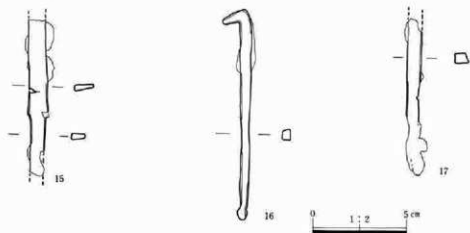
貯蔵穴は住居跡内東南隅の壁際に位置し、南北に47cm・東西に38cm・深さ40cmの不定形円形を呈する。壁は急傾斜で、底面は19×15cmの円形を呈し、堅緻。遺物は土師器の甕(63住-3)が主なもので、他は破片が数点出土している。

カマドは住居跡の東辺南寄りに構築されている。袖石として利用された石2個と、他に3個出土する。燃焼部はやや広く、焼土・灰の層が底面近くにて検出された。遺物は土師器の甕(63住-1)、須恵器の杯(63住-6・7)が主なものである。

遺物は住居跡内全体に多数出土する。床直からは須恵器の杯(63住-5・18)・長頸壺(63住-19)を、鉄製品の釘を南壁際、鉄鍔2本を覆土より出土する。(宮下)



第449図 63号住居跡出土遺物①



第450図 63号住居跡出土遺物②

1号掘立柱跡 (第451図、図版146)

1号掘立柱跡は、北側で3号掘立柱跡・4号掘立柱跡と近接し、西側で41号住居跡・42号住居跡・43号住居跡・47号住居跡と近接し、東側は44号住居跡が近接する。

規模は、2×1間で、北辺約2.6m・西辺約2.3m。主軸はN-10°-Eである。各柱穴は長辺40~67cm・短辺35~55cmと、大きさにばらつきがあり、深さも17~25cmとやや高低をもつ。2重にビットが重なり合い、大きさに大小の差がついている。各柱穴は不定の楕円形を呈する。底径は約20~55cmの間の大きさである。柱間は0.60~1.86mである。

遺物はほとんど出土せず、時代は不明。2号掘立柱跡と重複するが、新旧関係は不明である。

(宮下)

2号掘立柱跡 (第451図)

2号掘立柱跡は、1号掘立柱跡と47号住居跡とに、重複関係がある。北側は4号掘立柱跡と近接し、西側は41号住居跡・42号住居跡・43号住居跡が近接する。東側には44号住居跡が隣り合う。

規模は、2×1間で、北辺は約2.9m・西辺は約2.9mである。主軸はN-15°-Eである。各柱穴は、長辺33~50cm・短辺30~45cmとほぼ大きさに統一を持つ。深さは8~27cmとやや高低がある。各柱穴のうち2つの柱穴が、他の4つの柱穴より小さめで浅い。他の4つは規模・形状に統一感がある。平面形は円形を呈する。底径は18~30cmの間で、北東隅の柱穴のみ2段のビットである。南北に相対する柱穴がほぼ同一に近い規模である。柱間は0.90~2.42mと長さがまちまちで、直線上に柱穴の中心が並ばない凹凸が見られる。

遺物はほとんど出土せず、時代は不明。1号掘立柱跡と重複するが、新旧関係は不明である。47号住居跡の北東隅を切っている為、47号住居跡より時代は新しいと思われる。

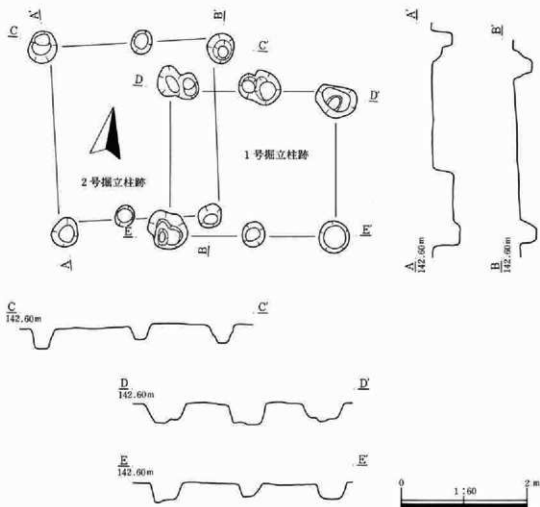
(宮下)

3号掘立柱跡 (第452図、図版146)

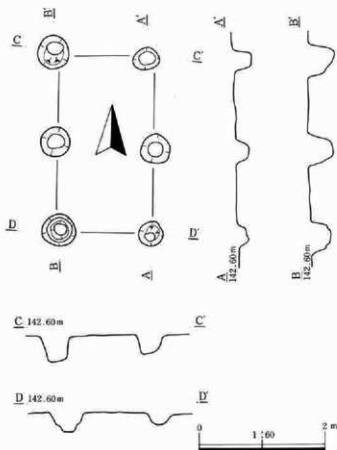
当遺構は、掘立柱群の中で、単独にて検出された。西側には4号掘立柱跡が近接し、南側には1号掘立柱跡・44号住居跡が近接し、東側と北側には、遺構が検出されない地域が広がる。

規模は1×2間、北辺約1.5m・西辺約2.8mの長方形を呈する。主軸はN-6°-Eである。各柱穴は長辺40~54cm・短辺35~50cmである。平面形は円形を呈する。深さは14~40cmと高低の差が大きい。底径は17~24cmとあまり差がない。西南隅の柱穴だけは2段である。各柱穴の規模はほぼ統一感がある。柱間は0.90m~1.05mで、直線上に並ぶ。底面はやや硬質で、壁は急な傾斜をもつ。

遺物はほとんど出土せず、時代は不明。他の掘立柱跡と比べて、小規模だが、形状はほぼ似た柱穴で構築されている。 (宮下)



第451図 1号掘立柱跡・2号掘立柱跡



第452図 3号掘立柱跡

5号掘立柱跡 (第453図)

当遺構は北側に45号住居跡が隣接し、西側には44号住居跡が隣接し、ピット群が西側周辺に近接する。南側は遺構が検出されない地域が広がる。東側は調査区域外へ延びる。

規模は西辺2間で、約2.1mである。主軸はN-5°-Eである。各柱穴、北より径55×22cm・深さ13cm、径35×35cm・深さ13cm、径35×38cm・深さ20cmと各々大きさがまちまちで統一感がない。平面形は楕円形を呈し、一番北側の柱穴は、2つのピットが重なり合っている。柱間は75cmと65cmである。各柱穴の底径は北より45cm・23cm・12cmと各々異なっている。

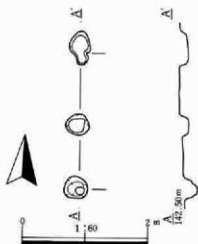
遺物はほとんど出土せず、時代は不明である。

当遺構は東側のほとんどが調査区域外へ延びている為、性格はほとんど不明である。(宮下)

4号掘立柱跡 (第454図、図版146)

当遺構は、掘立柱群の中で、単独にて検出された。北東側には46号住居跡が近接し、東側には3号掘立柱跡が近接する。南側には1号掘立柱跡・2号掘立柱跡が近接し、西側は調査区域外である。周辺にはピット群が隣接する。

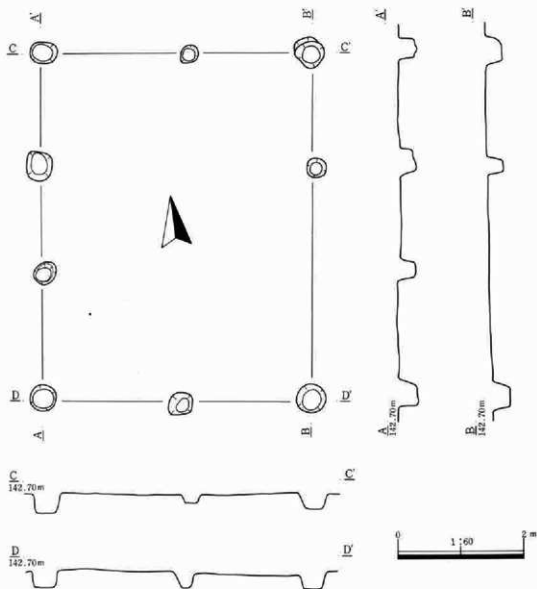
規模は2×3間で、北辺約4.3m・西辺約5.5m、他の掘立柱の中で一番大きい。主軸はN-8°-Eである。各柱穴は長辺29~48cm・短辺27~47cm・深さ12~31cmである。各柱穴は長辺・短辺がほぼ同一で、大小の円形を呈する。底径は12~34cm、床はやや硬質で、ほぼ平坦である。柱間は約1.3~2.0mとやや均一性には欠ける。



第453図 5号掘立柱跡

各柱穴9つのうち、2つがやや小さめな柱穴で、他の7つは統一性をもつ。当掘立柱跡は長方形の形状を呈し、各柱穴は直線上にほぼ並ぶ。

遺物はほとんど出土せず、時代は不明である。当掘立柱跡は掘立柱群の中でも規模・形状とも、統一感がある。
 (宮下)



第454図 4号掘立柱跡

1号溝跡 (第455図)

当溝跡は1号住居跡・6号住居跡・8号住居跡・10号住居跡・16号住居跡と重複関係にあり、それぞれ、切り合い関係から当溝跡の方が新しいと思われる。また、3号溝跡と南側で切り合い、2号溝跡と北側で切り合い、新旧関係では当溝跡の方が新しい。

規模は、上幅約1.1m・下幅約0.8m・深さ約0.5mである。北西から南東にかけて走向し、52mを測り、南側は1号住居跡と重なり途切れるが、北側は、調査区域外へと延びる。走向はほぼ直線である。

当溝跡は、北から南へ長く走り、重複関係の遺構は多いが、切り合いがそれぞれ明確にわかり、新しい時期のものと思われる。(宮下)

2号溝跡 (第455図)

当溝跡は、17号住居跡・22号住居跡と重複関係にある。それぞれ、切り合い関係により、当溝跡が新しいと思われる。また、1号溝跡と切り合い、新旧関係では当溝跡の方が古い。

規模は、上幅約0.5m・下幅約0.3m・深さ約0.3mで、細く浅い形状を呈する。西から東にかけて走向し、全長15mを測る。西側は1号溝跡と重なり途切れ、東側は22号住居跡と重なり、住居跡との重複部分で検出されなくなる。走向はほぼ直線である。(宮下)

3号溝跡 (第455図)

当溝跡は3号住居跡・6号住居跡・9号住居跡と重複関係にあり、それぞれ、切り合い関係により、時期が新しいと思われる。また、1号溝跡と切り合い、新旧関係では当溝跡の方が古い。

規模は、上幅約2.2m・下幅約0.5m・深さ約1.3m、他の溝跡と比べてかなり大きめ。西北から東南にかけて、少し蛇行しながら走向し、全長30mを測る。西側も東側も調査区域外へ延びる。遺物は須恵器の椀・蓋などが主なものである。覆土は砂礫層・砂層が堆積しており、水が流れていたと思われる。(宮下)

7号溝跡 (第455図)

当溝跡は59号住居跡・61号住居跡・62号住居跡と重複関係にあり、それぞれ、切り合い関係から当溝跡の方が新しいと思われる。

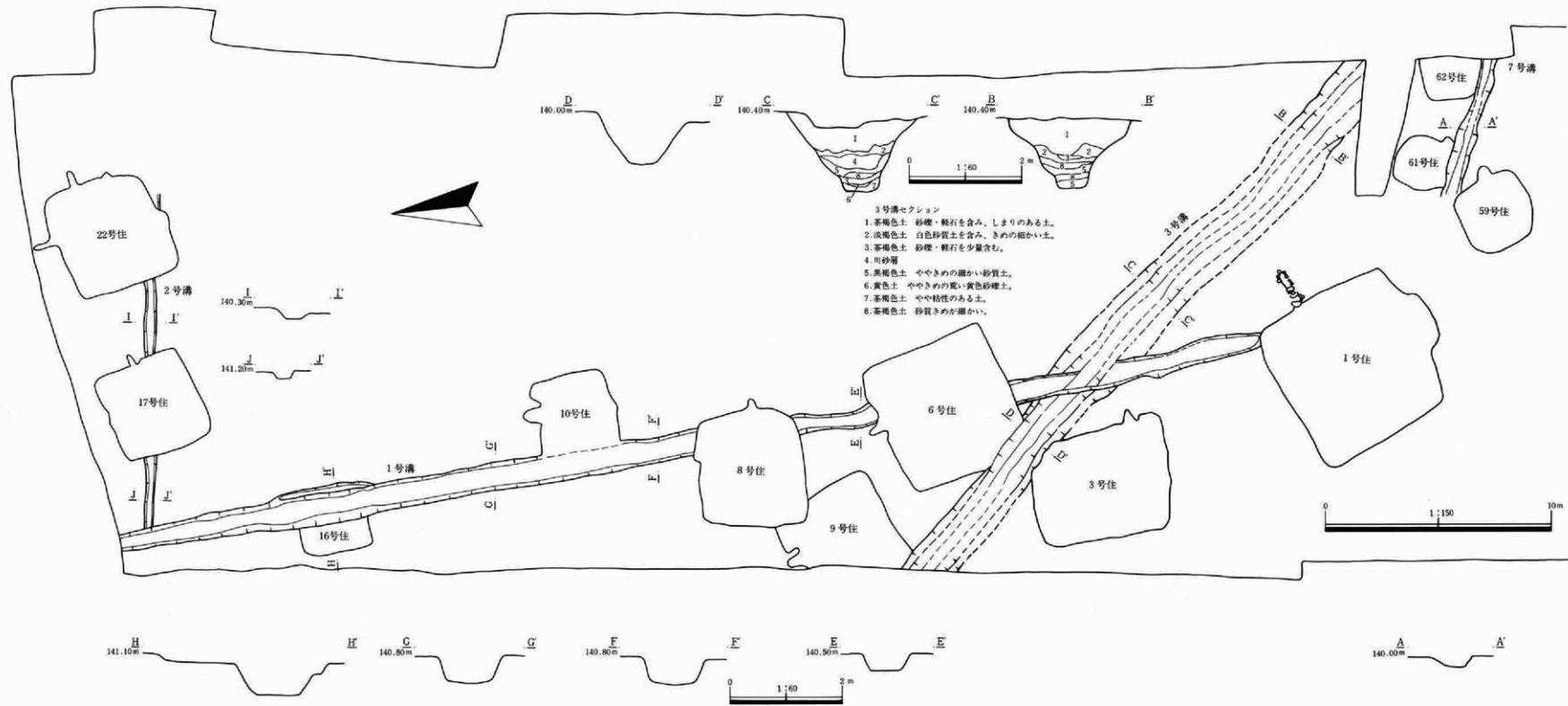
規模は、上幅約0.6m・下幅約0.4m・深さ約0.2mで、西から東にかけて、やや蛇行しながら走向。全長6mを測る。東側は調査区域外へ延び、西側は59号住居跡と重なる所で、検出できなくなる。(宮下)

4号溝跡 (第456・457図)

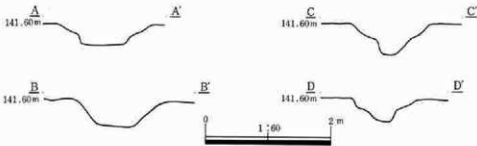
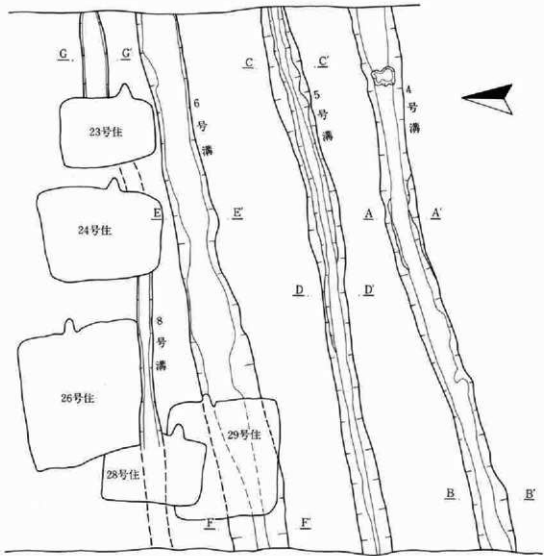
当溝跡は単独で検出された。規模は、上幅約1.3m・下幅約0.5m・深さ約0.4mで、西から東にかけて蛇行しながら走向する。全長22mを測る。西側も東側も調査区域外へ延びる。(宮下)

5号溝跡 (第456・457)

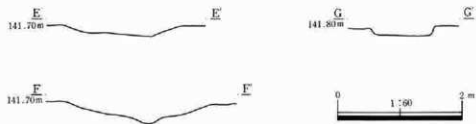
当溝跡は単独で検出された。規模は、上幅約1.0m・下幅約0.5m・深さ約0.4mで、西から東にかけて蛇行しながら走向する。全長21.5mを測る。西側も東側も調査区域外へ延びる。(宮下)



第455図 1号溝跡・2号溝跡・3号溝跡・7号溝跡



第456図 4号溝跡・5号溝跡・6号溝跡・8号溝跡①



第457図 4号溝跡・5号溝跡・6号溝跡・8号溝跡②



第458図 3号溝跡出土遺物

6号溝跡 (第456・457図)

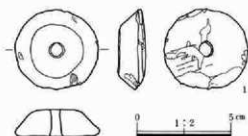
当溝跡は西側で29号住居跡と重複する。新旧関係は当溝跡の方が新しい。

規模は、上幅約1.6m・下幅約1.2m・深さ約0.2mと浅く広い形状を呈する。西から東にかけて走向する。全長21.5mを測る。西側も東側も調査区域外へ延びる。(宮下)

8号溝跡 (第456・457図)

当溝跡は23号住居跡・24号住居跡・26号住居跡・28号住居跡と重複する。新旧関係はそれぞれ住居跡より当溝跡の方が新しい。

規模は、上幅約1.0m・下幅約0.9m・深さ約0.1mである。西から東にかけて、途中とぎれながらも走向し、全長21mを測る。4号溝跡・5号溝跡・6号溝跡・8号溝跡はほぼ同じ方向に走向し、4本が並ぶ。(宮下)



第459図 表土出土遺物

表土

表土中からは、石製紡錘車が出土している。遺構との関係は不明であるが、完形品であり、石材は、輝緑岩を用いている。(宮下)

縄文時代の遺物

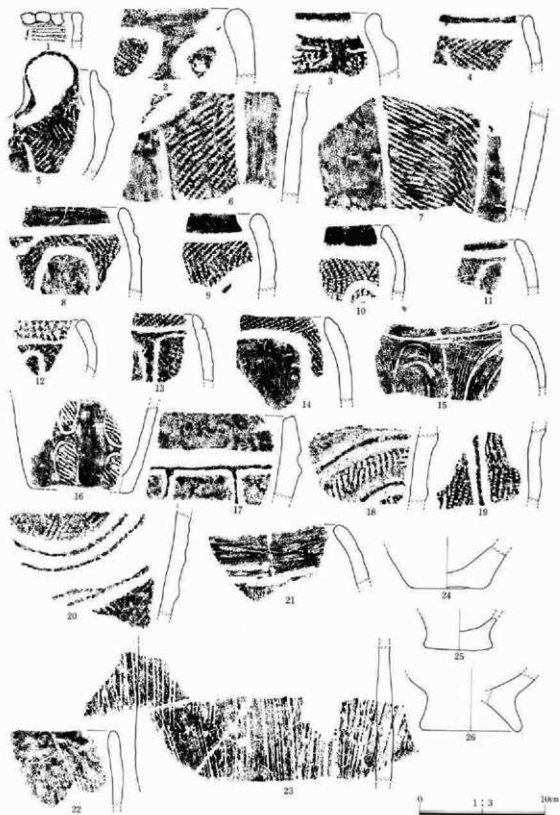
今回の調査では、前期末葉および中期後半～後期初頭の土器、および若干の石器類が出土した。土器のなかでは、加曾利E3～4式土器が主体となっており、前期末葉および後期初頭の土器は、数点の出土にとどまっている。遺物の分布は、古墳～平安時代の遺構分布が粗となる調査区北側部分に限定されている。特に遺物が集中する4区D～E-6～8グリッドでは、ローム層上面まで掘り下げて調査を行なったが、明確な遺構は確認できなかった。なお、分布の広がりを確認するため、調査区の北側にトレンチを2本設定したが、分布は認められなかった。

土 器 (第460図～第462図)

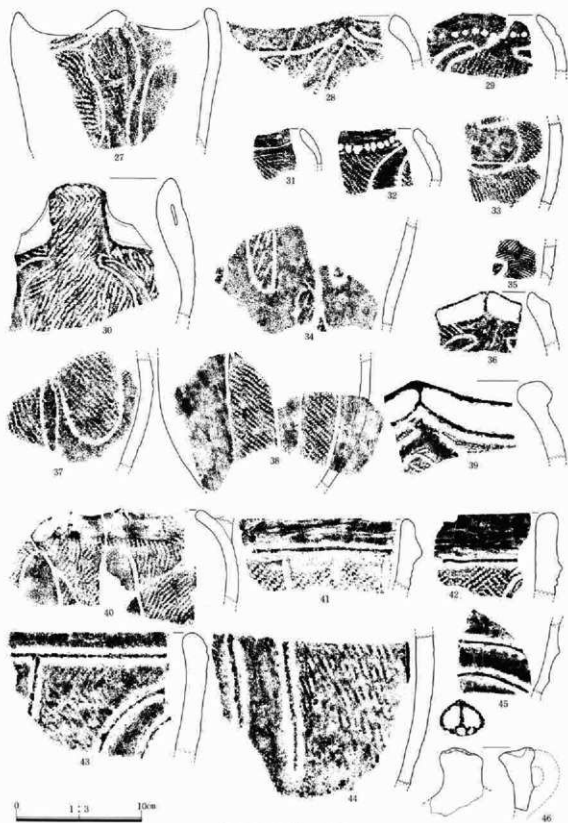
1は前期末葉の諸磯C式土器で、1点のみ出土した。口縁部がわずかに内湾し、口唇部は平坦な面をなしている。文様は、口縁部上端に左側端部を意図的に隆起させる刺突文をめぐらし、以下に半載竹管による平行沈線で横位の集合沈線を施し、その上に縦長の貼付文を施しているが欠損している。地文は認められない。胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好で灰黄橙色を呈す。

2～26は中期後葉の加曾利E3式土器である。2～7は渦巻文と楕円区画文による口縁文様帯をもつ土器である。2～5は口縁部破片であるが、いずれも小片で全体の構成はつかめない。3はわずかに隆帯表現をとどめているが、他は太い沈線で文様を表出されており、より新しい段階であることが理解されよう。5は把手部の破片で、把手上の渦巻文は円形化している。6・7は幅広の磨消縄文帯が施された胴部破片である。地文は2・3・5・6が縄文RL、4・7が縄文LRである。なお、4・5では縄文の施文方向を変えることによって羽状構成をとっている。8～16は口縁部文様帯を消失した段階の土器である。8～15はいずれも内湾する口縁部破片である。8～11は口唇下に一条の沈線をめぐらして無文帯を形成し、以下に上端がアーチ状の区画文を垂下させている。12・13も8～11と同様の構成であるが、12は口唇下無文部に2列の刺突文が施されており、13は縄文施文部が8～11と逆転している。14は口唇下無文部をもたない土器である。15は縄文のかわりに条線が施されている。16は胴下半部の破片で、区画内に縄文が施されている。区画内外を充填する縄文は、8・10・11がRL、9・12～14がLR、16がLである。なお8～14では口縁上端の一带のみを横位施文、以下を縦位施文して、羽状に構成している。17～20は隆線で文様が構成される土器である。17は口唇下に幅広く無文帯が形成されている。18～20は渦巻文が施された土器であろう。縄文は19・20がRL、18がLRである。21～23は縦位の条線を全面に施した土器である。21は口唇下に幅広く無文帯が形成されている。24～26は底部である。24は一般的な平底、25は端部が張り出したもので、いずれもこの時期に一般的であるが、26のように上げ底で端部が張り出したものも認められる。

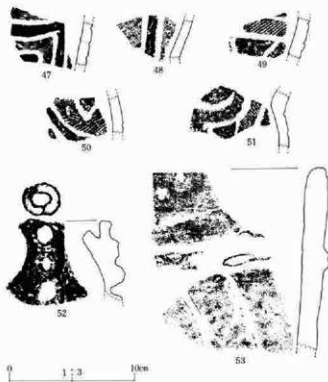
27～46は加曾利E4式土器である。27～35・37・38は沈線で文様を施す土器である。沈線はE3式土器に較べて細いものが使用されるようになる。口縁部は大きく内湾し、小波状を呈するものが多い。28



第460図 縄文時代の遺物①



第461図 縄文時代の遺物②



第462図 縄文時代の遺物③

る。36・39は28と同様に、波頂部につまみ上げたような突起が付く。波頂下の文様は、36が29・30と、39が28・32と同様である。40は波頂部に環状の把手が付くが欠損している。胴部には把手を挟んで2つのアーチ状区画の無文帯を垂下させている。41・42は平縁の土器で隆線下に懸垂沈線を施している。縄文は36・40・41がRL、39・42がLRである。43～45は断面三角形の隆線で文様を構成する土器である。43・44は同一個体である。口唇下に隆線を施して無文帯を形成し、そこから無文懸垂帯を数本垂下させ、その間にアーチ状の区画文を施しているものと思われる。縄文はLRで、上端部は羽状構成となっている。45は2本の平行隆線で文様を施した浅鉢形土器である。46は形象把手の破片である。橋状把手を伴うものと思われるが欠損している。形状は上端部が「胡桃」状を呈し、目の部分を深くくぼませて強調し、橋状把手接合部に数個の刺突を施している。

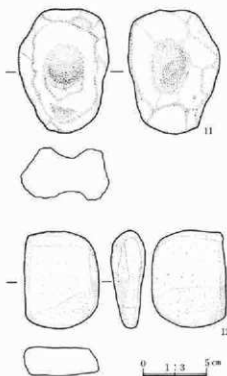
44～51は後期初頭の称名寺Ⅰ式土器である。充填縄文帯の重畳化、文様の複雑化が認められることから、Ⅰ式でも新しい段階と考えられよう。縄文は、いずれもLRで、著しく細いものを使用している。なお、48では縄文帯内に円形の刺突文が一列施されている。

52・53は称名寺Ⅱ式土器である。52は把手部破片である。把手部上端は円形を呈し、中央に刺突が施されている。また、正面には刺突を伴う鎖状の貼付文が施されている。53は口縁部に幅広く無文帯を置いて隆帯をめぐるし、以下に平行する2本の沈線で文様が施される。なお、隆帯には斜位の刻み状沈線が施されている。

は波頂部につまみ上げたような突起が付く。30は環状把手を押しつぶしたような把手が付く。27～32は口唇下に無文帯をもつが、29・32では列点文で区画している。28・32は波頂下に無文帯によるアーチ状に区画文が施されるが、29～30では上端部が離れた環状の文様となっている。38・39は渦巻文が施される土器であろう。文様は胴部中程で上下に分かれるものが多いようである。34・38は胴部破片である。38は幅広の充填縄文帯を垂下させているが、34は胴部中程で縄文帯を分け、交互入り組み状に配している。縄文は29・33・34がRL、30がL、他はLRである。36・39～44は口唇下無文帯を断面三角形の隆線で区画し、胴部に沈線で文様を施す土器である。36・39・40は波状口縁を呈する口縁部破片である。



第463図 縄文時代の遺物④



第464図 縄文時代の遺物⑤

石 器 (第463図・第464図)

石器は、石鏃1点、剥片石器5点、礫器1点、打製石斧3点、磨石類2点の計12点が出土した。

1は無茎の石鏃である。先端部をわずかに欠損している。周縁部調整は入念に行われており、側縁部・脚部とも直線的でシンメトリーな形状に仕上げられている。石質は黒色緻密安山岩で、重量は0.6gである。

2～6は剥片石器である。2は縁辺部全体に調整刻彫を加えた小型石器である。3は縦長剥片の一側縁を調整して刃部としている。4はU字状を呈する縦長剥片の両側縁を調整して刃部としている。5・6は横長剥片の長辺に調整刻彫を加えて刃部としたもので、5は使用により刃部が著しく磨耗している。石質は2が黒色緻密岩、3が頁岩、4・6が砂岩、5がシルト岩である。重量は2が4.3g、3が30g、4が26g、5が71gである。

7は磨耗の著しい石核状の礫の一部を打ち欠いた礫器である。石質は玄武岩で、重量は155gである。

8～10は打製石斧である。いずれも大型の横長剥片を使用しており、8の上端部片面および9の片面には自然面が認められる。8・10は短冊形を呈するものでいずれも刃部を欠損している。両側縁には刃つぶしが施されており、特に10は側縁部の磨耗が著しい。9は撮形を呈するもので、自然面を利用した反りが認められる。両側縁の刃つぶし部分は磨耗が著しい。石質および重量は、8が玄武岩で現存部58g、9が砂岩で233g、10は頁岩で現存部167gである。

11・12は磨石類である。11は稜を残す楕円状の円礫を利用したもので、両平坦面に集合打痕による大きな凹穴が認められる。12は偏平な円礫を利用したもので、平坦面の片面および周縁部全体に研磨面が認められる。石質はいずれも輝石安山岩で、重量は、11が318g、12が136gである。

今回の調査により、縄文時代前期末葉および中期後半～後期初頭の限られた時期に、調査区北側の一面(4区5～10ライン)で何らかの生活に関連する活動が行なわれたことが明らかとなった。しかし、遺構の検出もなく、ともすると見過ごされてしまう遺跡であるが、このような遺跡こそが最も数多く存在するのであり、その性格が問題とされなければならない遺跡でもある。この視点に立ってはじめて、本遺跡の存在意義が検討されることになる。(藤巻)

出土土器觀察表

検出番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 量 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
1住-1 (図版147)	甕 土師器	カマド内。口縁部欠。	() () (—) 最大径は胴部中央部。31.5cm。	球胴型に近く、丸底。輪積み。外面：頸部～底部はヘラ削り。内面：ナデ。	やや粗い砂粒を含む。酸化。硬質。明赤褐。内外面に油埋付着。
1住-2	甕 土師器	カマド内。口縁部～胴部ノミ残。	() (19) () 最大径は胴部上半部。24.5cm。	やや球胴型に近い。輪積み。外面：口縁部～頸部は横ナデ、頸部～胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はナデ。	砂粒を含む。酸化。硬質。にぶい橙。
1住-3 (図版147)	甕 土師器	カマド前床直。口縁部～胴部ノミ残。	() (21.5) () 最大径は口縁部。	輪積み。外面：口縁部は横ナデ、頸部～胴部はヘラ削り。内面：口縁部～頸部は横ナデ、頸部～胴部はナデ。	やや粗い砂粒を含む。酸化。硬質。にぶい橙。
1住-4	甕 土師器	床直。胴部下端～底部。	() () () (5.2)	外面：胴部下端～底部はヘラ削り。内面：ナデ。	大は径4～5mmの小石を含む。酸化。硬質。にぶい橙。
1住-5	甕 土師器	床直。胴部下端～底部が残。	() () () ()	外面：胴部はヘラ削り後にヘラ磨き。内面：ナデ。	大は径4～5mmの小石を含む。酸化。硬質。橙。
1住-6 (図版147)	高杯 土師器	貯蔵穴脇床直。ほぼ完形。	(13.8)(14.6)(15.0)	杯部：口縁部は直立ぎみに立ち上る。胴部：柱部は直線的に広がり、裾部はラッパ状に広がる。外面：口縁部～柱部はヘラ削り後にヘラ磨き、裾部は横ナデ。内面：杯部はナデ後にヘラ磨き。	砂粒を含む。酸化。硬質。にぶい橙。杯部内面は黒。
1住-7 (図版147)	杯 土師器	覆土。口縁部一部欠。	(3.8)(11.8)(—)	外面に横。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底面はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、体部～底面はナデ。	やや粗い砂粒を含む。酸化。硬質。橙。
1住-8 (図版147)	杯 土師器	南東隅床上10cmノミ残。	(5.8)(12.6)(—)	外面に横。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底面はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、体部～底面はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
1住-9 (図版147)	杯 土師器	カマド前床直。	(3.8)(12) (—)	外面に横。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底面はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、体部～底面はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
1住-10	杯 土師器	東壁中央脇床直。口縁部～底部ノミ残。	(4.0)(13) (—)	外面に横。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底面はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、体部～底面はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
1住-11	杯 土師器	中央床直。口縁部～体部ノミ残。	() (12) (—)	外面に横。丸底と推定。外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、体部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
1住-12	杯 土師器	中央床上30cm。口縁部～体部ノミ残。	() (10) (—)	外面に横。丸底と推定。外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
1住-13	杯 土師器	カマド前床上10cm。口縁部～体部ノミ残。	() (13) (—)	外面に横。丸底と推定。外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、体部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
1住-14	杯 土師器	南西床上5cm。口縁部～体部ノミ残。	() (11) (—)	外面に不明瞭な横。丸底と推定。外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。

押込番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口徑)(底徑)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
1住-15	杯 土師器	覆土。口縁部 ～体部ノ残。	() (11) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底と推定。外面：口 縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
1住-16	杯 土師器	西壁中央付近 床上20cm。口 縁部～体部ノ 残。	() (12) (—)	外面に稜。外面：口縁部は横ナデ、体部は ヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
1住-17	杯 土師器	貯蔵穴左脇床 上10cm。口縁 部～体部ノ 残。	() (11) (—)	外面に稜。丸底と推定。外面：口縁部は横 ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体 部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 口縁部は橙。体部はにぶい 褐。
1住-18	杯 土師器	中央北寄床 直。口縁部 ～体部ノ残。	() (11) (—)	外面に稜。丸底と推定。外面：口縁部は横 ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体 部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
1住-19	小型壺 土師器	覆土。口縁部 ～体部ノ残。	() () () 最大径は体部中央 部。16cm。	外面の口縁部下端に段を有す。外面：口縁 部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁 部～体部上端は横ナデ、体部中央～下半は ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
1住-20	壺 土師器	南東隅寄床 直。口縁部 ～体部ノ残。	() (12) (—) 最大径は体部上端。 13cm。	口縁部下端に明瞭な稜。丸底と推定。外面： 口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面： 口縁部～体部上半は横ナデ、体部下半はナ デ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
1住-21	小型壺 土師器	覆土。口縁部 ～体部ノ残。	() () ()	口縁部は外反。下端に段を有す。外面：口 縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口 縁部は横ナデ、体部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
1住-22	壺 土師器	覆土。口縁部 ～体部ノ残。	() (7) ()	器壁は薄く、口縁部下端に稜。外面：口縁 部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁 部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
1住-23	壺 土師器	中央床直。口 縁部～胴部ノ 残。	() (20) ()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。	大は径2～3mmの砂粒をや や多く含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
1住-24	壺 土師器	覆土。口縁部 ～胴部上端ノ 残。	() () ()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横 ナデ、胴部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 にぶい橙。
1住-25	壺 土師器	カマド袖下。 口縁部～胴部 上端ノ残。	() () ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外 面：口縁部～胴部は横ナデ、胴部はヘラ削 り。内面：口縁部～頸部は横ナデ、胴部は ヘラナデ。	やや多量の砂粒を含む。比 較的硬質。酸化。橙。
1住-26	壺 土師器	北東柱穴脇床 直。口縁部 ～頸部上端ノ 残。	() () ()	口縁部は外反し、端部は沈線状。輪積み。 外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。 内面：口縁部は横ナデ、胴部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 にぶい橙。
1住-28	杯 須恵器	中央南寄床上 10cm。体部 ～底部ノ残。	() () (6.0)	外面：体部は横ナデ、底部はヘラ削り。内 面：体部は横ナデ、底部はナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰。

第IV章 保護田遺跡

探出番号 (図版ページ)	器 種	出土状況	法 量 (器高)(口徑)(底徑)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
1住-33	甕 須恵器	カマド内。口縁部～胴部迄残。	() () ()	口縁部は「く」の字状に外反。外面：口縁部～頸部は横ナデ、胴部は叩き目。内面：口縁部～頸部は横ナデ、胴部は叩き目。	大は径2～3mmの砂粒を含む。硬質。還元。灰黄。
1住-34	甕 須恵器	覆土。胴部。	() () ()	内外面共に叩き目あり。	大は径1～2mmの砂粒を含む。硬質。還元。灰黄。
1住-35 (図版147)	台付甕 土師器	カマド内。口縁部～胴部一部欠。	(16.7)(15.0)(12.4) 最大径は胴部上半、19cm。	口縁部は直立し、胴部は直線的に広がる。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部～台部はヘラ削り、台端部はナデ。内面：口縁部は横ナデ、胴部～底部はヘラナデ。	大は径1～2mmのやや多量の砂粒を含む。比較的硬質。酸化。灰黄・にぶい橙。
1住-36 (図版147)	壺 土師器	カマド内。ほぼ丸形。	(27.8)(18.5)(3.0) 最大径は口縁部。	胴部は直線的で、口縁部は外反。底部は僅かである。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部～底部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部～底部はヘラナデ。	大は径4～5mmのやや多量の砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
1住-37	甕 土師器	中央床直。口縁部～底部迄残。	(9.6)(18.0)() 最大径は口縁部。	外面に段を有し、口縁部はやや外反。丸底に近い。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～胴部上半は横ナデ、胴部下半～底部はヘラナデ。	砂粒を少量含む。硬質。酸化。橙。
1住-38	杯 須恵器	覆土。口縁部～底部迄残。	(3.6)(9)(6.0)	丸底に近い平直。外面：口縁部～体部は回転ナデ、体部下端～底部はヘラ削り。内面：口縁部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。明青灰。
1住-39	蓋 須恵器	覆土。天井部～口縁部。	() () (—)	外面：天井部上半はヘラ削り、天井部下半～口縁部は回転ナデ。内面：天井部～口縁部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。
1住-40	蓋 須恵器	覆土。天井部～口縁部。	(3.4)(11.0)(—) つまみ径、1.4cm。	端部から0.9cmにかえり。擬空珠つまみ。外面：天井部は回転ヘラ削り、口縁部は回転ナデ。内面：天井部～口縁部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
1住-43	蓋 須恵器	カマド内覆土。天井部～口縁部迄残。	() (13) (—)	口縁部は屈曲し外方に下がる。屈曲部に沈線1条。外面：天井部はヘラ削り、天井部下端～口縁部は回転ナデ。内面：天井部～口縁部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
2住-1 (図版146)	甕 土師器	カマド袖部。口縁部～底部迄残。	(14.4)(24)(11.7) 最大径は口縁部。	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～胴部上端は横ナデ、胴部～底部はヘラナデ。	大は径3～4mmの小石を含むやや多量の砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい赤褐。油煙付着。
2住-2 (図版146)	甕 土師器	中央床直。口縁部～胴部迄残。	() (16) ()	胴部は直線的であり、口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	大は径3～4mmの小石を含む砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙・にぶい褐。油煙付着。
2住-3	甕 土師器	覆土。口縁部～胴部上端迄残。	() (17) ()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい褐・にぶい橙。
2住-4	甕 土師器	カマド内。口縁部～胴部上端迄残。	() (20) ()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	大は径2～3mmの小石を含む砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。

標頭番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
2住-5	甕 土師器	中央床直。口縁部へ胴部上端へ残。	() (20) ()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はへらナデ。	やや多量の砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。油煙付着。
2住-6	甕 土師器	西壁付近床直。胴部へ残。	() () ()	胴部は緩やかな丸をもつ。外面：へら削り。内面：へらナデ。	大は径2～3mmの砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙・にぶい橙。
2住-7 (図版14)	杯 土師器	南壁西寄輪床直。完形。	(4.2)(12.4)(—)	外面に稜。丸底。外面：口縁部へ底部は横ナデ、体部へ底部はへら削り。内面：口縁部へ体部は横ナデ、底部はナデ。	大は径1～2mmの砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
2住-8 (図版14)	杯 土師器	南壁中央輪床上5cmへ残。	(4.2)(12.6)(—)	外面に稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部へ底部はへら削り。内面：口縁部は横ナデ、体部へ底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
2住-9 (図版14)	杯 土師器	カマド左輪床直。ほぼ完形。	(3.8)(12.2)(—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部へ底部はへら削り。内面：口縁部は横ナデ、体部へ底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
2住-10 (図版14)	杯 土師器	北東隅付近床直。ほぼ完形。	(4.7)(13.0)(—)	外面に稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部へ底部はへら削り。内面：口縁部は横ナデ、体部へ底部はへらナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
2住-11 (図版14)	杯 土師器	北東柱穴付近床直。ほぼ完形。	(4.2)(12.0)(—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部へ底部はへら削り。内面：口縁部へ体部は横ナデ。底部はへらナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙・にぶい橙。
2住-12 (図版14)	杯 土師器	貯蔵穴直上。ほぼ完形。	(4.2)(12.4)(—)	外面に稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部へ底部へら削り。内面：口縁部へ体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
2住-13	杯 土師器	貯蔵穴内。口縁部へ体部へ残。	() (12.2) (—)	外面に稜。丸底と推定。外面：口縁部は横ナデ、体部はへら削り。内面：口縁部へ体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
2住-14	杯 土師器	カマド前床直。口縁部へ底部へ残。	(3.6)(12.0)(—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部へ底部はへら削り。内面：口縁部へ体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
2住-15	杯 土師器	覆土。口縁部へ底部へ残。	(4.2)(12.0)(—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部へ底部はへら削り。内面：口縁部は横ナデ、体部へ底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。油煙付着。
2住-16	杯 土師器	カマド左壁下床直。口縁部へ底部へ残。	(4.4)(11.2)(—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部へ底部はへら削り。内面：口縁部へ体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
2住-17	杯 土師器	貯蔵穴直上。口縁部へ底部へ残。	(4.8)(12.0)(—)	外面に稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部へ底部はへら削り。内面：口縁部は横ナデ、体部へ底部はへらナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
2住-18	杯 土師器	貯蔵穴直上。口縁部へ底部へ残。	(4.6)(13) (—)	外面に稜。口縁部に接合痕あり。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部へ底部はへら削り。内面：口縁部へ体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。

第四章 保護田遺跡

探検番号 (図版ページ)	器 種	出土状況	法 量 (器高)(口径)(底径)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
2住-19	杯 土師器	貯蔵穴直上。 口縁部～体 部ノ残。	() (12) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底と推定。外面；口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。油煙付着。
2住-20	杯 土師器	カマド内。口 縁部～底部ノ 残。	() (14) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底と推定。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
3住-1 (図版14)	壺 土師器	カマド内。口 縁部～胴部ノ 残。	() (22.3) () 最大径は口縁部。	口縁部は外反。輪積み。外面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	やや多量の砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙・にぶい橙。
3住-2	壺 土師器	東壁中央脇床 上20cm。口縁 部～胴部ノ 残。	() (18) ()	口縁部は外反。輪積み。外面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	やや多量の砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙・にぶい黄橙。
3住-3	壺 土師器	南西隅付近床 上10cm。口縁 部～胴部ノ 残。	() (24) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	やや多量の砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。口縁部に油煙付着。
3住-4	壺 土師器	中央北寄床上 5cm。底部ノ 残。	() () (6.0)	器壁は薄い。外面；胴部～底部はヘラ削り。内面；胴部～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
3住-5	壺 土師器	南西隅床直。 胴部ノ残。	() () ()	器壁は薄い。輪積み。外面；胴部はヘラ削り。内面；胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。油煙付着。
3住-6 (図版14)	杯 土師器	南東隅床直。 口縁部～底 部ノ残。	(3.3) (10.9) (—)	口縁部は内湾。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～底部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙・にぶい橙。
3住-7	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部ノ残。	() (11.2) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
3住-8	杯 土師器	東壁中央脇直 上10cm。口縁 部～底部ノ 残。	() (11) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
3住-9	杯 土師器	中央床上10 cm。口縁部 ～底部ノ残。	() () (—)	口縁部は内湾。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
3住-10	杯 土師器	南壁中央脇床 直。口縁部 ～体部ノ残。	() () (—)	口縁部はやや内湾。丸底と推定。外面；口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
3住-11	杯 土師器	貯蔵穴脇・中 央床直。口縁 部ノ残。	() () (—)	口縁部は内湾。丸底と推定。外面；口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
3住-12	杯 須恵器	覆土。口縁部 ～体部ノ残。	() () ()	内外面の口縁部～体部はロクロによる横ナデ。	石英等の鉱物粒を含む。硬質。珪元。灰黄。

標記番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(器径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
3住-13	壺 須恵器	覆土。割部。	() () ()	内外面の割部には叩き目あり。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰黄。
3住-14	壺 須恵器	覆土。割部。	() () ()	外面はカキ目。内面はロクロによるナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰黄。
3住-15	杯 須恵器	カマド左袖上。弓残。	(3.7)(10.0)(6.6)	外面：口縁部～体部は横ナデ。底部はヘラナデ。内面：口縁部～底部ロクロのナデ。	石英等の鉱物粒を含む。硬質。還元。灰オリーブ。
4住-1	杯 土師器	カマド内。口縁部～体部。	() () ()	外面：口縁部は横ナデ。体部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ後に放射状暗文。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。
5住-1 (図版14)	羽釜 土師器	カマド前床直他。口縁部～底部弓残。	(26.5)(20.6)() 最大径は割部上位、 21.6cm。	口縁部は直立。輪積み。断面三角形の鈎状付。外面：口縁部～胴上部は横ナデ。胴下部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ。胴部～底部はナデ。	砂粒を含む。やや硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。
5住-3	羽釜 土師器	カマド内床直。口縁部～胴部。	() (20) ()	口縁部は内傾。輪積み。断面は細長三角形の鈎状付。外面：口縁部～胴部は横ナデ。内面：口縁部～胴部は横ナデ。	砂粒を含む。やや硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。
5住-4 (図版14)	皿 灰陶器	カマド前床上4cm。完形。	(2.6)(13.1)(7.2)	口縁部外反。高台部確な貼付。外面：口縁部～体部回転ナデ。底部回転糸切り後に回転ヘラナデ。内面：口縁部～底部回転横ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。にぶい黄橙。軸は手掛け灰黄。底部焼成時ヒビが入る。
5住-5 (図版14)	碗 灰陶器	カマド前床上5cm。完形。	(4.3)(14.0)(7.4)	短い高台貼付。外面：口縁部～体部は回転横ナデ。底部は回転糸切り後に回転ヘラナデ。高台部は回転横ナデ。内面：口縁部～底部は回転横ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰黄。内外面に油煙付着。
5住-6 (図版14)	碗 土師質	貯蔵穴内床上24cm他。口縁部～底部残。	(5.6)(13) (7.6)	短い高台部確に貼付。外面：口縁部～体部は回転横ナデ。底部は回転糸切り後にナデ。高台部は回転横ナデ。内面：口縁部～底部は回転横ナデ。	鉱物粒を含む。やや硬質。還元。にぶい橙。外面底部に油煙付着。
5住-7 (図版14)	碗 土師質	カマド内床直。口縁部～底部弓残。	(6.3)(15) ()	細く長い高台部に貼付。外面：口縁部～体部は回転横ナデ。底部は回転糸切り後にナデ。高台部は回転横ナデ。内面：口縁部～底部は回転横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや硬質。酸化。灰黄褐。
5住-8	碗 土師質	カマド内床直。高台部弓残。	() () (11.0)	高台部は外反。外面：高台部は回転横ナデ。内面：高台部は回転横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや硬質。酸化。にぶい橙。
5住-10	横瓶 須恵器	カマド内床上2cm。割部。	() () ()	胴部は器壁が厚い。外面：ナデ後に平行叩き目。内面：平行叩き目。	鉱物粒を含む。硬質。還元。外面灰黄。内面灰黄。
5住-11	壺 土師器	覆土。口縁部～胴部。	() () ()	「コ」の字状口縁。外面：口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面：口縁部横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質。酸化。外面にぶい橙。内面にぶい黄橙。内面油煙付着。
6住-1 (図版14)	壺 土師器	カマド内。口縁部弓欠。	(38.6)(26.0)(4.8) 最大径は口縁部。	口縁部は「く」の字状に外反する。輪積み。外面：口縁部は横ナデ。胴部～底部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ。胴部～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。

第IV章 保護田遺跡

採回番号 (図版ページ)	器 種	出土状況	法 量 (器高)(口径)(底径)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
6住-2 (図版10)	甕 土師器	貯蔵穴内。口 縁部～胴部ノ 残。	() (21.6) () 最大径は口縁部。	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。内外面に油埋付 着。
6住-3 (図版10)	甕 土師器	カマド内。口 縁部～胴部ノ 残。	() (22.6) () 最大径は口縁部。	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。内外面に 油埋付着。
6住-4	甕 土師器	貯蔵穴直上。 口縁部～胴 部ノ残。	() (20) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
6住-5	甕 土師器	カマド内。口 縁部～胴部ノ 残。	() (21) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
6住-6	甕 土師器	カマド内。口 縁部ノ残。	() (22) ()	口縁部は「く」の字状に外反、内面口縁端 部に比縁有り。輪積み。外面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
6住-7	小型甕 土師器	西壁中央胎床 上20cm。口縁 部～胴部ノ 残。	() (11) ()	口縁部は僅かに外反。輪積み。外面；口縁 部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁 部～胴部上半は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。内外面に 油埋付着。
6住-8 (図版10)	杯 土師器	両壁中央胎床 直。ほぼ完形。	(4.0) (11.4) (—)	口縁部は直立する。丸底。外面；口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
6住-9 (図版10)	杯 土師器	両壁中央胎床 直。ほぼ完形。	(3.5) (11.4) (—)	口縁部は直立。丸底。外面；口縁部は横ナ デ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部 ～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
6住-10	杯 土師器	カマド左袖胎 床直。口縁部 ～底部ノ残。	(3.6) (12.0) (—)	口縁部は僅かに内湾。丸底。外面；口縁部 は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面； 口縁部は横ナデ、体部～底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。にぶい黄橙。外 面に焼成時の黒色あり。
6住-11	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部ノ残。	(3.4) (12) (—)	外面に不明瞭な稜。口縁部に比縁有り。丸 底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部は ヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、 底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
6住-12	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部ノ残。	(2.9) (10) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面；口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
6住-13	杯 土師器	北東隅床上10 cm。口縁部 ～底部ノ残。	(3.7) (14) (—)	外面に不明瞭な稜。口縁部は内湾。丸底。 外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ 削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底 部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
6住-14	杯 土師器	覆土。口縁部 ～体部ノ残。	() (14) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面；口縁部は 横ナデ、体部はヘラ削り。内面；口縁部～ 体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。

採出番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 量 (器高)(口径)(底径)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
6住-15	杯 土師器	覆土。口縁部 ～体部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (11) (—)	口縁部はやや内湾。丸底と推定。外面；口 縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面；口 縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
6住-19	盃 須恵器	覆土。天井部 ～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (18) (—)	かえりは短く、端部より内側。外面；端部 は回転横ナデ、天井部は回転ヘラ削り。内 面；端部～天井部は回転横ナデ。	少量の鉱物粒を含む。比較 的硬質。環文。灰黄。
6住-20	長頸壺 須恵器	南西隅床上30 cm。頸部 $\frac{1}{2}$ 残。	() () ()	輪積み。内外面共にヘラ状工具による回転 横ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。環文。 灰黄。自然釉の付着あり。
6住-21	提 瓶 須恵器	カマド左袖縁 床上10cm。	() () ()	外面はカキ目。内面は回転横ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。環文。 灰オリーブ。
6住-22	壺 須恵器	覆土。	() () ()	口縁部は外斜し、端部に沈線。1段目1条・ 2段目2条の凸帯を施し、3区画に分離。 各区画に波状紋あり。	大は径2～3mmの石英・長 石等の鉱物粒を含む。硬質。 環文。褐灰。
7住-1 (図版10)	壺 土師器	カマド内。胴 部下端～底 部 $\frac{1}{2}$ 欠。	(30.4)(20.6)(4.7) 最大径は口縁部。	口縁は「く」の字状に外反。輪積み。外面； 口縁部は横ナデ、胴部～底部はヘラ削り。 内面；口縁部は横ナデ、胴部～底部はヘラ ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。内外面に油埋付 着。
7住-2 (図版10)	壺 土師器	カマド内。胴 部下端～底 部 $\frac{1}{2}$ 欠。	() (16.8) () 最大径は口縁部。	口縁部は外反。輪積み。外面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙・橙。内外 面に油埋付着。
7住-3	壺 土師器	中央床上10 cm。口縁部 ～胴部上半 $\frac{1}{2}$ 残。	() (22.6) ()	口縁部は外反。輪積み。外面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。内外面に 油埋付着。
7住-4	壺 土師器	北東部床直。 口縁部～胴部 上端 $\frac{1}{2}$ 残。	() (21.1) ()	口縁部は外反。輪積み。外面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。内外面に 油埋付着。
7住-5	壺 土師器	東壁中央縁床 上20cm。口縁 部～胴部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (21) ()	口縁部は外反。輪積み。外面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	大は径2～3mmのやや多量 の砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
7住-6	小型壺 土師器	西壁中央寄床 上10cm。口縁 部～胴部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (14) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。内外面に 油埋付着。
7住-7	小型壺 土師器	中央西寄床 直。口縁部 ～胴部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (14) ()	口縁部は外反。輪積み。外面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。やや軟質。酸 化。にぶい黄橙。
7住-8	壺 土師器	カマド左袖縁 床直。口縁部 ～胴部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (20) ()	口縁部は外反。輪積み。外面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部～胴 部上端はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
7住-9	小型壺 土師器	中央床上5 cm。口縁部 ～胴部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (12) ()	口縁部はやや外反。輪積み。外面；口縁部 は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部 は横ナデ、胴部はヘラナデ。	大は径2～3mmの砂粒を含 む。比較的硬質。酸化。に ぶい橙。油埋付着。

第IV章 保護田遺跡

検出番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
7住-10	鉢 土師器	覆土。口縁部 ～底部ㄥ残。	() () ()	外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。 内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。におい橙。内黒。
7住-11	甕 土師器	西壁中央脇床 上5cm。胴部 ～底部残。	() () (3.9)	外面：胴部～底部はヘラ削り。内面：胴部 ～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。におい橙。油煙付着。
7住-12	甕 土師器	北西隅付近床 上5cm。底 部ㄥ残。	() () (6.0)	外面：胴部下端はヘラ削り、底部に木葉痕。 内面：胴部下端～底部はヘラ削り。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。におい橙・橙。外面 に油煙付着。
7住-13 (図版10)	杯 土師器	南西床直。ほ ぼ完形。	(3.7)(11.0)(—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
7住-14 (図版10)	杯 土師器	中央床上10 cm。口縁部ㄥ 欠。	(3.7)(10.3)(—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。外面に油煙付着。
7住-15 (図版10)	杯 土師器	北西部床上20 cm。ほぼ完形。	(3.4)(10.7)(—)	口縁部は内湾。丸底。外面：口縁部は横ナ デ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部 ～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
7住-16 (図版10)	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部ㄥ残。	(4.0)(13.0)(—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部は横ナデ、体部～底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。におい橙。内外面に 油煙付着。
7住-17	杯 土師器	カマド右床上 20cm。口縁部 ～底部ㄥ残。	(3.0)(10.0)(—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。におい橙。内面に油 煙付着。
7住-19	杯 土師器	中央部床上20 cm。口縁部 ～底部ㄥ残。	(4.1)(12.0)(—)	口縁部は直立。丸底。外面：口縁部は横ナ デ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部 ～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
7住-20	杯 土師器	カマド前床 直。口縁部 ～底部ㄥ残。	() (12) (—)	口縁部は直立。丸底と推定。外面：口縁部 は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部 は横ナデ、体部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。におい橙。
7住-21	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部ㄥ残。	() (14) (—)	口縁部は直立。丸底と推定。外面：口縁部 は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部 ～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
7住-22	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部ㄥ残。	() (14) (—)	丸底と推定。外面：口縁部は横ナデ、体部 はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。におい橙。
7住-23	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部ㄥ残。	() () (—)	口縁部は直立。丸底。外面：口縁部は横ナ デ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部 ～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
7住-24	杯 土師器	カマド前床上 5cm。口縁部 ～底部ㄥ残。	(2.9)(11)()	口縁部は直立。丸底に近い。外面：口縁部 は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面： 口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
7住-25	杯 土師器	カマド内。口 縁部～底部ㄥ 残。	() (12) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。

標記番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
7住-26	杯 土師器	北東部床上10 cm。口縁部 ～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(3.5)(12)(—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面；口縁部横 ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁 部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙・にぶい黄橙。
7住-27	台付樊 土師器	カマド前床上 30cm。台部 $\frac{1}{2}$ 残。	()()(11.0)	台部は「ハ」の字状に広がる。外面は横ナ デ。内面基部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙・にぶい褐。
7住-28 (図版16)	壺 須恵器	全面的。床上 5～10cm。肩 部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	()()(—)	丸底。外面；肩部～胴部上端は回転横ナデ、 胴部～底部は叩き目。内面；肩部～胴部上 端は回転横ナデ、胴部～底部は叩き目。	鉱物粒を含む。硬質。環元。 黄灰。
7住-29 (図版16)	壺 須恵器	中央やや南床 直。肩部～底 部 $\frac{1}{2}$ 残。	()()(8.3)	外面；肩部～胴部上半は回転ヘラナデ、胴 部下半～底部はヘラ削り。内面；口縁部整 形、底部はナデ。	石英・長石等の鉱物粒を含 む。比較的硬質。環元。黄 灰。
7住-30 (図版16)	蓋 須恵器	中央部床上5 cm。天井部 ～端部 $\frac{1}{2}$ 残。	()()(13.2)(—)	かえりはやや内側で短い。外面；天井部 ～端部は回転ヘラ削り。内面；端部は回転 横ナデ、口縁部使用。	鉱物粒を含む。やや軟質。 環元。灰白。
7住-33	杯 須恵器	覆土。口縁部 ～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(3.1)(11)(8.0)	外面；口縁部～体部は回転横ナデ、底部は ヘラナデ。内面；口縁部～底部は回転横ナ デ。	鉱物粒を含む。やや軟質。 環元。灰白。
7住-34	蓋 須恵器	北西部床上10 cm。天井部 ～端部 $\frac{1}{2}$ 残。	()()(—)	かえりは内側で短い。外面；天井部上半は 回転ヘラ削り、天井部下半～端部は横ナデ。 内面；天井部～端部は横ナデ。	鉱物粒はやや多い。硬質。 環元。灰黄褐。
7住-35	壺 須恵器	覆土。口縁 部 $\frac{1}{2}$ 残。	()()()	外面に凸帯一条あり。内外面共に横ナデ。	石英等の鉱物粒を含む。硬 質。環元。灰白。
7住-36	杯 須恵器	覆土。口縁部 ～高台部 $\frac{1}{2}$ 残。	()()()	外面の体部下端に沈線一条あり。付け高台。 内外面の口縁部～底部は共に回転横ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。環元。 灰白。
7住-37	長頸壺 須恵器	北東部床上10 cm。口縁部 ～頸部 $\frac{1}{2}$ 残。	()(8)()	口縁部整形。内外面共に回転横ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。環元。 灰。
7住-38	壺 須恵器	カマド内。肩 部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	()()()	外面；肩部～胴部上半は回転横ナデ、胴部 下半～底部は回転ヘラ削り。内面；肩部 ～底部は回転横ナデ。	鉱物粒を含む。やや軟質。 環元。灰白。
7住-39	壺 須恵器	北西部床上20 cm。肩部～胴 部 $\frac{1}{2}$ 残。	()()()	外面；肩部～胴部上端は回転横ナデ、胴部 は叩き目。内面；肩部～胴部上端は回転横 ナデ、胴部は叩き目後にヘラナデ。	鉱物粒を含む。硬質。環元。 灰白。
7住-40	壺 須恵器	覆土。頸部 ～肩部。	()()()	内外面共に回転横ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。環元。 黄灰。
7住-41	壺 須恵器	覆土。肩部 ～胴部上端。	()()()	内外面共に肩部は回転横ナデ、胴部は叩き 後に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。環元。 灰白。
7住-42	壺 須恵器	カマド前床 直。胴部。	()()()	内外面共に叩き目。	鉱物粒を含む。硬質。環元。 灰白。

第四章 保渡田遺跡

発掘番号 (図版ページ)	器 種	出土状況	法 量 (器高)(口径)(底径)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
7住-43	壺 須恵器	中央床直。胴部。	() () ()	内外面共に叩き目。	鉱物粒を含む。硬質。還元。黄灰。
8住-1 (図版150)	壺 土師器	北東柱穴付近床直。口縁部～胴部$\frac{1}{4}$残。	() (27.2) () 最大径は口縁部。	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。内外面に油煙付着。
8住-2 (図版150)	杯 土師器	完形。	(3.7) (10.8) (—)	口縁部はやや内湾。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。内外面に油煙付着。
8住-3 (図版14)	杯 須恵器	貯蔵穴直上。ほぼ完形。	(3.4) (11.9) (7.8)	外面；口縁部～体部は回転横ナデ、底部はヘラ削り。内面；口縁部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰黄。
8住-4 (図版14)	杯 須恵器	貯蔵穴直上。ほぼ完形。	(13.4) (3.5) (8.5)	歪みが大きい。外面；口縁部～体部は回転ナデ、底部はヘラ削り。内面；口縁部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。黄灰。
8住-5	提 瓶 須恵器	中央床直上10cm。口縁部～頸部。	() (9.3) ()	口縁部は「く」の字状に外反。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒は少ない。硬質。還元。灰黄。内面に油煙付着。
8住-6	杯 須恵器	南西柱穴付近床直上10cm。	() () (13.0)	付け高台。外面；体部下端は回転ナデ、底部は回転ヘラナデ。内面；体部下端は回転ナデ、底部は不定方向のヘラナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
8住-7	杯 須恵器	南西部床直。口縁部～底部$\frac{1}{4}$残。	() () ()	外面；口縁部～体部は回転ナデ、底部はヘラ削り。内面；口縁部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。やや軟質。還元。灰白。
8住-8	皿 須恵器	覆土。口縁部～底部。	() () ()	外面；口縁部は回転ナデ、底部は回転ヘラ削り。内面；口縁部～底部は回転ナデ。	鉱物粒はやや多い。硬質。還元。灰黄。
8住-10	蓋 須恵器	中央南壁寄床直上15cm。天井部～端部。	() () (—)	かえりは内側にはいり、短い。外面；天井部は回転ヘラ削り、端部は回転ナデ。内面；天井部～端部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。やや軟質。還元。灰白。
8住-11	壺 須恵器	北西部床直上10cm。口縁部$\frac{1}{4}$残。	() () ()	口縁端部下に凸帯一条。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を多く含む。比較的硬質。還元。明青灰。
8住-12	壺 須恵器	覆土。口縁部。	() () ()	口縁端部下に凸帯一条。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。やや軟質。還元。灰白。
8住-14	提 瓶 須恵器	覆土。体部。	() () ()	中心部は円形の接合。外面；カキ目。内面；中心部はナデ。周辺は回転ナデ。	鉱物粒を含む。比較的硬質。還元。明オリブ灰。
8住-15	壺 須恵器	南西部床直。胴部。	() () ()	内外面共に叩き目。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
8住-16 (図版148)	杯 土師器	南壁中央給床直。口縁部～底部$\frac{1}{4}$残。	(4.4) (17.6) (11.0)	外面；口縁部～体部は回転ナデ、底部は回転ヘラ削り後に付高台。内面；口縁部～体部は回転ナデ、底部は不定方向のヘラナデ。	鉱物粒を含む。比較的硬質。還元。灰白。
9住-1 (図版150)	杯 土師器	南西部床直上10cm。完形。	(3.4) (10.7) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。

採回番号 (図版ページ)	器 種	出土状況	法 量 (器高)(口径)(底径)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
9住-2 (図版15)	杯 土師器	南壁中央胎床 上5cm,完形。	(3.1)(10.7)(—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。内外面に油埋付 着。
9住-3 (図版15)	杯 土師器	北東部床直。 口縁部～底 部ノ残。	(3.4)(11.0)(—)	口縁部は直立。丸底。外面：口縁部は横ナ デ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部 ～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
9住-4	杯 土師器	中央部床上10 cm。口縁部 ～底部ノ残。	(3.1)(10.3)(—)	口縁部は直立。丸底。外面：口縁部は横ナ デ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部 ～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
9住-5	杯 土師器	北東部床上10 cm。口縁部 ～底部ノ残。	(3.6)(10.6)(—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。外面底部は黒褐。
9住-6	杯 土師器	南壁中央胎床 上5cm。口縁 部～底部ノ 残。	(3.3)(12)(—)	丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部 はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、体部 ～底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙・にぶい橙。外面 底部は黒褐。
9住-7	杯 土師器	北東部床直。 口縁部～底 部ノ残。	(3.3)(12.0)(—)	丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部 はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、 底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。外面底部は黒褐。 内外面に油埋付着。
9住-11	壺 土師器	覆土。口縁部 ～胴部。	() () ()	口縁部は「く」の字状に外反。外面：口縁 部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁 部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	雲母等の鉱物粒を含む。比 較的硬質。酸化。にぶい橙。
9住-13	杯 須恵器	覆土。口縁部 ～体部ノ残。	() (10) ()	内外面共に口縁部～体部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。やや軟質。 還元。灰白。
9住-14	杯 須恵器	覆土。体部 ～底部。	() () ()	付け高台。外面：体部～高台部は回転ナデ、 底部は回転ヘラナデ。内面：体部～底部は 回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 緑灰。
9住-15	蓋 須恵器	南西部床上15 cm。天井部。	() () () (—)	外面：天井部上半は回転ヘラ削り、下半は 回転ナデ。内面：天上部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 明青灰。
9住-16	壺 須恵器	覆土。口縁部。	() () () ()	口縁端部下に凸帯。口縁端部・口縁部に波 状文。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
9住-17	長頸壺 須恵器	中央部床上15 cm。口縁部。	() () () ()	口縁端部に凸帯1条。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 青灰。
10住-1	壺 土師器	中央部床上10 cm。口縁部 ～胴部ノ残。	() (24) () ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外 面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内 面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
10住-2	壺 土師器	貯蔵穴内。口 縁部～胴部。	() () () ()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部～胴 部上端は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
10住-3 (図版15)	杯 土師器	貯蔵穴胎床 直。口縁部 ～底部ノ残。	(3.7)(12.7)(—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。

第四章 保渡田遺跡

標記番号 (図版ページ)	器 種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
10住-4	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部ㄥ残。	() (12) (—)	口縁部はやや内湾。丸底と推定。外面：口 縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
10住-5	杯 須恵器	覆土。口縁部 ～体部。	() () ()	内外面共に口縁部～体部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 明オリブ灰。
10住-7	蓋 須恵器	覆土。天井部 ～端部。	() () (—)	かえりは短い。外面：天井部上半は回転ヘ ラ削り、下半は回転ナデ。内面：天井部～端 部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
10住-8	蓋 須恵器	カマド前床土 5cm, つまみ。	() () (—) つまみ径、4.6cm。	つまみは擬宝珠様。外面は回転ナデ、内面 はナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
10住-9	杯 須恵器	中央部床土10 cm, 体部～底 部ㄥ残。	() () (8.0)	外面：体部は回転ナデ、底部はヘラナデ。 内面：体部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。比較的硬質。 還元。明オリブ灰。
10住-10	皿 須恵器	覆土。口縁部 ～底部。	() () ()	外面：口縁部～体部は回転ナデ、底部は回 転ヘラ削り。内面：口縁部～底部は回転ナ デ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
10住-12 (図版56)	杯 土師器	南西部床土5 cm, 完形。	(3.5) (12.0) (—)	口縁部は直立。丸底。外面：口縁部は横ナ デ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部 ～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
10住-13	杯 土師器	中央部床直。 口縁部～底 部ㄥ残。	() () (—)	口縁部は直立。丸底。外面：口縁部は横ナ デ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部 ～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。外面に黒褐部分 あり。
10住-14	杯 土師器	カマド前床土 5cm, 口縁部 ～底部ㄥ残。	() () (—)	丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底 部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナ デ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
10住-15	杯 土師器	中央部床直。 口縁部～底 部。	() () ()	段を有す。外面：口縁部は横ナデ、体部～底 部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、体 部～底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。におい橙。
11住-1	鉢 土師器	北東隅床土20 cm, 口縁部 ～底部ㄥ残。	() (20) (—)	口縁部は内湾。丸底。外面：口縁部は横ナ デ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部 ～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	大は径2mmの砂粒を含む。 比較的硬質。酸化。橙。外 面底部は黒褐。
11住-2	杯 土師器	西カマド左脇 床直。口縁部 ～体部ㄥ残。	() (13) (—)	口縁部は直立。丸底。外面：口縁部は横ナ デ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部 は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。におい橙。
11住-3	杯 土師器	南東部東壁脇 床土20cm, 口 縁部～底部ㄥ 残。	() (10) (—)	口縁部は直立。丸底。外面：口縁部は横ナ デ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部 ～底部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
11住-4	杯 土師器	南東部東壁脇 床土20cm, 口 縁部～底部ㄥ 残。	() () (—)	口縁部は直立。丸底。外面：口縁部は横ナ デ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部 ～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。外面に油煙付着。

発掘番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
11住-5 (図版150)	壺 土師器	カマド内。口縁部～胴部欠残。	() (19.0) () 最大径は胴部上半、26cm。	口縁部は外反。輪積み。外面；口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。外面に黒褐色部分あり。内面油煙付着。
11住-6	壺 須恵器	カマド左袖上。口縁部。	() () () ()	外面口縁端部に凸帯1条。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。
11住-8 (図版150)	杯 土師器	北西隅床上20cm。ほぼ完形。	(3.4) (10.0) (—)	口縁部は内湾。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～底部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
12住-1 (図版150)	壺 土師器	中央部床直。胴部～底部欠残。	() () (8.2)	胴部上半が張らむ。輪積み。外面；胴部～底部はヘラ削り。内面；胴部～底部はヘラナデ。	大は径2～3mmのやや多量の砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙・にぶい橙。外面油煙付着。
12住-2	壺 土師器	北東部床直。口縁部～胴部。	() () () ()	口縁部に沈線1条。外面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。褐色・にぶい橙。
12住-3	壺 土師器	北西部床上10cm。体部下端～底部欠残。	() () () ()	外面；体部下端～底部はヘラ削り。内面；体部下端～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。
12住-4 (図版150)	杯 土師器	中央床直。完形。	(4.7) (13.0) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ、体部～底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
12住-5 (図版150)	杯 土師器	南壁中央脇床直。完形。	(4.2) (12.0) (—)	外面に稜。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
12住-6 (図版150)	杯 土師器	カマド左脇床直。完形。	(4.5) (11.3) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
12住-7 (図版150)	杯 土師器	北東柱穴脇床上20cm。口縁部一部欠。	(4.3) (12.2) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
12住-8 (図版150)	杯 土師器	南東隅床直。ほぼ完形。	(4.6) (12.2) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。外面に油煙付着。
12住-9 (図版150)	杯 土師器	北東部床直。口縁部一部欠。	(4.3) (12.2) (—)	外面に稜。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
12住-10 (図版150)	杯 土師器	カマド内。口縁部～底部欠残。	(4.8) (11.8) (—)	外面に稜。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。
12住-11	杯 土師器	貯蔵穴西床直。口縁部～底部欠残。	(4.4) (13.0) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。

第四章 保護田遺跡

標記番号 (図版ページ)	器 種	出土状況	法 量 (器高)(口径)(底径)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
12住-12	杯 土師器	カマド内。口縁部～底部の残。	(4.8)(13.0)(—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。内外面に油埋付着。
12住-13	杯 土師器	貯蔵穴北床直。口縁部～底部の残。	() (13.4)(—)	外面に稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油埋付着。
12住-14	杯 土師器	北東部床上5cm。口縁部～底部の残。	() (14.0)(—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。外面に油埋付着。
12住-15	杯 土師器	覆土。口縁部～底部の残。	() (14) (—)	外面に稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
12住-16	杯 土師器	覆土。口縁部～底部の残。	(4.6)(12) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙・褐灰。
12住-17	蓋 須恵器	カマド前床上20cm。	(4.4)(13) (—)	外面に沈線1条。外面：天井部は回転ヘラ削り、端部は回転ナデ。内面：回転ナデ。	鉱物粒を含む。やや軟質。還元。灰黄。
12住-18 (図版51)	甕 土師器	北東部床直。完形。	(15.5)(19.2)(3.6) 孔径、2.8cm。	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部～胴部上端は横ナデ、胴部はヘラナデ。	大は径2～3mmのやや多量の砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。外面に黒褐色あり。
12住-19 (図版51)	甕 土師器	北西柱穴内。ほぼ完形。	(13.0)(14.0)(—) 最大径は胴部上半17.0cm。	口縁部はやや外反。丸底。外面：口縁部は横ナデ、胴部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～胴部上端は横ナデ、胴部～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。外面底部は黒褐。
12住-20 (図版51)	甕 土師器	中央部床直。ほぼ完形。	(34.2)(18.6)(6.4) 最大径は口縁部。	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部～底部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部～底部はヘラナデ。	大は径2～3mmのやや多量の砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。外面に油埋付着。
12住-21 (図版50)	杯 土師器	北東部床直。完形。	(4.5)(12.0)(—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
12住-22	甕 土師器	カマド内。底部欠。	() (21.5)(—) 最大径は口縁部。	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部～胴部上端は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。外面に黒褐色あり。
12住-23	杯	中央部床上20cm。口縁部～底部の残。	() () (—)	口縁部は内傾し、受けは平坦。外面：口縁部は回転ナデ、体部は回転ヘラ削り。内面：口縁部～体部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。外面に自然釉付着。
12住-24 (図版50)	甕 土師器	カマド前床直。ほぼ完形。	(26.3)(20.6)(9.9) 最大径は胴中央部、26.8cm。	球胴形。口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部～底部はヘラ削り後に全面的にヘラ磨き。内面：口縁部は横ナデ、胴部～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。明赤褐。外面底部は黒褐。内外面に油埋付着。

標記番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
13住-1	壺 土師器	東南隅床上6 cm。口縁部 ～胴部。	() (22) ()	器壁は薄手。「コ」の字状口縁。輪積み。外面；口縁部は横ナゲ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナゲ、胴部はヘラナゲ。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。
13住-2	壺 土師器	カマド内床直。口縁部 ～胴部。	() (21) ()	口縁部は緩く外反。輪積み。外面；口縁部は横ナゲ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナゲ、胴部はヘラナゲ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや硬質。酸化。にぶい赤褐。口縁部小粘土塊付着。
13住-3	小型壺 土師器	南西隅床上9 cm。口縁部 ～胴部。	() (13) ()	器壁は薄手。「コ」の字状口縁。輪積み。外面；口縁部は横ナゲ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部横はナゲ、胴部はナゲ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや硬質。酸化。にぶい赤褐。内外面に油煙付着。
13住-4	壺 土師器	南西隅床上5 cm。口縁部 ～胴部。	(—) (23) (—)	器壁は薄手。弱い「コ」の字状口縁。輪積み。外面；口縁部は横ナゲ、胴部ヘラ削り。内面；口縁部は横ナゲ、胴部はナゲ。	鉱物粒を含む。硬質。酸化。外面橙。内面にぶい褐。外面に油煙付着。
13住-5	杯 土師器	南壁中央端床 上7cm。口縁 部～底部 ノミ残。	(3.4) (12.0) (—)	扁平な浅い丸底。外面；口縁部は横ナゲ、体部は薄なナゲ、底部はヘラ削り。内面；口縁部～底部は横ナゲ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや硬質。酸化。にぶい赤褐。内外面に油煙付着。
13住-6	杯 須恵器	中央部床上4 cm。口縁部 ～底部ノミ 残。	(3.6) (14) ()	外面；口縁部～体部は回転横ナゲ、底部回転ホリ。内面；口縁部～底部は回転横ナゲ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰黄。外面口縁部自然釉。
13住-7	杯 須恵器	中央部床上3 cm。口縁部 ～底部ノミ 残。	(3.6) (13) (7.6)	底径の広い杯。外面；口縁部～体部は回転横ナゲ、底部は回転ホリ。内面；口縁部～底部は回転横ナゲ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや硬質。還元。灰白。外面に油煙付着。
13住-9	壺 須恵器	北東柱穴内16 cm上。胴部 ノミ残。	() () ()	外面；胴部はホキ目。内面；胴部は平行叩き目。	鉱物粒を多量に含む。硬質。還元。外面灰黄。内面黄灰。
14住-1	壺 土師器	カマド内。口 縁部～胴部 ノミ残。	() (24) ()	口縁部は外反。外面；口縁部は横ナゲ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナゲ、体部はヘラナゲ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内面に油煙付着。
14住-2	杯 土師器	南西部床上20 cm。口縁部 ～体部ノミ 残。	() (18) (—)	口縁部はやや外反。丸底と推定。外面；口縁部は横ナゲ、体部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナゲ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
14住-3	杯 土師器	覆土。口縁部 ～体部ノミ 残。	() (11) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底と推定。外面；口縁部は横ナゲ、体部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナゲ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
14住-4	杯 土師器	南西部。口縁 部～底部 ノミ残。	() (12) (—)	口縁部は直立。丸底。外面；口縁部は横ナゲ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナゲ、底部はナゲ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙・橙。
14住-5	杯 土師器	南西隅床直。 口縁部～体 部ノミ残。	() (10) (—)	口縁部はやや内湾。丸底と推定。外面；口縁部は横ナゲ、体部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナゲ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
14住-6	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部ノミ 残。	() (11) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面；口縁部は横ナゲ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナゲ、底部はナゲ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。

第IV章 保渡田遺跡

採回番号 (図版ページ)	器 種	出土状況	法 量 (器高)(口径)(底径)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
15住-1	壺 土師器	覆土。口縁部 ～胴部上端。	() () ()	外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。 内面：口縁部～胴部上端は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
15住-2	壺 土師器	カマド内。口 縁部～胴部上 端。	() () ()	口縁部は外反。外面：口縁部は横ナデ、胴 部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴 部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
15住-3	杯 土師器	南壁中央脇床 直。口縁部 ～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(3.5) (13) (—)	口縁部は直立。丸底。外面：口縁部は横ナ デ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部 ～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。内面に油 埋付着。
15住-4	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	() () (—)	口縁部は直立。丸底。外面：口縁部は横ナ デ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部 ～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
15住-5	短筒覆 須恵器	覆土。口縁部 ～体部。	() () ()	口縁部は直立。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 青灰。
15住-6 (図版19)	杯 土師器	カマド左脇床 直。完形。	(3.6) (12.2) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は ヘラ削り、体部～底部は横ナデ。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい黄橙。内面に 油埋付着。
16住-1	蓋 須恵器	覆土。天井部 ～胴部。	() () (—)	かえりは短い。外面は回転ヘラ削り。内面は 回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
16住-2	杯 土師器	覆土。口縁部 ～体部。	() () ()	外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。 内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
16住-3	壺 須恵器	覆土。口縁部。	() () ()	内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
17住-1 (図版19)	壺 土師器	貯蔵穴内。口 縁部～胴部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (25.0) ()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
17住-2	壺 土師器	カマド内。胴 部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	() () (5.0)	丸底に近い。輪積み。外面：胴部～底部は ヘラ削り。内面：胴部～底部はヘラナデ。	大は径2～3mmの多量の砂 粒を含む。やや軟質。酸化。 にぶい橙。外面油埋付着。
17住-3 (図版19)	鉢 土師器	南壁中央脇床 直。口縁部 ～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(8.1) (18.0) (—)	外面に横。丸底。外面：口縁部は横ナデ、 体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体 部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。内面に油埋付着。
17住-4 (図版19)	杯 土師器	南西隅床上20 cm。口縁部 ～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(3.7) (12.1) (—)	外面に不明瞭な横。丸底。外面：口縁部は 横ナデ。体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
17住-5	杯 土師器	北東柱穴脇床 上20cm。口 縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (12) (—)	外面に横。丸底。外面：口縁部は横ナデ、 体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横 ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
17住-7 (図版19)	高 杯 土師器	カマド内。完 形。	(15.5) (14.3) (14.6)	杯部外面に不明瞭な横。脚部はラップ状に 広がる。外面：口縁部は横ナデ。体部～柱 部はヘラ削り、脚端部は横ナデ。内面：口 縁部～体部は横ナデ、柱部に輪積み直線著、 端部は横ナデ。	砂粒を含む。非常に硬質。 酸化。橙。

標記番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
18住-1 (図版12)	甕 土師器	カマド内。胴部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	() () (4.8)	輪積み。外面：胴部～底部はヘラ削り。内面：胴部～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。外面に多量の油煙付着。
18住-2	甕 土師器	カマド前床上5cm。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (15) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はナデ。	大は径4～5mmの砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。
18住-3	甕 土師器	覆土。胴部下端～底部。	() () (—)	丸底。外面：胴部下端～底部はヘラ削り。内面：胴部下端～底部はヘラナデ。	大は径4～5mmの砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。
18住-4 (図版13)	杯 土師器	北西隅床直。完形。	(4.7) (13.2) (—)	外面に稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
18住-5 (図版13)	杯 土師器	カマド左脇床上10cm。ほぼ完形。	(4.3) (12.0) (—)	外面に稜。口縁部はやや内湾。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。内外面に油煙付着。
18住-6 (図版13)	杯 土師器	南壁中央脇床上5cm。ほぼ完形。	(4.1) (12.6) (—)	外面に稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
18住-7 (図版13)	杯 土師器	南壁中央脇床上5cm。口縁部 $\frac{1}{2}$ 欠。	(4.3) (18.3) (—)	口縁部中央で粘土態不足し。外面に不明瞭な稜。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、体部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。内外面に油煙付着。
18住-8 (図版13)	杯 土師器	カマド左脇床上10cm。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(3.8) (12.0) (—)	外面に顕著な稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。内外面に油煙付着。
18住-9 (図版12)	杯 土師器	カマド左脇床直。底部一部欠。	(4.7) (12.0) (—)	外面に稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。
18住-10	杯 土師器	南壁中央脇床直。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(4.0) (12.2) (—)	外面に稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。内外面に油煙付着。
20住-1 (図版12)	甕 土師器	北東部床直。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (17.0) ()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。
20住-2 (図版12)	杯 土師器	カマド右脇床直上。ほぼ完形。	(3.5) (11.8) (—)	外面に不明瞭な稜。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。内面に油煙付着。
21住-1	甕 土師器	貯蔵穴脇床上15cm。口縁部～胴部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (22) ()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。外面に油煙付着。
21住-2	杯 土師器	カマド内。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(3.1) (13) (8.0)	外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～底部は横ナデ、底部中央はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。外面に油煙付着。

第四章 保渡田遺跡

探訪番号 (図版ページ)	器 種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
21住-3	杯 須恵器	覆土。口縁部 ～底部。	(4.0)(12)(7.0)	外面：口縁部～体部は回転ナデ、底部は回 転未切り。内面：口縁部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
21住-4	高杯 須恵器	覆土。胴部。	()()()	外面に沈線2条。外面は回転ナデ、内面は ヘラナデ。	鉱物粒を含む。やや軟質。 還元。にぶい橙。
21住-5	提瓶 須恵器	覆土。体部。	()()()	体部中心は凹板接合。外面はカキ目。内面 はナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 青灰。
21住-6	皿 須恵器	覆土。口縁部 ～底部。	()()()	外面に沈線1条。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
21住-7	蓋 須恵器	覆土。天井部。	()()(—)	外面：天井部上半は回転ヘラ削り、天井部 下半は回転ナデ。内面：天井部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。酸化。 灰白。
22住-1 (図版52)	壺 土師器	覆土。口縁部 ～胴部ノミ残。	()(20.2)()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。外面に油 埋付着。
22住-2	壺 土師器	カマドノ3 内。口縁部 ～胴部ノミ残。	()(22.2)()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
22住-3	壺 土師器	覆土。口縁部 ～胴部上端ノミ 残。	()(22)()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
22住-4	壺 土師器	覆土。口縁部 ～胴部上半ノミ 残。	()(22)()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
22住-7 (図版52)	杯 土師器	南西柱穴脇床 直。完形。	(3.3)(11.0)(—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
22住-8 (図版52)	杯 土師器	南西部床直。 ほぼ完形。	(3.5)(11.8)(—)	口縁部は内湾。丸底。外面：体部～底部は ヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、 底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
22住-9	杯 土師器	カマドノ2 内。口縁部 ～体部ノミ残。	()(13)(—)	口縁部はやや内湾。丸底と推定。外面：口 縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
22住-10	杯 土師器	南西部床上5 cm。口縁部 ～底部ノミ残。	()(12)(—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体 部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
22住-11	杯 土師器	北西部床上10 cm。口縁部 ～底部ノミ残。	(3.2)(15)()	丸底に近い。外面：口縁部は横ナデ、体部 ～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は 横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。内外面に 油埋付着。
22住-12 (図版52)	短頸壺 須恵器	南壁中央脇床 直。完形。	(5.5)(6.4)(—) 最大径は胴部上端。 9.0cm。	口縁部はやや外反。外面：口縁部～胴部上 半は回転ナデ、胴部下半～底部はヘラ削り。 内面：口縁部～胴部上半は回転ナデ、胴部 下半～底部はヘラナデ。	石英等の鉱物粒を含む。硬 質。還元。浅黄橙。外面2ヶ 所にヘラ記号。

標記番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
22住-13	壺 須恵器	中央部床直。 口縁部～胴部 上端に欠残。	() (16.4) ()	口縁部は外反。内外面共に口縁部～頸部は 回転ナデ、胴部は叩き目。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 明青灰。内外面に自然釉付着。
22住-14	平瓶 須恵器	北東隅貯蔵穴 内。口縁部 ～胴部。	() (9.4) ()	口縁部は外反。口縁部部下に凸帯1条。頸 部で接合。頸部は巻き上げ。外面；口縁部 ～頸部上半は回転ナデ、頸部下半はカキ目、 胴部は回転ナデ、刺突文。内面；口縁部～頸 部は回転ナデ、胴部はナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
22住-15	高杯 須恵器	北東部床土20 cm。杯部底面 ～脚部に欠残。	() () (11.3)	脚部は基底部から外反。内外面共に回転ナ デ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 明オリブ灰。外面に自然 釉付着。
22住-16	蓋 須恵器	中央部床土15 cm。天井部 ～端部に欠残。	() (11.4) (—)	かえりは短い。外面；天井部上半は回転へ ラ削り、天井部下半～端部は回転ナデ。天 井部中心はヘラナデ、天井部～端部回転ナ デ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
23住-2	杯 須恵器	カマド内。口 縁部～体部。	() () ()	内外面共に口縁部～底部は回転ナデ。	少量の鉱物粒を含む。硬質。 還元。灰白。
23住-3	蓋 須恵器	覆土。天井部 下半～端部。	() () (—)	かえりは短い。内外面共に天井部下半～端 部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 青灰。
24住-1	壺 土師器	カマド前床土 6cm地。口縁 部～胴部。	() (11.6) ()	器壁は薄手。「コ」の字状口縁。輪積み。外 面；口縁部は横ナデ、胴部へラ削り。内面； 口縁部は横ナデ、胴部へラナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質。 酸化。におい穢。内外面に 油煙付着。
24住-2	小型壺 土師器	北東隅床直。 口縁部～胴 部。	() (20) ()	弱い「コ」の字状口縁。輪積み。外面；口 唇部浅い沈線1条、口縁部横ナデ、胴部へ ラ削り。内面；口縁部横ナデ、胴部ナデ。	鉱物粒を含む。やや硬質。 酸化。明赤褐。内外面に油 煙付着。
24住-4	細頸壺 須恵器	北西柱穴内16 cm上。口縁 ～胴部。	() (12) ()	器壁は厚手。胴部で接合。外面；口縁部～頸 部上位は回転横ナデ、胴部叩き目。内面； 口縁部～頸部は回転横ナデ、胴部叩き目。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質。 還元。灰。
24住-5	壺 須恵器	北西隅床土29 cm。口縁部。	() (28) ()	外面；口唇部は巾の広い2条の沈線、口縁 部は回転横ナデ。内面；口唇部巾の広い1 条の沈線、口縁部は回転横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質。 還元。灰。
24住-6	杯 須恵器	東南柱穴付近 床土13cm。口 縁部～底部。	(3.5) (14) (8.8)	口唇部は外反。外面；口縁部～体部は回転 横ナデ、底部は回転糸切り。内面；口縁部 ～底部は回転横ナデ。	砂粒・鉱物粒を多量に含む。 やや硬質。還元。灰黄。
24住-7	碗 須恵器	カマド前床土 4cm。体部 ～底部。	() () (8.2)	高台部は細く低い。外面；体部は横ナデ、 底部は不明瞭。内面；体部～底部は横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや 硬質。酸化。褐灰。内外面 摩滅・剝離が著しい。横し。
24住-9	盤 須恵器	覆土。口縁部 ～底部。	() (22) ()	口唇部は大きく外反し、器高が低い。外面； 口縁部～体部回転横ナデ、底部回転へラ削 り。内面；口縁部～底部回転横ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 外面灰白。軸は灰オリブ。 内面灰。内面油煙付着。
25住-1	壺 土師器	カマド前床土 10cm。口縁部 ～胴部上端。	() () ()	口縁部は外反。外面；口縁部は横ナデ、胴 部はへラ削り。内面；口縁部～胴部上端は 横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。におい穢。

第IV章 保渡田遺跡

探査番号 (図版ページ)	器 種	出土状況	法 量 (器高)(口径)(底径)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
25住-2	壺 土師器	カマド前床直。胴部～底部。	() () (4.0)	外面：胴部～底部はヘラ削り。内面：胴部～底部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。
25住-3	杯 土師器	北東部床上5cm。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(3.2)(11.4)(—)	外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。還元。橙。
26住-1 (図版図)	壺 土師器	中央床直。胴部下 $\frac{1}{2}$ ～底部欠。	() (20.4) ()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部～頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。内外面に油煙付着。
26住-2 (図版図)	壺 土師器	中央床直。口縁部～胴部上端欠。	() () (3.4)	輪積み。外面：胴部はヘラ削り。底部に木葉痕。内面：胴部～底部はヘラナデ。	大は径3～5mmの砂粒を含む。酸化。におい橙。内外面に油煙付着。
26住-3 (図版図)	壺 土師器	カマド前床直。底部欠。	() (12.5) ()	口縁部はやや内湾。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部～胴部上端は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。
26住-4 (図版図)	壺 土師器	中央床直。底部欠。	() (13.6) ()	口縁部はやや外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部～胴部上端は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。
26住-5	壺 土師器	北西部床直。胴部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	() () ()	輪積み。外面：胴部～底部ヘラ削り。内面：胴部～底部ヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい赤褐。
26住-6 (図版図)	杯 土師器	カマド前床直。完形。	(3.5)(11.4)(—)	口縁部は直立。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
26住-7 (図版図)	杯 土師器	カマド前床直。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(4.1)(12.4)(—)	丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。口縁～底部放射状暗文。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。外面に油煙付着。
26住-8 (図版図)	杯 土師器	貯蔵穴脇床直。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(3.7)(12.4)(—)	外面に不明瞭な横。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
26住-9	杯 土師器	カマド前床直。	(4.1)(12.0)(—)	丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
26住-10	杯 土師器	覆土。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(3.1)(11) (—)	口縁部はほぼ直立。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
26住-11	杯 土師器	カマド前床直。口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (11) (—)	外面に横。丸底と推定。外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。におい橙。外面に油煙付着。
26住-12	短頸壺 須恵器	覆土。頸部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	() () (—)	胴部は大きく膨らむ。外面：頸部～胴部上半は回転ナデ、胴部下 $\frac{1}{2}$ ～底部はヘラ削り。内面：頸部～胴部は回転ナデ、底部はナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。

第3節 出土土器観察表

埋蔵番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
26住-13	斐須恵器	覆土。口縁部。	() () ()	口縁端部は上下方向への凸面。内外面に共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
27住-1 (図版IS)	斐土師器	カマド壇道部。口縁部～胴部ノ残。	() (20) () 最大径は胴部中央、30cm。	口縁部は直立し、端部はやや外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい赤褐・にぶい橙。内外面に油煙付着。
27住-2	斐土師器	中央床土5cm。口縁部～胴部上端ノ残。	() (14.2) ()	口縁部は外反。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒・雲母粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
27住-3 (図版IS)	杯須恵器	南東隅床土10cm。口縁部～底部ノ残。	(3.5) (14.0) (8.5)	外面：口縁部～体部は回転ナデ、底部はヘラ切り後にナデ。内面：口縁部～底部は回転ナデ、底部にヘラの痕有り。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
27住-4	蓋須恵器	覆土。天井部～端部。	() () (—)	かえりは短い。内外面に共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
27住-5	長頸壺須恵器	北東部床土10cm。肩部～胴部上端。	() () ()	頸部は接合。内外面に共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。外面に自然釉。
27住-6	杯須恵器	覆土。体部～底部。	() () ()	付け高台。外面：体部は回転ナデ、底部はヘラナデ後に高台貼り付け。内面：体部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
28住-1	羽釜土師器	貯蔵穴付近床土1cm。胴部～底部。	() () (8.0)	器壁は厚手。輪積み。外面：胴部～底部はヘラ削り。内面：胴部～底部は横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。
28住-4	羽釜土師器	カマド前床直他。口縁部～胴部。	() (20) ()	器壁は厚手。口唇部は平ら。断面三角形の筒貼付。口縁部は内傾。輪積み。外面：口縁部～胴上部横ナデ、胴下位はヘラ削り。内面：口縁部～胴部は横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。
29住-1	斐土師器	カマド前床直。胴部。	() () ()	輪積み。外面はヘラ削り。内面はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい赤褐。内外面に油煙付着。
29住-2	小型斐土師器	北西部床土15cm。口縁部～胴部上端。	() () ()	輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部～胴部上端は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。
29住-3	小型斐土師器	覆土。口縁部～胴部。	() () ()	口縁部はやや外反。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
29住-4 (図版IS)	杯土師器	貯蔵穴内。ほぼ完形。	(3.3) (10.4) (—)	口縁部は内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。
29住-5 (図版IS)	杯土師器	南西部床直。口縁部～底部ノ残。	(3.2) (10.8) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。

第IV章 保渡田遺跡

神岡番号 (図版ページ)	器 種	出土状況	量 (法 (器高)(口径)(底径)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
29住-7	杯 土師器	カマド前床直。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(3.8)(13)(一)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、体部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
29住-8 (図版15)	鉢 須恵器	南壁中央脇床直。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(13.2)(18.0)(9.2)	体部は外傾しつつ上方へのび口縁部になる。底部は外方向に短く張り出す。外面：口縁部～体部は回転ナデ。底部はヘラ削り後にヘラナデ。内面は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
29住-9	杯 須恵器	覆土。口縁部～底部。	() () ()	付け高台と推定。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
29住-11	杯 須恵器	覆土。体部～底部。	() () ()	外面：体部は回転ナデ、底部はヘラナデ後付け高台。内面：体部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。
29住-12	短頸直 須恵器	覆土。口縁部～胴部。	() () ()	内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
30住-1	甕 土師器	覆土。口縁部～胴部上端。	() () ()	口縁部は外反。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
30住-2 (図版15)	杯 土師器	カマド内。完形。	(3.5)(11.4)(一)	口縁部はほぼ直立。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。
30住-3 (図版15)	杯 土師器	南東部床直。ほぼ完形。	(4.6)(14.0)(一)	口縁部は内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
30住-5 (図版15)	横 瓶 須恵器	南東隅床直。頸部～胴部 $\frac{1}{2}$ 残。	() () ()	体部は巻き上げ、ミズビキ成形後に中央を粘土膜で塞ぎ、上部に穴をあけ頸部を接合。外面：頸部はナデ、体部はカキ目。内面：頸部はナデ、体部は叩き目。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。外面に自然釉付着。
30住-6	高 杯 須恵器	南東部床直。脚部。	() () ()	外面柱部に沈線1条。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。外面に自然釉付着。
30住-7	長頸直 須恵器	覆土。胴部。	() () ()	外面に太い沈線4条・細い沈線2条。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
30住-8	短頸直 須恵器	覆土。頸部～胴部。	() () ()	内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。
31住-1	甕 土師器	北西部床直。口縁部～胴部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (20)()	口縁部は外反。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	大は径2～3mmの砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。
31住-2 (図版15)	杯 土師器	南張り出し部床直。完形。	(4.4)(12.1)(一)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。
31住-3	杯 土師器	中央部床直。口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (17)(一)	外面に稜。丸底と推定。外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。

標記番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
31住-4	杯 土師器	北西部床直。 口縁部～底部 ノミ残。	() (12) (一)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
32住-1 (図版4)	甕 土師器	カマド内・カ マド前床直。 胴部～底部 欠。	() (21.4) () 最大径は口縁部。	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい赤褐。内外面 に油煙付着。
32住-2 (図版5)	杯 土師器	中央部床直。 ほぼ完形。	(4.4) (12.0) (一)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、胴部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。内外面に油煙付着。
32住-3	杯 土師器	中央部床直。 口縁部～底部 ノミ残。	() (13) (一)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 にぶい橙。内外面に油煙付 着。
32住-5	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部。	() () (一)	外面に2段の稜。平底に近い丸底。外面： 口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。 内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 にぶい赤褐。内面の体部 ～底部は糠しの黒。
32住-6	杯 土師器	中央部床直。 口縁部～体 部ノミ残。	() (12) (一)	外面に不明瞭な稜。丸底と推定。外面：口 縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
33住-1	甕 土師器	カマド右袖 上。口縁部 ～胴部ノミ残。	() (15.6) ()	口縁部は外反。外面：口縁部は横ナデ、胴 部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴 部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。内外面に 油煙付着。
33住-2	甕 土師器	覆土。口縁部 ～胴部上端ノ ミ残。	() (22) ()	口縁部は外反。外面：口縁部は横ナデ、胴 部上端はヘラ削り。内面：口縁部～胴部上 端はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
33住-5	杯 土師器	カマド右袖 上。口縁部 ～底部ノミ残。	(3.1) (12) (一)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 にぶい橙。
33住-6	杯 土師器	カマド内。口 縁部～底部ノ ミ残。	(3.2) (12) (一)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部ヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。内面に油 煙付着。
33住-7	杯 土師器	覆土。口縁部 ～体部ノミ残。	() (15) (一)	口縁部はほぼ直立。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体 部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
33住-8	杯 土師器	覆土。口縁部 ～体部ノミ残。	() (14) (一)	口縁部はやや内湾。外面：口縁部は横ナデ、 体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横 ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
33住-9	杯 土師器	南壁中央部床 上10cm。口縁 部～体部ノミ 残。	() (14) (一)	口縁部はやや内湾。外面：口縁部は横ナデ、 体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横 ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 にぶい橙。内外面に油煙付 着。
33住-10	杯 土師器	覆土。口縁部 ～体部。	() () (一)	口縁部は内湾。外面：口縁部は横ナデ、 体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部上半 は横ナデ、体部下半はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。

標記番号 (図版ページ)	器 種	出土状況	法 (器高)(口徑)(底徑)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
33住-11	皿 須恵器	カマド前床土 15cm。口縁部 ～底部。	() () ()	口縁部は上外方にのびる。外面；口縁部は 回転ナデ、底部はヘラ削り。内面；口縁部 ～底部は回転ナデ。	長石等の鉱物粒を含む。比 較的硬質。還元。灰白。
33住-12	壺 須恵器	覆土。口縁部。	() () ()	口縁部近く凸帯一条。内外面共に回転 ナデ。	鉱物粒を含む。比較的硬質。 還元。灰白。
33住-13	皿 須恵器	カマド内。口 縁部。	() () ()	外面；口縁部は回転ナデ。内面；回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰黄。
34住-1	壺 土師器	カマド前床 直。口縁部 ～胴部。	() (22) ()	「コ」の字状口縁。口唇部外面斜め沈線1 条。外面；口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り。 内面；口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。	鉱物粒を含む。硬質。酸化。 明赤褐。内外面に油埋付着。
34住-2	壺 土師器	カマド前床 直。口縁部 ～胴部。	() (20) ()	「コ」の字状口縁。口唇部直立気味に立ち 上る。外面；口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り。 内面；口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。	鉱物粒を含む。硬質。酸化。 橙。内外面に油埋付着。
34住-3	壺 土師器	カマド付近。 口縁部～底 部。	() (22) ()	弱い「コ」の字状口縁。器壁は薄手。輪積 み。外面；口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り。 内面；口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。	鉱物粒を含む。やや硬質。 酸化。橙。内外面に油埋付 着。
34住-4	壺 土師器	カマド付近 他。口縁部 ～底部。	() (18) ()	「コ」の字状口縁。口唇部直立気味。輪積 み。外面；口縁部横ナデ、胴部ヘラ削り。 内面；口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。	鉱物粒を含む。やや硬質。 酸化。にぶい赤褐。内外面 に油埋付着。
34住-5	杯 須恵器	張り床内。口 縁部～底部。	(3.5) (13) (6.4)	外面；口縁部～底部は回転横ナデ。底部回 転糸切り。内面；口縁部～底部は回転横ナ デ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや 硬質。還元。外面にぶい赤 褐。内面灰黄褐。厚感。横し。
34住-6	蓋 須恵器	張り床内。口 縁部～天井 部。	() (14) (—)	外面；口縁部は回転横ナデ、天井部回転ヘ ラ削り。内面；口縁部～天井部は回転横ナ デ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや 硬質。還元。灰白。内外面 に油埋付着。
34住-7	蓋 須恵器	覆土。口縁部 ～天井部。	() (16) (—)	外面；口縁部～天井部は回転横ナデ。内 面；口縁部～天井部は回転横ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰灰。
35住-1	壺 土師器	覆土。口縁部 ～胴部残。	() (24) ()	口縁部は外反。輪積み。外面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
35住-2	壺 土師器	カマド前床 直。口縁部 ～胴部残。	() (24) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
35住-3	壺 土師器	北東部床上20 cm。口縁部 ～胴部上端 残。	() (23) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
35住-4	壺 土師器	カマド前床 直。口縁部 ～胴部上端 残。	() () ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外 面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内 面；口縁部～胴部上端は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。

種別番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口徑)(底徑)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
35住-5	壺 土師器	覆土。口縁部 ～胴部ノ残。	() (24) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。内外面に油煙付着。
35住-6	壺 土師器	カマド前床 直。口縁部 ～胴部上端ノ残。	() (23) ()	口縁部は外反。輪積み。外面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
35住-7	台付壺 土師器	カマド前床 直。胴部下端 ～台部上平。	() () ()	外面；胴部はヘラ削り、台部は横ナデ。内面；胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
35住-8 (図版15)	杯 土師器	中央部床直。 ほぼ完形。	(4.1) (12.4) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
35住-9 (図版15)	杯 土師器	南壁中央脇床 直。口縁部 ～体部ノ残。	(3.7) (12.0) (—)	口縁部は直立。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
35住-10 (図版15)	杯 土師器	南東部床土10 cm。口縁部 ～底部ノ残。	(3.1) (12.2) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。
35住-11	杯 土師器	南西部床直。 口縁部～底 部ノ残。	() (13) (—)	口縁部は直立さみ。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。
35住-12	杯 土師器	張り床内。口 縁部～体部ノ 残。	() (14) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面；口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。
35住-13	杯 土師器	カマド前床 直。口縁部 ～底部ノ残。	() () ()	口縁部は上外方向にのび外反。外面；口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。外面に油煙付着。
35住-14	杯 土師器	中央部床土5 cm。口縁部 ～底部ノ残。	() () ()	口縁部は上外方向にのびる。外面；口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。外面に油煙付着。
35住-15 (図版15)	蓋 須恵器	南東部床土10 cm。完形。	(2.8) (17.6) (—) つまみ径、5.5cm。	天井部は緩やかに外方に下がり、口縁部はやや外反。外面；天井部上半は回転ヘラ削り、天井部下半～口縁部は回転ナデ。内面；天井部～口縁部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
35住-16	蓋 須恵器	南壁中央脇床 直。天井部 ～口縁部ノ残。	(3.2) (19) (—) つまみ径、5.7cm。	天井部は緩やかに外方に下がり、口縁部に至る。端部から1cmにかえり。外面；天井部は回転ヘラ削り。天井部下端～口縁部は回転ナデ。内面；天井部～端部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。明青灰。
35住-17	蓋 須恵器	覆土。天井部 ～口縁部ノ残。	() (14) (—)	天井部は緩やかに外方に下がり、口縁部に至る。かえりは短い。外面；天井部は回転ヘラ削り。天井部下端～口縁部は回転ナデ。内面；天井部～口縁部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。

第IV章 保護田遺跡

検出番号 (図版ページ)	器 種	出土状況	法 量 (器高)(口径)(底径)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
35住-18	蓋 須恵器	覆土。天井部。 口縁部へハナリ。 内面：口縁部へハナリ。 内面：口縁部へハナリ。	() () () つまみ径、2.5cm。	天井部上半はほぼ平皿。外面；天井部上半はへラ削り、天井部下半は回転ナデ。内面：天井部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。
35住-19	蓋 須恵器	覆土。天井部 へ口縁部へハナリ。 内面：口縁部へハナリ。	() (20) () ()	天井部は緩やかに外方に下がる。端部から1.3cmにかえり。外面；天井部上半は回転へラ削り、天井部下半へ口縁部は回転ナデ。内面：口縁部へ端部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。
35住-20	杯 須恵器	覆土。口縁部 へ底部へハナリ。 内面：口縁部へハナリ。	(3.6) (12) (7.0)	体部へ口縁部は外方に上がる。外面；口縁部へ体部は回転ナデ。体部下端へ底部はへラ削り。内面：口縁部へ底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。
35住-21	杯 須恵器	北東部床土25 cm。口縁部 へ底部へハナリ。 内面：口縁部へハナリ。	(3.6) (13) (8.0)	体部へ口縁部は外方に上がる。外面；口縁部へ体部は回転ナデ。底部は回転へラ削り。内面：口縁部へ底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。比較的硬質。還元。灰白。
35住-22	杯 須恵器	張り床内。口 縁部へ底部へハナリ。 内面：口縁部へハナリ。	(4.7) (11) (7.0)	体部へ口縁部は外方に上がる。外面；口縁部へ体部は回転ナデ。体部下端へ底部は回転ナデ。口縁部へ底部は回転ナデ。	長石等の鉱物粒を含む。硬質。還元。灰。
35住-23	杯 須恵器	覆土。体部 へ底部。 内面：口縁部へハナリ。	() () ()	外面；体部は回転ナデ。体部下端へ底部はへラ削り。内面：体部へ底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。明青灰。
35住-24	杯 須恵器	覆土。口縁部 へ底部。 内面：口縁部へハナリ。	() () ()	外面；口縁部へ体部は回転ナデ。体部下端へ底部はへラ削り。内面：口縁部へ底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。やや軟質。還元。灰白。黄緑。
35住-25	杯 須恵器	覆土。口縁部 へ底部。 内面：口縁部へハナリ。	() () ()	外面；口縁部へ体部は回転ナデ。体部下端へ底部はへラ削り。内面：口縁部へ底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。
35住-26	杯 須恵器	覆土。体部下 端へ底部。 内面：口縁部へハナリ。	() () (14.0)	付け高台。外面；体部は回転ナデ。底部は回転へラ削り後に付け高台。内面：体部は回転ナデ。底部はナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。
35住-27	長頸壺 須恵器	北西部床直。 頸部へ肩部。 内面：口縁部へハナリ。	() () ()	頸部は直立した後に外反、巻き上げ。肩部は穿孔後に頸部を接合。外面；頸部へ肩部は回転ナデ。内面：頸部は回転ナデ。肩部はナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。明青灰。外面に自然釉。
35住-28	長頸壺 須恵器	中央部床直。 胴部へ底部。 内面：口縁部へハナリ。	() () ()	胴部は緩やかに内湾しながら外方に上がる。外面；胴上半は回転ナデ。胴下半は回転へラ削り。内面：胴部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。外面に自然釉。
35住-29	短頸壺 須恵器	北東部床直。 口縁部へ胴部。 内面：口縁部へハナリ。	() () ()	口縁部はほぼ直立。外面；口縁部へ胴部上半は回転ナデ。胴部下半は回転へラ削り。内面：口縁部へ胴部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
35住-30	長頸壺 須恵器	北西部床直。 肩部へ胴部。 内面：口縁部へハナリ。	() () ()	胴部上端で鋭く内湾し、肩部となる。肩部に沈線6条。内外面共に肩部へ胴部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。明青灰。
36住-1 (図版14)	蓋 土師器	サマド内。口 縁部へ胴部へハナリ。 内面：口縁部へハナリ。	() (23) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面；口縁部は横ナデ。胴部へハナリ。内面；口縁部は横ナデ。胴部はへラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。外面に油煙付着。

採掘番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 量 (器高)(口径)(底径)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
36住-2 (図版15)	壺 土師器	カマド内・カマド前。口縁部～胴部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (22) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪襷み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
36住-3 (図版15)	壺 土師器	カマド内・北西部床直。胴部 $\frac{1}{2}$ 残。	() () ()	輪襷み。外面：胴部はヘラ削り。内面：胴部ヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。
36住-4 (図版15)	壺 須恵器	北西部床直。口縁部～胴部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (17) () 最大径は胴部上半。 22cm。	口縁部は大きく屈曲し、外反。外面口縁部部下に凸帯1条。外面：口縁部～胴部は回転ナデ。内面：口縁部～胴部上半は回転横ナデ、胴部下半は叩き目。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰褐・青灰。
36住-5 (図版15)	杯 土師器	中央部床直。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(3.7) (12.0) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。
36住-6 杯 土師器	覆土。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(3.9) (12) (—)	口縁部はほぼ直立。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。	
36住-7 杯 土師器	覆土。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (14) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。	
36住-8 杯 土師器	中央部床直。口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (15) (—)	口縁部はやや内湾。丸底と推定。外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。	
36住-9 杯 土師器	覆土。口縁部～体部。	() () ()	口縁部は外上方にのびる。外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。内外面に油煙付着。	
36住-10 (図版15)	杯 須恵器	北東部床直上5cm。口縁部～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(3.2) (12.1) (8.3)	口縁部は外上方にのびる。外面：口縁部～体部は回転ナデ。体部下端は回転ヘラ削り。底部は回転ヘラ削り後にヘラナデ。内面：口縁部～底部は回転ナデ。底部中心はナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
36住-11 杯 須恵器	覆土。底部 $\frac{1}{2}$ 残。	() () (12.0)	外面：底部は回転ヘラ削り後に付け高台。内面：底部はナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰。	
36住-12 杯 須恵器	覆土。口縁部～底部。	() () ()	口縁部は外上方へのびる。付け高台。外面：口縁部～体部は回転ナデ。底部は回転ヘラ削り後に付け高台。内面：口縁部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。明青灰。	
36住-13 杯 須恵器	カマド内。体部下端～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	() () (7.0)	外面：体部下端～底部はヘラ削り。内面：体部下端～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。	
36住-14 蓋 須恵器	中央部床直上5cm。天井部。	() () (—) つまみ径、4.5cm。	天井部は緩やかに外方に下がる。外面：天井部上半は回転ヘラ削り、天井部下半は回転ナデ。内面：天井部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。	

第IV章 保渡田遺跡

縄文番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
36住-15	蓋 須恵器	覆土。天井部 ～口縁部。	() () (—)	天井部は緩やかに外方に下がる。端部から 1cmに短いかえり。外面：天井部～口縁部 は回転ナデ。内面：天井部～口縁部は回転 ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 褐灰。
36住-16	長頸壺 須恵器	覆土。肩部 ～胴部。	() () ()	肩部先端に比線1条。胴部は外方に上がり、 鋭く屈曲内湾して肩部に至る。内外面共に 回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
36住-17	長頸壺 須恵器	カマド内・覆 土。肩部。	() () ()	肩部先端に比線1条。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 明青灰。
37住-2 (図版5)	壺 土師器	カマド前床 直。口縁部 ～胴部ノミ残。	() (18.7) () 最大径は胴中央、21、 7cm。	口縁部はほぼ直立。輪積み。外面：口縁部 は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部 は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。やや軟質。酸 化。灰褐・褐灰。
37住-3	壺 土師器	北東部床直。 口縁部～胴部 上半ノミ残。	() (20.8) ()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	大は径1～2mmの砂粒を含 む。比較的硬質。酸化。焼。 内面に油煙付着。
37住-4	壺 土師器	北東部床直。 口縁部～胴 部ノミ残。	() (9.1) ()	口縁部はやや外反。外面：口縁部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、 胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。焼。
37住-5	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部ノミ残。	(4.0) (13) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は横 ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部は横ナデ、体部～底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。焼。
37住-6	杯 土師器	覆土。口縁部 ～体部ノミ残。	() (11.6) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底と推定。外面：口 縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口 縁部は横ナデ、体部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。焼。
37住-7	杯 土師器	北東部床10 cm。口縁部 ～底部ノミ残。	() (10) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。焼。
37住-8	長頸壺 須恵器	北東部床15 cm。肩部～胴 部ノミ残。	() () ()	肩部と胴部は個別に成形し接合。外面肩部 端に比線2条。外面：肩部は回転ナデ、胴 部は叩き目。内面：肩部～胴部上端は回転 ナデ、胴部はナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 明青灰。内外面に自然釉。
37住-11 (図版15)	壺 土師器	北東部床直。 口縁部～胴 部ノミ残。	() (11.0) ()	口縁部はほぼ直立。外面：口縁部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、 胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 焼。外面に油煙付着。
37住-12 (図版16)	壺 土師器	カマド内。胴 部下端～底部 欠。	() (21.5) ()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい焼。内外面に 油煙付着。
37住-13 (図版16)	壺 土師器	カマド内他。 ほぼ完形。	(38.3) (19.0) (2.1)	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部～底部はヘラ削り。内面：口縁 部は横ナデ、体部～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい焼。
37住-14 (図版16)	壺 土師器	カマド内。胴 部下端～底部 欠。	() (19.5) ()	口縁部は外反。輪積み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい焼。内外面に 油煙付着。

種別番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
38住-1 (図版15)	甕 土師器	カマド前床直。胴部下端～底部欠。	() (21.2) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ。胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。
38住-2 (図版16)	小型甕 土師器	南東部床直。完形。	(12.9) (12.2) (—) 最大径は胴部下半、13.5cm。	口縁部は外反。丸底。外面：口縁部は横ナデ。一部に指痕あり。胴部～底部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ。胴部～底部はヘラナデ後にヘラ磨き。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。内外面に油煙付着。
38住-3	甕 土師器	カマド前床直。口縁部～胴部上半に残。	() () ()	口縁部は「く」の字状に外反。外面：口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ。胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。外面に油煙付着。
38住-4 (図版16)	杯 土師器	貯蔵穴直上。完形。	(3.8) (12.5) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ。体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ。体部～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
38住-5 (図版16)	杯 土師器	貯蔵穴直上。完形。	(3.2) (11.4) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ。体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
38住-6 (図版16)	杯 土師器	貯蔵穴直上。完形。	(3.0) (10.6) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ。体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
38住-7 (図版16)	杯 土師器	貯蔵穴直上。完形。	(3.0) (10.0) (—)	口縁部は僅かに内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ。体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
38住-8 (図版16)	杯 土師器	南東部床直上10cm。ほぼ完形。	(3.2) (10.5) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ。体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
38住-9 (図版16)	杯 土師器	貯蔵穴直上。ほぼ完形。	(3.4) (10.2) (—)	口縁部は内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ。体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙・橙。
38住-10	杯 土師器	貯蔵穴内。口縁部～底部に残。	() (11) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ。体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。内外面に油煙付着。
38住-11 (図版15)	短頸直須恵器	南東部床直。ほぼ完形。	(7.8) (9.6) (—) 最大径は胴部上半、13.1cm。	口縁部はやや外反。丸底。外面：口縁部～胴部上半は回転ナデ。胴部下半～底部はヘラ削り。内面：口縁部～底部は回転ナデ。	長石等の鉱物粒を含む。硬質。還元。明青灰。
38住-12 (図版16)	杯 須恵器	北東部床直。口縁部一部欠。	(4.8) (11.8) (—)	体部～口縁部は外上方へのびる。丸底。外面：口縁部～体部上半は回転ナデ。体部下半～底部はヘラ削り。内面：口縁部～底部は回転ナデ。	長石等の鉱物粒を含む。硬質。還元。明青灰。内面底部にヘラ記号。
38住-13	甕 須恵器	貯蔵穴直上。胴部下半～底部。	() () (—)	巻き上げ。丸底。内外面共に胴部下半～底部は叩き目。	鉱物粒を含む。硬質。還元。緑灰・褐灰。

第IV章 保渡田遺跡

探検番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
39住-1 (図版55)	杯 土師器	カマド右袖 脇。完形。	(4.0)(12.4)(—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。にぶい橙。
39住-4	杯 須恵器	覆土。口縁部 ～底部ノ残。	() (14) (8.0)	外面：口縁部～体部上半は横ナデ、体部下 半は回転ヘラ削り、底部はヘラ削り、内面： 口縁部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。内面に自然釉。
39住-5	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部ノ残。	(3.5)(13)(—)	口縁部はやや内湾。平底に近い丸底。外面： 口縁部は横ナデ。体部～底部はヘラ削り。 内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 にぶい橙。
40住-1	甕 土師器	カマド内床土 13cm位。胴部 ～底部。	()()(6.8)	器壁は薄手。輪積み。外面：胴部～底部は ヘラ削り。内面：胴部～底部ヘラナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質。 酸化。外面にぶい赤褐。内 面明赤褐。内外面油煙付着。
40住-3	甕 須恵器	中央土坑内床 上4cm。口縁 部。	()(22.0)()	口縁部は大きく外反。外面：口縁部は回転 横ナデ。内面：口縁部は回転横ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 外面灰。内面褐灰・中心灰 白。外面自然釉部分的に有。
40住-5	碗 須恵器	兩壁中央床 直。体部～底 部。	()()(14.0)	口径は大きく、太く深い高台貼付。外面： 体部は回転横ナデ、底部は回転ヘラ削り、 高台部は回転横ナデ。内面：体部～底部は 回転横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質。 還元。灰。
41住-1	甕 土師器	カマド内床 直。	()(20.0)()	弱い「コ」の字状口縁。口唇部浅い1条沈 線。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部 はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部 はヘラナデ。	鉱物粒を含む。やや硬質。酸 化。にぶい赤褐。内外面に 油煙付着。
41住-2	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部。	()(16)()	外面：口縁部～体部は横ナデ、底部はヘラ 削り。内面：口縁部は横ナデ、体部～底部 はナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質。 酸化。橙。内外面厚減。
42住-2 (図版56)	碗 須恵器	貯蔵穴内。口 縁部～底部一 部欠。	(7.0)(17.0)(9.7)	口縁部直む。短く薄い高台貼付。外面：口 縁部～体部は回転横ナデ。底部は回転未切 り。高台部は回転横ナデ。内面：口縁部～底 部は回転横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや 硬質。還元。外面灰オリ ブ。内面灰。自然釉。
42住-3	甕 須恵器	覆土。口縁部。 () (16) ()	() (16) ()	器壁は薄手。内面に浅い沈線1条。外面： 口縁部は回転横ナデ後に被状文。内面：口 縁部は回転横ナデ。	鉱物粒を含む。やや硬質。 還元。灰白。
42住-4	杯 須恵器	覆土。口縁部 ～底部。	(3.6)(14)()	器壁は均一した厚み。外面：口縁部～体部 は回転横ナデ、底部は回転未切り。内面： 口縁部～底部は回転横ナデ。	鉱物粒を含む。やや硬質。 還元。灰。
42住-5	甕 土師器	北東隅床直。 口縁部～胴 部。	()(20)()	「コ」の字状口縁。口唇部1条沈線。外面： 口縁部横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口 縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや 硬質。酸化。にぶい橙。
43住-1 (図版56)	甕 土師器	カマド内床 直。口縁部 ～胴部ノ残。	()(19.6)() 最大径は胴上部、21. 6cm。	「コ」の字状口縁。口唇部に内外面沈線1 条。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部 はヘラ削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部 はヘラナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質。 酸化。にぶい赤褐。外面に 油煙付着。

標記番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
43住-3 (図版36)	杯 須恵器	北東部柱穴内 床上2cm。ほ ぼ完形。	(3.3)(13.0)(7.1)	口唇部全体に歪み。外面；口縁部～体部は 回転横ナデ。底部は回転糸切り。内面；口 縁部～底部は回転横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質。 還元。灰。
43住-4 (図版36)	皿 須恵器	中央床上5 cm。口縁部 ～底部汚残。	(2.9)(16)(6.7)	口唇部全体的に歪み。外面；口縁部～体部 は回転横ナデ。底部は雑な回転糸切り。内 面；口縁部～底部は回転横ナデ。	大径径2～3mmの鉱物粒を 含む。やや硬質。還元。灰。
44住-1	杯 土師器	覆土。口縁部 ～体部。	()()()	口縁部はやや内湾。外面；口縁部は横ナデ、 体部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横 ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
44住-2	甕 須恵器	中央部床直。 胴部。	()()()	巻き上げ。内外面共に引き後にナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。外面にヘラ記号。
45住-1	杯 土師器	覆土。口縁部 ～体部。	()()()	外面に不明瞭な横。外面；口縁部は横ナデ、 体部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横 ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
45住-2	甕 須恵器	覆土。口縁部。	()()()	外面の口縁端部下に凸帯1条。口縁部に波 状文。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 青灰。
45住-3	蓋 須恵器	覆土。天井部 ～口縁部。	()()()	端部から0.7cmに長いかえり。内外面共に回 転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。外面に自然釉。
46住-1	甕 土師器	カマド内。口 縁部～胴部上 端。	()()()	口縁部は外反。輪積み。外面；口縁部は横 ナデ。胴部はヘラ削り。内面；口縁部～胴 部上端は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。外面に油煙付着。
46住-2	杯 土師器	覆土。口縁部 ～体部汚残。	()(14)()	口縁部はほぼ直立。丸底と推定。外面；口 縁部は横ナデ。体部はヘラ削り。内面；口 縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
46住-4	杯 土師器	カマド右袖 脇。口縁部 ～体部汚残。	()(17)()	口縁部は外反。外面；口縁部は横ナデ、体 部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナ デ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
46住-5	杯 土師器	中央部床直。 ほぼ完形。	(3.9)(12.0)(9.0)	丸底に近い平底。外面；口縁部～体部は回 転ナデ。体部下端～底部はヘラ削り。内面； 口縁部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。比較的硬質。 還元。灰白。内面に油煙付 着。摩滅が激しい。
47住-1	甕 土師器	1号ピット内 床直。口縁部 ～胴部。	()(18)()	「コ」の字状口縁。輪積み。外面；口縁部 は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面；口縁部 は横ナデ。胴部はヘラナデ。	鉱物粒を含む。やや硬質。 酸化。明赤褐。
47住-2	小型甕 土師器	1号ピット内 床直。口縁部 ～胴部。	()(16)()	「コ」の字状口縁。口唇部に1条沈線。輪 積み。外面；口縁部横ナデ。頸部ヘラ削り。 内面；口縁部横ナデ。頸部ヘラナデ。	鉱物粒を含む。やや硬質。 酸化。明赤褐。外面に油煙 付着。
48住-1	甕 土師器	南西隅床上10 cm。口縁部 ～胴部上端。	()()()	口縁部は「く」の字状に外反。外面；口縁 部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面；口縁 部～胴部上端は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
48住-2	甕 土師器	覆土。口縁部 ～胴部上端。	()()()	口縁部は「く」の字状に外反。外面；口縁 部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面；口縁 部～胴部上端は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。内外面に油煙付着。

第IV章 保波田遺跡

調査番号 (図版ページ)	器 種	出土状況	法 量 (器高)(口径)(底径)	器 形・手 法 の 特 徴	胎土・焼成・色調・備考
48住-3 (図版16)	杯 土師器	カマド内支脚上。ほぼ完形。	(3.4)(10.2)(—)	口縁部は内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。内面に油煙付着。
48住-5	杯 土師器	南西部床直。口縁部～体部。	() () ()	口縁部はほぼ直立。外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。赤褐。内外面に油煙付着。
48住-6	杯 土師器	北西部床上10cm。口縁部～体部。	() () ()	外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。におい橙。
48住-7	杯 土師器	覆土。口縁部～体部。	() () ()	口縁部はやや外反。外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。におい橙。内外面に油煙付着。
48住-8	杯 土師器	覆土。口縁部～体部。	() () ()	口縁部はやや外反。外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
48住-9	杯 須恵器	南西部床上20cm。底部欠残。	() () (12.0)	外面は回転ヘラ削り後に付け高台。内面は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。
48住-10	杯 須恵器	覆土。底部欠残。	() () (12.0)	外面は回転ヘラ削り後に付け高台。内面は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
48住-11	杯 須恵器	覆土。口縁部～底部。	() () ()	外面：口縁部は回転ナデ。体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。
48住-12	蓋 須恵器	南西部床上5cm。天井部。	() () (—) つまみ径、6.6cm。	外面：つまみ部は回転ナデ、天井部上平は回転ヘラ削り。内面：天井部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。比較的硬質。還元。青灰。灰白。
48住-13	蓋 須恵器	カマド前床直。天井部～口縁部。	() () (—)	端部から1.5cmに短いかえり。外面：天井部上平は回転ヘラ削り。天井部下平～端部は回転ナデ、内面：天井部～端部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
48住-14	蓋 須恵器	北東部床上15cm。天井部～口縁部。	() () (—)	端部から1.3cmにかえり。外面：天井部上平は回転ヘラ削り。天井部下平～口縁部は回転ナデ。内面：天井部～端部は回転ナデ。	長石等の鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
48住-17	壺 須恵器	覆土。口縁部。	() () ()	口縁端部は沈線状、外面端部下に凸帯1条。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
48住-18 (図版16)	杯 土師器	中央部床上5cm。底部一部欠。	() (13.6)(—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
48住-19 (図版16)	杯 土師器	覆土。口縁部～底部欠残。	() (18) (—)	口縁部は外反。平底に近い丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
48住-20	杯 土師器	南東部床直。口縁部～底部欠残。	(3.4)(12) (—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。におい橙。

標記番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	量 (直径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
48住-21	杯 土師器	貯蔵穴直上。 口縁部～底 部1/2残。	() (14) (—)		口縁部はやや内湾、平底に近い丸底。外面： 口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。 内面：口縁部は横ナデ、体部～底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
48住-22	杯 土師器	南西部床直。 口縁部～底 部1/2残。	(3.3) (15) (—)		平底に近い丸底。外面：口縁部は横ナデ、 体部～底部はヘラ削り。内面：口縁部～体 部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい黄橙。
48住-24	杯 須恵器	覆土。口縁部 ～底部。	() () ()		付け高台。外面：口縁部～体部は回転ナデ、 底部は回転ヘラ削り後に付け高台。内面： 口縁部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 緑灰。
48住-25	蓋 須恵器	南西部床上10 cm。天井部 ～口縁部1/2 残。	() () (—)		天井部は緩やかに外方に下がる。端部から 1.5cmにかえり。外面：天井部上半は回転ヘ ラ削り、天井部下半～口縁部は回転ナデ。 内面：天井部～口縁部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
48住-27 (図版16)	短頸壺 須恵器	中央部床直。 完形。	(6.3) (6.4) (5.6)		口縁部はほぼ直立。外面：口縁部～胴部上 半は回転ナデ、胴部下半～底部はヘラ削り。 内面：口縁部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
48住-28 (図版16)	杯 須恵器	南壁中央脇床 上10cm。完形。	(3.9) (12.1) (7.8)		口縁部は外方に上がる。外面：口縁部～体 部は回転ナデ。底部はヘラ削り。内面：口 縁部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 青灰。
48住-29 (図版16)	杯 土師器	南壁中央脇床 直。口縁部 ～底部1/2残。	(3.6) (11.4) (—)		口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
48住-30 (図版16)	蓋 須恵器	南壁中央脇床 上5cm。完形。	(2.5) (10.0) (—)		口縁部は平担。口縁部は鋭く屈曲し外方に 下がる。内外面共に天井部～口縁部は回転 ナデであるが、單曲部分の外側は回転ヘラ 削り。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 青灰。
49住-1	杯 土師器	カマド内。口 縁部～底部1/2 残。	(3.3) (12) (—)		丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部 はヘラ削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、 底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。内外面に油埋付着。
49住-2	杯 土師器	カマド内。口 縁部～体部。	() () ()		外面：口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。 内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
50住-1	杯 須恵器	覆土。体部 ～底部。	() () ()		外面：体部は回転ナデ、体部下端～底部は 回転ヘラ削り。内面：体部～底部は回転ナ デ。	鉱物粒を含む。比較的硬質。 還元。灰白。
51住-1	壺 土師器	カマド内。口 縁部～胴部。	() () ()		口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外 面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内 面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 にぶい橙。内外面に油埋付着。
51住-2	壺 土師器	覆土。口縁部 ～胴部上端。	() () ()		口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外 面：口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内 面：口縁部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
51住-3 (図版16)	杯 土師器	カマド右袖脇 床直。口縁部 ～底部1/2残。	(3.6) (12.2) (—)		口縁部はやや内湾。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部～底部はヘラ削り。内面：口 縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。外面に油埋付着。

第IV章 保渡田遺跡

標記番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(口径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
51住-5 (図版156)	壺 土師器	カマド右袖脇 床直。口縁部 ～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(9.6)(9.6)(—) 最大径は胴部中央、 11.7cm。	口縁部は「く」の字状に外反。球胴。丸底。 外面；口縁部は横ナデ、胴部～底部はヘラ 削り。内面；口縁部は横ナデ、胴部～底部 はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。内外面に多量の油煙 付着。二次焼成を受け厚膜 が激しい。
52住-1	壺 土師器	南東柱穴内。 口縁部～胴部 上端。	() () ()	口縁部は外反。外面；口縁部は横ナデ、胴 部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ、胴 部はヘラナデ。	大径径2～3mmの砂粒を含 む。硬質。酸化。橙。
52住-2	杯 土師器	南東部床直。 口縁部～底 部 $\frac{1}{2}$ 残。	(3.7)(12.2)(—)	外面に不明瞭な稜。外面；口縁部は横ナデ、 体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体 部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
52住-3	杯 土師器	カマド前床 直。口縁部 ～体部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (14) (—)	外面に稜。丸底。外面；口縁部は横ナデ、 体部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横 ナデ後に放射状喰文。	砂粒を含む。硬質。酸化。 黒褐。
52住-4	杯 土師器	南東部床土 5cm。口縁部 ～体部 $\frac{1}{2}$ 残。	() () (—)	外面に稜。丸底と推定。外面；口縁部は横 ナデ、体部はヘラ削り。内面；口縁部～体 部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
52住-5 (図版156)	杯 土師器	南東部床直。 口縁部～底 部 $\frac{1}{2}$ 残。	(4.6)(13.2)(—)	外面に稜。丸底。外面；口縁部は横ナデ、 体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体 部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 にぶい。内外面に多量の 油煙付着。
52住-6 (図版156)	杯 土師器	カマド右袖脇 床直。ほぼ完 形。	(4.1)(12.8)(—)	外面に稜。丸底。外面；口縁部は横ナデ、 体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体 部は横ナデ、底部はナデ後に放射状喰文。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。灰褐。内外面に油煙 付着。
53住-1	壺 土師器	カマド右袖脇 床土10cm。口 縁部～胴部。	() () ()	口縁部は外反。輪積み。外面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
53住-2	杯 土師器	中央部床土30 cm。口縁部～ 体部は $\frac{1}{2}$ 残。	() (12) (—)	口縁部は内湾。丸底。外面；口縁部は横ナ デ、体部はヘラ削り。内面；口縁部～体部 はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
53住-3	蓋 須恵器	北東部床土5 cm。天井部 ～口縁部 $\frac{1}{2}$ 残。	() () (—)	天井部は緩やかに外方に下がる。端部から 1.1cmにかえり。外面；天井部は回転ヘラ削 り。端部は回転ナデ。内面；回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
53住-4	蓋 須恵器	カマド内。天 井部。	() () (—)	外面；天井部上半は回転ヘラ削り、天井部 下半は回転ナデ。内面；回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
53住-5	蓋 須恵器	カマド前床土 10cm。	() () ()	外面；口縁部直下に凸部1条。内外面共に 回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 青灰。
53住-6	壺 土師器	カマド右袖先 端上。口縁部 ～胴部。	() () ()	口縁部は「く」の字状に外反。外面；口縁 部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面；口縁 部は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい。橙。
53住-7 (図版156)	杯 土師器	貯蔵穴内。ほ ぼ完形。	(2.8)(10.9)(—)	口縁部はやや内湾。平底に近い丸底。外面； 口縁部は横ナデ、体部～底部はヘラ削り。 内面；口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい。内外面に 油煙付着。

第3節 出土土器観察表

埋蔵番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
54住-2	杯 土師器	北東部北壁掘 床上5cm。口 縁部へ体部。	() () () (—)	外面に稜。丸底と推定。外面：口縁部は横 ナデ、体部はヘラ削り。内面：口縁部へ体 部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。外面に油煙付着。
55住-1 (図版15)	壺 土師器	貯蔵穴左脇床 直。底部欠。	() (14.7) () 最大径は胴部下半、 15.1cm。	口縁部は外反。輪横み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	大は径2～3mmの砂粒を含 む。比較的硬質。酸化。に ぶい橙。油煙付着。
55住-2 (図版15)	台付壺 土師器	北東部床直。 脚部欠。	() (14.0) ()	口縁部は内湾。輪横み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。全体が歪。	砂粒を含む。比較的硬質。 ナデ、胴部はヘラナデ。全体が歪。 砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。内外面に 油煙付着。
55住-3	壺 土師器	中央部床上10 cm。口縁部 へ胴部上端。	() () () ()	口縁部は外反。輪横み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい赤褐。
55住-4	壺 土師器	覆土。口縁部 へ胴部上端。	() () () ()	口縁部はやや内湾。輪横み。外面：口縁部 は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部 は横ナデ、胴部はヘラナデ。	大は径2～3mmの砂粒を含 む。比較的硬質。酸化。に ぶい赤褐。
55住-5	台付壺 土師器	カマド内。胴 部下半へ台 部。	() () () (9.1)	輪横み。外面：胴部はヘラ削り。台部は横 ナデ。内面：胴部へ底部はヘラナデ、台部 はナデ。	大は径2～3mmの砂粒を含 む。比較的硬質。酸化。に ぶい橙。油煙付着。
55住-7 (図版16)	杯 土師器	貯蔵穴東床上 5cm。口縁部 一部欠。	(3.9) (11.7) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部へ底部はヘラ削り。内面：口 縁部へ体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。内外面に 油煙付着。
55住-9 (図版15)	杯 土師器	貯蔵穴北床 直。口縁部 へ底部欠残。	(3.6) (11.4) (—)	外面に稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、 体部へ底部はヘラ削り。内面：口縁部へ体 部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。外面に油煙付着。
55住-10	杯 土師器	貯蔵穴西床上 5cm。口縁部 へ底部欠残。	(4.2) (11.2) (—)	外面に稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、 体部へ底部はヘラ削り。内面：口縁部へ体 部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
56住-1	壺 土師器	南東部床直。 口縁部へ胴部 上端。	() () () ()	口縁部は外反。輪横み。外面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横 ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい黄橙。
56住-3 (図版15)	杯 土師器	南西部床上10 cm。ほぼ完形。	(4.9) (13.2) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部へ底部はヘラ削り。内面：口 縁部へ体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
56住-4 (図版15)	杯 土師器	北西部床直。 完形。	(4.2) (12.0) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部へ底部はヘラ削り。内面：口 縁部へ体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。
56住-5 (図版15)	杯 土師器	北西部床直。 完形。	(4.5) (13.5) (—)	外面に稜。丸底。外面：口縁部は横ナデ、 体部へ底部はヘラ削り。内面：口縁部へ体 部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
56住-6 (図版15)	杯 土師器	南西部床上10 cm。完形。	(3.8) (10.0) (—)	外面に不明瞭な稜。丸底。外面：口縁部は 横ナデ、体部へ底部はヘラ削り。内面：口 縁部へ体部は横ナデ、底部はヘラナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。 橙。

第IV章 保護田遺跡

縄文番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
56住-7	杯 土師器	覆土。口縁部 ～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(4.0)(12)(—)	口縁部はやや外反。丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はへら削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
56住-8	杯 土師器	中央部床直。 口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (12) (—)	外面に横。丸底と推定。外面：口縁部は横ナデ、体部はへら削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい黄橙。
56住-12	杯 土師器	南西部床直。 口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (12) (—)	外面に不明瞭な横。丸底と推定。外面：口縁部は横ナデ、体部はへら削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
57住-1 (図版5)	壺 土師器	カマド右袖脇 床直。口縁部 ～胴部 $\frac{1}{2}$ 残。	() (21.6) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はへらナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。
57住-2 (図版5)	壺 土師器	カマド右袖に 使用。胴部下 半～底部欠。	() (21.4) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はへらナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油煙付着。
57住-3	壺 土師器	北西部床直。 口縁部～胴部 上半 $\frac{1}{2}$ 残。	() (22) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はへらナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。外面に油煙付着。
57住-4	壺 土師器	カマド左袖 上。口縁部 ～胴部上端 $\frac{1}{2}$ 残。	() (19.4) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面：口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面：口縁部は横ナデ、胴部はへらナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。外面に油煙付着。
57住-5	壺 土師器	カマド左袖脇 床直。胴部 ～底部残。	() () (4.2)	輪積み。外面：胴部～底部はへら削り。内面：胴部～体部はへらナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内外面に多量の油煙付着。
57住-6	杯 土師器	北西部床直20 cm。口縁部 ～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	() () (—)	丸底。外面：口縁部は横ナデ、体部～底部はへら削り。内面：口縁部～体部は横ナデ、底部はへらナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
57住-7	杯 土師器	中央部床直。 口縁部～体部 $\frac{1}{2}$ 残。	() () (—)	丸底と推定。外面：口縁部は横ナデ、体部はへら削り。内面：口縁部～体部は横ナデ。	砂粒を含む。硬質。酸化。橙。
57住-8 (図版5)	杯 須恵器	カマド右袖脇 床直。口縁部 ～底部 $\frac{1}{2}$ 残。	(4.6)(19.2)(14.3)	付け高台。高台より底部が下がる。外面：口縁部～体部は回転ナデ、底部は回転へら削り後に付け高台。内面：口縁部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。緑灰。
57住-9	杯 須恵器	カマド内。体部 ～底部。	() () ()	外面：体部は回転ナデ、体部下半～底部は回転ナデ。内面：体部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。オリブ灰。
57住-11	蓋 須恵器	覆土。天井部 ～口縁部。	() () (—)	端部から1cmにかえり。外面：天井部は回転へら削り、口縁部は回転ナデ。内面：天井部～口縁部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
57住-12	長頸壺 須恵器	カマド内。頸部。	() () ()	巻き上げ。内外面共に回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。外面に自然釉。

第3節 出土土器観察表

標記番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
57住-13 (図版57)	壺 土師器	カマド左袖に 使用。胴部 ～底部一部 欠。	(34.7)(21.8)(5.3)	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面；口縁部は横ナデ。胴部～底部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ。胴部～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。外面に油埋付着。
57住-14 (図版57)	壺 土師器	カマド右袖脇 床直。口縁部 ～胴部上半 残。	() (22.8) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面；口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ。胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油埋付着。
57住-15	蓋 須恵器	貯蔵穴南床 直。天井部。	() () (—) つまみ径、2.6cm。	外面；天井部上半は回転ヘラ削り。天井部下半は回転ナデ。内面は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。
58住-1	杯 須恵器	覆土。口縁部 ～底部。	() (14) ()	器壁は薄手。外面；口縁部～体部は回転横ナデ。底部はヘラ削り。内面；口縁部～底部は回転横ナデ。	鉱物粒を含む。やや硬質。還元。灰白。
58住-2	蓋 須恵器	北壁中央床 直。天井部 ～体部。	() () (—)	外面；天井部～体部は回転ヘラ削り。内面；天井部～体部は回転横ナデ。	鉱物粒を含む。やや硬質。還元。灰白。
59住-1	壺 土師器	中央部床直。 口縁部～胴部 上半残。	() (18.8) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面；口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ。胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内外面に油埋付着。
59住-2	壺 土師器	中央部床直。 口縁部～胴部 残。	() (20) ()	口縁部は「く」の字状に外反。輪積み。外面；口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面；口縁部は横ナデ。胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。内面に油埋付着。
59住-3	壺 土師器	南西部床直。 胴部下半～底 部。	() () (6.0)	輪積み。丸底に近い平底。外面；胴部～底部はヘラ削り。内面；胴部～底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。にぶい橙。
59住-4 (図版58)	杯 土師器	北東部床土15 cm。口縁部～ 底部残。	() (17.0) (—)	口縁部はやや外反。丸底。外面；口縁部は横ナデ。体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ。底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。酸化。橙。
59住-5 (図版58)	杯 土師器	中央部床直。 ほぼ完形。	(3.8)(12.8)(—)	口縁部はやや内湾。丸底。外面；口縁部は横ナデ。体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ。底部はナデ。	砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。
59住-7	杯 土師器	中央部床直。 口縁部～底 部残。	(3.7)(14)(—)	丸底。外面；口縁部は横ナデ。体部～底部はヘラ削り。内面；口縁部～体部は横ナデ。底部はナデ。	砂粒を含む。やや軟質。酸化。橙。
59住-9	杯 須恵器	北東部床直。 体部下端～底 部。	() () ()	外面；体部は回転ナデ。底部は回転ヘラ削り後に付け高台。内面；体部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。灰白。
59住-10	杯 須恵器	北西部床直。 体部下端～底 部。	() () ()	外面；体部は回転ナデ。体部下端～底部はヘラ削り。内面；体部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。オリーブ灰。
59住-11	杯 須恵器	覆土。体部 ～底部。	() () (8.0)	外面；体部は回転ナデ。体部下端～底部はヘラ削り。内面；体部～底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。青灰。断面は酸化と還元の間層。

検出番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
59住-12	皿 須恵器	覆土。口縁部 へ体部。	() () ()	口縁部は外反。内外面共に口縁部へ体部は 回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
59住-13	蓋 須恵器	覆土。天井部 へ口縁部。	() () (—)	端部から1cmにかえり。外面：天井部上半 は回転ヘラ削り、天井部下半へ口縁部は回 転ナデ。内面：天井部へ口縁部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 青灰。
59住-14 (図版156)	杯 須恵器	北西部床直。 完形。	(3.4)(11.6)(7.7)	外面：口縁部へ体部は回転ナデ。体部下端 は回転ヘラ削り、底部はヘラ削り。内面： 口縁部へ底部は回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰白。
59住-15 (図版156)	杯 須恵器	北東部床直。 口縁部へ底部 へ残。	(4.3)(13.0)(8.0)	外面：口縁部へ体部は回転ナデ。体部下端 へ底部はヘラ削り。内面：口縁部へ底部は 回転ナデ。	大は径2～3mmの鉱物粒を 含む。硬質。還元。青灰。
59住-16 (図版156)	長頸壺 須恵器	北西部床直。 胴部へ胴部へ 残。	() () () 胴部径、23.0cm。	胴部へ胴部に2条単位の沈線8条・肩部端 に太い沈線1条。この沈線の間4区画に刺 突文。巻き上げ。内外面共に胴部へ胴部は 回転ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 青灰。外面に自然釉。
60住-1	壺 土師器	北西部床直。 口縁部へ胴部 上半へ残。	() (21.4)()	口縁部外反。輪積み。外面：口縁部は横ナ デ。胴部はヘラ削り。内面：口縁部は横ナ デ。胴部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。内外面に 油埋付着。
60住-2	壺 土師器	カマド内。胴 部下半へ底部 残。	() () (4.5)	外面：胴部へ底部はヘラ削り。内面：胴部 へ底部はヘラナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい赤褐。内外面 に油埋付着。
60住-3	杯 土師器	カマド前床 直。口縁部 へ底部へ残。	(3.6)(10.5)(—)	口縁部は内湾。丸底。外面：口縁部は横ナ デ。体部へ底部はヘラ削り。内面：口縁部 へ体部は横ナデ。底部はナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。外面に油 埋付着。
60住-5	杯 土師器	東柱穴内。口 縁部へ体部。	() () (—)	口縁部は内湾。丸底と推定。外面：口縁部 は横ナデ。体部はヘラ削り。内面：口縁部 へ体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。内外面に 多量の油埋付着。
60住-6	杯 土師器	覆土。口縁部 へ体部。	() () (—)	口縁部はやや内湾。丸底と推定。外面：口 縁部は横ナデ。体部はヘラ削り。内面：口 縁部へ体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
61住-1	壺 土師器	覆土。口縁部 へ胴部上端。	() () ()	外面：口縁部は横ナデ。胴部はヘラ削り。 内面：口縁部へ胴部上端は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。内面に油 埋付着。
61住-2	杯 土師器	覆土。口縁部 へ体部。	() () (—)	口縁部は内湾。丸底と推定。外面：口縁部 は横ナデ。体部はヘラ削り。内面：口縁部 へ体部は回転ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。橙。
62住-1	壺 土師器	覆土。口縁部 へ胴部上端。	() () ()	口縁部は外反。外面：口縁部は横ナデ。胴 部はヘラ削り。内面：口縁部へ胴部上端は 横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。
62住-2	杯 土師器	覆土。口縁部 へ体部。	() () (—)	口縁部はやや内湾。丸底と推定。外面：口 縁部は横ナデ。体部はヘラ削り。内面：口 縁部へ体部は横ナデ。	砂粒を含む。比較的硬質。 酸化。にぶい橙。

標記番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
63住-1	壺 土師器	カマド内床土 5cm他。口縁 部～胴部。	() (20) ()	「コ」の字状口縁。輪積み。外面：口縁部 は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口縁部 は横ナデ、胴部はヘラナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質。 酸化。外面にふい粉。内面 明赤褐。内外面に油煙付着。
63住-2	壺 土師器	中央床土9 cm。口縁部 ～胴部。	() (20) ()	弱い「コ」の字状口縁。輪積み。外面：口 縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：口 縁は部横ナデ、胴部はヘラナデ。	鉱物粒を含む。やや硬質。 酸化。にふい粉。内外面に 油煙付着。
63住-3	壺 土師器	貯蔵穴内。頸 部～胴部。	() () ()	「コ」の字状口縁。輪積み。外面：頸部は 横ナデ、胴部はヘラ削り。内面：頸部～胴 部はヘラナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや 硬質。酸化。にふい赤褐。
63住-4	台付壺 土師器	覆土。台部。	() () (9.0)	器壁は薄手。輪積み。外面：台部横ナデ。 内面：底部ヘラナデ、台部横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや 硬質。酸化。にふい赤褐。
63住-5 (図版19)	杯 須恵器	北壁乗寄床土 2cm。完形。	(3.5) (13.7) (7.8)	均一した厚さ。外面：口縁部～体部は回転 横ナデ。底部は回転糸切り。内面：口縁部 ～底部は回転横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや 硬質。還元。外面灰・底部 灰白。内面灰白。
63住-6	杯 須恵器	カマド内覆土 他。口縁部 ～底部の残。	(3.2) (14) (8.4)	口縁は緩く外反し。器壁は薄手。外面：口 縁部～体部は回転横ナデ、底部回転糸切り。 内面：口縁部～底部は回転横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや 硬質。還元。灰。
63住-7	杯 須恵器	カマド内床土 15cm他。口縁 部～体部。	() (14) ()	均一した厚さ。外面：口縁部～体部は回転 横ナデ。内面：回転横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質。 還元。灰。
63住-9	杯 須恵器	中央床土6 cm。口縁部 ～底部。	(3.3) (14) ()	外面：口縁部～体部は回転横ナデ。底部は 回転糸切り後ヘラ底。内面：口縁部～底部 は回転横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや 硬質。還元。灰。
63住-11	蓋 須恵器	覆土。天井部 ～口縁部。	() (11.0) (—)	口唇部に1条沈線。外面：天井部は回転 ヘラ削り、天井部～口縁部は回転横ナデ。内 面：天井部～口縁部は回転横ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰。
63住-12	すり鉢 須恵器	貯蔵穴付近床 土8cm他。胴 部～底部。	() () (12.0)	器壁は厚手。外面：胴部～底部はヘラ削り。 内面：胴部～底部は回転横ナデ。	鉱物粒を含む。やや硬質。 還元。黄灰。
63住-13	杯 須恵器	西南隅床土14 cm。体部～底 部。	() () (5.8)	体部は器壁薄手。底部は厚手。外面：体部 は回転横ナデ。底部は回転糸切り。内面： 体部～底部は回転横ナデ。	砂粒を含む。やや硬質。還 元。外面灰白。内面灰。
63住-18 (図版18)	杯 須恵器	北壁付近床 土。完形。	(3.8) (12.4) (6.3)	器壁は均一で薄手。外面：口縁部～体部は 回転横ナデ。底部は回転糸切り。内面：口 縁部～底部は回転横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。やや 硬質。還元。灰。内外面に 油煙付着。
63住-19 (図版18)	長頸壺 須恵器	北西隅床直 他。口縁部 ～頸部。	() (12.5) ()	外面：口縁部～頸部は回転横ナデ。内面： 口縁部～頸部は回転横ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 褐。内外面に自然釉。
3号溝 -1	匚 須恵器	溝内床土7 cm。体部～底 部。	() () (12.0)	短く薄い高台は丁寧な貼付。外面：体部は 回転横ナデ。底部回転糸切り後に回転ヘラ 削り。高台部は回転横ナデ。内面：体部～ 底部は回転横ナデ。	鉱物粒を含む。硬質。還元。 灰。

第IV章 保渡田遺跡

種別番号 (図版ページ)	器種	出土状況	法 量 (器高)(口径)(底径)	器形・手法の特徴	胎土・焼成・色調・備考
3号溝 -3	蓋 須恵器	覆土。天井部。	() () (—) つまみ径、4.0cm。	天井中央部に凹状のつまみ貼付。外面：天井部回転ヘラ削り、つまみ部回転横ナデ。 内面：天井部回転横ナデ。	砂粒・鉱物粒を含む。硬質、還元。灰。

中里天神塚古墳

第V章 中里天神塚古墳

(1) 古墳の立地

古墳は榛名山の東南麓、井野川の支流である唐沢川の東方に位置している。北西より南東にゆるやかに傾斜する微高地上に構築されており、標高は約150mを測る。1938年に刊行された『上毛古墳総覧』によると、天神塚古墳の所在する昆沙門地内に2基の円墳が記載されている。上郊村10号墳と11号墳で、それぞれ直径が81尺と108尺の円形であり葺石が存在することと大石が露出していることがしるされている。

本古墳の西南方には保渡田八幡塚・薬師塚・井出二子塚古墳を中心として、大小の円墳が多く存在している。八幡塚古墳は全長84.6m、薬師塚古墳は68.4m、二子塚古墳は92.4mでいずれも主体部は舟形石棺である。薬師塚古墳からは仿製内行花纹鏡、玉類、馬具類が発見されている。また、八幡塚古墳からも馬具が発見されている。これらの前方後円墳は、井野川上流～中流域に属し、6世紀前半から中葉にかけて次々に造営されたものと考えられている。なお、井野川流域には井出・保渡田・中里に円墳を中心とした古墳の濃密な分布がある。

(2) 調査の方法

調査方法については、以下の点を基準として実施した。

- (1) 1×1mグリッドを基本単位とする。
- (2) 基軸線に平行する方向(南→北)を算用数字、直行する方向(西→東)をアルファベットであらわし、この組み合わせをグリッド表示とする。
- (3) 各グリッドの表示は、南西隅の交点に拠った。
- (4) 基準線はN-17-Wである。
- (5) 本古墳及び周辺の調査対象区域は、上越新幹線大宮基点85km168m周辺である。

(3) 墳丘上の天神祠および碑について

墳丘上には天神祠1、庚申塔3、それに大青面金剛、岸仲吉翁之碑が存在した。

天神祠は高さ約70cmで、正面には「天満宮」、向かって左側には「文化4年歳□丁卯□□三月吉祥穀且」という銘がある。

庚申塔は3基あり、いずれも正面に「庚申塔」という刻銘があるものの年号はない。そのうち一基は高さ約1.5mで比較的古い様相をもっている。他の2基は高さ30cm前後で新しい。

「大青面金剛」は高さ1.7mである。裏面には「萬延元年歳次庚申 十二月令日建 願主 寺東組中原岸二軒 七十一翁 静斎揮書」の刻銘がある。

「岸仲吉翁之碑」は高さ約2m、昭和25年の建立銘がある。

なお、これらの天神祠および碑は日本鉄道建設公団により約150m北方に古墳墳丘状の土盛り造られて

移転され、現存している。

(4) 墳 丘

本古墳は、昭和13年に群馬県から発行された「上毛古墳綜覧」(群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第5輯)によると「上郊村第12号墳」として記載されている。上郊村第12号墳は天神塚と呼ばれ、円墳で直径36尺・高さ6尺の規模をもつこと、主体部はすでに掘られており、墳丘上には天神祠が存在することが記されている。

発掘調査に先だって実施した墳丘測量では、東西14.5m、南北8~11mの不整形で高さは約2mである。墳丘はかなり変形しており、裾部には本古墳の石室の石材と考えられる石により石垣が組まれ墳頂部には上毛古墳綜覧に記された天神祠の他に、庚申塔が3基とそれに岸仲吉翁之碑・大青面金甕碑が存在していた。

本古墳の主体部がいつ掘られたのかは明確でない。墳頂部に存在する大青面金甕碑の台石とその他に2ヶ所、1.3×1.3m程度やや扁平な石が墳頂部に存在しており、石室の天井石の可能性が高い。仮にこれらの石が天井石であるとすると、大青面金甕碑には「萬延元年」銘があることから江戸時代末にはすでに掘られ、石室は破壊されていたということになる。

(5) 主体部掘り方および地山上層

石室は地山を穿った土坑内に組まれている。しかしこの土坑の遺存状態は悪く、墳丘西側で僅かに確認されているにすぎない。確認された土坑の深さは、当時の地表から30cm前後と浅い。

当時の地表からローム層までは約80cmである。この間を次の9層に分層した。

第1層 FA混入暗褐色粘質砂層

砂質であるが粘性を帯びており、やや黒味がかっている。

第2層 FA・軽石混入黒色土層

FAがブロック状に混入し、軽石が霜降状に混じる。第3層に類似している。

第3層 FA・軽石混入暗褐色砂質土層

少量の軽石とFAがブロック状に混入しており、砂質。

第4層 暗黄褐色粘質土層

少量のFA粒子の混入が認められ、粘性が強い。

第5層 FAブロック混入暗褐色粘質砂層

黄色火山灰がブロック状に混入しており、砂質味が強い。主体部の掘り方によって、本土層の上面は削られている。

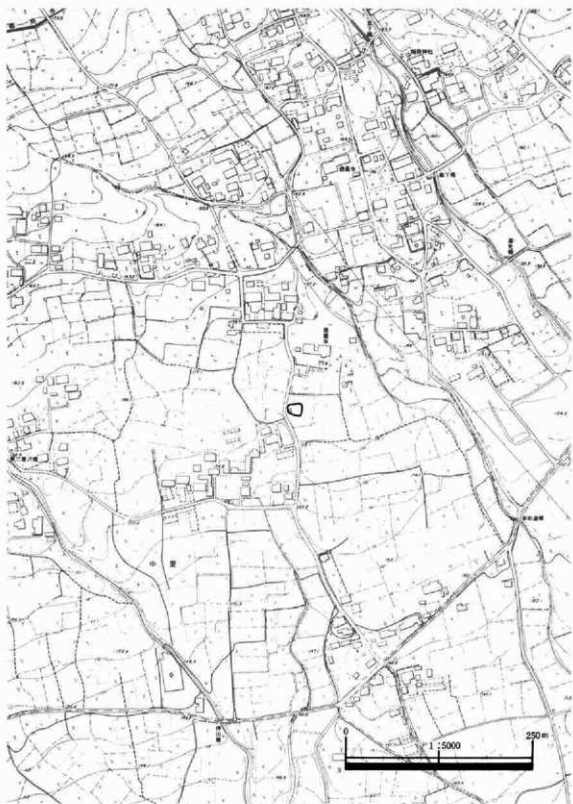
第6層 ニッ岳降下火山灰層 (FA層)

部分的に淡いピンク色を帯びている。黄色味が強く、サラサラしている。

第7層 浅間C降下軽石混入黒色土層

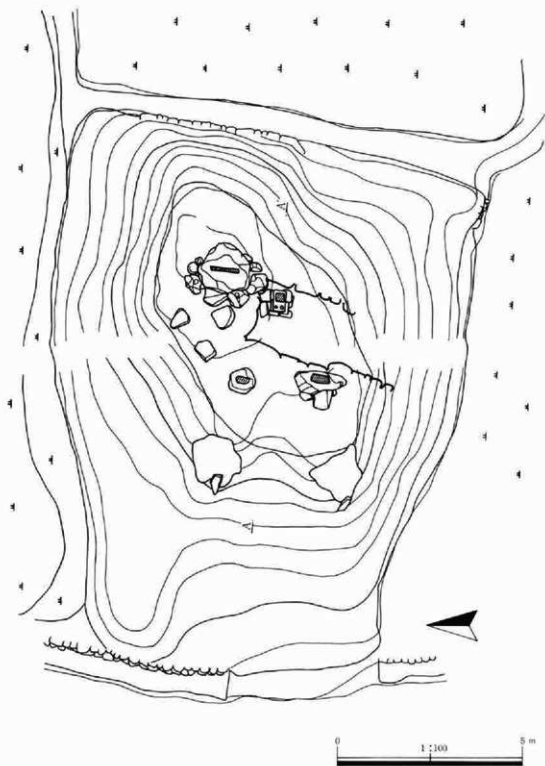
多量にC軽石を混入しており、部分的にはC軽石がブロック状になっている。黒色味が強い。

第8層 C軽石混入黒褐色粘質土層

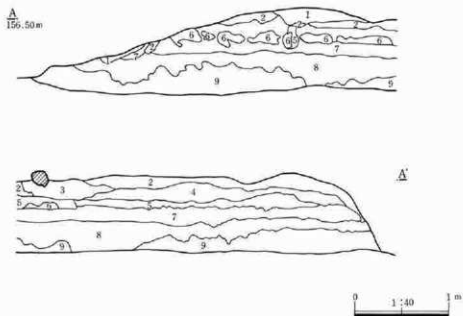


第465図 遺跡周辺の地形

群馬町都市計画図を使用



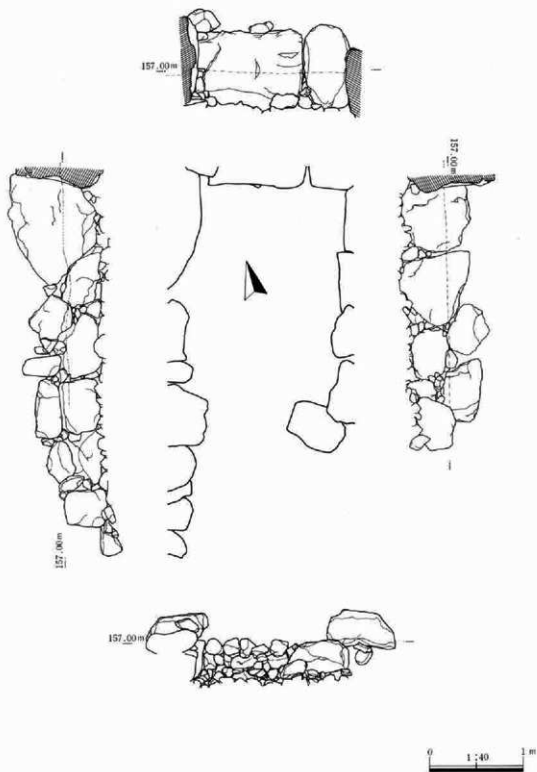
第466図 中里天神塚古墳墳丘実測図



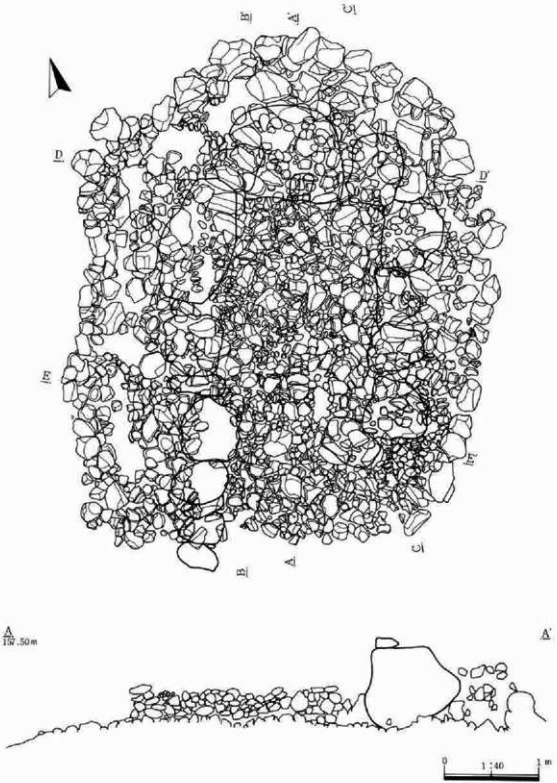
第467図 墳丘断面図

軽石粒が霜降り状に少量混入している。第7層に類似しているが、やや褐色味を帯び粘質がかかっている。

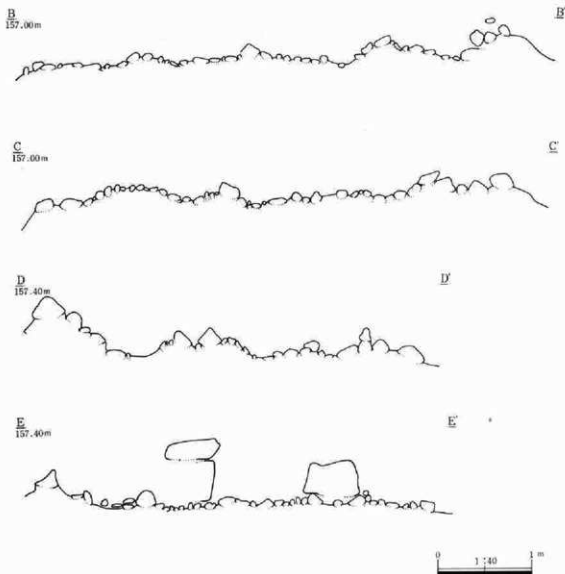
第9層 暗褐色軟質粘土層 (ソフト・ローム)



第468図 石室実測図



第469図 礎石実測図



第470図 補石エレベーション図

(6) 石 室

両袖式の横穴式石室で、安山岩質の崩れ石を使用している。天井石・両側壁・奥壁・羨道部のいずれも著しく破壊されており、玄室の根石と羨道の一部の根石が残存していた。

石室は地山を穿った土坑内に組まれたものと考えられるが、掘り方は墳丘西側で一部確認されているにすぎない。規模は現存長3.8m、玄室長2.25m、同幅1.55m、羨道部現存長1.65m、同幅0.9mで、主軸方位はN-17-Wである。石材は大きなもので1m角を超え、大割りしたものを使用している。壁面には凹凸があり揃っていないと言いきれない。巨石の間には小石をつめて補強している。

玄室内は礫を厚さ20cm程に敷きつめて礫床を形成する。奥壁および側壁を据えた後に礫を充填している。玄室内からの出土遺物として、金環5個と大刀・刀子・鎌・釘の破片が若干存在するが、多くはすでに持ち出されていたと考えられる。

羨道部は円礫混じりの土が詰まっており、土中から金環が1個発見されている。羨道部の下部においては、比較的しっかりしているので閉塞施設と考えられるが、大部分は盗掘時に積まれたものと推定される。

礎石は、石室内および主体部根石の下部において検出された。石室内部と根石下部とでは、石の設置方法および大きさに変化がある。したがって、主体部の根石を設置する時点で下部に礎石するとともに、安定させるため斜位方向からやや大きめの礎石を施し、後に主体部下部にやや小さめで比較的規模の揃った石を設置したものと考えられる。

裏込めは、裏込め石の一部が確認できたのみであった。根石は、主体部の東側から北側にかけての部分は明確に把握できた。しかし、南西部分の南側の羨道部入口にかけては確認できなかった。また、西側部分については、東側の根石と比較してやや小さくなり、根石として結論づけられるかどうかという疑問もある。

(7) 出土遺物

遺物はすべて主体部である石室内からの出土である。玄室内床面上に存在するものと、底面下に落ち込んでいるものがあった。また羨道部内の攪乱土中からも発見されている。出土遺物として金環6、鉄製の大刀、刀子、鎌、釘の破片がある。

金環（1～6） 主として玄室床面からの出土であるが、羨道部の攪乱土中からも1点出土している。6点の金環が大・中・小と対をなすかのような形状を呈しているが、出土位置は原位置から浮離した状態にあった。

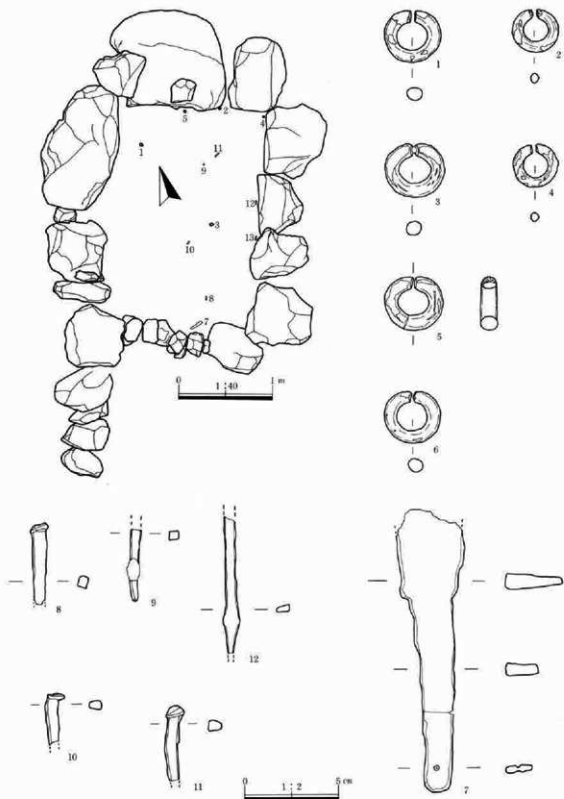
3・5は中身の銅胎に金箔をかぶせたもので、一對をなす同形同大のものである。金箔の残りは比較的良好である。規格は直径3.1cm、短径2.7cmで、断面は円形であるがややいびつである。切れ目は0.2cmを測る。重量は3が26.0g、5が26.8gである。1・6は一對をなすもので、中身の銅胎に金箔をかぶせている。金箔は半分以上が剝離しており遺存状態はあまり良くない。規格は同形同大で、長径2.9cm、短径2.6cm、切れ目は0.2cmを測る。重量は1が18.3g、6は20.0gである。2と4は同形同大で一對をなすものと考えられる。銅胎に金箔をかぶせているものの大部分剝離しており、極く一部しか残存していない。長径は2が2.5cm、4が2.3cmで、2の方が0.2cm大きい。短径は2・4とも2.1cmで、切れ目はともに0.25cmである。重量は1・2とも6.1gである。

大刀（7） 茎と刀身の一部のみの残存である。残存長は15cmで、平造りの直刀と考えられる。規格は刃幅3cm、背厚0.9cmで、茎の長さは10.2cmである。目釘穴が茎の端部から1.2cm内側に確認出来る。

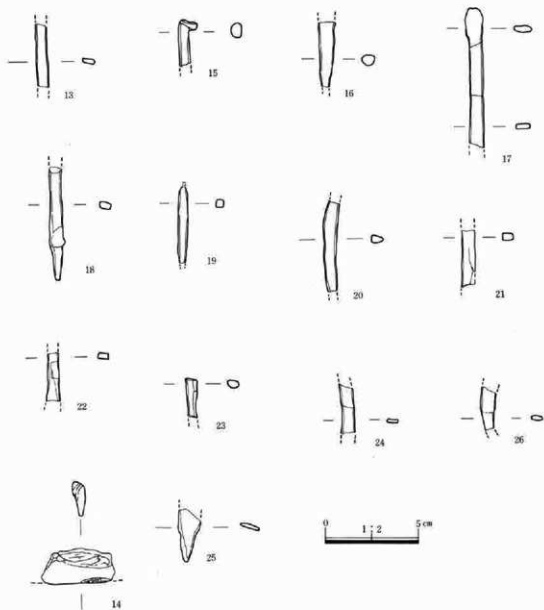
刀子（14） 身の一部のみであるが、刀子であると考えられる。刃部付近に木質が付着している。

鉄鎌（12、13、18、20、21、22、23、24、26） 完存するものはない。12と18は鎌身部と茎の一部を欠き、17は茎の一部を欠いている。その他はすべて茎の一部である。17は尖根式で、残存長7.2cmを測る。

鉄釘（8、9、10、11、15、16、19） 完存するものはない。8、10、11、15は頭部から身の一部、9



第471図 遺物出土状態図 出土遺物図①



第472図 出土遺物図②

は尖った先端部分から身の半分位が残存している。その他は身の一部である。すべて断面は方形で、頭部は半円形または不整形を呈する。身の部分にはすべてに木質状の付着物がみられる。

(8) 調査結果の概要

本古墳は、墳丘および墳丘の周囲が著しく削られていた。そのため、墳丘の規模をはじめ墓石や周堀の有無を確認することが出来なかった。横穴式石室下約25cmには、6世紀前半に降下したとされる榛名山ニッ岳火山灰（FA）が約6.5cm堆積している。したがって、榛名山FA火山灰降下以降一定の年月が経過した後に構築されたものと考えられる。

石室内から出土した遺物の様相と横穴式石室の形態から、また、墳丘中より埴輪片が全く発見されていないことから、7世紀代に築造されたものと考えられる。

第Ⅵ章 調査の成果と問題点

第1節 古墳時代・奈良時代の土器について

三ッ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡からは、合計160軒の住居跡が検出できた。このうち、古墳時代・奈良時代に属すると考えられる住居跡は、118軒である。

当遺跡には、古墳時代前期に属する住居跡はなく、すべてが古墳時代後期から奈良時代にかけての住居跡である。最も古い住居跡は、覆土中に榛名山の二ッ岳降下火山灰（以後略称のFAと記述する）が堆積しているものである。FAの堆積した年代は、6世紀前半と考えられている。当遺跡の住居跡は、間層を挟みFAが堆積していることから、5世紀末～6世紀初頭に廃棄された住居跡と推定している。

FAは、当遺跡住居跡群の上限を定める根拠であるが、下限を定める根拠ではない。即ち、当遺跡の住居跡のうち、どの住居跡が一般史の奈良時代に生活を営んだかを決定する直接的根拠はない。従って、奈良時代とは、概ね奈良時代であり、土器の比較から奈良時代になるであろうと言う事である。また、第2節の平安時代とも、便宜的に分けたものであり、時代区分等を意味するものではない。

以下、三ッ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡出土土器の分類を試みる。ここでの分類は、土器変化の流れを把握しようと試みたものであり、土器型式を捉えようとしたものではない。分類は、でき得る限り一住居跡出土の一括遺物、特に、最も普遍的である甕・杯を基にした。分類基準は、当遺跡内の重複関係に置くが、重複関係で分類できる部分は少ない。従って、分類基準に、周辺遺跡との比較を多く取り入れた。また、当遺跡の古墳時代～奈良時代の集落は、継続的に営まれたとする仮定に立脚している。

第1分類期

当期に属する住居跡は、三ッ寺Ⅲ遺跡9号住居跡だけである。同住居跡の覆土中には、約40cmの間層を挟み、FAが堆積している。同住居跡からは、甕・壺・杯がセットで出土している。そのなかで、当期を特徴付けているのは、球胴形の壺である。

甕は、明瞭な資料を欠くが、口縁部が緩やかに外湾し、胴部が大きく脹らむ三ッ寺Ⅲ遺跡9号住居跡№5（以下、三9住-5と略称で記述する）と、胴部の脹らみが少ない三9住-7がある。

壺は、胴部が大きく脹らみ、球胴形をしているが、口縁部の形態は異なっている。「コ」の字状に近い口縁部をもち、口縁端部が平らに切られている三9住-3、口縁部中央に段をもつ三9住-47、「く」の字状に近い口縁部をもつ三9住-1がある。この三個体の全体的な外形は類似しており、整形技法的にも、三9住-1の外表面にはヘラ削りが残るが、三個体の外表面及び口縁部内面にはヘラ磨きが施してある。しかし、三9住-2は、前述の3個とやや異なっている。胴部の脹らみは、更に大きくなり、器高より胴径の方が大きいと推測できる。口縁部の立ち上りは垂直に近く、口縁端部は内湾している。

杯は、大きく二種類に分けることができる。一つは、内稜をもち、口縁部が外折する形態の杯であり、三9住-8・三9住-10などが挙げられる。他方は、底部から体部にかけて緩やかな曲線を描いて立ち上り、そのまま口縁部に至る、三9住-14・三9住-15などの半球形の形態をなすものである。いずれの種類も、外面の底部から体部はヘラ削りであり、内面には放射状暗文を施している。しかし、三9住-18は

やや異なっており、内外面にヘラ磨きを施している。

第2分類期

当期は、三ッ寺III遺跡5号住居跡出土の一括遺物を指標とする。三ッ寺III遺跡2号住居跡・4号住居跡・14号住居跡・27号住居跡が当期に属する。当期の住居跡のうち、2号住居跡・5号住居跡・27号住居跡の覆土中には、FAが堆積しており、第1分類期の9号住居跡との間に時期的な大差はないものと考えられる。当期を特徴付けるのは、第一分類を特徴付けた壺が全く見られないことであり、須恵器模倣形態の杯が伴ってくることである。

三5住-1・三5住-3・三14住-1の壺は、第1分類期の三9住-5・三9住-7からの流れのなかにあるものと考えている。胴部は緩やかな脹らみをもち、最大径は胴部中央にある。口縁部の外反は、第1分類期よりも強い。三5住-4は、前者を小型にした形態をしている。

三5住-22の甗は、口縁部は「く」の字状に外反し、胴部上半から中央の曲線は非常に緩やかであるが、胴部下半で窄まる形態である。胴部の内外面には、ヘラ磨きが施されている。

杯は、第1分類期からの系統を引く、内稜をもつ三5住-7・半球形の三5住-13の他、須恵器模倣の杯が伴ってくる。三5住-17・三27住-5は、底部から体部にかけて緩い曲線を描き、口縁部は直線的に立ち上る形態をし、外稜を特徴とする須恵器模倣の杯である。三5住-17の口縁端部は沈線状になっている。三5住-16は、平底であり、口縁部は内湾する。当遺跡では、特殊な形態の杯である。

高杯の出土数は少ないが、三5住-41は、体部から口縁部が直線的に拡がり、脚部が短い形態をしている。三15住-18は、手づくね土器である。

第3分類期

三ッ寺III遺跡12号住居跡出土の遺物を指標とした。三ッ寺III遺跡3号住居跡・15号住居跡が当期に含まれる。当期の特徴は、第1分類期・第2分類期では主流であった、内稜をもつ形態の杯・半球形の杯が減り、須恵器模倣形態の杯が増え、主流を占めてくることである。FAの堆積も認められない。

壺は、大きく2種類が考えられる。三12住-4の壺は、第2分類期の三5住-1等の系統を引くものであり、大差は認められない。三12住-30の壺は、胴部が大きく脹らみ、最大径を胴部中央にもつものである。第1分類期の壺との系統も考えられるが、第2分類期に同種の壺を確認することができず、明瞭に辿ることはできない。

甗の基本的な器形に、大きな変化は認められない。しかし、三12住-3の甗は、第2分類期の甗に較べて、胴部上半の脹らみが目立ち、胴部下半の窄まりが強い。

杯は、三3住-3等の内稜を特徴とする杯、三15住-3等の半球形の杯は少なくなり、三12住-7等の須恵器模倣形態の杯が数多くなってくる。杯で注目されるのは、三15住-4・三12住-15のような、大型の須恵器模倣形態の杯が現われてくることである。三3住-9は、須恵器模倣の形態をしているが、他の杯に較べて口縁部が外傾しており、内外面の器面全体にヘラ磨きを施している。

高杯は、須恵器模倣杯に脚を付けた形態の三3住-22と、半球形の杯に脚を付けた形態の三12住-21がある。両者とも、脚は短い。

第4分類期

三ッ寺III遺跡94号住居跡の一括遺物を指標とする。三ッ寺III遺跡60号住居跡・85号住居跡が当期に属

する。当期の特徴は、第1分類期から第3分類期に見られた、内稜を特徴とする杯・半球形の杯が消滅することである。

第3分類期の三12住-4の系統を引くと考えられる壺、三94住-3・三94住-24は、長胴化の傾向が進み、最大径が胴部から口縁部へ移る。しかし、胴部の脹らみは残っている。三94住-1の壺は、第3分類期の三12住-30に較べて、最大径が胴部中央から胴部上半に移動している。口縁部もやや短くなっており、第3分類期に見られた、ヘラ磨きも施されていない。

杯は、前述のように、須恵器模倣形態の杯の独占となってくるのであるが、その特徴である外稜の不瞭な杯、三94住-13も現われてくる。また、須恵器模倣の形態をしているが、三60住-13・三60住-16は底部に暗文が施されており、三60住-15は口縁部に段をもつ。更に、三60住-12・三60住-14・三85住-9の口縁部は内傾しており、須恵器蓋杯の杯身を模倣した形態と考えられる。これらの異なった形態の杯は、地域的な異なりを表わすのではないかと推測している。

その他、当期には、三94住-9・三60住-5の壺、三94住-8の小型壺、三94住-20の鉢、三85住-17の高杯などが共伴してくる。

第5分類期

指標となるのは、三ツ寺III遺跡58号住居跡出土の遺物である。三ツ寺III遺跡17号住居跡、保波田遺跡1号住居跡・12号住居跡が当期に属する。当期に属する住居跡からは、須恵器の蓋杯が共伴してくる。第4分類期以前にも、須恵器破片の出土は見られるが、日常器として使用されたと推定できる杯類が出土するのは、第5分類期以降である。

壺は、長胴化が顕著になり、胴部の脹らみは殆んどなくなる。三58住-3・三58住-6は、第4分類期の三94住-3・三94住-24の系統で捉えられるものである。三58住-3・三58住-6の壺は、口縁部は共に大きく外反するが、前者は頸部のくびれが強く、胴部が僅かに脹らむ形になっており、後者は頸部から胴部下半にかけて直線的である。保1住-2は、第4分類期の三94住-1に較べて、胴部上半の脹らみがなくなり、全体的に滑らかな曲線になっている。保12住-19は、球胴形の小型壺である。甔は、保12住-18のような、小型のものは認められるが、大型の甔は見られない。

杯は、第4分類期と同じく、須恵器模倣形態の杯が主流であるが、その特徴である外稜はやや崩れてきている。三58住-14・三58住-18・保12住-12は、外稜がほとんど見られない。また、保12住-10は、口縁部が内傾する第4分類期の三60住-14等の流れをくむものである。保12住-5・保12住-9は、口縁部に段を持つ第4分類期の三60住-15等の流れをくむものと考えられる。

三58住-26・三58住-28・保12住-17は、須恵器の蓋であり、三58住-25は身である。前述のように、これらの須恵器蓋杯は、第4分類期以前には見られなかったものである。

第6分類期

当期に属する住居跡には、三ツ寺III遺跡51号住居跡・67号住居跡・87号住居跡、保波田遺跡26号住居跡・37号住居跡が挙げられる。良好なセット関係は、捉えることができなかったが、三ツ寺III遺跡51号住居跡・保波田遺跡37号住居跡出土の遺物を指標とする。当期は、長胴形態の壺が最も長胴化する時期である。また、杯は、須恵器模倣の形態を離れた、口縁部が短く直立するものや、半球形のものが見られる時期である。

保37住-12・保37住-13の甕は、著しく長胴化が進んだ甕である。保37住-12は、口縁部が大きく外反し、頸部はくびれ、胴部は直線的であり、底部近くで大きく窄まる。保37住-13の胴部は、緩やかな曲線を描くが、底部付近の窄まりは大きい。底部は、小さく、ほとんどない。保37住-3は、胴部が大きく脹らむ甕である。保37住-2・保26住-3の甕は、第5分類期の三58住-12の流れをくむものと考えられ、保37住-4・保37住-11の甕は、保12住-19の流れをくむものと考えられる。

杯は、須恵器模倣形態の杯が主流である。しかし、その形態は大きく崩れてきている。三51住-9は、口縁部が短く、直立する形態の杯であるが、その形は三51住-13を通した、須恵器模倣形態の変形と考えることが可能であろう。丸底の底部から緩やかな曲線を描いて口縁部に至る、半球形の形態の杯、保26住-7・保26住-9は、第5分類期には見られなかったものである。三51住-16は大型の杯である。

第7分類期

三ッ寺III遺跡68号住居跡出土の遺物を指標とした。三ッ寺III遺跡80号住居跡・保渡田遺跡17号住居跡が当期に属する。当期は、第6分類期まで続いてきた、甕の長胴化が止まり、胴部が再び脹らみ始める時期である。

三68住-1・三68住-3は、胴部の脹らみが少なく、長胴の傾向を残す甕である。しかし、三68住-4・保17住-1の甕は、長胴化の傾向が崩れ、胴部上半が脹らみ、胴部下半が大きく窄まる形態をしている。三68住-5は、球胴形の甕であるが、第6分類期の保37住-3に比べ、頸部のくびれが弱くなり、口縁部の外反は緩やかになっている。三68住-6・三68住-18の甕は、第6分類期の三37住-4・三37住-11からの流れのなかに存在すると考えられるが、口縁部の外反が目立つようになる。

杯は、第6分類期と同様、三80住-5等の須恵器模倣形態の杯と、三68住-23等の半球形の杯が混在する時期である。三68住-30は、半球形の杯に、短く直立した口縁部を付けた形態をしている。第6分類期の大型の杯、三51住-16と同じ形態をしている。当期の大型の杯、三68住-13も同じ範疇で考えることができよう。保17住-3は、須恵器模倣杯を大型化した形態である。

第8分類期

三ッ寺III遺跡53号住居跡出土の遺物を指標とする。保渡田遺跡6号住居跡・7号住居跡が当期に属する。甕は、第7分類期から認められた、長胴化を離れる傾向を継承している。杯は、須恵器模倣形態の系統は傍流となり、半球形の杯・半球形で短い口縁部が直立する形態の杯・半球形で口縁部が内湾する形態の杯が主流となる。

第7分類期に比べ、甕に大きな変化はないが、口縁部の外反は強くなっている。三53住-1の甕は、胴部上半にやや脹らみをもち、胴部下半で小さく窄まる。底部は非常に小さい。三53住-4の甕は、前者に比べて頸部のくびれが強く、胴部上半の脹らみが大きい。三53住-2の甕は、胴部下半の窄まりは弱く、底部が大きい。保7住-3の甕は、球胴型の甕の系統を引くものである。

杯は、前述のように、須恵器模倣形態の杯は僅かになる。三53住-11等は、須恵器模倣の形態が残っているものである。三53住-12・保6住-10等は、半球形の杯であるが、口縁部の内湾傾向を窺わせている。保7住-13・保7住-14等は、口縁部が内湾する杯であり、保6住-8・保6住-9等は、短い口縁部が直立する杯である。三53住-8等の大型の杯は、半球形・口縁部内湾形の杯と同じ形態である。

第9分類期

保渡田遺跡3号住居跡・57号住居跡出土の遺物を指標とするが、明瞭なセット関係は、把握できなかった。当期になると、甕の器壁は薄くなり、須恵器模倣の杯は姿を消す。

保3住-1・保57住-13は、三53住-1・三53住-4からの流れをくむ甕である。器形に大きな変化は認められないが、器壁が薄くなる傾向とともに、底部が大きくなり、底部と胴部の境が鋭くなっている。

保3住-6・保3住-8は、口縁部が短く、直立する形態のものであり、第8分類期の保6住-8の延長線上に位置付けられるが、口縁部は目立たなくなっている。保22住-8は、口縁部が内湾する形態の杯である。保3住-11・保22住-9は、第8分類期の三53住-8等の流れをくむ大型の杯である。保22住-11も大型の杯であるが、器高は低く、丸底ではあるが底部の湾曲は僅かであり、体部から口縁部にかけて大きく湾曲する。当期では、やや異なった形態の杯である。

保57住-8は、高台をもつ須恵器の杯であるが、底部の方が高台の下位になるものである。

第10分類期

当期も明瞭なセットを把握することはできなかったが、三ツ寺III遺跡41号住居跡、保渡田遺跡35号住居跡・48号住居跡を指標とした。杯の大型化が目立ち、底部平坦化傾向が見られる時期である。

三41住-2の甕は、胴部下半にくびれが見られるが、基本的な器形は、第9分類期の保57住-13と差がない。胴部上半に脹らみをもち、胴部下半で窄まる形態である。

保30住-3・保48住-21等は、大型で、口縁部が内湾する杯であり、第9分類期の保3住-10に見られたものである。保10住-13・保48住-22は、体部から口縁部にかけて湾曲する、器高の低い杯である。底部平坦化の傾向は、この両者に表われている。三41住-4・保10住-3の杯は、第9分類期の保22住-8との流れで捉えられるものである。保35住-13・保35住-14の杯は、器高は低く、平底に近い丸底をし、口縁部が大きく広がる杯である。

三48住-28の須恵器の杯は、体部下端から底部にかけてヘラ削りを施している。保35住-15・保35住-16の須恵器の蓋は、大きなつまみと短いかえりの付くものである。

第11分類期

三ツ寺III遺跡66号住居跡・74号住居跡出土の遺物を指標とする。甕は、胴部上半の脹みが目立ちはじめ、器壁の薄くなる傾向が進む時期である。杯は、口縁部の湾曲が弱くなってきている。

三74住-1の甕は、第10分類期の三41住-2に較べて、全体が丸味を帯びている。口縁部は大きく外湾し、頸部のくびれは強く、胴部上半が脹らみをもつものであるが、前述のように、器壁は薄くなっている。

三74住-6・三66住-6の杯は、第10分類期の保10住-13・保48住-22と同様に、器高は低く、底部の丸味は弱くなり、しかも、口縁部の湾曲は弱くなってきている。三66住-4・三66住-5は、第10分類期の三41住-4・保48住-29からの流れで捉えることができる、小型で口縁部が比較的湾曲する杯である。

三74住-9・三74住-10等の須恵器の杯は、体部下端から底部にかけて、ヘラ削りやヘラナデを施しているものである。三66住-13の須恵器の蓋は、かえりがなくなり、口縁部が内傾して折れ曲がる形態のものである。

第12分類期

三ッ寺Ⅲ遺跡33号住居跡を指標とし、保渡田遺跡46号住居跡を含めたが、当期に属する資料は少ない。当期の特徴は、器壁が薄く、胴部上半が大きく張り、胴部下半が小さく窄まる、三33住-1の壺である。口縁部・底部は欠けているが、胴部の断面形は逆三角形である。

三33住-5等の杯は、第11分類期の杯と大差はないが、口縁部が内湾するものは認められない。保46住-4は、体部から口縁部にかけて外湾するものである。

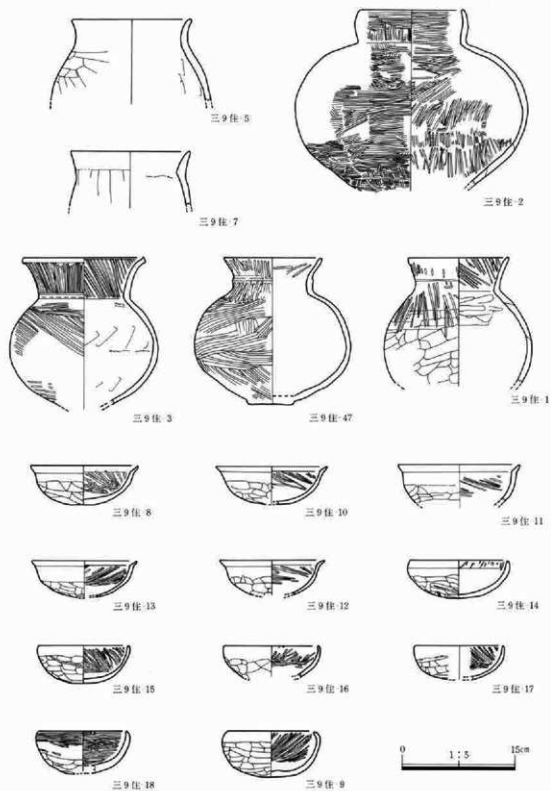
三33住-10・保46住-5の須恵器の杯は、第11分類期と同様、体部下端から底部にかけてヘラ削りを施しているものである。三33住-8は、底部に、工具による刺突が多数ある鉢である。

三ッ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡の土器変化の流れに、12の分類期を設定してみた。でき得る限り、同一住居跡の一括遺物を設定基準にしたつもりであるが、良好な一括遺物を得られなかった部分もある。特に、後半の分類期設定には、明確さを欠く部分が残るであろう。しかし、基本的な方向性は、一定の蓋然性を持ち得るであろう。

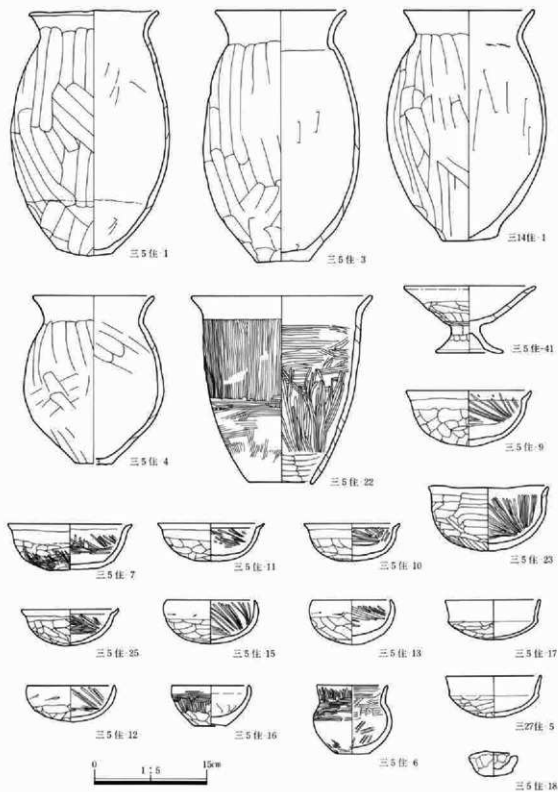
古墳時代の当遺跡周辺には、豪族の館跡と考えられる三ッ寺Ⅰ遺跡があり、大型前方後円墳3基が保渡田地内に現存する。三ッ寺Ⅰ遺跡・前方後円墳と同時期の遺物が発見されている遺跡としては、当遺跡の他、三ッ寺Ⅱ遺跡・井出村東遺跡・熊野堂遺跡・中林遺跡などを挙げる事ができる。また、井野川流域の同道遺跡・芦田貝戸遺跡・御布呂遺跡・熊野堂遺跡からは、同時期の水田跡が発見されている。即ち、当遺跡周辺からは、政治の場としての豪族の館跡とその政治的カリスマ性を支える大きな古墳、民衆の生活の場として散在する集落、そして、それらを経済的側面から支える水田跡が発見されている。これらは、社会が時代と言う産屋の中で産み落としたものであり、歴史像を読み取る貴重な材料である。この材料を基として、政治的・社会的・宗教的・経済的な構造を解析し、そして、総合的な歴史を叙述することは、現代と言う時代が負う役割であり、宿命である。

〈引用・参考文献〉

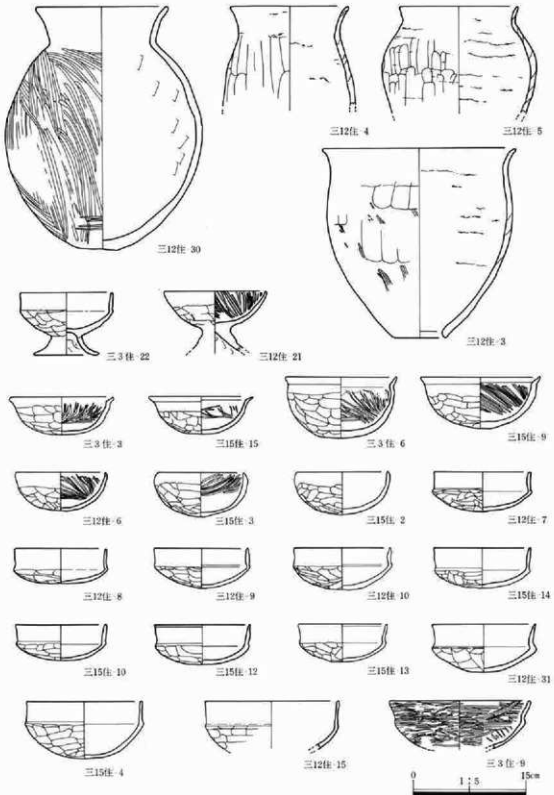
- 『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第五輯 上毛古墳地誌』群馬県 1938 (昭和13年)
- 尾崎喜住雄・井上唯雄 「入野遺跡」吉井町教育委員会 1962
- 岡田淳子・服部敬史他 「八王子中田遺跡」八王子市中田遺跡調査会 1968
- 井上唯雄 「寺内遺跡」赤城村教育委員会 1975
- 井上唯雄 「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究 第8号』群馬県 1978
- 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一編集 「特集・火山灰堆積物と遺跡1」『考古学ジャーナル』157 ニュー・サイエンス社 1979
- 神戸聖造・関口修・高橋政子 「御布呂遺跡 高崎市文化財報告第18集」高崎市教育委員会 1980
- 田村孝・小野和之・金井潤子 「芦田貝戸遺跡Ⅱ 高崎市文化財報告第19集」高崎市教育委員会 1980
- 松本浩一・平野進一・佐藤明人他 「八幡原A・B 上境 元島名A」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
- 今井幹夫・井上大他 「本宿・郷土遺跡」富岡市文化財保護協会 1981
- 立石盛詞他 「関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告XV—後編Ⅱ—」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1981
- 井上唯雄他 「歌舞伎遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 下城正・女屋和志雄・小安和順 「三ッ寺Ⅰ遺跡」『年報1』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 長谷部達雄他 「三ッ寺Ⅱ遺跡」『年報1』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 前原章・志村哲他 「AⅠ期之内遺跡群」藤岡市教育委員会 1982
- 五十嵐至 「昭和56年度埋蔵文化財調査略報 保渡田Ⅱ遺跡・中林遺跡」群馬町教育委員会 1982
- 下城正・女屋和志雄・小安和順・新井龍二 「群馬県三ッ寺Ⅰ遺跡調査概要」『考古学雑誌第17巻第4号』日本考古学会 1982
- 熊登健・中沢徳・石坂茂他 「同道遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 大和久廣平・大賀健他 「井出村東遺跡」群馬町井出村東遺跡調査会 1983
- 坂口一・三浦京子 「中尾 遺物類」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 飯塚三二・井川達雄・坂井隆他 「熊野堂遺跡(1)」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 坂井隆他 「熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨森遺跡」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984
- 茂木由行 「群馬県における丸高式土器の編年」『群馬考古通信 第9号』群馬考古学研究会 1984
- 鈴木地雄 「いわゆる北武蔵系土器器形の動態」『土曜考古 第9号』土曜考古学研究会 1984



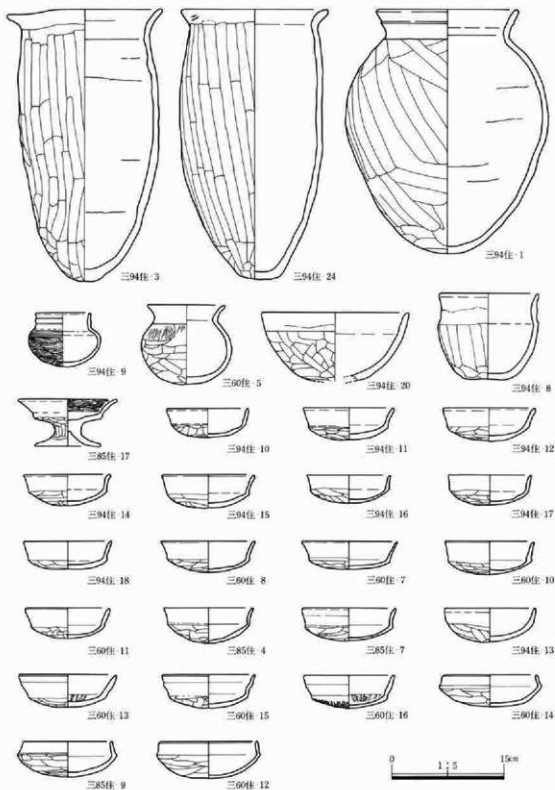
第473図 三ツ寺田遺跡・保渡田遺跡第1分類期



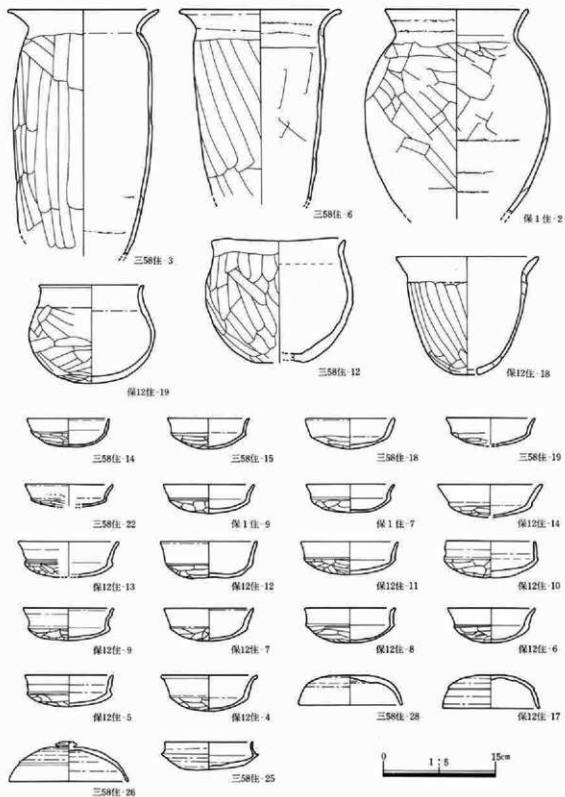
第474図 ミツ寺田遺跡・保渡田遺跡第2分類期



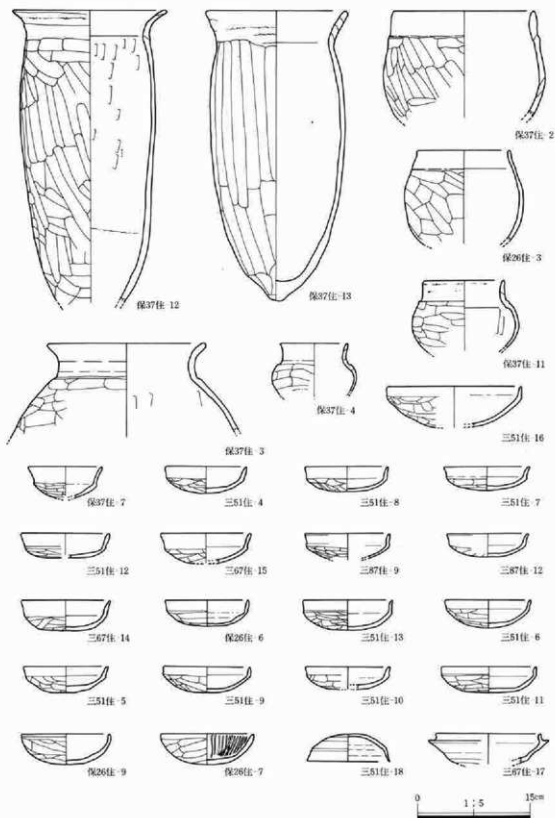
第475図 ミツ寺山遺跡・保渡田遺跡第3分類期



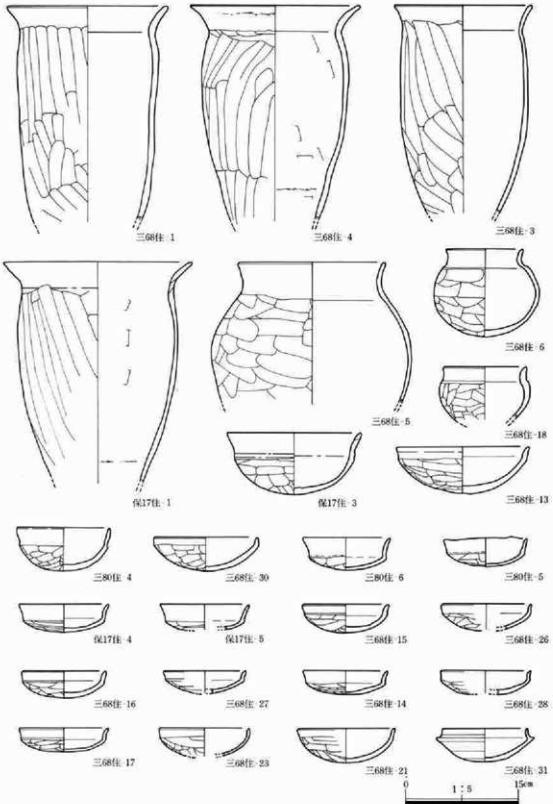
第476図 ミツ寺田遺跡・保波田遺跡第4分類期



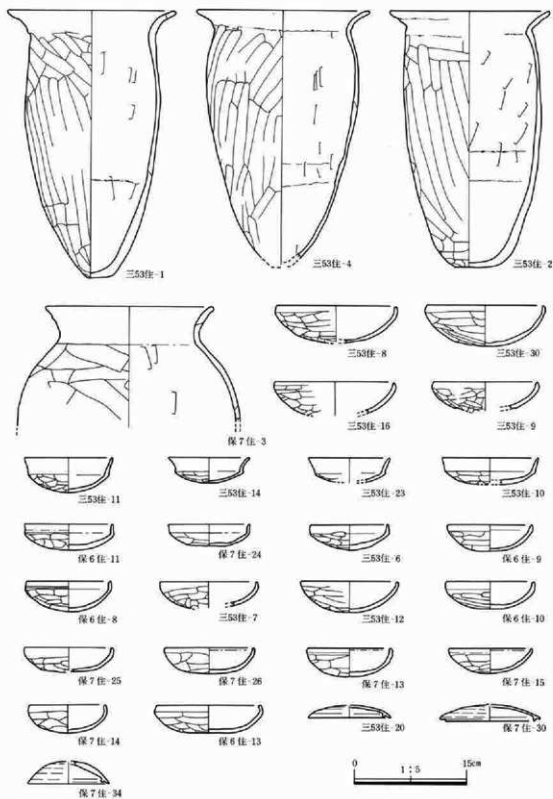
第477図 三ツ寺田遺跡・保渡田遺跡第5分類期



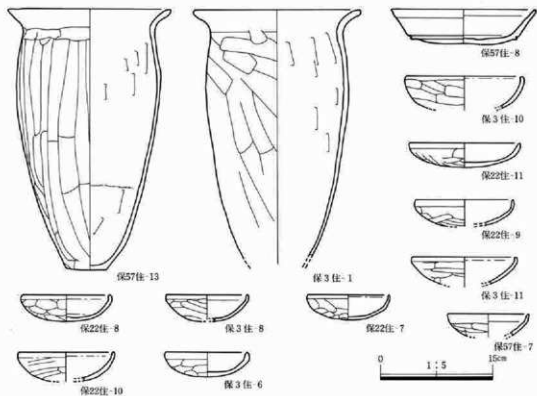
第478図 ミツ寺Ⅲ遺跡・保波田遺跡第6分類期



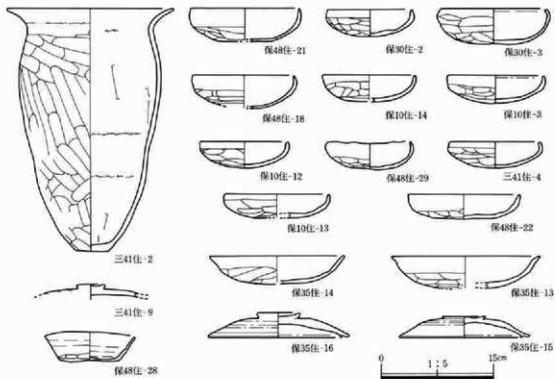
第479図 三ツ寺川遺跡・保渡田遺跡第7分類期



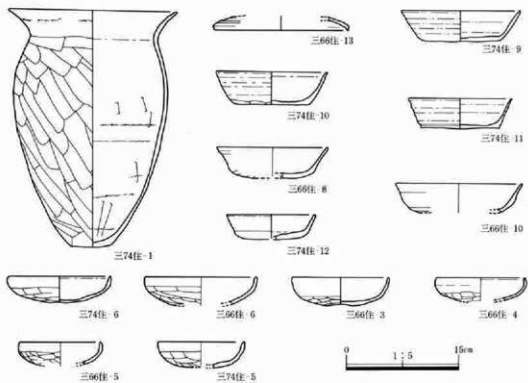
第480図 ミツ寺田遺跡・保波田遺跡第8分類期



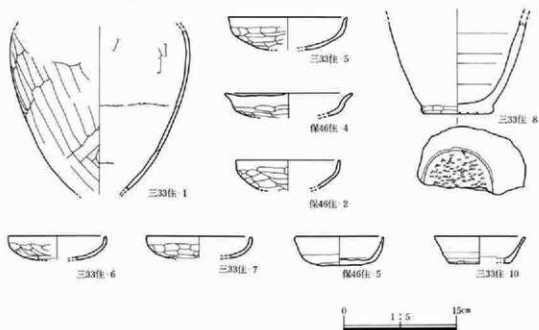
三ツ寺田遺跡・保渡田遺跡第9分類期



第481図 三ツ寺田遺跡・保渡田遺跡第10分類期



三ツ寺田遺跡・保渡田遺跡第11分類期



第482図 三ツ寺田遺跡・保渡田遺跡第12分類期

第2節 平安時代の土器について

当該期の遺構は、唐沢川をへだてて三ッ寺Ⅲ遺跡・保渡田遺跡の両遺跡よりほとんど全域にわたり検出された。遺構のうち住居跡は三ッ寺Ⅲ遺跡14軒、保渡田遺跡12軒の計26軒を数える。

大概すると、カマドは住居跡の東辺南寄りに構築され、他の時代の住居跡に比べて規模は小さく、形状は不整の方形を呈する。柱穴・壁周溝はほとんど確認されず、貯蔵穴は小型の楕円形を呈し、住居跡内の東南隅に位置する傾向が多い。同時代で重複するものは少なく、保渡田遺跡では41号住居跡・42号住居跡・43号住居跡・47号住居跡の4軒が切り合い、三ッ寺Ⅲ遺跡では22号住居跡・23号住居跡の2軒が重なり合うだけである。

清里・陣場編年の第Ⅰ期の堅穴住居跡8軒、第Ⅱ期の堅穴住居跡9軒、第Ⅲ期の堅穴住居跡2軒、第Ⅳ期の堅穴住居跡2軒、第Ⅴ期～Ⅵ期の堅穴住居跡0軒、時期不詳が5軒と、時期が新しくなるに従って、遺構の検出、出土土器の数が少なく衰退していく傾向にある。

遺物は土師器・須恵器・土師質土器などが主な出土物である。清里・陣場遺跡での平安時代土器編年を援用して概要を記す。各遺構からは数多くの土器類が出土しているが、須恵器杯の糸切りとその後の無調整から羽釜・土師質土器の出現、その推移の時期の年代と続行していく。

特徴的な遺物は少なく、墨書土器が2例、灰釉陶器が2例である。砥石は5点、金属製品が数点出土。平安時代の集落は保渡田遺跡・三ッ寺Ⅲ遺跡を経て、南側約50mの三ッ寺Ⅱ遺跡へと続いていく。

集落の変遷を考えるに、古墳時代から奈良・平安時代にかけて脈々として続いた村落であるととらえられる。

第13分類期

三ッ寺Ⅲ遺跡37号住居跡・86号住居跡・92号住居跡、保渡田遺跡13号住居跡・34号住居跡・41号住居跡・51号住居跡・63号住居跡が当期に属する。

土師器壺：口縁部は「コ」の字状の前段階の外反ものから、明らかな「コ」の字状口縁のものまであり、器壁は、全体に薄手である。肩部は横方向のヘラ削り、胴部は縦方向のヘラ削り。最大径は胴部上半にもつ。

土師器台付甕：口縁部は、ほぼ「コ」の字状を呈し、胴部は丸味をもつ。器壁は、全体に薄手である。肩部は横方向のヘラ削り、台部は横ナデ。指痕が口縁部外面に認められる。最大径は胴部上半にもつ。

土師器杯：偏平な丸底を呈するが平底に近く、口径の大きい、器高の低い杯。口縁部はやや直線的で横ナデ、体部は雑なナデ、底部は手持ちヘラ削り。器壁は、底部が薄手となる。

須恵器杯：口径・底径が大きく、器高が低い。体部は直線的である。底部は回転糸切り後無調整。出土数が多い。灰色を呈する、焼きの硬質な杯。器壁は、底部が厚手となる。

須恵器蓋：天井部から体部にかけてやや丸味をもつ。口縁部は垂直に屈曲し、器壁は天井部が厚手となる。天井部は回転ヘラ削り、体部から口縁部はロクロ整形。灰白色を呈し、焼きは硬質である。

第14分類期

三ッ寺Ⅲ遺跡13号住居跡・24号住居跡・29号住居跡・31号住居跡・36号住居跡・59号住居跡、保渡田遺跡42号住居跡・43号住居跡・47号住居跡が当期に属する。

土師器甕：出土数が多く、口縁部は「コ」の字状が明瞭となる。肩部は横方向のヘラ削り、胴部は縦方向のヘラ削りである。器壁は口縁部から胴部にかけて薄手である。最大径は胴部上半にもつ。

土師器台付甕：口縁部は「コ」の字状が明瞭となり、胴部は丸味をもつ。台部は短かく、端部がやや広がる。台部の接合は丁寧であり、器壁は、全体的に薄手となる。肩部は横方向のヘラ削り、胴部は斜め方向のヘラ削りである。台部は丁寧な横ナデ。最大径は胴部上半にもつ。

須恵器杯：口径・底径が大きく、器高が低い。ロクロ整形が内外面に明瞭に残っている。底部は、回転糸切り後、無調整である。体部は直線的であり、底部は中央がやや盛り上がる。口縁部から底部にかけて、器壁は均一である。灰白色を呈し、焼きは硬質である。

須恵器椀：底部は回転糸切り後、短い高台を丁寧に貼付。ロクロ整形が内外面に明瞭に残っている。器壁は均一である。灰白色を呈し、焼きは硬質である。

須恵器皿：口径・底径が大きく、器高が低い。ロクロ整形が明瞭に残り、口縁部から体部にかけての器壁は薄手である。底部は回転糸切りであり、器壁は、やや厚手である。

第15分類期

三ッ寺III遺跡61号住居跡・保渡田遺跡24号住居跡が当期に属する。

土師器甕：口縁部は「コ」の字状が弱くなり、口縁部から胴部にかけて器壁はやや厚手となる。肩部から胴部は不定方向のヘラ削りである。口縁部の横ナデがやや雑になり、輪積み痕が残る。口径がやや小さく、全体に小型化する。

土師器台付甕：口縁部は、「コ」の字状が崩れ、口縁端部が外反する。器壁は厚手である。胴部は不定方向のヘラ削りであり、やや丸味が欠けている。最大径は胴部中央にもつ。

須恵器杯：底径が小さく、器高が高くなり、口縁端部がやや外反する。器壁は、口縁部から底部にかけて厚手である。底部は回転糸切りであり、体部から底部にかけて丸味をもつ。

須恵器椀：口縁端部が外反し、全体的に丸味を帯びてくる。底部は回転糸切り後、高台をやや開いた形で貼付。接合痕が雑に残る。

第16分類期

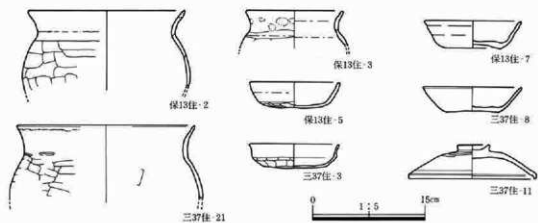
保渡田遺跡5号住居跡・28号住居跡が当期に属する。

土師器羽釜：口縁部はやや内傾し、口縁端部は平らである。鈎は胴部に水平に丁寧に貼り付け、胴部中央から下半は縦方向のヘラ削りである。底部は不定方向のヘラ削りである。器壁は、全体に均一であるが、底部がやや厚手である。最大径は胴部上半にもつ。

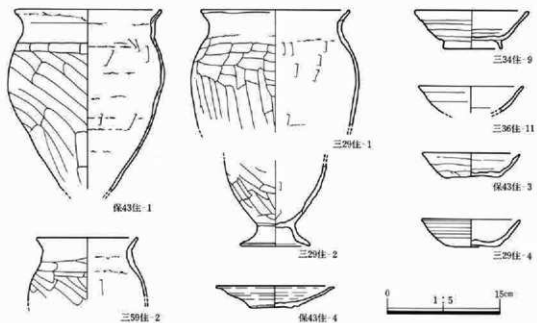
土師質土器椀：体部は丸味をもち、ロクロ整形が明瞭に残る。底部は回転糸切り後、高台を貼り付け。口縁部から体部にかけての器壁の厚さは均一であり、底部が厚手となる。

灰陶陶器椀：口縁端部はやや外反し、体部は丸味をもつ。器高はやや低い。底部は回転糸切り後、丁寧に高台を貼り付け。ロクロ整形は丁寧であり、器壁の厚さはほぼ均一であり、底部はやや厚手である。

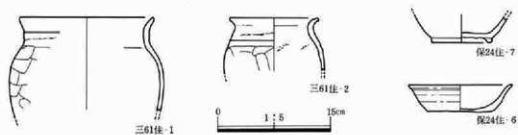
灰陶陶器皿：器高は低い。底部は回転糸切り後、回転ヘラ削りを施し、短い高台を貼り付け、やや雑なナデ。軸は漬けがけである。



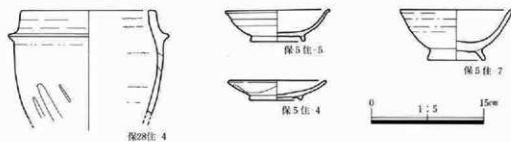
三ツ寺川遺跡・保渡田遺跡第13分類期



三ツ寺川遺跡・保渡田遺跡第14分類期



第483図 三ツ寺川遺跡・保渡田遺跡第15分類期



第484図 三ツ寺田遺跡・保渡田遺跡第16分類期

〈引用・参考文献〉

- 須田茂他 「保渡田遺跡」 『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報 VI』 群馬県教育委員会 1980
 都丸肇他 「三ツ寺田遺跡」 『上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報 VI』 群馬県教育委員会 1980
 中沢清他 「清里・陣場遺跡」 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981
 長谷部達雄他 「三ツ寺田遺跡」 『年報1』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982

第3節 三ツ寺III遺跡9号土壌墓出土の人骨について

石 守 晃

1. 遺存状況

9号土壌から出土した骨は、形態的な特徴などから成人の人骨と思われる。これらの人骨は全て焼骨であり、かつ6cm以下の破片、細片あるいは骨粉である。これらはやや硬質ではあるが、変形し屈曲しているものもあって、その表面には多少粗造化が認められる。その数は破片、細片で30以上が数えられる。人骨は幾つかのブロックに分けて取り上げられているが、このうち一定の大きさの破片を含む9ブロックのものについて若干を述べる。

2. 出土人骨

- ① 取り上げ番号No2の人骨 長さ5.3cmを測る右側大腿骨後面の可能性も考えられる長骨片(B-1)がある。その他、長さ1.8cmの長骨片(B-2)と、径1.2cm以下の海綿質部分の骨片(B-3)がある。
- ② 取り上げ番号No3の人骨 長さ4.2cmを測る長骨(B-4)があり、左側腓骨やや下位の後縁部分と思われる。その他、長さ1.7cmの長骨片(B-5)がある。
- ③ 取り上げ番号No5の人骨 長さ5.4cmを測る右側脛骨前縁部と思われる長骨片(B-6)と、長さ1.7cm以下の大腿骨下端部の可能性が考えられる骨片(B-7)がある。
- ④ 取り上げ番号No6の人骨 長さ3.2cmを測る脛骨上部の前縁を中心とすると思われる長骨片(B-8)。その他、径2cm以内の脛骨上位の関節面部分と思われるもの(B-9)、長さ1.6cmの長骨片(B-10)がある。
- ⑤ 取り上げ番号No12の人骨 長さ5.4cmを測る右側大腿骨中位の内側と思われる長骨片(B-11)があり、他に、長さ1.9cmを測る長骨片(B-12)がある。
- ⑥ 取り上げ番号No13の人骨 長さ4.5cmを測る右側腓骨上位の内外側面を中心とする長骨片(B-13)と思われるもの、および長さ1.2~1.8cmを測る前縁部などの腓骨片と思われるもの(B-14)がある。他に径2.3cm以下を測る脛骨上位の関節面部分と思われるもの4片以上(B-15)がある。
- ⑦ 取り上げ番号No17の人骨 長さ2.5cmを測る右側脛骨外側下部と思われる骨(B-16)とこの破片と思われる細片がある。
- ⑧ 取り上げ番号No20の人骨 長さ5.3cmを測る左側脛骨下位の可能性も考えられる長骨片(B-17)と長さ4.7cmを測る脛骨前縁部の可能性も考えられる長骨片(B-18)の骨端縁部分は化骨している。
- ⑨ 取り上げ番号No23の人骨 径2.7cm以下の大腿骨下端の関節面部分と思われる骨片2片(B-19)がある。

3. 小 結

以上のように9号土壌から出土した人骨は、その部位において重複するものがなく、断定はできない

第VI章 調査の成果と問題点

が1個体分のものである可能性が考えられる。また、B-17が脛骨下位とすれば、その化骨から20歳以上のものと考えられるが、この人骨の年齢を特定することはできなかった。性別についても特定できなかった。本土墳は火葬墓と思われるが、これらの人骨の出土位置を見ると、規則性は認められず、再葬時の火葬あるいは埋葬には供せられなかったものと思われる。

〈参考文献〉

金子壯之助 「日本人体解剖学」 1968

池田次郎 「高松塚被葬者の推定年齢について」 『季刊人類学』 第6巻第1号 P78～111 1975

第4節 三ツ寺III遺跡2号土壇墓出土の馬歯・馬骨について

はじめに

前回日高遺跡出土の馬歯・馬骨について調査したが、その結果従来考えていたことと異なり日高遺跡には中形馬が意外と多く存在していたことを確認⁽¹⁾することが出来た。今回は三ツ寺III遺跡の馬歯・馬骨を調査する機会を得たので中世以降の馬の大きさ、形態及び改良度等について検討を加えたい。

1 調査内容

この調査に伴い依頼内容は次のとおりである。出土馬歯・馬骨についてその馬の性、年齢、大きさ及び改良度等について検討する。

2 調査方法と使用した基準

(1) 調査方法

① 出土馬歯・馬骨の部位の検討を行う。② 出土馬歯・馬骨の性の検討を行う。その方法として馬歯については犬歯の有無により、馬骨については寛骨によりこの馬の性別を検討する。③ 出土馬歯・馬骨について年齢の検討を行う。その方法として出土馬歯・馬骨について年齢的特徴を検討し、また現代馬の馬歯・馬骨との対比により出土馬歯・馬骨を有する馬の年齢を検討する。④ 出土馬歯・馬骨について大きさ及び改良度の検討を行う。その方法としてa) 馬歯については既往の中世以降に属する出土馬歯の計測値並びに現代小格馬⁽²⁾の馬歯の計測値と比較検討する。b) 馬骨については出土馬骨が完形でなく中世以降に属する出土馬骨の調査例との対比が難しいので、三ツ寺III遺跡出土の馬骨を林田重幸⁽³⁾の調査による現代の在来馬の馬骨と対比して検討する。c) 三ツ寺III遺跡出土の左・右岩椽骨を現代小格馬の岩椽骨と対比し、その機能的変化を検討する。

(2) 使用した基準

- ① 馬歯・馬骨の部位、記号、各部の名称及び測定部位。註 参照⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾
- ② 馬の大きさ 馬の大きさは林田重幸⁽⁸⁾の体高区分による大形馬、中形馬、小形馬の表現を用いた。
- ③ 馬の年齢 馬の年齢については市井正次⁽⁹⁾の幼令馬、壮令馬、老令馬の区分を用いた。
- ④ 単位 馬歯・馬骨の計測値は特別に記載のない限りmmを表わし、比率は%を表わす。
- ⑤ 番号 図中の通番は本文、写真及び附表中の通番に一致する。本文中の図及び出土状況の写真は三ツ寺III遺跡整理班によって作成された。

3 調査成績

(1) 馬歯・馬骨の出土状況

調査所見によれば三ツ寺III遺跡の南東部に掘られた2号土壇中に丁寧に埋められた形で1体の馬の遺体が出土している。土壇埋土中には浅間山の噴火による噴出物であるB軽石が混じているが、A軽石が混じていないことから時代的には中世以降(1108年～1783年)のものと考えられる。この馬の遺体は左側臥⁽¹⁰⁾で、前軀を東に向け東西に横臥している。頭部を後方に屈曲し、前・後肢とも肢を縮めた形で埋められていた。頭蓋及び前後の肢骨が大体所定の位置より出土している所から土壇の底は平らで、入念

に掘られ、馬の遺体はほぼ水平に横臥されたものと考えられる。

(2) 出土馬歯・馬骨の遺存状態とその形態

三ッ寺III遺跡出土の馬歯・馬骨は出土状態より1体分の骨格としてよくまとまったものであり今後の検討に資するものと考えられるので以後この馬を三ッ寺馬Aと呼びたい。

三ッ寺馬Aの馬歯は全般的に淡黄褐色を呈している。外部セメント質は下顎歯には良く遺残しているものが多いが上顎歯は殆んど脱落し、舌面と各錐、各谷の間及び歯根の分岐部に僅かに遺存するのみである。風化激しく骨格の遺存状態が悪いにも拘らず、馬歯そのものは殆んど原相を保っている。

切歯は全般的に小さい。切歯の咬耗は激しく歯冠は短い。咬合面の舌面への傾斜は強い。上顎切歯には太い2本の縦溝が、または巾4mmに達する1本の太い縦溝が走っている。風化の進行と老令のため重量は軽い。頬歯も全般的に小さい。頬歯の咬耗は激しく歯冠は短い。前附歯 *parastyle*、中附歯 *mesostyle* は柱状で良く発達している。咬合面は四角形で小さい。前後葉の中央が高く、また前後葉と中葉が低く咬合はやや不整である。内部エナメル質は比較的単純である。前小窩 *prefossette* と原錐後谷 *postprotoconal valley* は大きく、原錐 *protocone* と次錐 *hypocone* の後展は良好である。後小錐 *metaconule* の原錐後谷への張り出しが目立っている。

馬骨の風化の進行は激しく、頭蓋及び前後肢骨の僅かな小骨片が残っているのみである。頭蓋の骨片は淡黄褐色から茶褐色を呈し、四肢骨は淡黄褐色から淡茶褐色を呈している。緻密骨の表面は粗ざうで極めて脆い。重量は軽く、馬骨は小さい。

馬歯・馬骨の遺存状態は第485・486・487図に示すとおりであり、その形態は第488・489・490図及び写真の1から55までに示すとおりである。

(3) 性別

三ッ寺馬Aの性別についてはNo52、No53の左・右の坐骨体が遺存しているのでこれについて性別を検討してみると、①坐骨体が細いこと ②坐骨体が閉鎖孔に向って僅かに張り出していることの2つの理由で三ッ寺馬Aは雌であると考えられる。

(4) 年齢

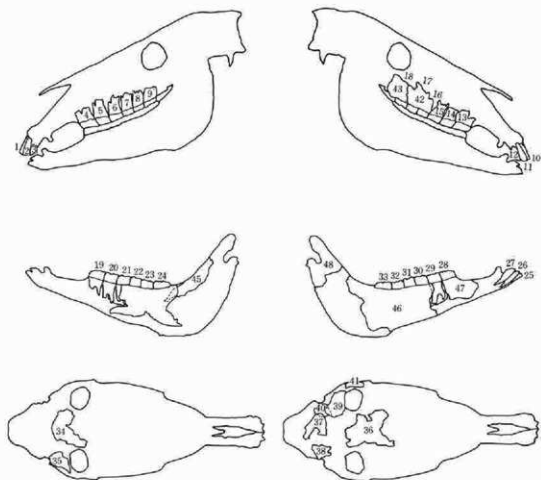
餌料が異なるので現代馬の歯の摩滅度をもって中世の馬の年齢を類推することは妥当ではないと考えられるが、一応現代馬の歯の摩滅をもって三ッ寺馬Aの年齢を考えると、三ッ寺馬Aの下顎第1切歯の摩滅度は現代馬では17.5歳を示している⁰⁶ので三ッ寺馬Aは老令馬に属するものと考えられる。

(5) 三ッ寺馬Aの大きさ

既往の調査成績との比較

馬歯 三ッ寺馬Aの馬歯の大きさは附表1に示すとおりである。この計測値を附表4に示す中世以降の出土馬歯の計測値と比較して見る。三ッ寺馬Aの頬歯は平均値では中世以降の出土頬歯の平均値より歯冠長、歯冠巾、巾率は夫々5.2%、11.8%、5.5%小さい。また上・下顎とも後臼歯が著しく小さく、特に下顎の後臼歯の歯冠巾は16.6%も小さい。また附表4の中で小格馬の馬歯として分類されているM₁、M₂は三ッ寺馬Aの計測値とほぼ同じである。

三ッ寺馬AのM₁—M₃の歯列長は左73.8、右75.8で、附表5に示す中世以降出土の馬の遺体のM₁—M₃の歯列長と比較するとやや小さい。



第 485 図 三ツ寺山遺跡出土の馬歯・馬骨の部位

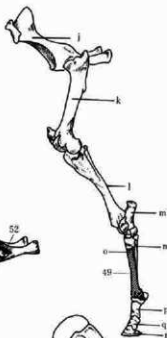
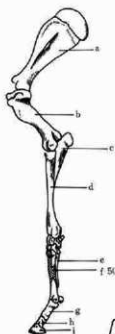
馬骨 附表 2、3 に示すように三ツ寺馬 A の馬骨はいずれも小さく、左中足骨の中央部巾(林田⁽³⁾の 11-12、DUERST⁽⁷⁾の最小巾)は 25.1、中央部径は 23.5 である。この数値を林田の調査成績と比較すると、林田の成績のトカラ馬 T₂ の中央部巾 25、中央部径 23、及びトカラ馬 T₃ の中央部巾 26、中央部径 23 に該当する。トカラ馬 T₂、T₃ の体高は夫々 109cm、115cm である。

現代馬との比較

現代馬の馬歯の計測値は既報⁽¹⁾のとおりである。三ツ寺馬 A の馬歯の計測値を現代小格馬の計測値と比較してみる。三ツ寺馬 A の頬歯の平均値は現代小格馬のうち体高 110cm の馬の頬歯の平均値より歯冠長は 14.2% 大きく、歯冠巾及び巾率は夫々 2.2%、14.3% 少ない。体高 130cm の馬の頬歯の平均値より歯冠長は 3.4% 小さく、歯冠巾及び巾率は夫々 15.8%、12.7% も少ない。特に下顎歯の歯冠巾の発達が悪いことが目立っている。

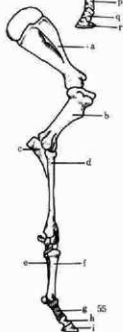
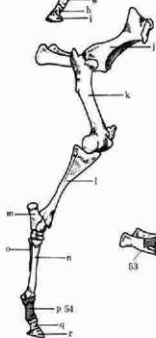
左前肢骨

左後肢骨



右後肢骨

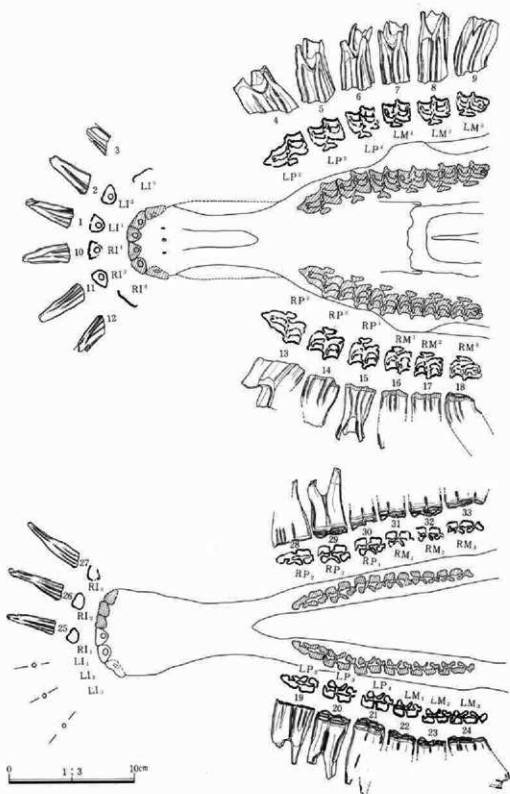
右前肢骨



- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|-----|---|-------|---|-----|
| a | 肩甲骨 | e | 小中手骨 | i | 末趾骨 | m | 踵骨 | q | 中趾骨 |
| b | 上腕骨 | f | 中手骨 | j | 寛骨 | n | 第4中趾骨 | r | 末趾骨 |
| c | 尺骨 | g | 基節骨 | k | 大犢骨 | o | 中足骨 | | |
| d | 橈骨 | h | 中趾骨 | e | 脛骨 | p | 基節骨 | | |

原図はW.ELLENBERGER 1921による。

第486図 出土馬骨の部位



第487図 三ツ寺田遺跡出土の馬Aの馬歯の部位及び咬合面の状態

第VI章 調査の成果と問題点

No	部位	計 測 値						備 考
		歯冠長	歯冠巾	巾 率	頰側・唇側歯冠高	現全歯高	エナメル厚 (頰側一舌側)	
1	L I ¹	13.8	11.9	86.2	23.4	37.9	1.4 - 0.9	5.2
2	L I ²	14.3	11.2	78.3	22.1	39.8	1.2 - 0.8	5.1
3	L I ³	13.8	欠 損	—	9.3	24.2	1.1 - 欠損	1.6
4	L P ²	35.8	21.7	60.6	22.4	44.5	1.5 - 0.9	19.9
5	L P ³	25.5	25.1	98.4	26.5	55.6	1.5 - 1.1	26.8
6	L P ⁴	23.2	25.1	108.2	24.6	48.4	1.6 - 0.9	23.9
7	LM ¹	21.2	21.9	103.3	21.7	50.6	1.4 - 0.9	22.1
8	LM ²	22.2	22.6	101.8	33.3	53.9	1.5 - 1.2	31.7
9	LM ³	24.9	21.3	85.5	36.4	51.7	1.6 - 0.9	26.8
10	R I ¹	14.0	10.2	72.9	22.2	38.7	1.5 - 欠損	4.8
11	R I ²	15.4	10.9	70.8	26.9	43.3	1.3 - 0.9	5.9
12	R I ³	14.8	欠 損	—	19.8	34.1	1.3 - 欠損	1.9
13	R P ²	37.3	23.1	61.9	21.5	50.2	1.3 - 0.9	23.4
14	R P ³	24.8	24.7	99.5	24.9	48.6	1.4 - 0.9	30.4
15	R P ⁴	22.6	25.0	110.6	23.6	47.2	1.5 - 1.0	26.8
16	RM ¹	20.5	21.8	106.3	24.9	46.8	1.4 - 0.9	—
17	RM ²	22.2	22.1	99.5	歯槽に植立	歯槽植立	1.4 - 1.1	— 歯槽に植立
18	RM ³	24.5	20.3	82.8	29.1	53.7	1.5 - 1.1	— 舌側歯槽附着
19	L P ₂	30.4	13.6	44.7	16.2	46.7	1.5 - 1.1	15.8
20	L P ₃	26.0	14.7	56.5	20.1	44.7	1.4 - 0.9	19.8
21	L P ₄	24.8	14.2	57.3	歯槽中に植立	歯槽植立	1.4 - 1.1	— 歯槽に植立
22	LM ₁	21.7	13.8	63.6	#	#	1.4 - 0.9	— #
23	LM ₂	22.2	11.7	52.7	#	#	1.4 - 1.0	— #
24	LM ₃	30.9	11.2	36.2	#	#	1.5 - 1.0	— #
25	R I ₁	10.9	9.8	89.9	24.7	37.8	1.5 - 0.8	4.2
26	R I ₂	12.4	10.4	83.9	24.3	48.6	1.4 - 0.9	5.6
27	R I ₃	欠 損	10.2	—	20.7	51.4	1.4 - 0.8	4.8
28	R P ₂	31.2	13.2	42.3	22.3	46.5	1.4 - 1.2	— 歯槽附着
29	R P ₃	26.2	14.9	56.9	20.1	50.2	1.4 - 1.1	21.2
30	R P ₄	24.1	14.8	61.4	歯槽中に植立	歯槽植立	1.5 - 1.1	— 歯槽中に植立
31	RM ₁	21.9	13.2	60.3	#	#	1.4 - 1.1	— #
32	RM ₂	23.2	11.4	49.1	#	#	1.4 - 1.1	— #
33	RM ₃	30.9	10.2	33.0	#	#	1.4 - 1.1	— #

附表1 三ツ寺馬Aの馬歯

No	部 位	長 径	短 径	高さまたは厚さ	重 量(g)	備 考
34	前頭骨の一部	68.6	49.1	12.7	9.2	
35	右側頭骨頬骨突起	48.1	47.2	30.4	11.3	
36	右側頭骨の一部	96.2	92.6	67.4	39.9	
37	右後頭骨	63.6	50.1	33.8	10.9	
38	左岩様骨	47.1	24.4	35.6	27.5	
39	右側頭骨頬骨突起	57.2	48.9	47.1	10.1	
40	右岩様骨	38.1	25.8	27.9	24.9	
41	右関節結節の一部	34.7	23.6	9.0	3.8	
42	右上顎歯槽の一部	64.8	55.9	35.7	74.1	重量は2つの頬歯を含む
43	#	60.2	56.7	32.1	46.2	重量は1つの頬歯を含む

附表2 三ツ寺馬Aの馬骨の計量値

No	部 位	長 径	短 径	高さまたは厚さ	重 量(g)	備 考
44	左下顎臼歯部	183.4	90.1	別 記	154.9	重量は4つの顎歯を含む
45	左下顎枝上縁部	121.6	28.4	8.6	12.4	
46	右下顎臼歯部	199.2	129.4	別 記	221.4	重量は1つの顎歯を含む 重量は1つの顎歯を含む
47	左・右下顎骨臼歯部	86.2	42.5	40.2	64.9	
48	右下顎骨関節部	90.6	67.9	36.5	23.8	別 記
49	左中足骨					
50	右中手骨	175.2	28.2	欠 損	24.3	別 記
51	左腸骨体	147.0	32.5	16.9	21.1	
52	左坐骨体	80.2	41.7	17.2	23.8	別 記
53	右坐骨体	64.7	35.4	18.6	16.0	
54	右後基節骨					別 記 "
55	右前基節骨					

附表2 三ツ寺馬Aの馬骨の計測値

No	馬骨の部位	現最大長	現近位部巾	現近位部径	中央部巾	中央部径	現遠位部巾	現遠位部径	重量(g)
49	左中足骨	192.1	26.8	20.1	25.1	23.5	36.7	24.0	61.7
54	右後基節骨	72.2	欠 損	欠 損	欠 損	17.4	21.1	17.6	16.2
55	右前基節骨	70.6	欠 損	欠 損	欠 損	14.9	32.8	14.9	10.2

附表3 三ツ寺馬Aの肢骨計測値

以上のように既往の調査成績及び現代小格馬についての調査成績から考えると三ツ寺馬Aは小形馬の中では中程度以上の大きさに属する馬であったと考えられる。

4 結果及び考察

三ツ寺馬Aは雌で老令馬に属し、大きさは小形馬の中では中程度以上の大きさの馬であると考えられる。また下顎頰歯の歯冠巾の発達が悪く、左・右下顎骨体のなす角度が10°で極めて狭いことから頬の細い馬であったと考えられる。さらに寛骨が小さく、中足骨及び基節骨が細いので、体全体が小柄で足も細く、また頬の細い馬であったと考えられる。

三ツ寺馬Aの左右の岩椽骨は指圧痕も深く、また外耳道も現代馬よりやや細い程度であり、指圧痕の深さ及びすう袋の鮮明さと外耳道の構造とは殆んど現代馬に近い。現代馬が聴覚だけ特に優れていると言わないので三ツ寺馬Aも五感全体の機能が現代馬に近かったと考えられる。

歯冠巾の小さいことが改良度も低く、原相を現わす、とするならば、体格に関する限り三ツ寺馬Aは余り改良度の進んだ馬ではなかったが、五感の機能は現代馬に近かったと言い得る。

三ツ寺馬Aが土壌中に極めて入念に埋められていたことを考えると、体格はそれ程大きい馬ではなかったがこの馬が飼育者に対して愛情または敬愛の念を起させるだけの美点を持っていたものと考えられる。その美点は老令になるまで忠節を尽くしたことか、或いは前述のように五感の優れた点であったかも知れない。

おわりに馬歯・馬骨について資料の御提供と種々御教導を賜った東京大学農学部家畜解剖学教室望月公子氏、福田勝洋氏に深甚な感謝の意を表します。

第VI章 調査の成果と問題点

区分	P ²				P ³		P ⁴			M ¹			
	大 形		中 形		大 形		中 形			大 形		中 形	
	例数	平均値	例数	平均値	例数	平均値	例数	平均値	例数	平均値	例数	平均値	
歯冠長	1	36.8	1	33.5	1	28.2	2	24.7, 25.3			2	24.6, 23.6	
歯冠巾	1	25.8	1	23.5	1	29.4	2	24.9, 27.7	1	28.1	1	26.1	
巾 率		70.1		70.1		104.3		100.8, 109.5				106.1	

区分	M ²		M ³		I ₁		I ₂		I ₃	
	中 形		中 形		中 形		中 形		中 形	
	例数	平均値	例数	平均値	例数	平均値	例数	平均値	例数	平均値
歯冠長	4	26.6±1.7	3	28.0±1.1	2	15.1, 15.6	2	15.7, 15.7	2	15.2, 15.8
歯冠巾	4	27.5±1.3	3	23.5±1.7	2	12.7, 12.8	2	11.3, 12.1		10.3, 10.3
巾 率		103.4		83.9		84.1, 82.1		72.0, 77.1		67.8, 65.2

区分	P ₂		P ₃		P ₄		M ₁			
	中 形		大 形		中 形		中 形		小 形	
	例数	平均値	例数	平均値	例数	平均値	例数	平均値	例数	平均値
歯冠長	4	31.5±1.4	1	29.3*	3	25.3±0.2	7	25.5±1.6	5	23.2±1.0
歯冠巾	4	16.6±0.8			4	16.9±0.6	7	16.6±1.1	4	17.5±0.3
巾 率		52.7				66.8		65.1		73.5

区分	M ₂		M ₁					
	中 形		大 形		中 形		小 形	
	例数	平均値	例数	平均値	例数	平均値	例数	平均値
歯冠長	5	23.9±1.7	1	35.7*	4	31.4±1.7	1	27.3*
歯冠巾	5	16.2±1.0			5	13.8±0.3	1	11.9*
巾 率		67.8				43.9		40.6

*は裏印検定により5%水準で裏印

- 馬歯計測値は直良信夫「日本および東アジア発見の馬歯・馬骨」による。
- 出土地は① 鎌倉市由比ヶ浜稲荷通713 ② 青森県島舌内
- ③ 青森県北郡川内町宿部 ④ 埼玉県秩父郡皆野町日野沢高松城址
- ⑤ 神奈川県秦野市今泉中尾旧馬捨場 ⑥ 群馬県吾妻郡横恋村三原
- ⑦ 東京都西多摩郡神原村元宿 ⑧ 青森県むつ市田名部

附表4 中世以降出土馬歯計測値の平均

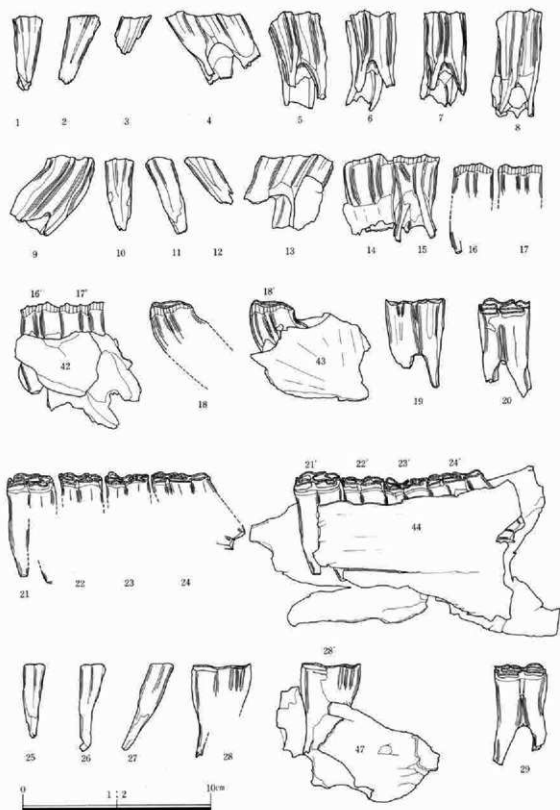
出土地	個体 No	計 測 部 位		備 考
		M ₁ -M ₂	M ¹ -M ²	
1	1	74.0		L
	1	80.5		
2	1	80.4		R
	2		77.2	
5	1	72.2		L
平均		76.8±3.7	77.2	

附表5 中世以降出土馬歯歯冠長計測値

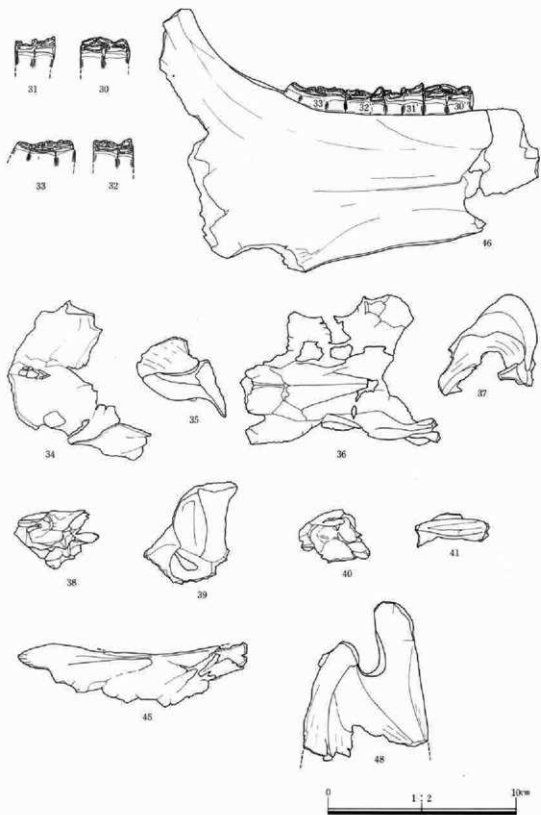
また本文中の実測図を作成して下さった群馬県埋蔵文化財調査事業団三ツ寺III遺跡整理班の皆さんに心から感謝の意を表します。

註

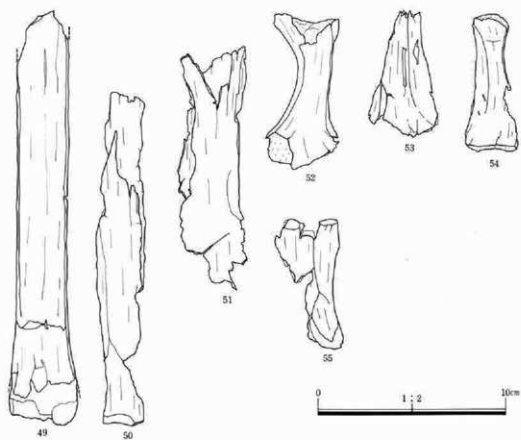
- (1) 「日高遺跡出土の馬歯・馬骨」〔日高遺跡〕群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- (2) 岡部利雄 『馬の品種図鑑』 1968 の中で馬とポニーとの区別について英国では14ハンド 2 インチを148cm以下のものをポニーと呼んでいると述べている。ここでは148cm以下を小格馬として取扱っている。
- (3) 林田重幸 『日本在来馬の系統に関する研究』 日本中央競馬会 1978
- (4) 馬歯の部位、記号、並びに各部の名称
G. G. SIMPSON [HORSES] OXFORD UNIVERSITY 1951、直良信夫 『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』 日本中央競馬会 1970により、和名については、原田俊治訳 『馬と進化』 1979による。
- (5) 馬歯の測定部位
[A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHAEOLOGICAL SITES] HARVARD UNIVERSITY 1976に準拠して行った。
- (6) 馬骨の名称
加藤嘉太郎 『家畜比較解剖図説(上巻) 改訂増訂』 1981、川田信平、醍醐正之 『図説家畜解剖学(上巻) 新改訂』 1974による。
- (7) 馬骨の測定部位
J. U. DUERST BERN [METHODEN DEN VERGLEICHENDEN MORPHOLOGISCHEN FORSCHUNG] 1926、林田重幸 『日本在来馬の系統に関する研究』 日本中央競馬会 1978 により、一部直良信夫 『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』 を参考とした。
- (8) 馬の体高区分について林田重幸は 『日本在来馬の系統に関する研究』の中で「日本及び東アジア地域の在来馬について、トカラ馬、海南馬、四川馬のような小形馬群と、御崎馬、木曾馬、蒙古馬のような中形馬群の2群に大別し、体高について小形馬が106~122cm、中形馬が129~138cmの範囲にある」ことを述べている。
- (9) 馬の年齢区分について市井正次は 『馬学精説』 1943の中で「5歳以下を幼令、6歳以上15~16歳迄を壮令、17歳以上を老令」としている。
- (10) 左側とは動物が左側を下にして横臥することを言う。
- (11) 市井正次 『第24章年令鑑定』 『馬学精説』 1943
- (12) 直良信夫は 『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』の中で「臼歯が市を増してくることは他の大形馬の支配などによってもたらされる馬の改良の結果ではないか」と述べている。
- (13) 吉倉眞は 『塚原古墳群出土の馬歯』〔塚原〕 熊本県教育委員会 1975の中で「咬合面の狭いことは原始的な1つの特徴」と述べている。また G. G. SIMPSON は 『馬と進化』の中で「歯冠の大きさと高さは植物食性と体の大きさとに対する進化の現われである」と述べている。
- (14) 前臼歯、後臼歯を一括して槽歯と言う。
- (15) 直良信夫 『日本および東アジア発見の馬歯・馬骨』 日本中央競馬会 1970



第488図 三ツ寺田遺跡出土の馬Aの馬歯・馬骨



第489図 三ツ寺田遺跡出土の馬Aの馬歯・馬骨



第490図 ミツ寺III遺跡出土の馬Aの馬歯・馬骨

保渡田遺跡写真図版



I区・II区全景(南より)



I区・II区道南全景(北より)



Ⅱ区・Ⅲ区全景（南より）



Ⅱ区・Ⅲ区全景（北より）



遺跡近景



1号住居跡全景



1号住居跡カマド遺物出土状態



1号住居跡カマド遺物除去後



1号住居跡カマド周辺遺物出土状態



1号住居跡カマド天井石除去後



1号住居跡カマド天井石



1号住居跡カマド内遺物出土状態



1号住居跡
カマド爐遺部



2号住居跡
遺物出土状態
全景



2号住居跡
全景

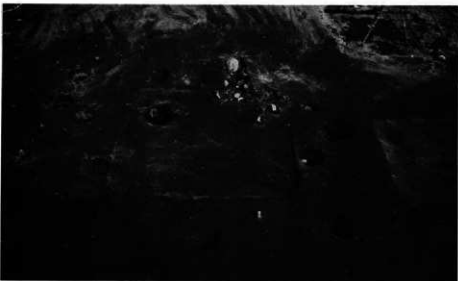
3号住居跡
全景



3号住居跡
カマド周辺
遺物出土状態



5号住居跡
全景





5号住居跡
カマド
遺物出土状態



6号住居跡
全景



6号住居跡
カマド
遺物出土状態

6号住居跡
遺物出土状態



6号住居跡
遺物出土状態



7号住居跡
カマド





7号·25号住居跡遺物出土状態全景

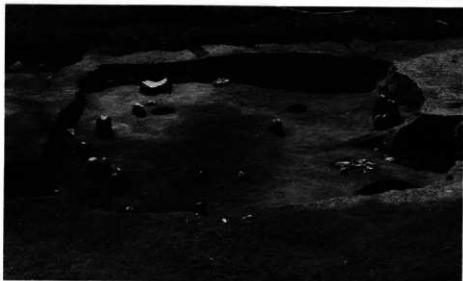


7号·25号住居跡全景

8号住居跡
全景



8号住居跡
遺物出土状態
全景



9号住居跡
全景





10号住居跡
全景

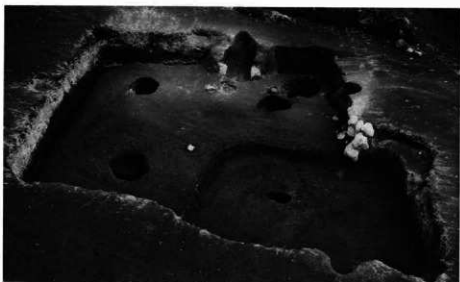


10号住居跡
遺物出土状態
全景



10号住居跡
カマド

11号・12号
住居跡全景



11号住居跡
遺物出土状態
全景



11号住居跡
カマド





11号住居跡
カマド



12号住居跡
カマド



12号住居跡
カマド周辺
遺物出土状態

13号住居跡
全景



13号住居跡
カマド
遺物出土状態



14号住居跡
全景

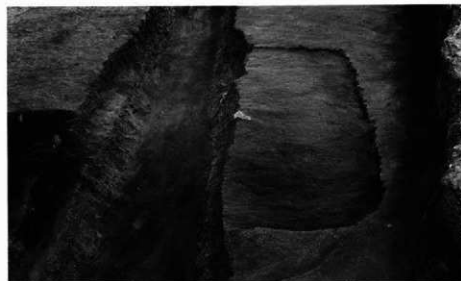




15号住居跡
全景



15号住居跡
カマド



16号住居跡
全景

17号住居跡
全景



17号住居跡
遺物出土状態
全景



17号住居跡
カメラ下

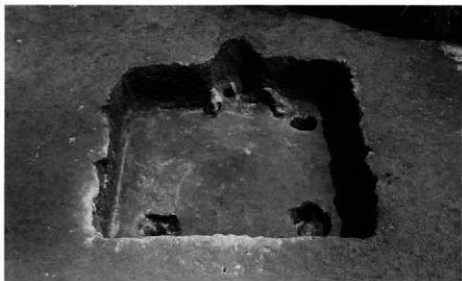




18号住居跡
全景



18号住居跡
カマド



20号住居跡
全景

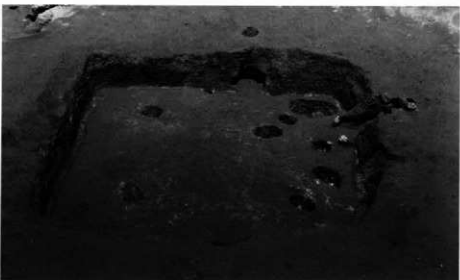
20号住居跡
カマド



21号住居跡
全景



22号住居跡
全景





22号住居跡
全景



22号住居跡
遺物出土状態
全景



22号住居跡
カマド2
遺物出土状態

22号住居跡
貯蔵穴
遺物出土状態



22号住居跡
カマド1



22号住居跡
カマド2





23号住居跡
全景



24号住居跡
全景



26号・27号・28
号・29号・31号
住居跡全景

26号・27号・28
号・31号住居跡
全景



28号・29号住居
跡全景



26号住居跡
遺物出土状態
全景





27号·31号住居
跡全景



28号住居跡
全景



29号住居跡
全景

26号住居跡
遺物出土状態



26号住居跡
カマド



28号住居跡
カマド





29号住居跡
カマド



30号住居跡
遺物出土状態
全景



30号住居跡
カマド

32号・33号住居
跡全景



32号住居跡
全景



33号住居跡
全景





32号住居跡
カマド周辺
遺物出土状態



34号・35号住居
跡全景

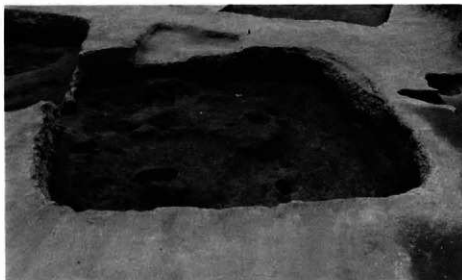


34号住居跡
床下状態
全景

35号住居跡
遺物出土状態
全景



35号住居跡
床下状態
全景



36号住居跡
遺物出土状態
全景





36号住居跡
カマド
遺物出土状態



37号住居跡
全景



37号住居跡
遺物出土状態
全景

37号住居跡
カマド周辺
遺物出土状態



38号住居跡
全景



38号住居跡
遺物出土状態
全景





38号住居跡
遺物出土状態



38号住居跡
カマド



39号住居跡
遺物出土状態
全景

40号住居跡
全景



40号住居跡
カマド



41号・42号・43
号・47号住居跡
全景

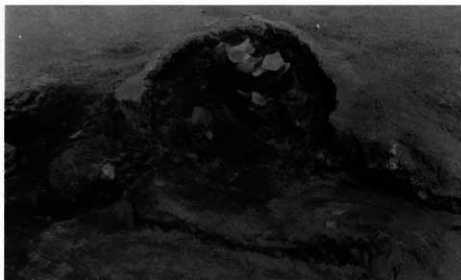




42号住居跡
全景



43号住居跡
全景

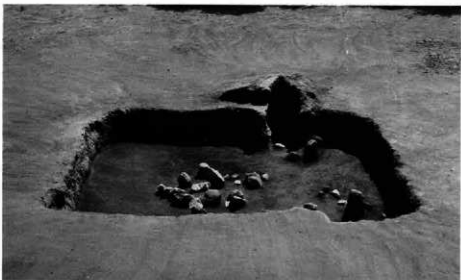


41号住居跡
カマド

43号住居跡
カマド



44号住居跡
遺物出土状態
全景



46号住居跡
遺物出土状態
全景





46号住居跡
カマド



48号住居跡
全景



48号住居跡
カマド

48号住居跡
遺物出土状態



49号住居跡
全景



50号住居跡
全景





51号住居跡
全景



51号住居跡
カマド



52号住居跡
全景

52号住居跡
カマド



53号・54号住居
跡全景



55号住居跡
全景





55号住居跡
遺物出土状態



56号住居跡
遺物出土状態
全景



57号住居跡
全景

57号住居跡
カマド
遺物出土状態



57号住居跡
カマド



57号住居跡
カマド

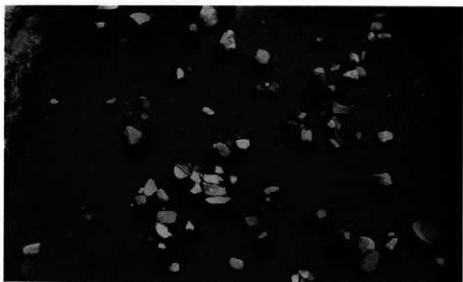




58号住居跡
全景



59号住居跡
全景



59号住居跡
遺物出土状態

60号住居跡
全景



63号住居跡
全景



63号住居跡
カマド





1号掘立柱跡



3号掘立柱跡



4号掘立柱跡



1 住-7



1 住-9



1 住-8



1 住-35



1 住-6



1 住-36



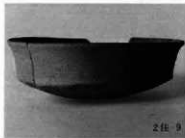
1 住-1



1 住-3



2 住-7



2 住-9



2 住-12



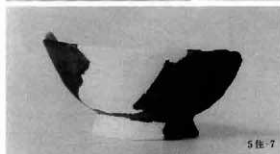
2 住-11

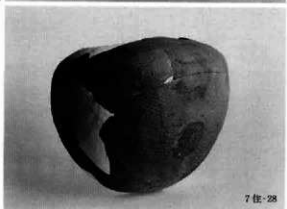
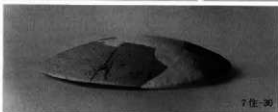
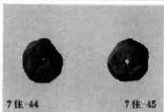
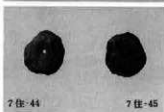


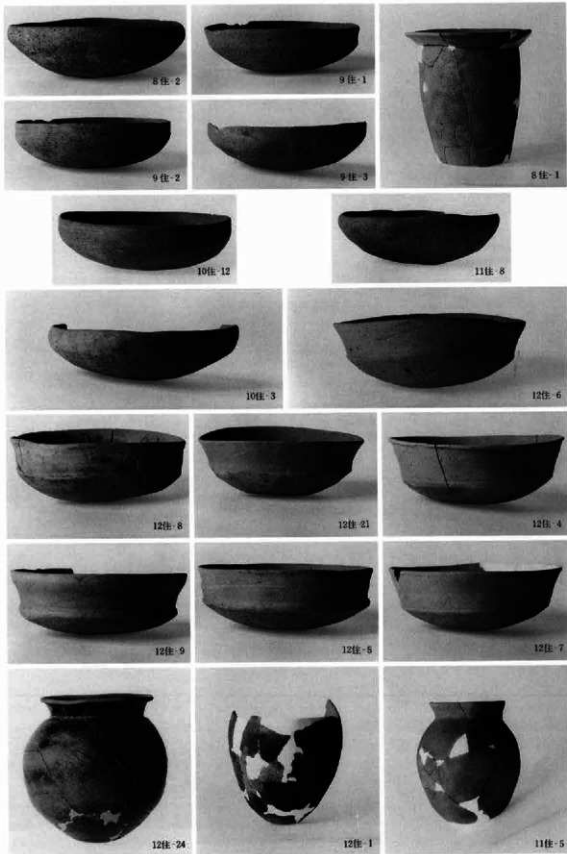
2 住-8

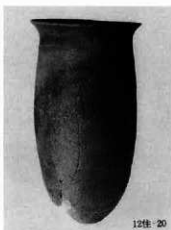


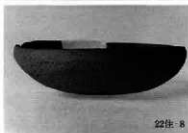
2 住-10



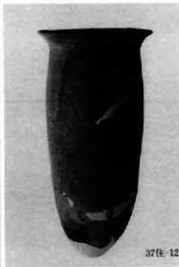
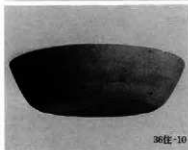


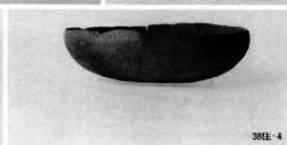


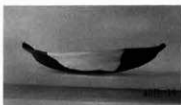


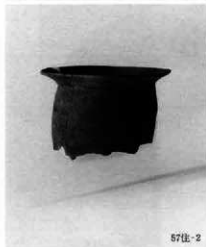


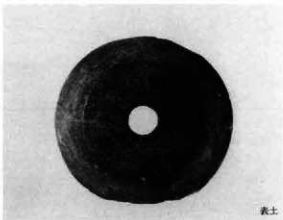
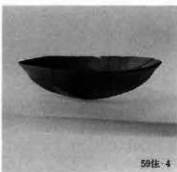


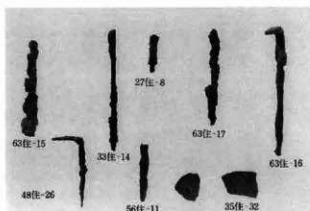




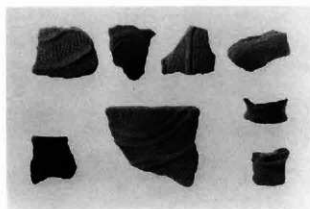




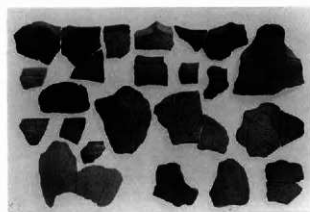




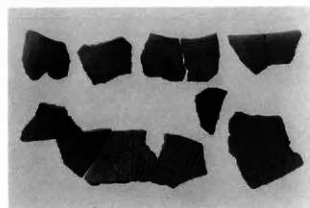
出土金属器



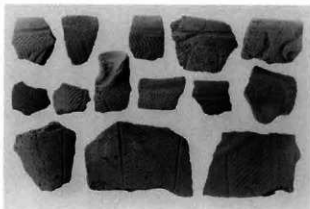
縄文時代の遺物-1



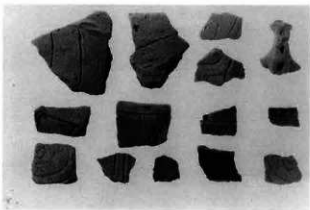
縄文時代の遺物-2



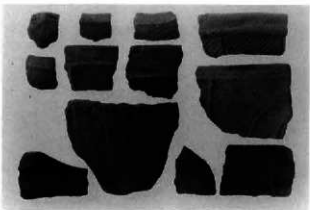
縄文時代の遺物-3



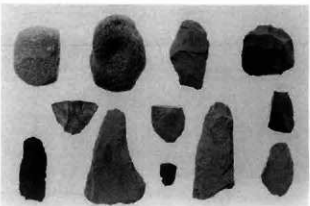
縄文時代の遺物-4



縄文時代の遺物-5



縄文時代の遺物-6

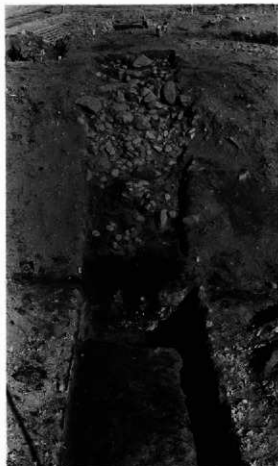


縄文時代の遺物-7

中里天神塚古墳写真図版



トレンチ掘り下げ状態



トレンチ掘り下げ状態



表土除去後の全景



表土除去後の
状態



石室検出状態
全景(北より)



石室検出状態
(南より)



閉塞石・礫石除去後の石室全景（東より）



閉塞石・礫石除去後の石室全景（北より）



石室全景
(東より)



閉塞石の状態



石室内部の状態

石室内部の状態
(礎石除去後)



石室内部の状態
(礎石除去後)



奥壁の状態
(礎石除去後)





裏込め石の状態



裏込め石の状態



全環出土状態

金環出土状態

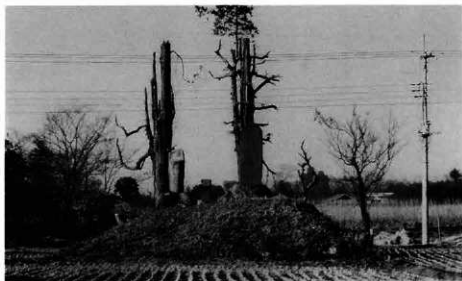


鉄刀出土状態



石室除去後の
根石の状態





古墳全景



移築前の天神祠



移築前の庚申塔

移築前の庚申塔

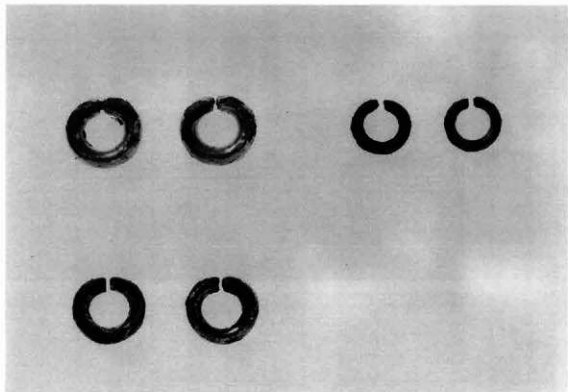


移築後の
天神祠・
庚申塔

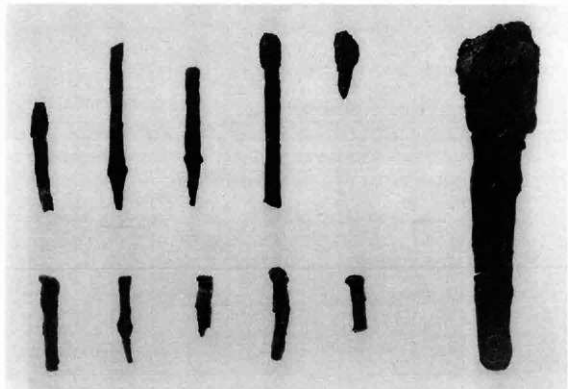


移築後の
天神祠・
庚申塔



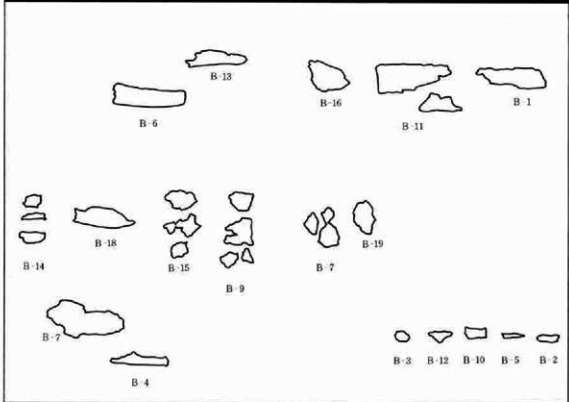


出土した金環・銀環

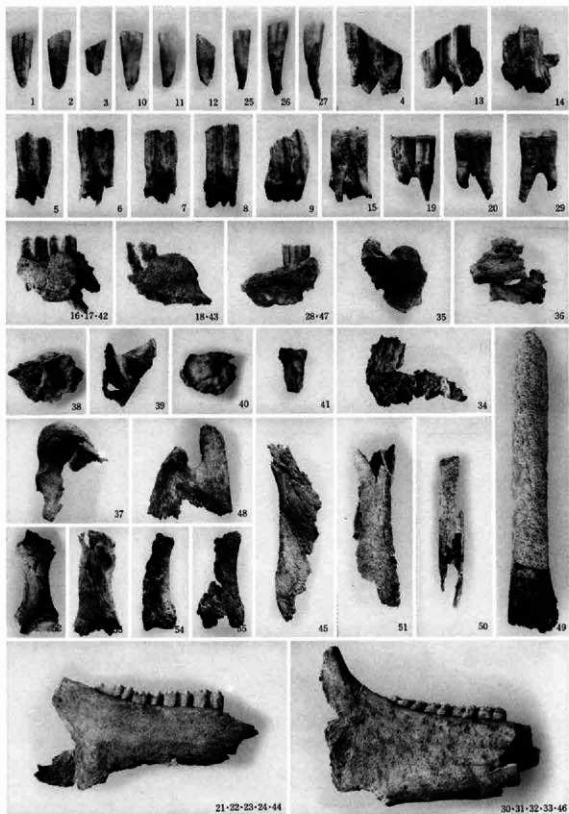


出土した鉄刀・鉄鏃・釘

調査の成果と問題点写真図版



9号土坑墓出土人骨



三ツ寺田遺跡出土の馬Aの馬歯・馬骨 (50は1:5、その他はおよそ1:3)

三ツ寺Ⅲ遺跡
保渡田遺跡
中里天神塚古墳

(第2分冊)

—上越新幹線関係埋蔵
文化財発掘調査報告第5集—

印刷 昭和60年11月26日
発行 昭和60年11月30日

編集・発行

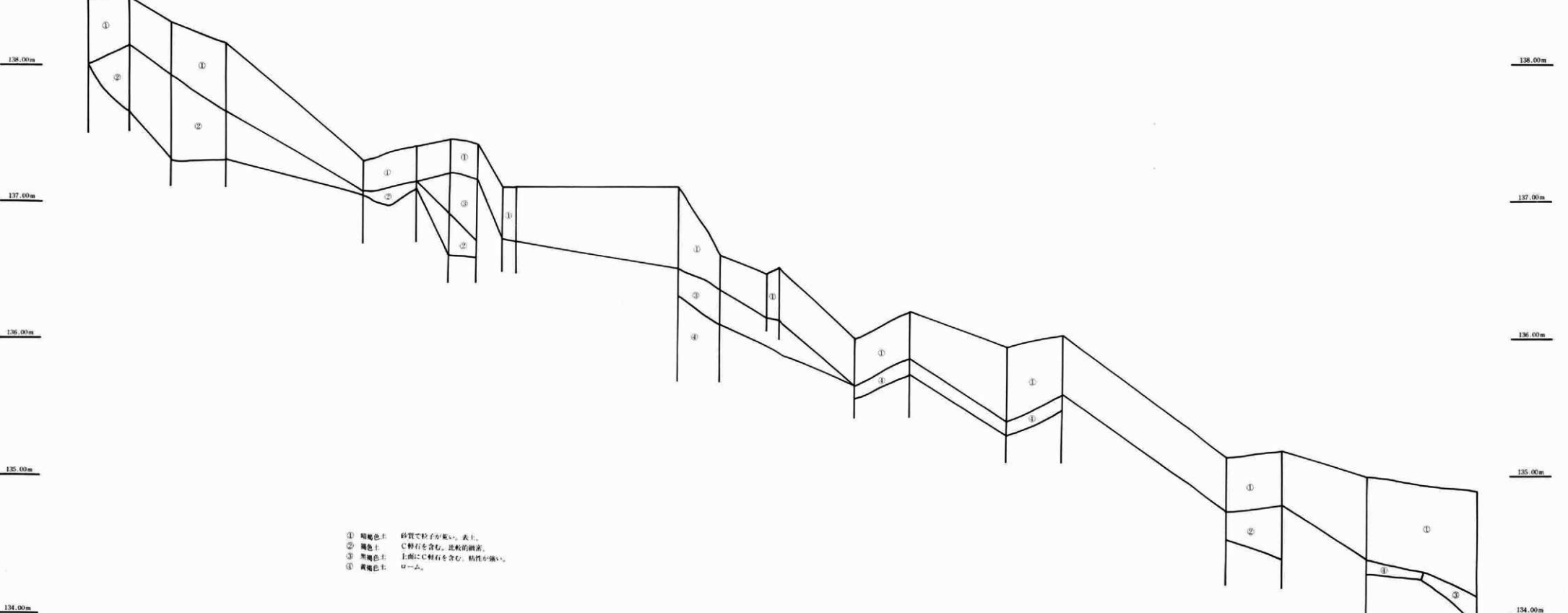
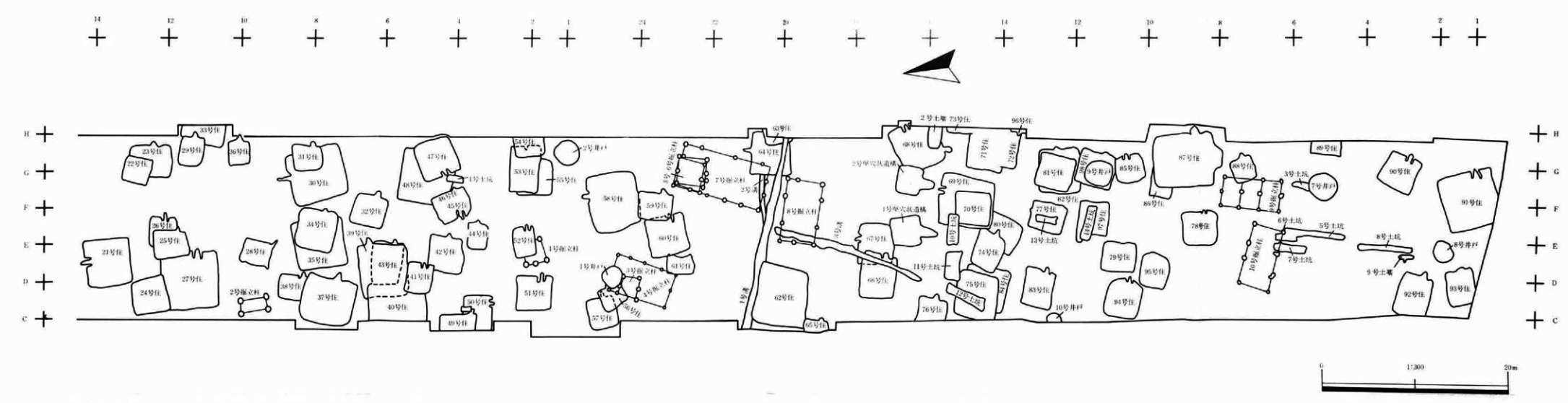
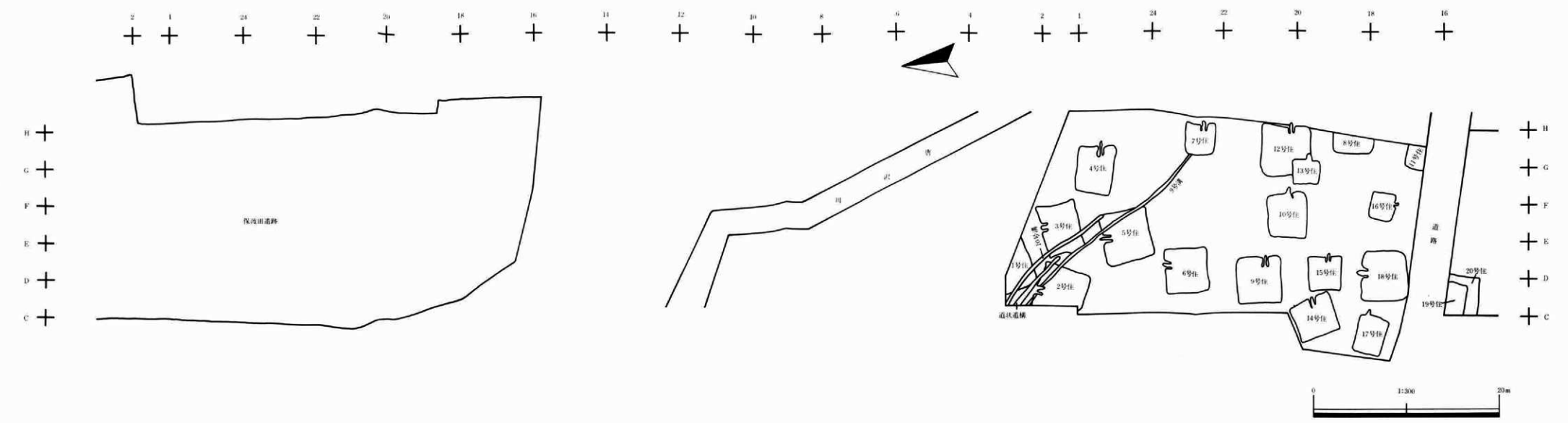
群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
(0279) 52-251100

印刷

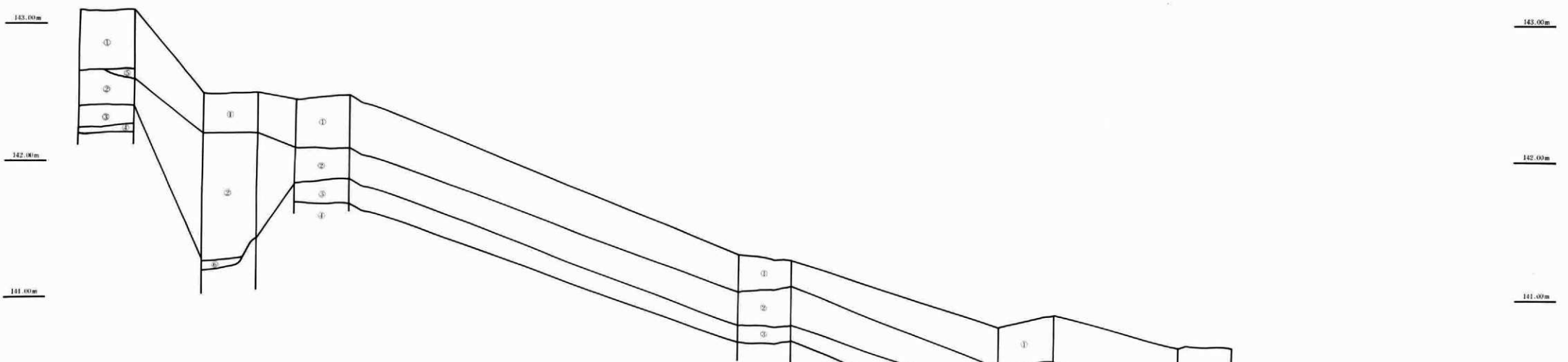
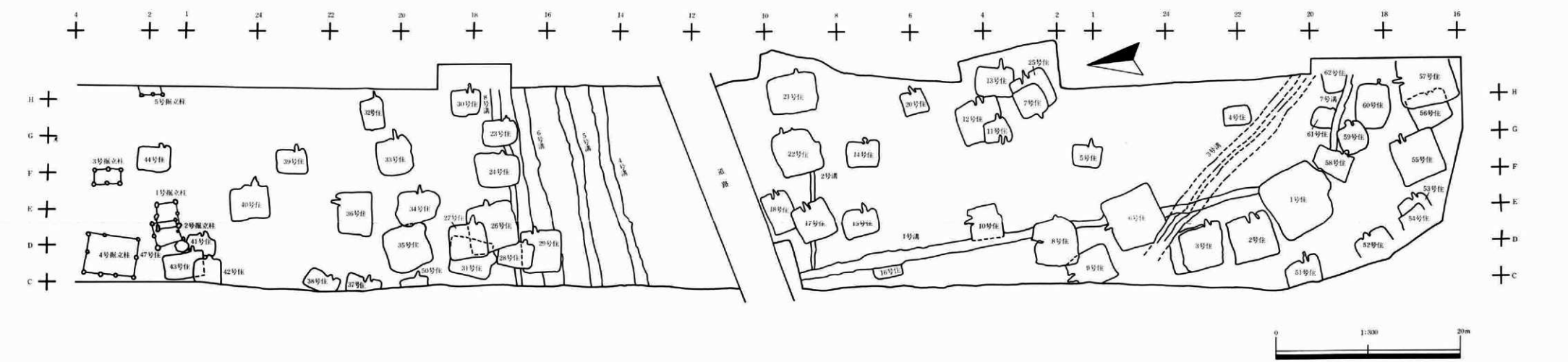
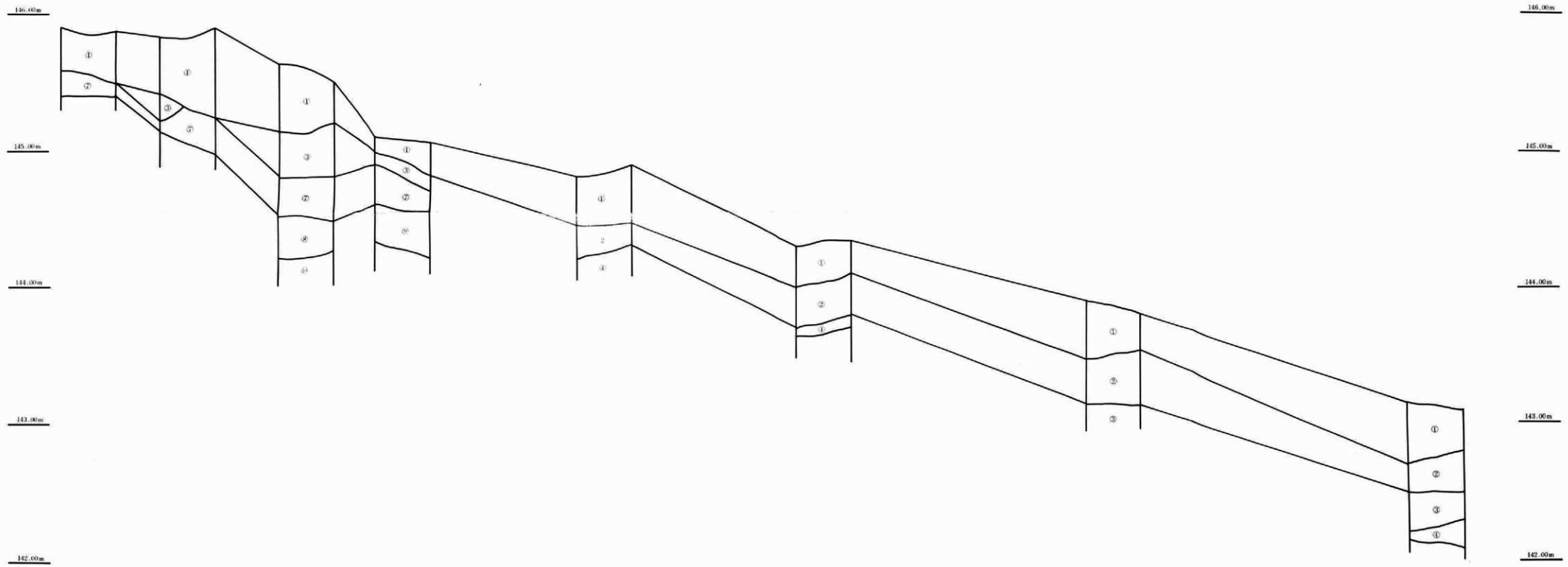
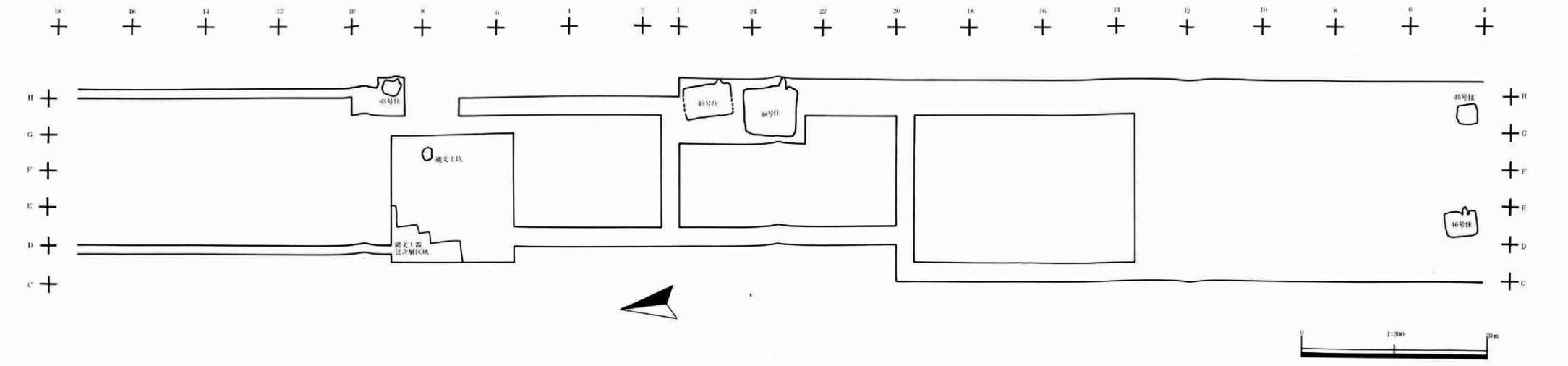
朝日印刷工業株式会社

01-310
11
(6)

付図1 ミツ寺川遺跡全体図・基本土層図



① 暗褐色土 砂質で砂子が多い。表土。
 ② 褐色土 C砂石を含む。比較的細砂。
 ③ 黒褐色土 上面にC砂石を含む。粘性が強い。
 ④ 黄褐色土 ローム。



- ① 表土 砂質のしまりのない暗褐色を呈す。
- ② 茶褐色土 C層石を散らしたしまりのある土。
- ③ 黒褐色土 粘性がやや強く、上面部付近にC層石を含む。
- ④ ローム 黄色を呈すローム。
- ⑤ 黒砂石 砂質土。
- ⑥ 黒色土 砂粒が細かくシルトに近い。
- ⑦ 茶褐色砂質土 田圃用。
- ⑧ 砂層 田圃用。
- ⑨ 暗褐色粘質土 栗味をおび、しまっている。構文も含む。
- ⑩ 茶褐色粘質土 よくしまっている。構文なし。埋土。